

箱石  
動浅  
山間  
山古  
古墳

# 箱石浅間山古墳 不動山古墳

平成21年度緊急雇用創出基金事業に係わる  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年度緊急雇用創出基金事業に係わる  
埋蔵文化財発掘調査報告書



二〇一〇

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2010

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

はこ いし せん げん やま  
箱 石 浅 間 山 古 墳  
ふ どう やま  
不 動 山 古 墳

平成21年度緊急雇用創出基金事業に係わる  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





箱石浅間山古墳全景（西から）



不動山古墳出土円筒埴輪（左 001、右 010）





## 序

本書は、佐波郡玉村町に所在し、昭和 50 年に圃場整備事業に伴い発掘調査がなされた箱石浅間山古墳と、昭和 54 年に国道 354 号道路改良事業に伴い発掘調査がなされた不動山古墳周堀部分の調査報告書です。両古墳の報告書作成業務は、群馬県教育委員会からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成 21 年度に実施したものです。

両古墳とも発掘調査が行われた時点から注目を集めていた古墳であり、その調査成果の公表は群馬県における古墳時代研究の基礎資料として切望されていたものでした。

今回、発掘調査報告書を作成することにより、箱石浅間山古墳については古墳時代前期に築造された古墳の墳丘が後期になって再利用されていたこと、前期の古墳の墳丘は多角形を呈しており、底部穿孔の二重口縁壺が樹立されていたことなどを明らかにすることができました。また、不動山古墳は高崎市東南部に位置し、井野川流域を代表する 5 世紀代の古墳として既に良く知られた前方後円墳でしたが、古墳の周囲に二重の周堀が巡っていたことや古墳に樹立されていた円筒埴輪の様相の一端を提示することができました。

これらの調査成果は、多くの古墳が築造されたことで知られる群馬県地域の歴史に新たな資料を提供することとなるものと考えられます。そして、この報告書が群馬県の古墳時代研究をはじめ、地域史を紐解く歴史資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが報告書の作成におきましては、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会、高崎市教育委員会および地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成 22 年 3 月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 須 田 栄 一



# 例 言

- 1 本書は、玉村町中部土地改良事業に伴い発掘調査の行われた箱石浅間山古墳、ならびに国道354号道路改良事業に伴い発掘調査の行われた不動山古墳の調査報告書である。
- 2 上記遺跡の所在地は以下のとおりである。

箱石浅間山古墳 群馬県佐波郡玉村町大字箱石字八反田 558 (旧 609) 番地  
不動山古墳 群馬県高崎市綿貫町金堀1260-1 番地他
- 3 上記遺跡の発掘調査時の事業主体、調査担当者、調査期間は以下のとおりである。

箱石浅間山古墳 事業主体 玉村町中部土地改良区  
調査主体 群馬県教育委員会文化財保護課  
担当者 平野進一  
調査期間 昭和50 (1975) 年 3月25日から 5月31日

不動山古墳 事業主体 群馬県土木部  
調査主体 群馬県教育委員会文化財保護課  
担当者 松本浩一 桜場一寿  
調査期間 昭和54 (1979) 年 3月12日から 3月17日
- 4 本書作成のための整理事業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が、群馬県教育委員会より過年度公共開発関連出土品等整理事業として委託を受け、平成13 (2001) 年 9月 1日から平成14 (2002) 年 3月31日まで実施した。その後、平成21年度緊急雇用創出基金事業として委託を受け、平成21年 (2009年) 10月 1日から平成22年 (2010年) 3月31日まで実施した。
- 5 本書作成時の事業団組織および整理事業体制は次の通りである。

理事長 須田栄一 常務理事 木村裕紀 事業局長 相京建史  
総務部長 笠原秀樹 資料整理部長 石坂 茂 調査研究部長 飯島義雄  
資料整理第2グループリーダー 大木紳一郎  
事務担当 経理グループリーダー 佐嶋芳明 職員 須田朋子、柳岡良宏、田口小百合、矢島一美、高橋次代  
補助員 今井もと子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典
- 6 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集・文章執筆 徳江秀夫  
遺物写真 担当職員 佐藤元彦  
版下作成 補助員 有井千冬、石坂敦、岩崎麻衣、生形浩、川田和枝、関伸枝
- 7 報告書作成に際しては、群馬県教育委員会、玉村町教育委員会、高崎市教育委員会、梅澤重昭氏、松本浩一氏、平野進一氏、桜場一寿氏、右島和夫氏、土生田純之氏、田口一郎氏、若狭徹氏、神戸一氏、鹿沼栄輔氏、南雲芳昭氏、小柴可信氏、深澤敦仁氏、小高哲茂氏、中里正憲氏、中島直樹氏をはじめ関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝いたします。
- 8 遺構・遺物に対する所見については、当事業団職員の唐澤至朗、原 雅信、大木紳一郎、大西雅広から助言を受けている。

- 9 発掘調査時の諸記録・諸資料および出土品については、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 凡 例

- 1 遺構の挿図中に示した方位は磁北を基準としている。
- 2 遺構および遺物実測図中の縮尺は、それぞれの図中に表示している。
- 3 報告にある火山噴火物の標記は以下の通りである。

As- A	：	浅間山A軽石	1783年（天明3年）
As- B	：	浅間山B軽石	1108年（天仁元年）
Hr-FP	：	榛名二ッ岳軽石	6世紀中頃
Hr-FA	：	榛名二ッ岳火山灰	6世紀初頭
As- C	：	浅間山C軽石	4世紀初頭
- 4 第1図は国土地理院発行の20000分の1の「宇都宮」「長野」地勢図を原図として使用している。

第2図・第32図は『群馬県史』通史編付図を原図とし、これを編集して使用している。

第3図・第34図は国土地理院発行の25000分の1の地形図「高崎」「伊勢崎」を原図として使用している。

第4図は玉村町発行の現形図を原図として使用している。

第31図は田口一郎「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその後』研究・報告編1987の第2図を原図とし、一部編集して使用している。

第34図は津金澤吉茂・飯島義雄・大久保美加「群馬県高崎市岩鼻町『群馬の森』を中心とする地域の歴史について」『群馬県立歴史博物館紀要』2の中の図を原図として一部修正して使用している。

第35図は中島義一他『日本図誌大系』関東Ⅱ1972掲載図を原図としている。

第36図は『高崎市史』資料編1から転載したものである。

第37図は徳江秀夫「上野地域の舟形石棺」『古代学研究』127から転載したものである。

第38図は高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書13』を原図としている。

第39図は高崎市発行の現形図を原図としている。

第40図・第54図は『群馬県史』資料編3掲載図を修正して使用している。

写真図版P L 1・P L 19は国土地理院発行の空中写真を使用した。
- 5 遺物観察表の残存状況 法量の項中（ ）は復元径、〈 〉は残存高を表わす。

色調は農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』によった。



# 目次

口 絵
序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
表 目 次
写真目次
報告書抄録

## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

1 調査に至る経過	1
2 古墳の位置と地形	1
3 周辺の遺跡	3
4 調査の方法と経過	
(1) 古墳の呼称と調査区の設定	9
(2) グリッドの設定	9
(3) 調査の方法	9
(4) 調査の経過	10
(5) 整理作業の経過とその方法	10
5 調査された遺構	
(1) 周辺の地形と土層の堆積状況	12
(2) 墳丘	12
(3) 盛土	13
(4) 葺石	13
(5) 周堀	14
(6) 遺物の出土状況	14
6 出土した遺物	
(1) 二重口縁壺	14
(2) その他古墳時代の土器	27
(3) 埴輪	29
(4) 中・近世の土器	39

(5) 縄文土器	40
7 成果と問題点	
(1) 調査の成果	40
(2) 二重口縁壺について	42
(3) 箱石浅間山古墳の位置付け	42
8 箱石浅間山古墳引用・参考文献	44

## 第2章 不動山古墳の調査

1 調査に至る経過	45
2 調査の経過	46
3 古墳の位置と地形	46
4 周辺の遺跡	46
5 これまでの調査と研究成果	
(1) 調査以前の不動山古墳	53
(2) 群馬県立博物館による調査	53
(3) 高崎市教育委員会による調査	54
(4) 研究史上の位置付け	55
6 調査された遺構	60
7 出土した遺物	
(1) 埴輪	67
(2) 土器	75
(3) 不動山古墳隣接地出土土器	75
8 成果と問題点	
(1) 調査の成果	75
(2) 円筒埴輪について	76
(3) 不動山古墳の位置付け	81
9 不動山古墳引用・参考文献	82

遺物観察表	83
-------	----

写真図版
------

## 挿 図 目 次

第1図	箱石浅間山古墳と不動山古墳の位置……………1 (1. 箱石浅間山古墳 2. 不動山古墳)	第29図	出土した土器 (10) ……………40
第2図	箱石浅間山古墳周辺の地形……………2	第30図	墳丘の復元……………41
第3図	箱石浅間山古墳周辺の遺跡……………4	第31図	烏川・井野川流域のパレス壺……………43
第4図	箱石浅間山古墳の位置……………8	第32図	不動山古墳周辺の地形……………45
第5図	箱石浅間山古墳とその調査区……………11	第33図	不動山古墳周辺の遺跡……………49
第6図	検出された遺構……………15	第34図	不動山古墳周辺の遺跡……………50
第7図	葺石の出土状況 (1) ……………17	第35図	不動山古墳周辺の地理的変遷……………52
第8図	葺石の出土状況 (2) ……………18	第36図	不動山古墳造出部の推定図……………54
第9図	土器の出土状況 (1) ……………19	第37図	不動山古墳出土の舟形石棺……………55
第10図	出土した土器 (1) ……………20	第38図	不動山古墳出土の円筒埴輪……………56
第11図	出土した土器 (2) ……………21	第39図	調査区の位置 (1) ……………58
第12図	出土した土器 (3) ……………22	第40図	調査区の位置 (2) ……………59
第13図	出土した土器 (4) ……………23	第41図	調査区の土層断面 (1) ……………61
第14図	出土した土器 (5) ……………24	第42図	調査区の土層断面 (2) ……………63
第15図	出土した土器 (6) ……………25	第43図	調査区の土層断面 (3) ……………64
第16図	出土した土器 (7) ……………26	第44図	調査区の土層断面 (4) ……………65
第17図	土器の出土状況 (2) ……………27	第45図	調査区の土層断面 (5) ……………66
第18図	出土した土器 (8) ……………28	第46図	出土した円筒埴輪 (1) ……………69
第19図	埴輪の出土状況……………30	第47図	出土した円筒埴輪 (2) ……………70
第20図	出土した円筒埴輪 (1) ……………31	第48図	出土した円筒埴輪 (3) ……………71
第21図	出土した円筒埴輪 (2) ……………32	第49図	出土した円筒埴輪 (4) ……………72
第22図	出土した円筒埴輪 (3) ……………33	第50図	出土した円筒埴輪 (5) ……………73
第23図	出土した円筒埴輪 (4) ……………34	第51図	出土した円筒埴輪 (6) ……………74
第24図	出土した円筒埴輪 (5) ……………35	第52図	出土した土器……………75
第25図	出土した円筒埴輪 (6) ……………36	第53図	不動山古墳隣接地出土土器……………75
第26図	出土した形象埴輪 (1) ……………37	第54図	不動山古墳の企画……………77
第27図	出土した形象埴輪 (2) ……………38	第55図	不動山古墳と旧地割り……………78
第28図	出土した土器 (9) ……………39	第56図	群馬県内出土のB種ヨコハケ埴輪 (1) ……79
		第57図	群馬県内出土のB種ヨコハケ埴輪 (2) ……80

## 表 目 次

第1表	箱石浅間山古墳周辺の遺跡一覧……………5	第2表	不動山古墳周辺の遺跡一覧……………47
-----	----------------------	-----	---------------------

## 写 真 目 次

PL1	箱石浅間山古墳の位置	2	箱石浅間山古墳の現状 (2001年1月) (東から)
PL2-1	調査の状況 (西から)		



# 抄 録

書名ふりがな	はこいしせんげんやまこふん ふどうやまこふん
書名	箱石浅間山古墳 不動山古墳
副書名	平成 21 年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	495
編著者名	徳江秀夫
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20100319
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	はこいしせんげんやまこふん
遺跡名	箱石浅間山古墳
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちおおあざはこいし
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町大字箱石 558 番地
市町村コード	10464
遺跡番号	489
北緯 (日本測地系)	361742
東経 (日本測地系)	1390854
北緯 (世界測地系)	361753
東経 (世界測地系)	1390842
調査期間	19750325-19750531
調査面積	1215
調査原因	圃場整備
種別	墓
主な時代	古墳
遺跡概要	墓 - 古墳 - 古墳 1 - 底部穿孔二重口縁壺 + 土器 + 埴輪
特記事項	古墳時代前期に築造された一辺約 30 m の多角形墳である。底部穿孔の二重口縁壺が出土した。この古墳の墳丘を再利用して後期古墳が築造されていた。円筒埴輪、形象埴輪が出土した。
(要約)	箱石浅間山古墳は玉村町大字箱石の利根川右岸に所在した一辺約 30 m 余の不等辺八角形の古墳である。墳丘は 2 時期にわたり利用されていた。第 1 次墳丘は葺石が施されていた。古墳時代前期の築造と考えられ、底部穿孔の二重口縁壺が出土している。この中にはパレス壺の系譜をひく加飾付の壺が含まれていた。第 2 次墳丘には円筒埴輪、形象埴輪が樹立されていた。6 世紀中葉から後葉の築造と考えられる。
遺跡名ふりがな	ふどうやまこふん
遺跡名	不動山古墳
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしわたぬきまちかなほり
遺跡所在地	群馬県高崎市綿貫町金堀 1260-1 番地他
市町村コード	10202
遺跡番号	01426
北緯 (日本測地系)	361801
東経 (日本測地系)	1390455
北緯 (世界測地系)	361812
東経 (世界測地系)	1390443
調査期間	19790312-19790317
調査面積	415
調査原因	道路建設工事
種別	墓
主な時代	古墳
遺跡概要	墓 - 古墳 - 古墳 1 - 円筒埴輪
特記事項	墳丘 94 m の前方後円墳の周堀部分の調査。二重の周堀が巡ることが確認された。
(要約)	不動山古墳は高崎市綿貫町の井野川右岸段丘上に位置し、綿貫古墳群の中核をなす前方後円墳である。墳丘長は 94 m を測り、主体部は後円部墳頂部に露出している舟形石棺と考えられている。本報告の調査時に墳丘の周囲に二重の周堀が巡ることが確認された。周堀内からは円筒埴輪が出土している。この中には胴部外面の調整に 2 次調整 B 種ヨコハケを施した資料が含まれている。5 世紀中葉の築造と考えられる。



# 第1章 箱石浅間山古墳の調査

## 1 調査に至る経過

佐波郡玉村町では、昭和30年代後半から昭和50年代にかけて町域の広範囲にわたり土地改良事業が実施された。箱石浅間山古墳が位置する箱石地区周辺では1970（昭和45）年から1975（昭和50）年にかけて玉村町中部土地改良区の事業が進められた。

箱石浅間山古墳は、玉村町大字箱石字八反田 558（旧609）番地に所在した。圃場整備事業にあたり、古墳所在地の整地とこれに接する道路の拡幅工事が計画されたため、中部土地改良区と群馬県教育委員会、玉村町教育委員会の間で調整が行われ、圃場整備事業の実施に先立ち、本古墳の発掘調査を実施し、記録保存を講ずることとなった。

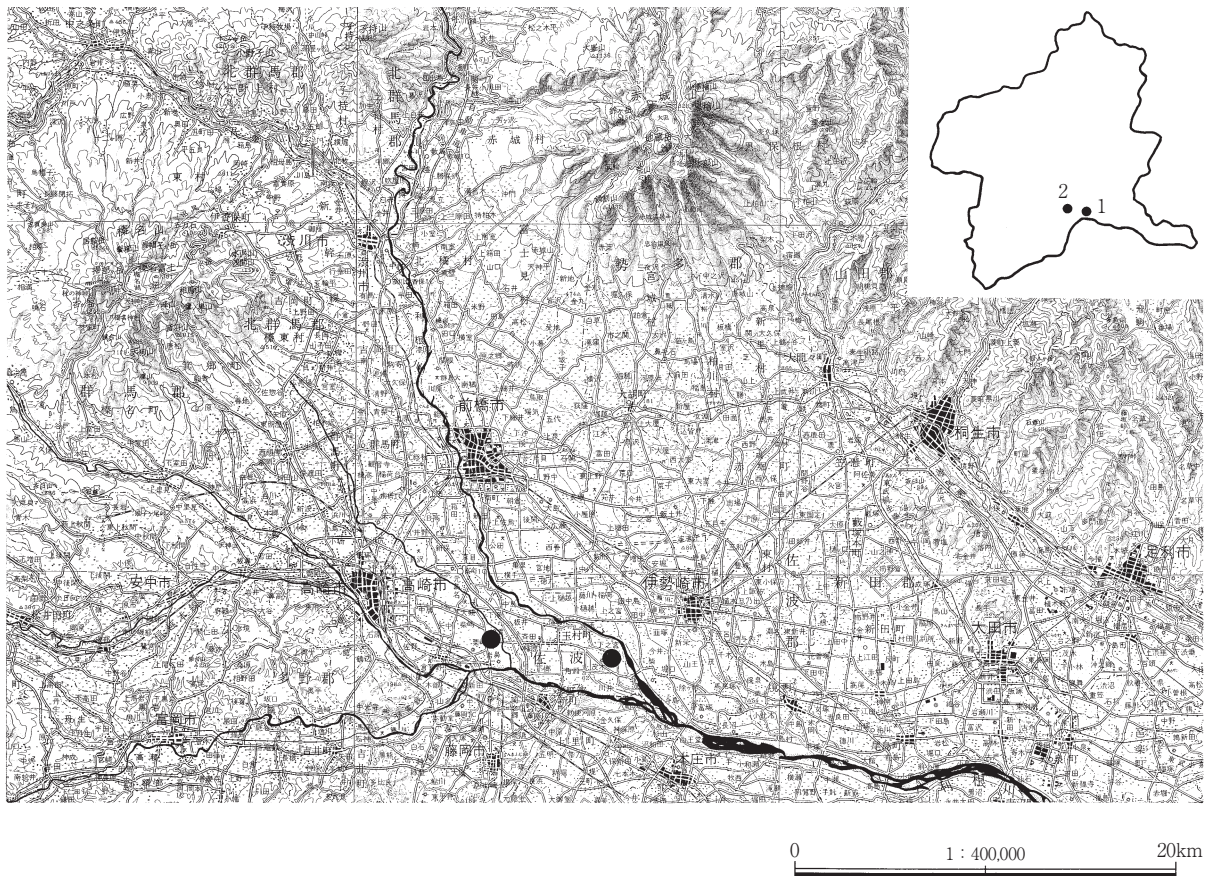
## 2 古墳の位置と地形

箱石浅間山古墳のある大字箱石は、群馬県佐波郡

玉村町の北東寄りに位置し、J R高崎線の新町駅から北に約5kmの距離のところにある。

玉村町は、群馬県の中央部から南側寄りに位置し、東経139度08分54秒、北緯36度17分42秒（本古墳の位置）を測る。地形的には低地と微高地の違いによる多少の高低差があるものの、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜する平坦地が形成されている。標高は68mから69mを測る。町域の北東部を北西から南東に利根川が流れ、西には井野川が南流している。また、南には井野川と合流し南東方向に流れる烏川が町域の南東部で利根川と合流している。

本古墳周辺には、圃場整備事業により整然と区画された水田や畠が広がり、長年、米麦二毛作、養蚕を中心とした農業が盛んに行われてきた。近年は隣接する前橋市や高崎市、伊勢崎市などのベッドタウンとして住宅建築が激増し、人口もここ数年で著し



第1図 箱石浅間山古墳と不動山古墳の位置（1. 箱石浅間山古墳 2. 不動山古墳）



第1章 箱石浅間山古墳の調査

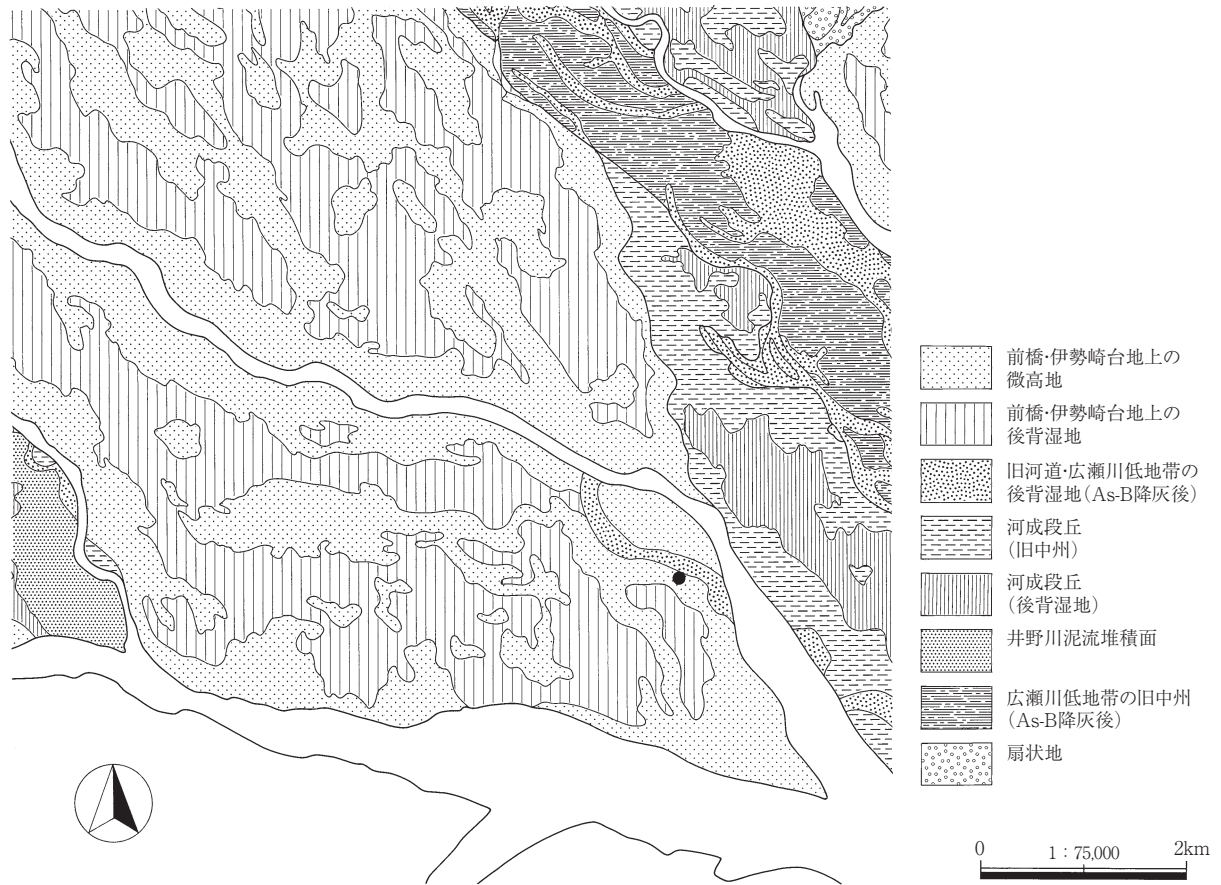
く増加している。それとともに生産・物流企業関連の施設の増加や国道354号玉村バイパスをはじめとした主要道路、利根川の橋架建設などの交通網の整備が大々的に行われ、玉村町はここ数年で著しい発展と変貌を遂げてきている。

また、箱石浅間山古墳は、前橋台地の南端に立地すると見ることもできる。前橋台地は、洪積世後期、利根川によってもたらされた、厚さ200m以上も堆積した前橋砂礫層の上に、約20,000年から24,000年前の浅間山の山体崩落に起因する前橋泥流が極めて短期間にこの台地を覆って堆積し、形成されたものである。

こうして形成された前橋台地上には洪積世後期以降、利根川をはじめとする幾つかの河川が流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成していった。特に台地の東側を流れる利根川は、榛名山南東麓の末端を浸食する形で南流している。約24,000年前は、前橋

市総社町辺りから新前橋駅を経て染谷川、滝川付近を流れ、井野川に注いでいたとされる。その後、約17,000年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。現在は前橋市大手町付近から、玉村町五料付近まで、前橋台地を貫通している。現在の河道に移ったのは中世後期であると考えられている。その後、利根川は大きな変流をこそ起こさなかったが、洪水などの氾濫を度々起こし周辺の小河川に影響を与えながら前橋台地を刻み続けた。その結果、玉村町においても後背湿地と微高地とが複雑に入り組んだ地形が形成されている。

利根川は、中世の変流後も幾度となく大洪水を引き起こした。利根川流域にあたる玉村町域内においても利根川の洪水堆積層に被覆された水田や畠が確認されている。また、1783（天明3）年の浅間山大噴火の際には鎌原泥流が流れ下り、旧芝根村をはじめ



第2図 箱石浅間山古墳周辺の地形

め利根川沿いの町域に甚大な被害をもたらしている。近年に至っても1947（昭和22）年のキャサリン台風の直撃を受け、玉村町はその氾濫によって大きな被害を被っている。

### 3 周辺の遺跡

この項では箱石浅間山古墳を理解するために周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は玉村町域であるが、図幅の都合により、第3図からは玉村町の北部と西部を除外している。

以下、玉村町周辺の遺跡の動向について古墳時代を中心に記しておく。

#### (1) 弥生時代

縄文時代に引き続き弥生時代の遺跡分布も稀薄である。その中、上飯島芝根Ⅱ遺跡で中期後半の住居1軒が検出されている。一万田遺跡(86)では中期後半の壺館が、行人塚Ⅲ遺跡(45)では土坑が検出されている。

#### (2) 古墳時代

古墳時代前期になると玉村町の遺跡分布は弥生時代後期の状況から一転、多くの集落が形成される状況が見られる。本古墳の周辺では調査例はないが、町域の中央からやや北側を東西方向に通過する国道354号玉村バイパス関連の調査例としては福島曲戸遺跡(82)、福島大光坊遺跡(61)、福島久保田遺跡(65)、上新田中道東遺跡(75)などがある。町域の南側、烏川左岸段丘上では上之手八王子遺跡(51)や下郷遺跡、角瀨城遺跡(30)などの存在が知られている。各地区とも圃場整備が進み、旧地形を復元することが困難になっているが、沖積地を臨む微高地上に集落が占地していたものと考えられる。

利根川左岸の砂町遺跡では4世紀初頭と後半の2時期に掘削された溝が検出されている。

上新田中道東遺跡、福島飯塚遺跡(70)、赤城遺跡などの遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。下郷遺跡では28基の方形周溝墓をはじめ円形周溝墓、土坑が前方後墳や前方後円墳とともに検出されている。

前期の主要古墳としては、前方後円墳の川井稲荷山古墳(芝根7号墳)(14)、下郷天神塚古墳、円墳の軍配山古墳(22)が知られている。

中期の古墳としては、前方後円墳とされる梨ノ木山古墳(20)が5世紀後半の築造である。他に横堀遺跡で5世紀後半の円墳が検出されている。

後期になると町域東南部に分布する古墳群の内容が充実してくる。6世紀後半の時期の前方後円墳としては、小泉大塚越3号古墳(6)、オトカ塚古墳(19)、房子塚古墳(17)などが知られる。また、烏川左岸の若宮・八幡原古墳群(33)や角瀨古墳群(29)、川井古墳群(13)では、6世紀から7世紀にかけて広範囲にわたる群集墳が形成されている。小泉大塚越3号古墳が築造された小泉古墳群は、一帯が1783(天明3)年の泥流により埋没しており、20基前後の古墳が分布するものと考えられている。箱石浅間山古墳からは750mの距離にある。

古墳の分布から見れば、前期の集落は中期・後期へと継続して展開していったことが考えられるが、調査成果からはそれを読みとることは困難である。斉田中耕地遺跡(74)、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡(67)、福島大光坊遺跡、福島久保田遺跡、福島曲戸遺跡で古墳時代後期の水田が検出されている。

#### (3) 奈良・平安時代

現在の玉村町周辺は律令期的那波郡域にあたり、倭名類聚抄に記載された佐味と、鞆田郷・朝倉郷の一部に比定することができる。また、地域内に延喜式内社の火雷神社(4)と倭文神社(89)の2社が鎮座している。

奈良時代の集落は、福島稲荷木遺跡(68)や上之手八王子遺跡をはじめ、古墳時代同様微高地上に立地する傾向がみられる。さらに平安時代の集落は斉田竹之内遺跡(72)、福島飯塚遺跡の他、上之手八王子遺跡や行人塚遺跡(44)などをはじめ、町域のほぼ全域で発見されており、奈良時代から平安時代の集落動向を知ることができる。

その中、一万田遺跡では直径1mの柱穴からなる柵列の検出や瓦の出土が見られ、9世紀前半から中







第1表 箱石浅間山古墳周辺の遺跡一覧

※文の項中の番号は章末の引用・参考文献の番号と同じ

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
1	箱石浅間山古墳	玉村町箱石 558	本報告の古墳。	
2	社宮島古墳	玉村町南玉 836-1	昭和 51 年玉村町教育委員会で調査を実施。	1
3	箱石古墳群	玉村町箱石	本古墳の西側に散在的に分布する。	1
4	火雷神社	玉村町下之宮字宮東 524-1 他	平安時代延喜式内社。上野国八の宮。本遺跡の北東方向約 200 m に位置する。	1
5	小泉古墳群	玉村町飯倉、小泉	小泉大塚越古墳 3 号古墳をはじめ 20 基の古墳が分布する。	2
6	小泉大塚越遺跡	玉村町小泉 121 他	10 基の古墳を調査。古墳の分布は周辺に広がる。3 号墳は墳丘長 46 m の前方後円墳で角閃石安山岩の削石を使用した横穴式石室を主体部に有する。他は 20～25 m の円墳である。4 号墳の主体部は 2 基の堅穴系石槨を有していた。A s - A 泥流に埋没した畠を検出。	2
7	小泉長塚 1 号古墳	玉村町小泉字長塚 142 他	円墳とされるが前方後円墳の可能性も指摘されている。主体部は角閃石安山岩の削石を使用した横穴式石室である。単鳳環頭大刀柄頭を出土する。	3
8	稲荷木 1 号墳・稲荷木 2 号墳	玉村町箱石 440・421	昭和 51 年玉村町教育委員会で調査を実施している。ともに埴輪が樹立されていた。2 号墳からは耳環、玉類、滑石製腕輪、鉄鏃、銅製鈴が出土している。	1
9	川井箱石遺跡	玉村町川井他	古墳 3 基の他に平安時代の住居、A s - B 下水田を検出した。	4
10	三境遺跡	玉村町上茂木 74 他	平安時代、A s - B 下水田を検出。	5
11	三境Ⅱ遺跡	玉村町上茂木 99	平安時代、A s - B 下水田を検出。	5
12	十王堂Ⅰ・Ⅱ遺跡	玉村町上茂木 100・776 他	平安時代、A s - B 下水田を検出。	6
13	川井古墳群	玉村町川井	川井稲荷山古墳をはじめ 20 基弱の古墳が分布する。芝根村第 15 号墳は、直径 10 m 前後の円墳で、主体部の横穴式石室には角閃石安山岩が使用されていた。埴輪が樹立されていた。芝根村第 14 号墳は、直径 22 m の円墳である。主体部は横穴式石室で、埴輪が樹立されていた。芝根村第 18 号墳は、直径 20 m 未満の円墳と考えられる。主体部は横穴式石室であったが残存状態は不良であった。埴輪が樹立されていた。	7
14	川井稲荷山古墳	玉村町川井 1191-1 他	『綜覧』芝根村 7 号古墳。墳丘長 40 m 以上の規模を有する前方後円墳である。4 世紀に築造された墳丘を利用して、6 世紀後半に角閃石安山岩を使用した横穴式石室が築造されている。石室の裏込めから三角縁神獣鏡が出土している。	7
15	川井城	玉村町川井字堀之内	16 世紀の城館址である。築・在城者は斎藤基盛。堀、櫓台が見られる。	8
16	茂木古墳群	玉村町角測、上茂木、下茂木	浄土山古墳、殿台山古墳、房子塚古墳の 3 基の前方後円墳をはじめ 30 基余りの古墳が分布する。	7
17	房子塚古墳	玉村町下茂木 715-1 他	墳丘長 45 m ほどの前方後円墳とされる。単鳳環頭大刀柄頭や銅鏡などを出土している。	7
18	殿台山古墳	玉村町下茂木 396 他	『上毛古墳綜覧』に前方部幅約 23 m の前方後円墳と記載されている。	7
19	オトカ塚遺跡	玉村町下茂木皇院巡 1050	オトカ塚古墳は墳丘長 50 m の前方後円墳である。副葬品に双龍環頭大刀の柄頭がある。大型の円筒埴輪や馬形埴輪を樹立していた。近接地で古墳時代前期の方形周溝墓を検出。	9
20	梨ノ木山古墳	玉村町大字下茂木 1016 他	二重の周堀が廻っている。墳長 82 m の前方後円墳とする考えもある。勾玉、石製模造品、大刀を出土している。円筒埴輪には二次調整のヨコハケが見られる。	7
21	浄土山古墳	玉村町下茂木 900 他	墳丘長 54 m の前方後円墳である。墳丘は 2 時期にわたり利用される。角閃石安山岩を使用した横穴式石室が構築されていた。	7
22	軍配山古墳	玉村町角測 4750 他	直径 40 m の円墳。粘土槨と推定される主体部から内行花文鏡 2、勾玉、管玉、鉄刀、鉄鏃、鉄斧が出土している。	7
23	萩塚古墳	玉村町下茂木 702-1	円墳と考えられている。6 世紀後半の築造で、角閃石安山岩を使用した横穴式石室を有していた。埴輪を有する。大刀、鉄鏃、須恵器、土師器などが副葬されていた。	7
24	神明遺跡	玉村町上茂木 771-1～3	平安時代、A s - B 下水田を検出。	10
25	下茂木神明Ⅱ遺跡	玉村町下茂木 767 他	平安時代、A s - B 下水田を検出。	11
26	滝川南遺跡	玉村町上茂木 712-1 他	平安時代の住居を検出。	12
27	下茂木地区遺跡群	玉村町下茂木 863 他	平安時代、A s - B 下水田を検出。	11
28	下茂木屋敷	玉村町下茂木	天正年間に存続した屋敷。斎藤氏が在住。堀、土居。	8
29	角測古墳群	玉村町角測	14 基の古墳が確認されているが、実数はこれを上回ると考えられている。玉村町第 19 号墳、玉村町第 22 号墳、玉村町第 23 号墳などは『上毛古墳綜覧』に直径約 20 m の円墳と記載されている。	7
30	角測城遺跡	玉村町大字角測字杉山 1886-1 他	城郭。二重の堀、戸口が認められる。北辺・西辺の一部を調査する。周辺からは縄文時代の土坑。古墳時代前期、中期の集落、5 世紀末から 6 世紀前半の埴輪を伴う円墳 4 基を検出する。	8

第1章 箱石浅間山古墳の調査

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
31	天神巡りⅢ遺跡	玉村町角測字御門	古墳時代の住居、土坑（土器焼成坑と考えられる）を検出。	15
32	若王子Ⅱ遺跡	玉村町上之手 2095-2	平安時代、A s - B 下水田を検出。	15
33	若宮・八幡原古墳群	高崎市八幡原町、玉村町八幡原	若宮古墳群では竪穴系小石塚を主体部に有する円墳6基、横穴式石室を主体部に有する円墳11基が調査された。その東側に続く八幡原古墳群では城1号・2号古墳をはじめ、5世紀後半以降の円墳が群集する。	1
34	城1号古墳	玉村町八幡原 1760	若宮・八幡原古墳群の一角に位置する。円墳で竪穴系小石塚を主体部とする。	16
35	城2号古墳	玉村町八幡原 1766-1	若宮・八幡原古墳群の東端に位置する6世紀後半の円墳。直径22mの円墳。	16
36	八幡原城	玉村町八幡原字城	中世城郭。一城二郭。	8
37	宇貫館	玉村町宇貫字赤城	中世の屋敷。外郭は東西・南北100mの規模。二重の堀が廻る。	25
38	蟹沢遺跡	玉村町角測5291・5292	中世の屋敷、近世の畠を検出する。	17
39	蟹沢Ⅱ～Ⅳ遺跡	玉村町角測字御門	近世の土坑他を検出。	18 19
40	横堀遺跡	玉村町宇貫 5199-2	5世紀代の古墳を検出。	20
41	新井屋敷	玉村町上之手 398	中世の屋敷。堀、土居が見られる。北側に上之手石塚Ⅱ・Ⅲ遺跡が位置する。	8
42	上之手石塚遺跡	玉村町上之手 2121 他	古墳時代前期から平安時代の住居、中・近世の屋敷を検出する。	21
43	上之手石塚Ⅲ遺跡	玉村町上之手 2121-1	平安時代住居、溝、中・近世溝、土坑。	22
44	行人塚遺跡	玉村町上之手 2065-2	奈良・平安時代の住居、溝、土坑を検出。	23
45	行人塚Ⅲ遺跡	玉村町上之手 2065-3	弥生時代の土坑、古墳時代前期・後期の住居、奈良・平安時代の住居、中世の屋敷を検出する。	23
46	行人塚Ⅳ遺跡	玉村町上之手 2065-2	行人塚Ⅲ遺跡に近接する。	23
47	上之手地区遺跡群(2)	玉村町上之手2061、2076	平安時代の住居を検出。	11
48	宇貫遺跡	玉村町宇貫 588 他	古墳時代前期、奈良・平安時代の住居、中世の屋敷を検出する。	25
49	赤城Ⅱ遺跡	玉村町宇貫 574-1 他	古墳時代、平安時代の土坑を検出。	26
50	重田屋敷	玉村町上之手字原	中世の屋敷。重田氏が在住。	8
51	上之手八王子遺跡	玉村町上之手 1855 他	古墳から平安時代の集落。平安時代の水田。隣接する上之手石塚遺跡では古墳時代の住居、方形周溝墓を検出している。	28
52	中郷遺跡	玉村町上之手 1929-3	平安時代の住居、溝を検出。	
53	原屋敷	玉村町上之手 1994-1	中・近世の屋敷。溝、土坑を検出する。奈良・平安時代の土坑も合わせて検出。	30
54	粉糠島遺跡	玉村町上之手 2012-2	近世土坑、溝を検出。粉糠島Ⅱ遺跡からは平安時代の溝を検出。	30
55	上之手立野遺跡	玉村町上之手 1557-2	奈良・平安時代の住居、中世の水田・畠を検出する。	31
56	曲田Ⅱ遺跡	玉村町上之手 1690-1	平安時代、A s - B 下水田を検出。	32
57	曲田遺跡	玉村町上之手 1661	平安時代の住居、井戸、溝を検出する。	33
58	中袋遺跡	玉村町上之手 1525	奈良時代の土坑、近世の遺構を検出する。	34
59	観照寺屋敷	玉村町上之手字寺巡	13世紀の屋敷。二重堀、土居が見られる。	8
60	十王堂Ⅳ遺跡	玉村町上茂木	近接して十王堂ⅠからⅢ遺跡が近接する。	
61	福島大光坊遺跡	玉村町福島字大光坊	古墳時代、平安時代の住居、古墳時代H r - F A 下水田、平安時代A s - B 下水田、近世の復旧溝を検出する。	35
62	福島南玉遺跡	玉村町福島・南玉	平安時代の住居、水田、近世復旧溝を検出。	36
63	利根添遺跡	玉村町南玉字利根添 1071-1 他	A s - A とその泥流によって埋没していた近世の土手・畠を検出。	37
64	味噌袋・福島二丁目遺跡	玉村町福島 532 他	平安時代の住居、水田、近世復旧溝を検出。	36
65	福島久保田遺跡	玉村町福島字久保田	古墳時代前期の住居、H r - F P 泥流下水田。平安時代住居、A s - B 下水田を検出。14世紀前半の屋敷。東西80から95m、南北50から70m前後の周囲に堀を廻らせた区画。中・近世の畠。近世の復旧溝を検出。	35
66	久保田遺跡	玉村町福島字久保田	福島久保田遺跡に近接。屋敷の区画内を検出。	38
67	福島大島遺跡	玉村町福島字大島	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居、A s - B 下水田を検出。中世の屋敷は一辺108mの規模である。中世の畠、近世の復旧溝を検出。	39
68	福島稲荷木遺跡	玉村町福島 325 他	古墳時代から平安時代の住居、中世の屋敷を検出。	40



No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
69	福島稲荷木IV遺跡	玉村町福島	平安時代を主体とした古墳から平安時代の住居と平安時代A s - B下水田が検出された。	40
70	福島飯塚遺跡	玉村町福島字飯塚	弥生時代の土坑。古墳時代前期の方形周溝墓、水田、後期住居、平安時代住居、A s - B下水田、墨書土器を出土する大溝を検出した。中世の畠、近世の水田、復旧溝を検出。	41
71	福島飯玉遺跡	玉村町福島字飯玉	平安時代A s - B下水田、中世の屋敷3箇所、大規模水路を検出。中世の畠、近世の水田、畠、復旧溝を検出。	42
72	齊田竹之内遺跡	玉村町齊田字竹之内	福島飯玉遺跡の西側に位置し、同一遺跡をなすと考えられる。飯玉遺跡と同期、同種の遺構を検出、中世の屋敷は3箇所。他に平安時代の住居を検出する。	43
73	竹之内遺跡	玉村町福島100	齊田竹之内遺跡の北側に位置する。	44
74	齊田中耕地遺跡	玉村町齊田字中耕地	古墳時代後期の水田、奈良・平安時代の洪水層下水田、A s - B下水田を検出。中世の一辺30 m以上の屋敷、畠を検出。	45
75	上新田中道東遺跡	玉村町上新田字中道東	古墳時代前期の住居、方形周溝墓、平安時代A s - B下水田を検出。中世の屋敷2箇所を検出。大規模な用水路も検出。	46
76	蛭堀東遺跡	玉村町与六分	古墳時代溝。平安時代溝、A s - B下水田を検出。	47
77	中道東遺跡	玉村町与六分	古墳時代溝。平安時代溝、A s - B下水田を検出。東側に中道東II遺跡が位置する。	48
78	一本木遺跡	玉村町板井14	平安時代A s - B下水田を検出。	49
79	温井東屋敷・西屋敷	玉村町齊田字諏訪南	中世の屋敷。温井氏が在住。堀が見られる。齊田東屋敷、齊田西屋敷とも呼称する。	8
80	田口下屋敷	玉村町齊田字樋尻587	中世の屋敷。東西75 m、南北100 m。二重の堀が廻る。	50
81	天神古墳	玉村町福島字屋敷1230-9	円墳か。	
82	福島曲戸遺跡	玉村町福島字曲戸	縄文時代中期土坑、古墳時代前期住居、古墳時代後期水田、平安時代の住居、A s - B下水田を検出。中世畠、近世A s - A復旧水田、復旧溝を検出する。	51
83	中町遺跡	玉村町上福島字中町	A s - A泥流で埋没した屋敷を検出。	52
84	上福島中町遺跡	玉村町上福島中町	平安時代の住居、土坑を検出。中世の屋敷、A s - A泥流で埋没した屋敷、畠を検出する。	52
85	上福島遺跡	玉村町上福島	平安時代A s - B下水田を検出。近世の畠、復旧溝も検出。	51
86	一万田遺跡	玉村町上福島191他	弥生時代後期の再葬墓。平安時代の住居、柵列、江戸時代の畠を検出。奈良・平安時代の官衙遺構と考えられている。	53
87	神人村II遺跡	玉村町樋越305-7他	弥生時代の土坑、奈良・平安時代の住居、平安時代A s - B下水田を検出。	54
88	樋越諏訪前遺跡	玉村町樋越1609	A s - A泥流で埋没した屋敷、畠を検出する。	55
89	倭文神社	伊勢崎市上之宮	平安時代延喜式内社。上野国九の宮。	

頃を中心とする時期に郡衙や寺院などの官衙施設が存在していたことが想定される。福島曲戸遺跡からは「村長」と線刻された紡錘車や多数の緑釉陶器が出土している。福島飯塚遺跡の大溝からは、「家」などの文字が記された墨書土器、250点以上が出土している。上飯島芝根II遺跡からは銅印の出土が知られる。

砂町遺跡と上福島尾柄町遺跡からは推定東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)と考えられる幅員4 mの道路状遺構が検出されている。

集落の分布と呼応するように、この時期、水田開発が急速に進行したものと考えられる。1108年(天仁元)年の浅間山噴火による軽石、浅間B軽石で埋没した水田遺構は川井箱石遺跡(9)、三境遺跡をはじめ町内各所から多数検出されている。町域のほぼ全域にわたる沖積地が、水田耕地化されていたと

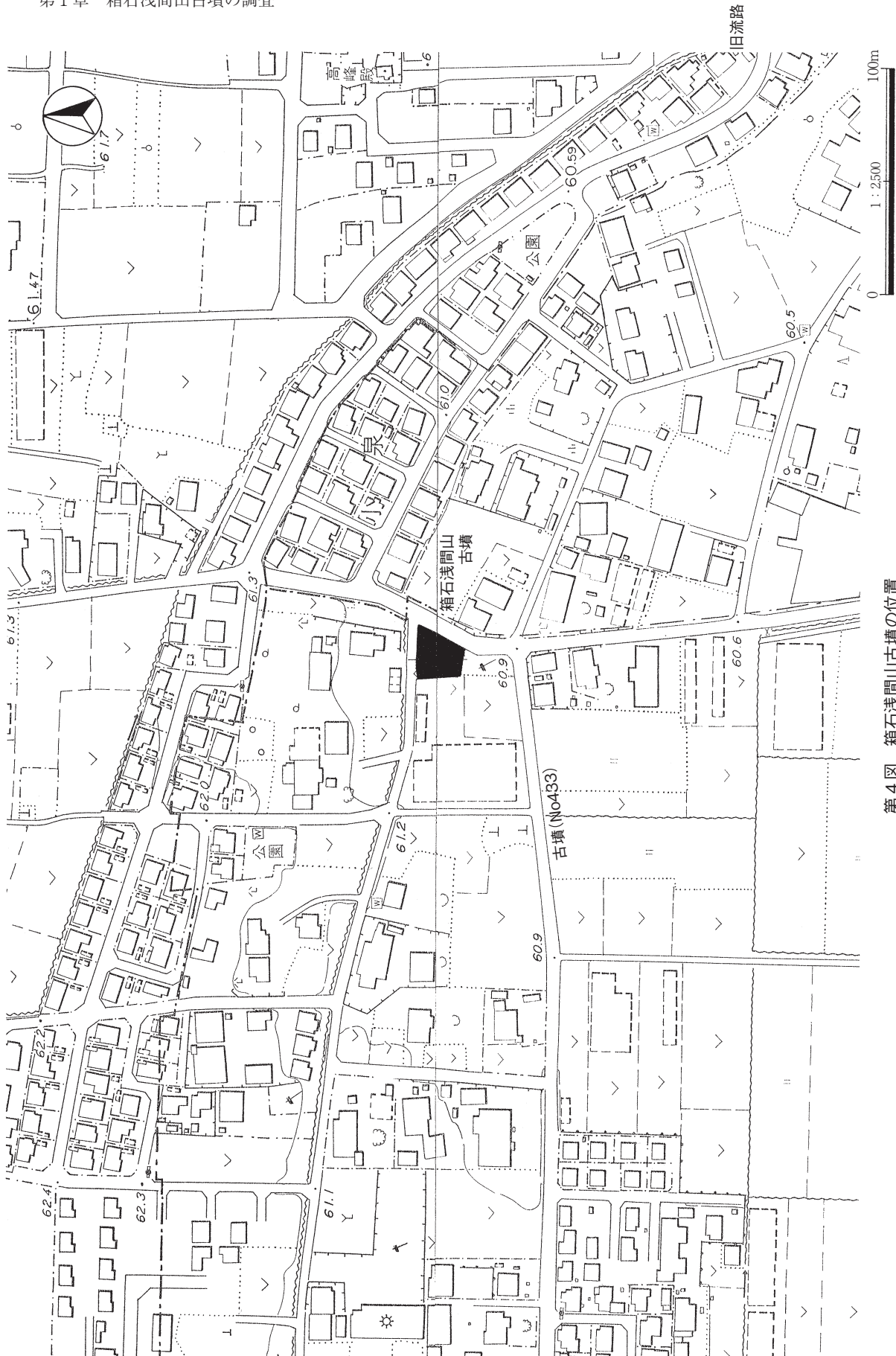
考えられるような状況である。

12世紀中頃には伊勢神宮収領の玉村御厨が構えられたとする記録があり、これより以前には玉村保が成立していたと考えられている。

#### (4) 中世

鎌倉時代の玉村町域は上野国奉行人安達氏、およびその被官である玉村氏の支配下にあったとされる。玉村氏は、玉村御厨成立の際の在り地開発領主であったと考えられている。霜月の乱で安達氏没落後は、北条得宗家の支配下にあったと考えられる。室町時代には、上杉氏守護のもと那波氏の領域となったとされる。戦国時代には、玉村町域のみならず上野国一帯が、上杉・武田・後北条氏の3氏の争奪戦の渦中に置かれた。この中、宇津木氏は大字福島を本拠地とした氏族である。

玉村町域においては、山崎一氏の長年の研究や、



第4図 箱石浅間山古墳の位置

群馬県教育委員会が実施した城郭分布調査により明らかになったように、城郭や周囲に堀（溝）をめぐる屋敷が多数存在することが知られている。『群馬県の中世城館跡』によれば、中世の城郭・屋敷として玉村町域内で34箇所を掲載している。この中で観照寺屋敷（59）、玉村城（南玉原屋敷）、南玉館（原武屋敷）の存続期間を13世紀、阿左美館を13から16世紀としている。角瀨城は15・16世紀、田口下屋敷（80）、茂木館（本木館）は16世紀とする。

また、近年の発掘調査においても多数の城郭・屋敷の検出がなされている。国道354号関連の遺跡では福島飯玉遺跡、斉田竹之内遺跡、斉田中耕地遺跡、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡で当該期の遺構や遺物を検出している。また、玉村町教育委員会により、久保田遺跡、宇貫遺跡（48）、八幡原赤塚Ⅱ遺跡、上之手石塚遺跡、蟹沢遺跡（38）、内田屋敷、原屋敷（53）、田口下屋敷などが調査されている。福島久保田遺跡と久保田遺跡の調査では、東西80～95m、南北50～70m前後の長台形に区画溝がめぐると考えられる屋敷の存在が明らかになった。築造年代は14世紀前半と考えられている。

この時期の生産遺構としては、福島久保田遺跡で1427（応永34）年に起こったと推定される大洪水による堆積層で埋没した水田が検出されている。上之手立野遺跡（55）では水田・畠が検出されている。利根川の変流以後、町域では数々の洪水被害を重ねて受けることとなる。

#### 4 調査の方法と経過

##### （1）古墳の呼称と調査区の設定

本古墳の呼称については、調査担当者によると調査開始時には箱石浅間山古墳と命名されていたとのことである。1879（明治9）年作成の「箱石一筆限字別地図」には浅間社の注記が記載された円形の区画が表記されている。このことから地元で浅間山と称されていたものと考えられる。

箱石浅間山古墳は、『上毛古墳総覧』には未登録であるものの、1971（昭和46）年に作成された『群

馬県教育委員会遺跡台帳』Ⅰにナンバー3529、箱石古墳群（所在地は609と594の2番地が対象になっている）として掲載されている周知の遺跡であった。

それ以前の1963（昭和38）年に作成された『群馬県の遺跡』にもナンバー1942として「芝根小学校北方1kmの地点に3基の古墳が残っている・・・」とある。この中に箱石浅間山古墳が含まれていたものと考えられる。

なお、1992（平成4）年に玉村町教育委員会が発行した『玉村町の遺跡』には町台帳番号489として掲載されている。

##### （2）グリッドの設定

箱石浅間山古墳の墳丘周辺を含めた調査対象地は、およそ南北50m、東西50mの範囲に収まるものであった。このため、調査に際しては、調査対象地北東隅の任意の点を基点として、調査区全域を網羅する形で5m四方のグリッドを設定した。グリッドの南北軸は磁北から東偏4度である。グリッドは、第5図に示したとおり、東西方向（X軸方向）には東から西に向かってA・B・・・Jとアルファベットを、南北方向（Y軸方向）には1・2・・・10とアラビア数字を付した。グリッドの呼称は北東隅の交点をもってこれにあてた。遺物の取り上げはこのグリッドを基本として行われている。

##### （3）調査の方法

調査時における箱石浅間山古墳の墳丘は、削平が進行し、地割りにその墳形を残しながらも、直径10から15m、高さ1m程の小丘状となっていた。ここに浅間神社が鎮座していた。

調査にあたっては、墳丘の残存状況を確認することを目的に、残存した墳丘の高まりを念頭におきながら、調査対象地内に幅1.5mのトレンチを南北方向に設定した。また、これに交差するように東西方向のトレンチを2本設定した。トレンチの位置は、南北トレンチがグリッドのEラインから西方向に1mのところにあたる。東西のトレンチは、北側が5ラインから南側に1mのところと7ラインに沿った位置である。これらのトレンチの掘削を進め、土層

## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

の観察を行うとともに、墳丘の規模、周堀の確認を行った。

トレンチの掘削を進めた結果、表土下に葺石を施した墳丘の一部が残存していることが判明した。このため、その後の調査は、葺石の施された範囲を確認するために、検出された葺石を追いかけるようにして調査区を拡張、面的に墳丘斜面上の表土および泥流堆積層などの墳丘面を被覆していた土層を除去していった。

調査は、調査期間、調査に投入できる労力が限定されていたため、葺石の検出にその主眼が置かれた。そのため、周堀の全容を解明するまでにはいかなかった。また、旧地表土より古墳時代前期の土器が出土した。墳丘下は古墳時代前期の遺物包蔵地であり、竪穴住居と考えられる落ち込みも検出した。

遺構の記録は、実測図の作成と写真撮影により行った。遺構の図化は、古墳の状況に則して、墳丘とその周辺の状態の平面図を200分の1、葺石平面図を40分の1、土層断面図を20分の1と縮尺を変えて行った。これらを基に第2図面を作成し、葺石の全体図や遺物の出土位置図の作成を行った。

遺構写真は、モノクロ写真については35ミリフィルムを使用して、リバーサルフィルムについても35ミリフィルムを使用して撮影した。

### (4) 調査の経過

箱石浅間山古墳の発掘調査は、1975（昭和50）年3月25日から5月31日までの間実施された。調査対象地は前述のよう圃場整備に伴う区画整備対象地と新設の道路建設予定地であった。

調査は以下のような工程で進められた。

1975（昭和50）年

3月25日 墳丘の南側、西側にトレンチを設定し、調査を開始する。

3月26日 西側トレンチ発掘作業。

3月27日 西側（東西）トレンチ、北側中央トレンチの発掘作業、墳丘の断ち割りを行う。

3月28日 各トレンチで作業継続。

3月31日 西側部分の葺石精査。底部を穿孔した壺

形土器の破片が多量に出土している。

4月1日 西側部分の葺石を精査すると共に、南西側の葺石の検出作業を行う。

4月2日 西側と南東部分の葺石を精査する。

4月4日 南西側と北東側の葺石検出作業を行う。

4月7日 南西側と北東側の葺石精査を行う。

4月8日 北西側と南西側の葺石精査を行う。

4月9日 南西から西側の葺石、平板測量作業開始、南西側の測量を終了する。

4月10日 平板測量を継続。葺石全面の測量を終了する。

4月11日 西側、南東側の墳丘部分の測量を開始する。葺石のレベル計測。写真撮影。南北トレンチの断面実測を行う。

4月12日 南北トレンチの土層観察。トラバー測量。葺石のレベル計測。全景写真撮影。南側ベルトの除去作業。

4月14日 調査区の埋め戻し作業を開始する。出土遺物の洗浄作業、図面整理を行う。

4月15日 調査区の埋め戻し作業を行う。墳丘部の整地作業を行う。その後1週間、現地で、出土遺物・図面の整理作業を行う。

5月31日 事務手続き等を終了する。

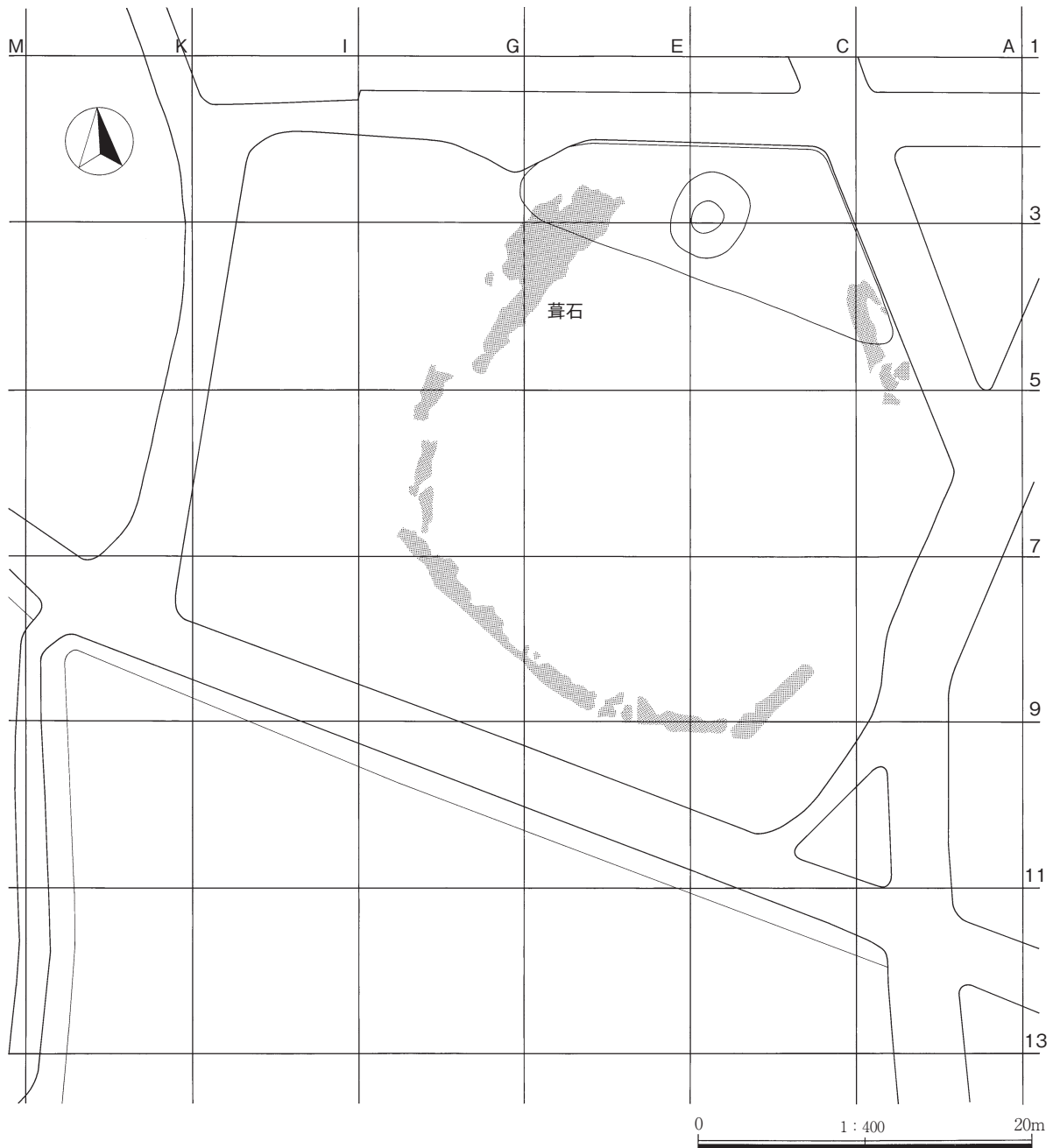
調査の終了後、調査地対象地は圃場整備に伴う整地作業が実施され、新設道路が建設された。箱石浅間山古墳はこれにより一部が破壊されたものの土中に埋め戻された。

現在は調査対象地は畝地となっている。畝の北側寄りの一隅には小丘上に浅間神社が鎮座している。周辺には宅地が増加し、古墳を取り巻く景観は調査時とは徐々に変化を遂げようとしている。

### (5) 整理作業の経過とその方法

箱石浅間山古墳の調査成果・出土遺物の整理作業は、今回合わせて報告を行う高崎市所在の不動山古墳の作業と合わせ、2001（平成13）年9月1日から2002（平成14）年3月31日の間、過年度公共開発関連出土品等整理事業として、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会からの委託を受け





第5図 箱石浅間山古墳とその調査区

実施している。これが第1回目の整理作業である。

この時点での作業の内容を記述すると、遺構図面については、調査時作成の図面に編集作業を加えた後、トレース・版下作成を行った。

出土遺物については、出土古墳、その地点ごとに接合作業を行った後、報告書に掲載する遺物を選別・抽出した。実測に際しては、その一部について器械実測により素図を作成しこれを精図した。器形の復

元が困難な資料については、断面のみ実測を行い、これに拓本を添付した。作成した実測図は、トレース作業を行い、遺構図面と合わせ版下作成を行った。

作業を進めて行く途中で次年度以降の事業の中止が決まり、報告書の刊行経費が確保されないことが明らかとなり、整理作業は一端中断の形となった。

第2回目の整理作業は、2009（平成21）年10月1日から2010（平成22）年3月31日までの間に平成21



## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

年度緊急雇用創出基金事業として不動山古墳、藤岡市所在の七興山古墳の整理作業とともに合わせて実施された。

遺構図面、出土遺物の図面については、前回作成していた版下図面の点検、レイアウト等の作業を行った。

掲載資料については、台帳作成後収納作業を行った。掲載を断念した土器・石器などは出土遺構・地点ごとに種別・器種の分類を行い、計数後収納した。

記録写真類は、古墳ごとに整理し、レイアウト・版下作成作業を行った。

上記の経過を経て、2010（平成22）年3月に『箱石浅間山古墳 不動山古墳』として発掘調査報告書の刊行を行ったところである。

### 5 調査された遺構

#### （1）周辺の地形と土層の堆積状況

調査対象地周辺は、明治時代の地図によると宅地が点在しその周辺一帯に畠が広がるといった土地利用の状況にあったようである。本古墳も調査直前の地目は畠であった。

本古墳は北西から南東方向に延びる微高地上に立地しているものと考えられる。古墳の位置する地点の標高は61.3m前後である。

本古墳の北側には現在は宅地が密集しその識別が困難になりつつあるが、旧流路の痕跡が認められる。ここには矢川端の小字名が残されている。これは利根川の旧流路とされる矢川が箱石地区少林山堂付近で分流し、その支流が古墳の北側を東流、現利根川にいたっていたものである。現在の利根川は本古墳の北東約350mのところを流れている。

本古墳の南側には圃場整備後小泉地区にかけて広い範囲にわたり水田が造成されているが、これは1783（天明3）年に浅間山が大噴火を起こした際の火山灰と鎌原泥流に厚く覆われた土層上に広がる景観で、小泉大塚越遺跡をはじめとする周辺遺跡の調査により、表土下2mには江戸時代の水田・畠や古墳が多数埋没していたことが明らかとなっている。

微高地上には箱石地区の東側の下之宮地区から西側の南玉地区にかけて東西1.5kmほどの範囲に20基弱の古墳が点在していたものと考えられている。その中で本古墳から西方約1kmのところにある社宮島古墳が発掘調査されている。また、本古墳の南西80mには周囲の畠の耕作面より一段高い小丘を利用した墓地がある。この墓地の片隅には加工痕の認められる角閃石安山岩が数個残されている。これは横穴式石室の石材の一部であると考えられることから、この墓地は古墳の墳丘を利用して作られたもので、泥流堆積物により墳丘が埋没しているものと考えられる。玉村町の遺跡台帳に433として登載されている。さらに南西200mにある台帳番号432も古墳が墓地とされている。同様の状況は本古墳の南方に分布する小泉古墳群でも認められたところであり、洪水堆積物から埋没を逃れた古墳の墳丘頂部が墓地に利用されている事例が認められる。

#### （2）墳丘

本古墳の墳形は、検出した葦石の敷設状況を基に検討すると、平面形は、方形状を呈しながらも、第6図に見るように、四隅が隅切りされたように短い辺をなし、不等辺の八角形状をなす異質なプランを示していた。短辺の存在についてはD-9グリッド部分で検出された葦石の根石の列が検出端でN-43°-Eの方向から約135度の角度で西方向に向きを変えているという調査所見に基づくものである。

規模は、約30.8mに推定復元されるものと考えられる（『日本考古学年報』の報告では南北33.4m、30.0m前後と記載されている）。墳丘の軸線は南北方向がN-45°-Eである。

墳丘は耕作により平夷されていたが、洪水堆積物により墳丘が被覆されていたことが幸いし、墳丘下段が残存していた。葦石の根石から残存最上位までの高さは1.0mから1.5mを測った。葦石を検出したことにより、墳丘下半の形状についてはその一部を確認することができたもの、全体の立面形状、段築の有無などについては確認することはできなかった。

主体部は検出されなかった。既に消失していたものと考えられる。

また、後述するように墳丘調査の過程で古墳時代前期の所産と考えられる二重口縁壺とともに円筒埴輪や形象埴輪の破片が多数検出されている。このことから、本古墳は2時期わたって構築、使用されたものと考えられる。

6世紀の段階で、既存の墳丘を二次的に利用し、新たな古墳が築造されたものと考えられる。調査で検出された円筒埴輪、形象埴輪は第2次の古墳の墳丘上に樹立されていたものと考えられる。

後述するように円筒埴輪の特徴からすると、第2次墳丘の主体部は横穴式石室であった可能性が高いが、今回の調査においては新しい古墳に係わる墳丘や埋葬施設に関する情報を得ることはできなかった。

### (3) 盛土

第6図の土層断面図は南北トレンチの西壁の土層堆積状況を記録したものである。既にこの段階では墳丘上の耕作土は除去されていたようである。4層は河川等による堆積土と注記があることから1783(天明3)年の浅間山噴火による泥流堆積物が流入したのと考えられる。このことからこの時点ではまだ墳丘が残存していたものと考えられる。

表土下約2mにある36層は黒色土で、その下層に37層のローム漸移層が見られることからこの土層が本古墳築造時の自然堆積層と考えられる。これより上層には黒色土、あるいは黒色土を主体としたローム・褐色土との混土層、縞状のロームブロックが認められることから本古墳の盛土と考えられる。

土層の分層からは、葦石の一部が検出された9層から8・7層と墳丘内側に向かって盛土が堆積しているようにも見えるが詳細は不詳である。7・22・30層の上面には平坦面の存在を推定させる分層線が見られる。

### (4) 葦石

墳丘全体の状況を見ると葦石の遺存状況は必ずしも良好ではなく、崩落をきたしていた箇所も少なく

なかった。

葦石には少数の垂角礫の他は長軸の長さが20cmから50cmほどの大きさの円礫が使用されていた。調査時に石材同定を行っていないし、葦石が保管されていないので断定はできないが、記録写真から見ると安山岩が主体となっているようである。

石積みは礫の長軸が墳丘各辺の走向と平行になるように積まれていた。基底の根石にはそれより上位に用いられている礫よりも大型の礫が選択され、整然と設置されていた。

石積み作業の単位、小間割を示すような縦方向の目地については後述するように何箇所かそれを検討させるような状況は見られたものの、明瞭で断定できるような箇所は認められなかった。

次に墳丘各所ごとに葦石の検出状況を見ていく。

第7図左側は墳丘北西辺部分における検出状況である。長さ17.1mにわたり石積みを検出した。根石部分は出水のため検出することができなかったが、調査時の担当者の所見ではあとわずかで葦石の基底に達したのと考えられている。

検出した葦石の高さは最高位と最下位の礫の比較差で1.7mである。その角度は39度で立ち上がっていた。全体的には大小規模の異なる礫が使用されており、積み方もあまり整然としたものではない。記録に残された平・断面図から見ると、これらの石積みは、途中で幅0.7mほどの狭い平坦面を挟んで、上下2段の斜面に分かれて積み上げられているようにも見える。斜面途中にやや大型の礫が列状に並んでいるところも見られる。調査の際には担当者としては特に中段平坦面の存在を意識することはなかったという。

第7図右側は墳丘南西辺部分における検出状況である。図の上位は西側短辺にあたるが根石部分は残存していなかった。

南西辺では長さ16.8mにわたり石積みを検出した。根石部分は9.1mの長さで直線をなし、水平を保って据えられていた。

葦石の残存高は0.5から0.9mである。その角度は

## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

45度で立ち上がっていた。石積みは根石にやや大振りな礫が意識的に使用されている他は大小の礫が上位、下位を余り意識せずに使用されているように見受けられた。約3m程の間隔を開けて縦方向に通る石列が見えるところもあるが作業の小間割を示す目地とするにはやや粗雑である。

第8図左側は、墳丘南東部分とこれに続く南側短辺部分の検出状況である。南東辺は長さ5.9mにわたり根石が直線的に検出された。残存部南端の礫は横幅50cmと他の根石よりも一回り大きく要石のような設置状況であったとされる。調査時の所見ではこの礫を境に葺石の墳裾部は方向を転換し南側短辺に続いていたとされる。この部分は高さ約50cmの残存で、その角度は30度から35度で立ち上がっていた。この部分の石積みの状態は良好で、下位の礫の上に礫を積み上げているという状況が見られた。使用されているのはいずれも円礫である。他の箇所と比較して横方向の目地が通っているような残存状態でもあった。縦方向に石列が揃っているところもあるが作業の小間割と呼べるような目地の通りではない。

南側短辺においても長さ6mにわたり礫を検出したが根石は残存していなかった。

第9図右側は、墳丘北東部分の検出状況である。長さ7.5m、高さ1.1mにわたり石積みを検出したが、根石の部分が残存していたのは北側寄りの2.2mである。その角度は30度である。検出された根石は他所の根石よりも小型であった。墳形変換点近くからやや大型の垂角礫2石が検出されている。

### (5) 周堀

葺石を検出する時点で出水があった。南北トレンチを南側に延長し周堀の確認を行ったが、1783(天明3)年の泥流堆積層の崩落が生じ、周堀の確認には至らなかった。周堀推定部分には厚さ30cmほどの黒色泥土の堆積が見られ、その可能性がうかがわれる。葺石基底から続く基壇面の存在についても不明である。

### (6) 遺物の出土状況

葺石の石積みに密着するような状態で二重口縁壺

が多数検出されている。これらの遺物が第1次墳丘に伴うものと考えられる。平面的な出土位置については第9図に示したとおりである。墳丘上に配置されたものが、墳丘下に転落、破碎かあるいは破碎後転落したものと考えられる。

第2次墳丘に伴うと考えられる埴輪は原位置出土のものはなく、いずれも埋没土中からの出土である。平面的な出土位置については第19図に示した。

## 6 出土した遺物

今回の調査により出土した遺物は、古墳から出土した二重口縁壺、円筒埴輪、形象埴輪、墳丘盛土部分から地山にかけて設定したトレンチ内から出土した古式土師器他である。これらの遺物の数量は、60×37×15cmの遺物収納箱に13箱である。これらの中から本報告で掲載した資料は合計で224点である。その内訳は、二重口縁壺71点、土師器埴・高杯・器台・甕他32点、円筒埴輪87点、形象埴輪13点、中・近世の土師質土器・軟質陶器他11点、縄文土器10点である。

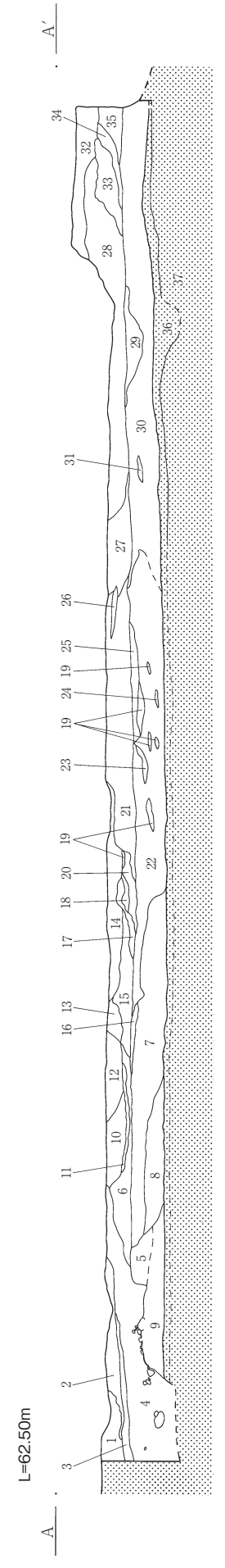
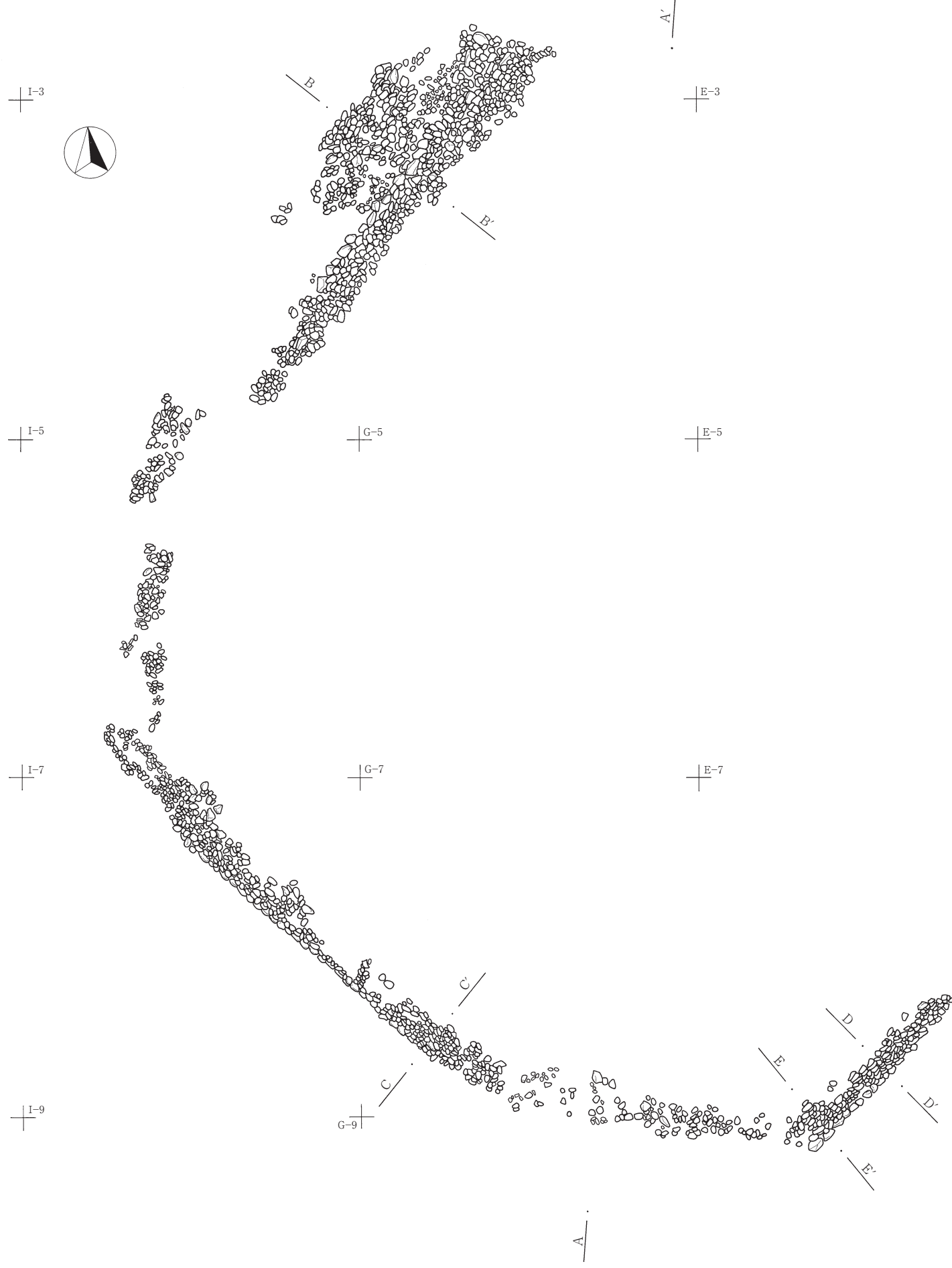
以下、本文中には器種ごとにその概要について記す。詳細については遺物観察表を参照願いたい。

### (1) 二重口縁壺

001から071の土器は残存した葺石部分部を中心に出土した土器である。001や050のような大型破片に復元することができた資料もあるものの全体形状を把握することができたものはなかった。口縁部から底部にいたる各部位を観察すると二重口縁の口縁部と底部に焼成前の穿孔を有する壺の一部を構成していた破片資料と考えられる。

出土資料が破片状態であるものが多数であったことから個体数を識別することは困難であるが口縁部の残存数から36個体、底部の残存数から22個体を数えることができる。

各資料の特徴を記すると、1は、口縁部の先端が欠損するものの二重口縁の形状を呈していたことが分かるものである。口縁部下半は頸部がやや外反ぎみに立ち上がっている。受け部の存在は不明瞭であ



南北トレンチ西壁セクション

1. 黒色土
2. 褐色土 細粒。やや灰色みをおびる。
3. 軽石、あるいは砂粒。白色みをおびる
4. 河川等による堆積土。粘性をおびる。細粒。
5. 黒色土にロームブロックを含み。ハサハサしている。図中央付近は黒色みをおびた褐色土を、図右寄りには褐色土を含む。
6. ロームを主体とし、少量の黒色土・褐色土との混土層。
7. 黒色土を主体としたローム・褐色土との混土層。
8. 黒色土を主体とした少量のローム・褐色土との混土層。7層に比して黒色土の混入多い。
9. 黒色土
10. 黒色土
11. ローム・褐色土・黒色土の混土層
12. ローム・褐色土・黒色土の混土層

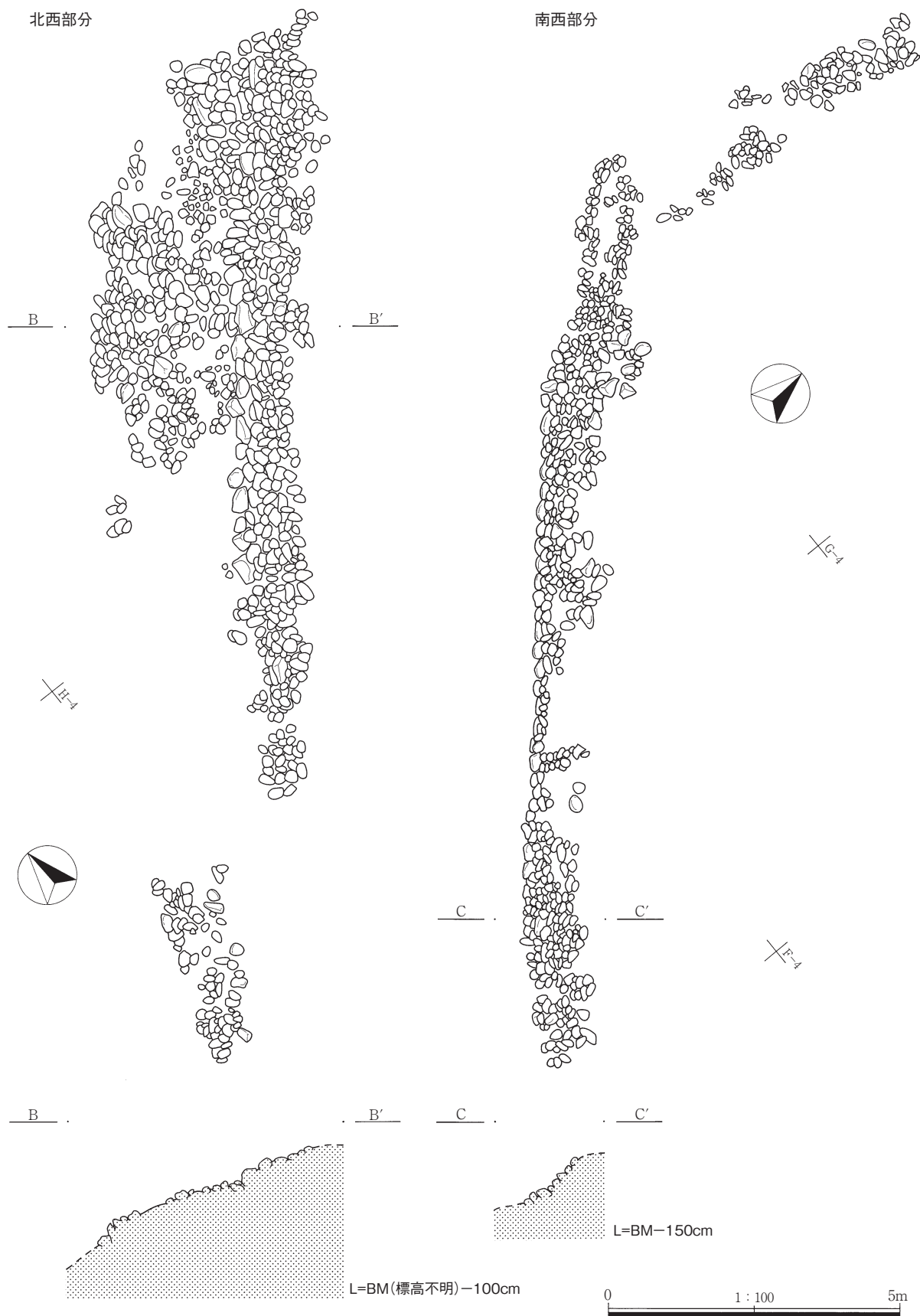
13. ロームを主体とした黒色土との混土層。
14. 黒色土 ロームブロックを混入。
15. 黒色土を主体とした少量のロームブロックとの混土層。
16. ロームと黒色土の混土層
17. ローム・黒色土の混土層 図右寄りはロームが主体となる。
18. 黒色土 ローム粒を混入。
19. ロームブロック
20. 黒色土 ロームを少量混入。
21. 黒色土・褐色土・ロームの混土層 斑状を呈する。
22. 黒色土を主体とした褐色土・ロームとの混土層 図左側では褐色土の混入はみられない。図中央ではロームが層状に、図右寄りではロームがブロック状に混入する。
23. 褐色土
24. 褐色土

25. 黒色土 ローム・褐色土の混入は少ない。
26. 黒色土
27. ロームと黒色土の混土層 両者ともブロック状に堆積。
28. 黒色土 図左側は薄い褐色土を混入。
29. 黒色土 28層と類似するが褐色みはない。
30. 黒色土 図左側は褐色土を含む。図中央から右側は黒色土・ローム・褐色土が層状に堆積している。
31. 褐色土
32. 攪乱
33. ローム粒
34. 黒色土
35. 黒色土・ローム・褐色土のブロック状の混土層
36. 黒色土 ロームの細粒を含みまじりなし。図右側は礫を含み、ガラザラしている。
37. ローム漸移層



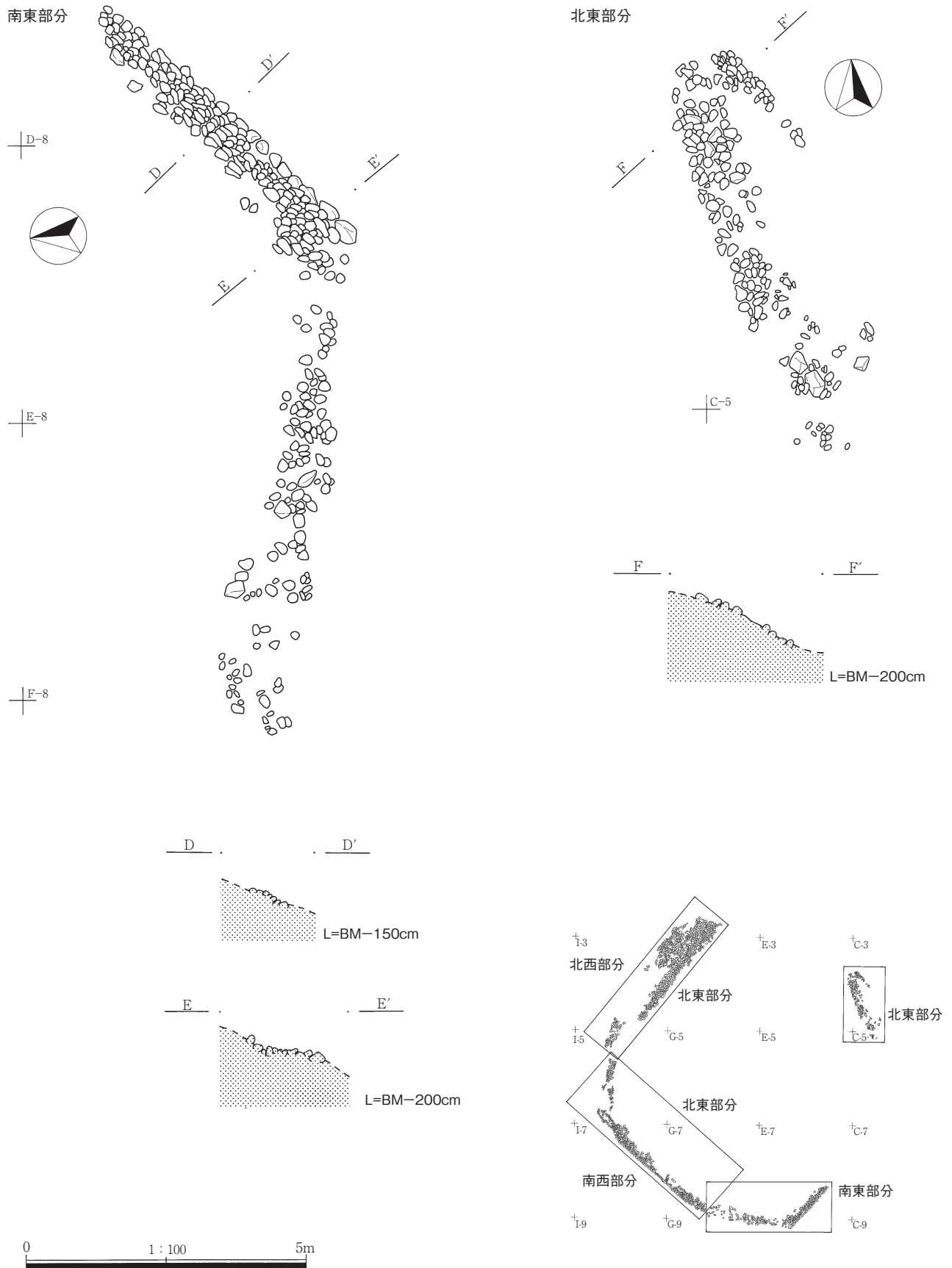
第6図 検出された遺構





第7図 葺石の出土状況(1)

第1章 箱石浅間山古墳の調査



第8図 葺石の出土状況(2)

る。一重目と二重目の口縁部の接合部の下方に粘土帯を垂下させている。

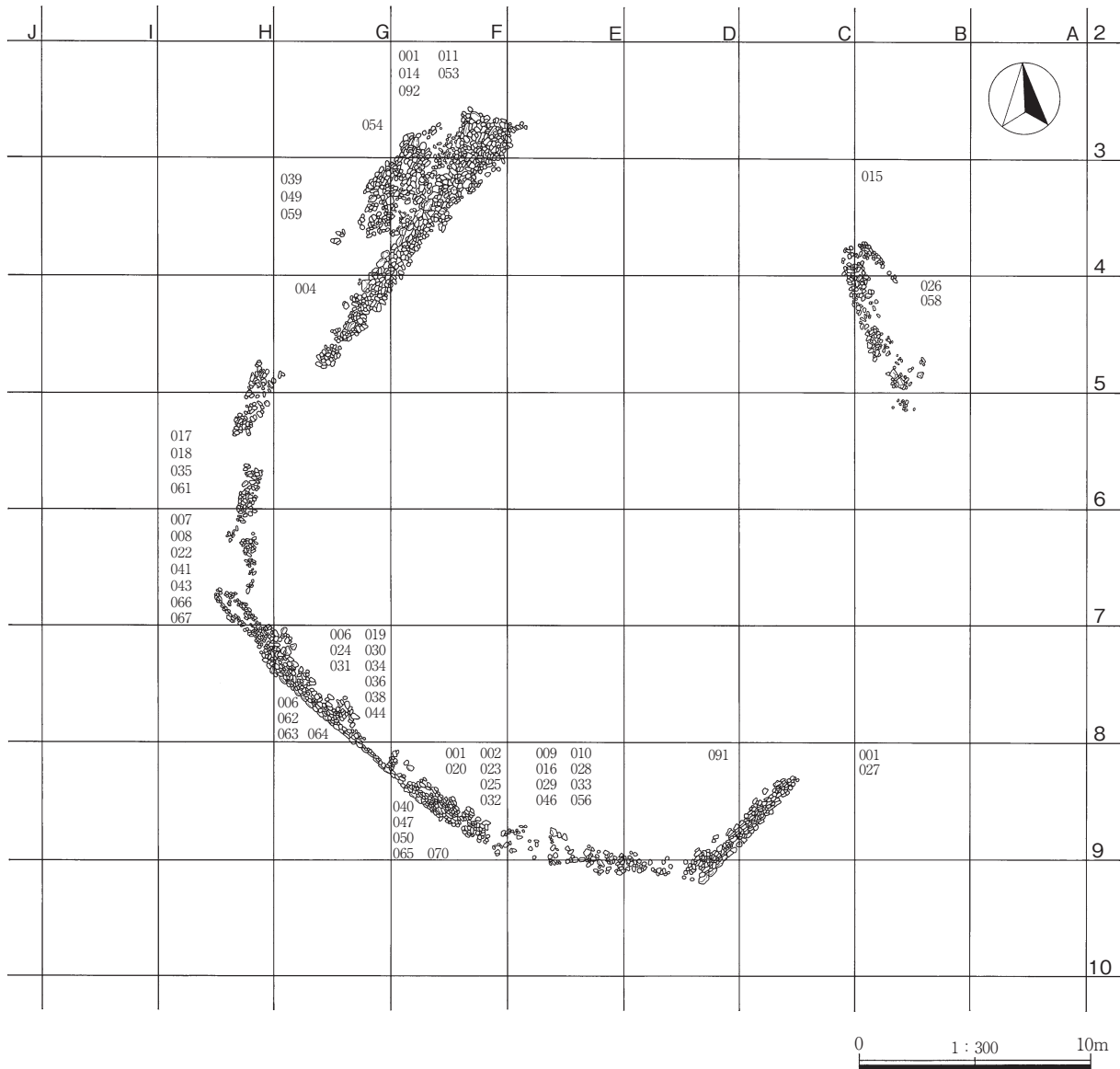
胴部は上半部が残存していた。胴部は丸く大きく張り出し、球胴を呈していた。肩部は3本あるいは4本1単位のクシ状工具により横方向に区画された中をヘラ描き沈線により細分することにより作り出された鋸歯文が2段にわたり配置されている。器面には赤色塗彩が施されている。外面は全面にわたりハケメが施されているが、あまり規則性は認められない。内面にもハケメが施されている。

今回の調査で出土した二重口縁壺の中で胴部外面

に鋸歯文が加飾されたものは本資料だけである。

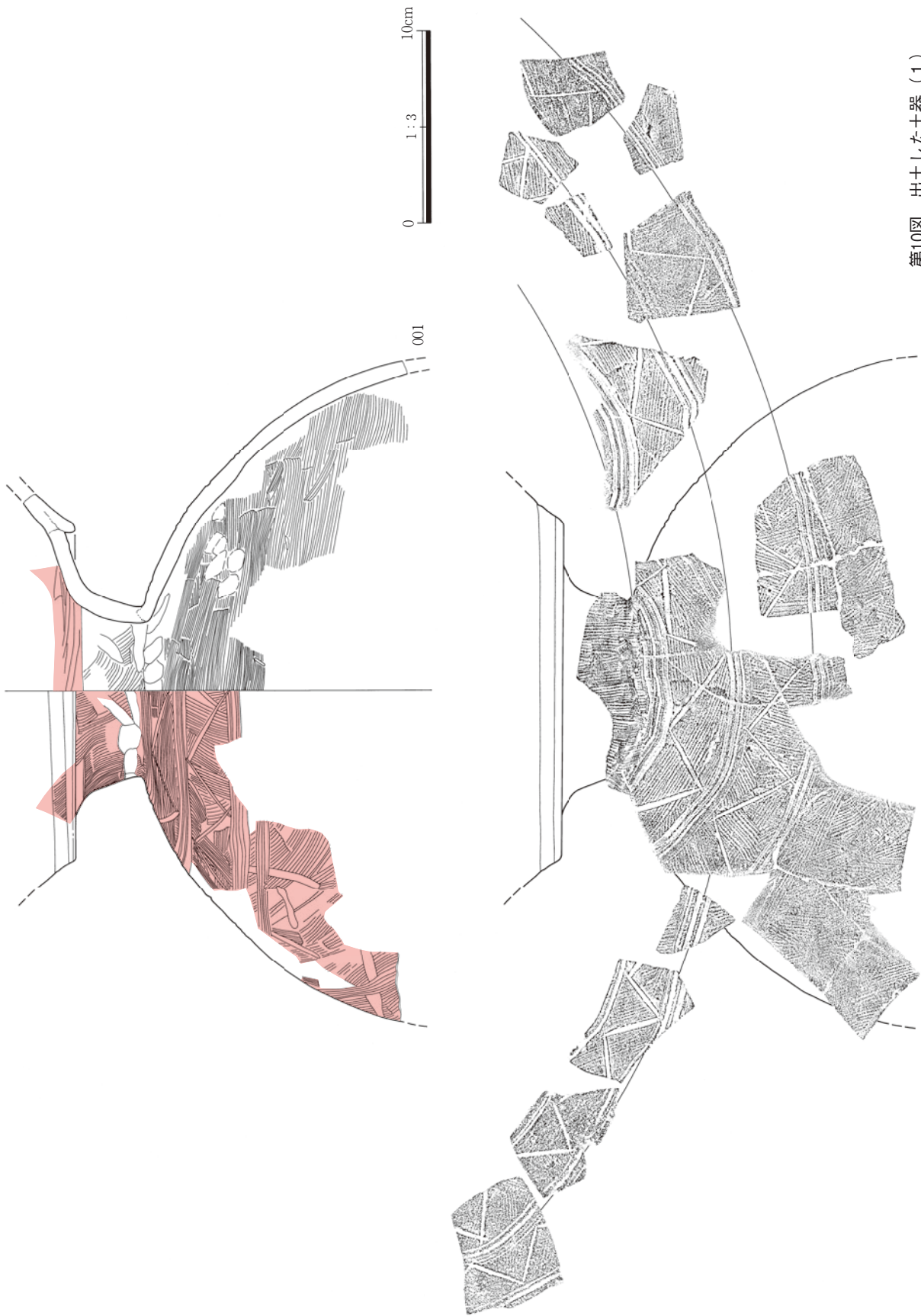
胎土中には細かな白色鉱物、黒色鉱物、赤色粘土粒が見られるが全体的には精選されている印象を受けるものである。焼成は良好である。

002から006は壺型土器の口縁部破片である。小破片からの復元であるが口縁部の直径は24cmから26cmが推定される。いずれの資料も内面にクシ状工具の刺突による綾杉文が施されている。004だけは外面にも内面と同様のクシ状工具による矢羽根状の文様が見られる。形状は002の口縁部外面の接合部に粘土の垂下が不明瞭であったが、他の資料には粘土が



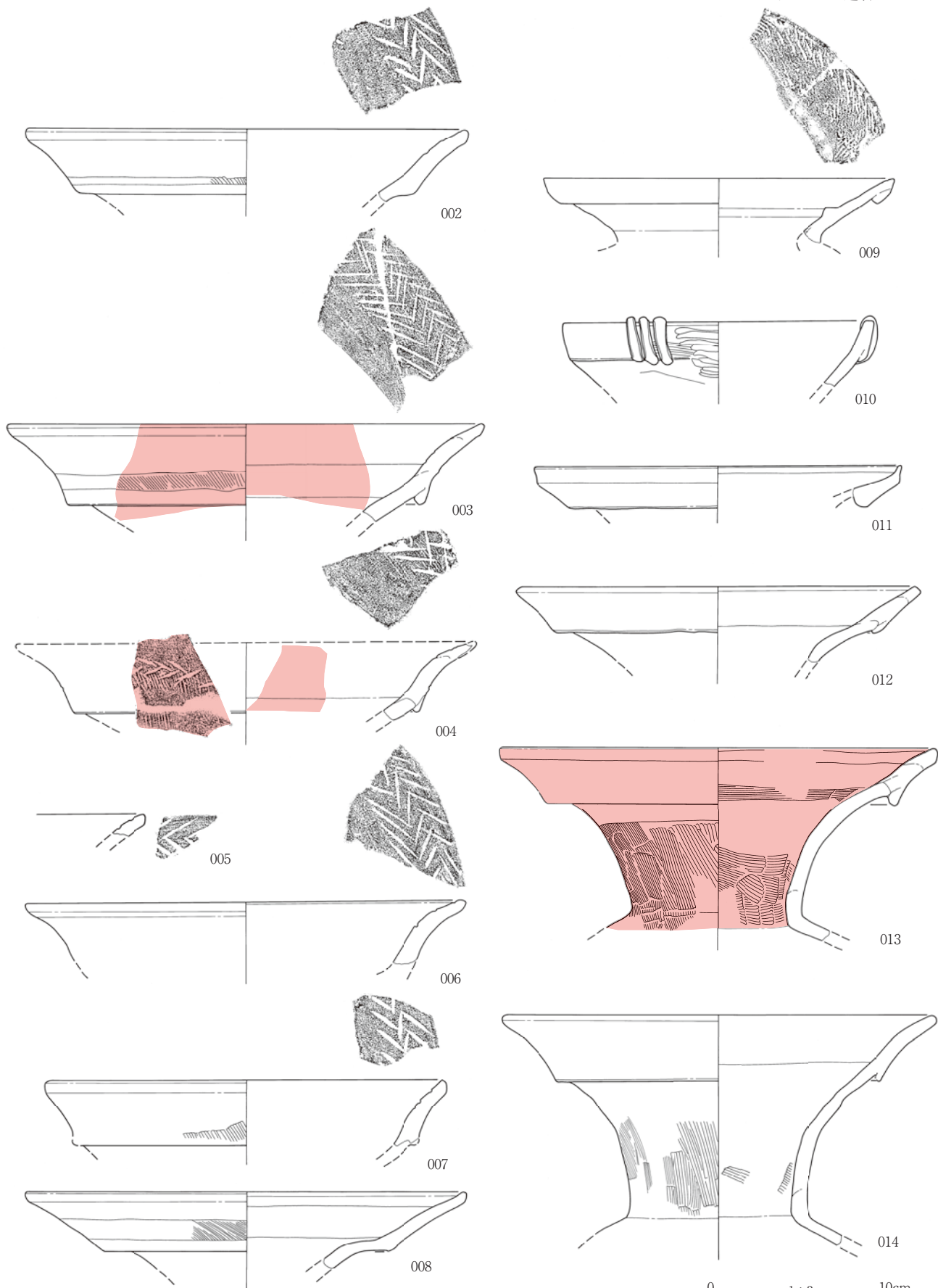
第9図 土器の出土状況（1）



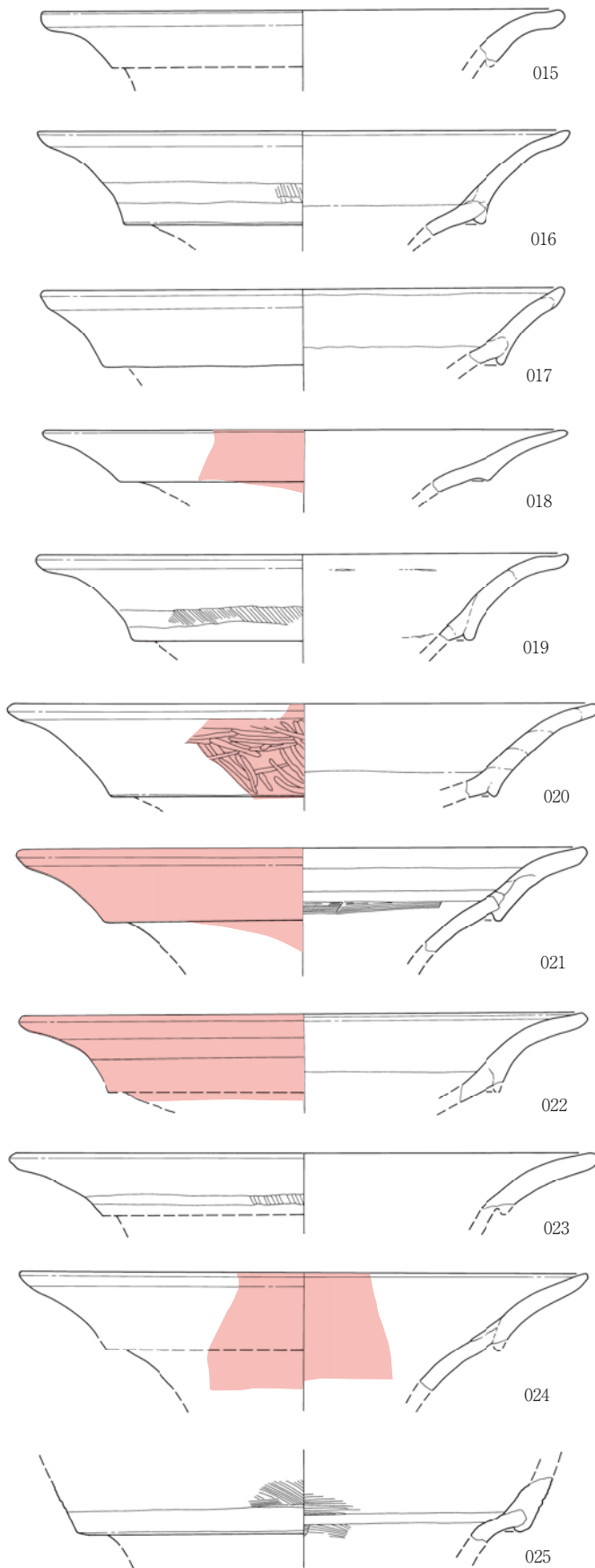


第10図 出土した土器(1)

6 出土した遺物



第11図 出土した土器 (2)



第12図 出土した土器 (3)

垂下していた。細部の形状にも違いが見られる。003は口縁部の先端は外側がそがれやや尖っている。007は他例より立ち上がりが短いものである。

器面の調整は、いずれも、外面がハケメをナデ消しているが一部にハケメが残っている。

003・004は内外面に赤色塗彩が施されている。

013・014・037は口縁部の全体が分かる資料である。器形は001と比較すると口縁部下半が長くラップ状に外反して立ち上がっている。受け部の存在は1と同様不明瞭である。一重目と二重目の口縁部の接合部の下方に粘土帯を垂下させていることは同様である。013は他2点より口縁部上半の立ち上がりが短い。器面の調整はいずれも一重目の外面にハケメが、二重目の外面にはヨコナデが施されている。

残存部分には文様は認められなかった。

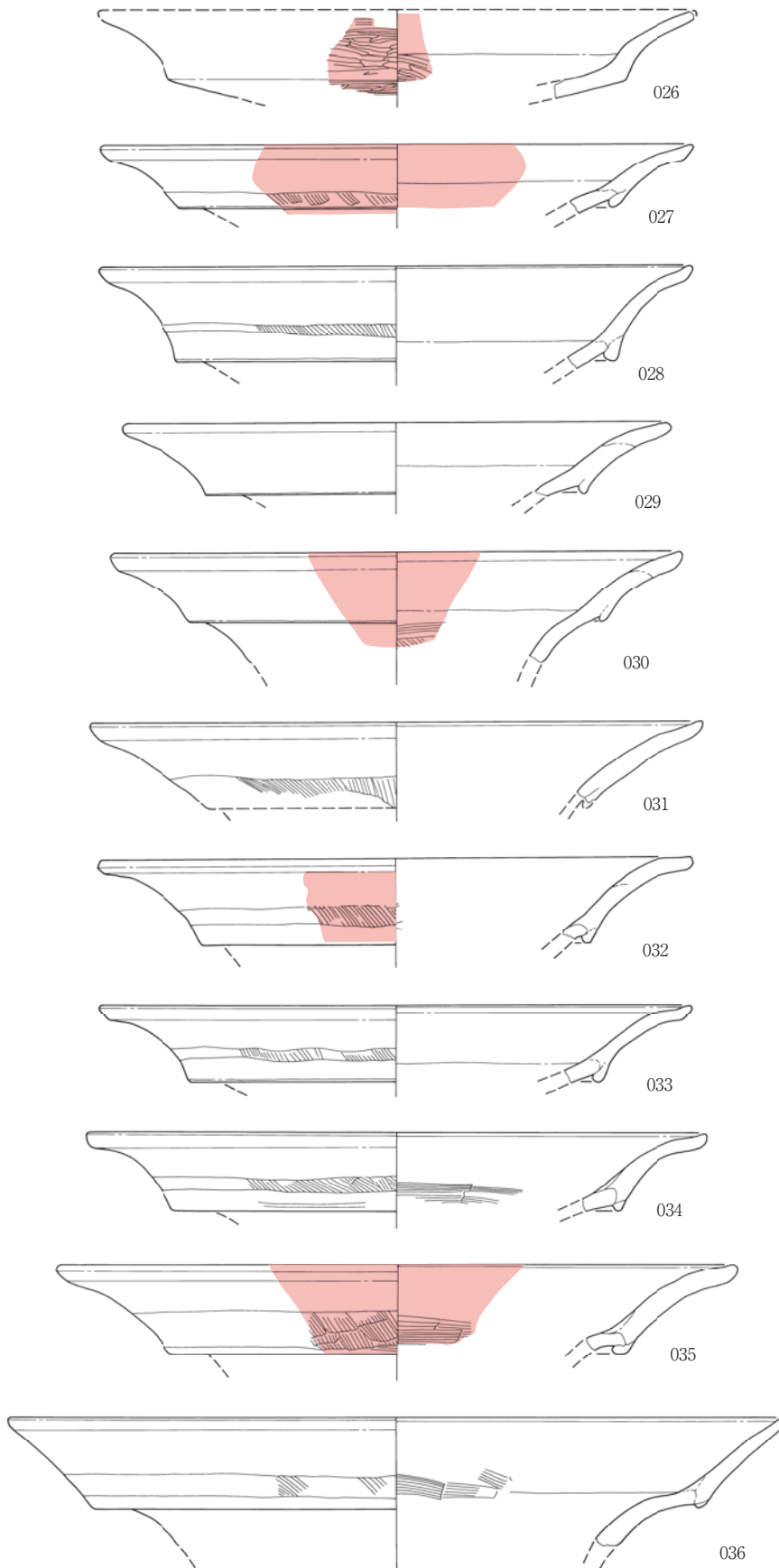
015から025・027から036も二重口縁の口縁部上半部分である。口縁部の直径は23から29.8cmに復元された。036は大径である。

形状は類するものの細部には差異が見られる。立ち上がりの長さは016が他よりも長く、017は他よりも短い。先端の形状は015が厚く丸みをおびるのに対し、016・023・031・032・036は外側がそがれて尖っていた。021は器肉全体が厚いものである。

器面の調整は前述した013と同様であるが、020は外面にナナメ方向に棒状工具によるミガキが認められる。018・

0 1:3 10cm

6 出土した遺物



第13図 出土した土器（4）

021・022、032は外面に、024・027・035は内外面に赤色塗彩が施されていた。

040から045は口縁部下半の資料である。内外面にハケメが施されている。

038・039は口縁部下半から胴部上位の資料である。内外面にハケメが施されている。046から049は胴部である。

050は胴部から底部の資料である。形状は球形を呈し、最大径は中位にある。底部は平底で、焼成前に穿孔が施されている。器面は内外面ともハケメが施されている。

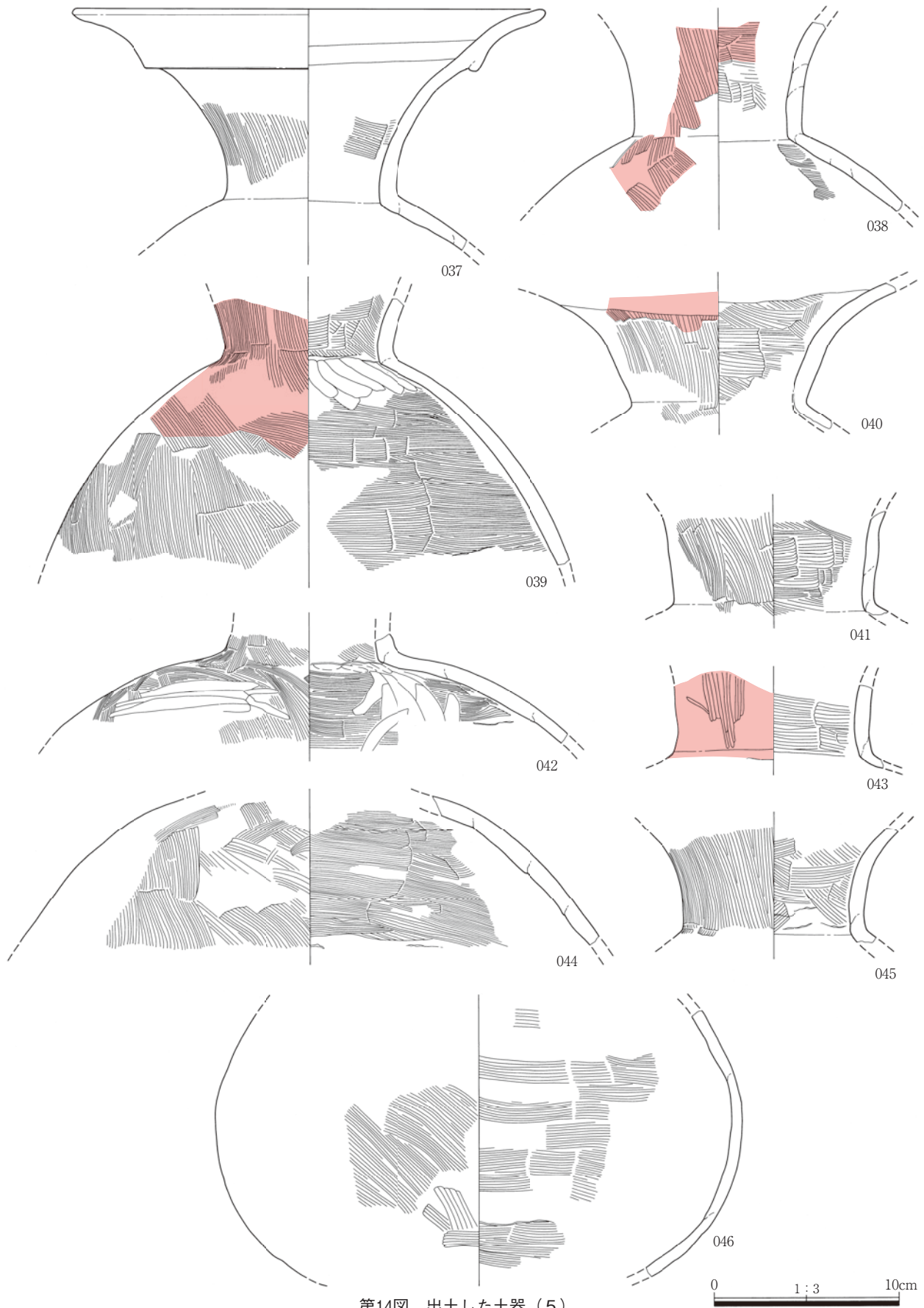
051から071は胴部下位から底部の残存資料である。いずれも焼成前に穿孔が施されている。底径は6.2cmから10.4cm、穿孔の直径3.0cmから8.8cmである。

009・010・011・026はこれまで述べてきた二重口縁壺と形状の異なる壺である。

009は口縁部先端の外面に粘土帯が貼付され肥厚している。内面には突線が巡り、これより上位に縄文が施文されている。010は外面先端が肥厚し、この上に3本1単位の棒状浮文が貼付されている。内外面にミガキを施している。011は

0 1:3 10cm

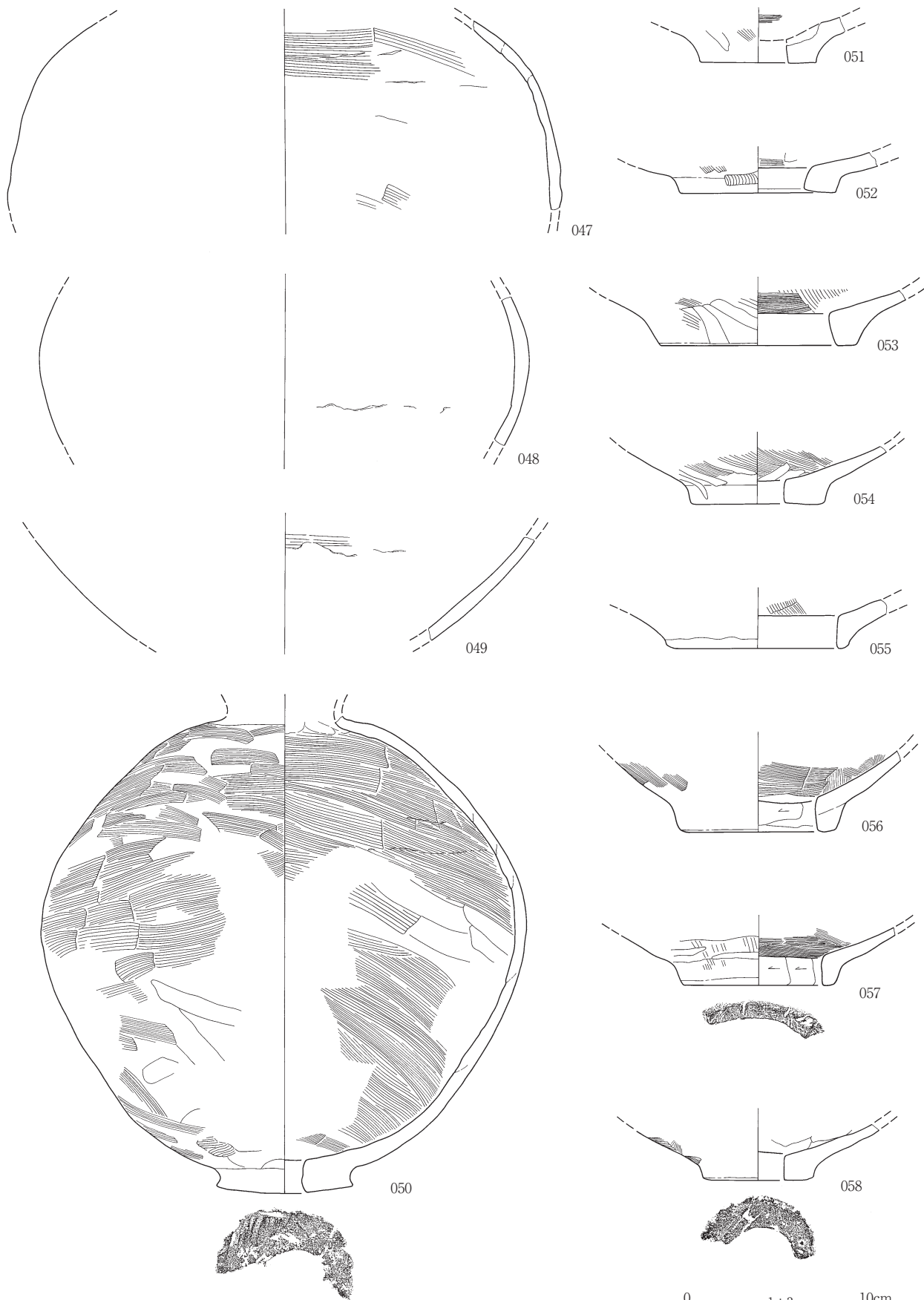




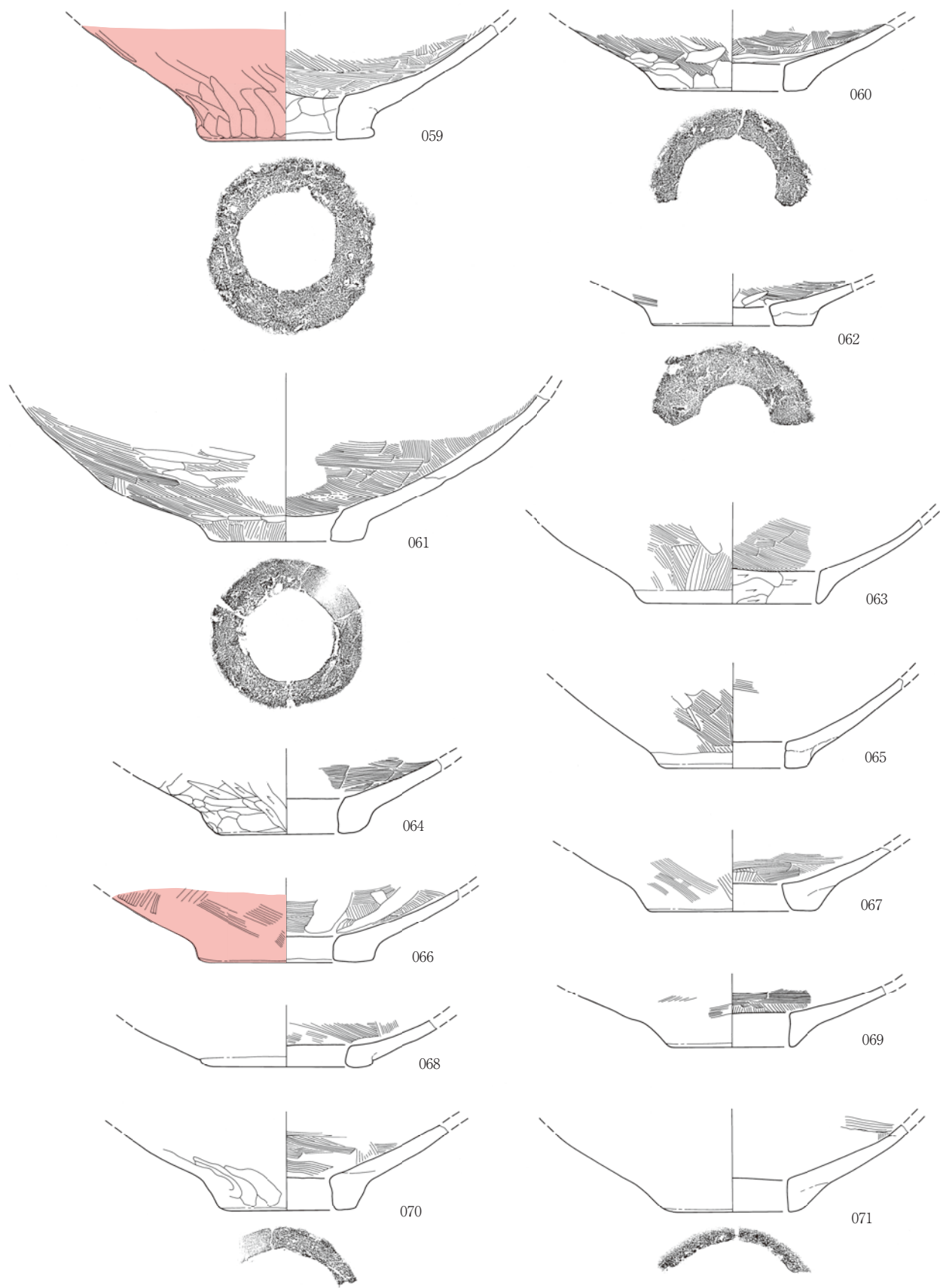
第14図 出土した土器 (5)



6 出土した遺物



第15図 出土した土器 (6)



第16図 出土した土器（7）

0 1/3 10cm

先端が短くつままれるように尖っている。

026は外面にナナメタテ方向を基本とする棒状工具によるミガキが施されている。高杯の口縁部破片の可能性も考えられる。

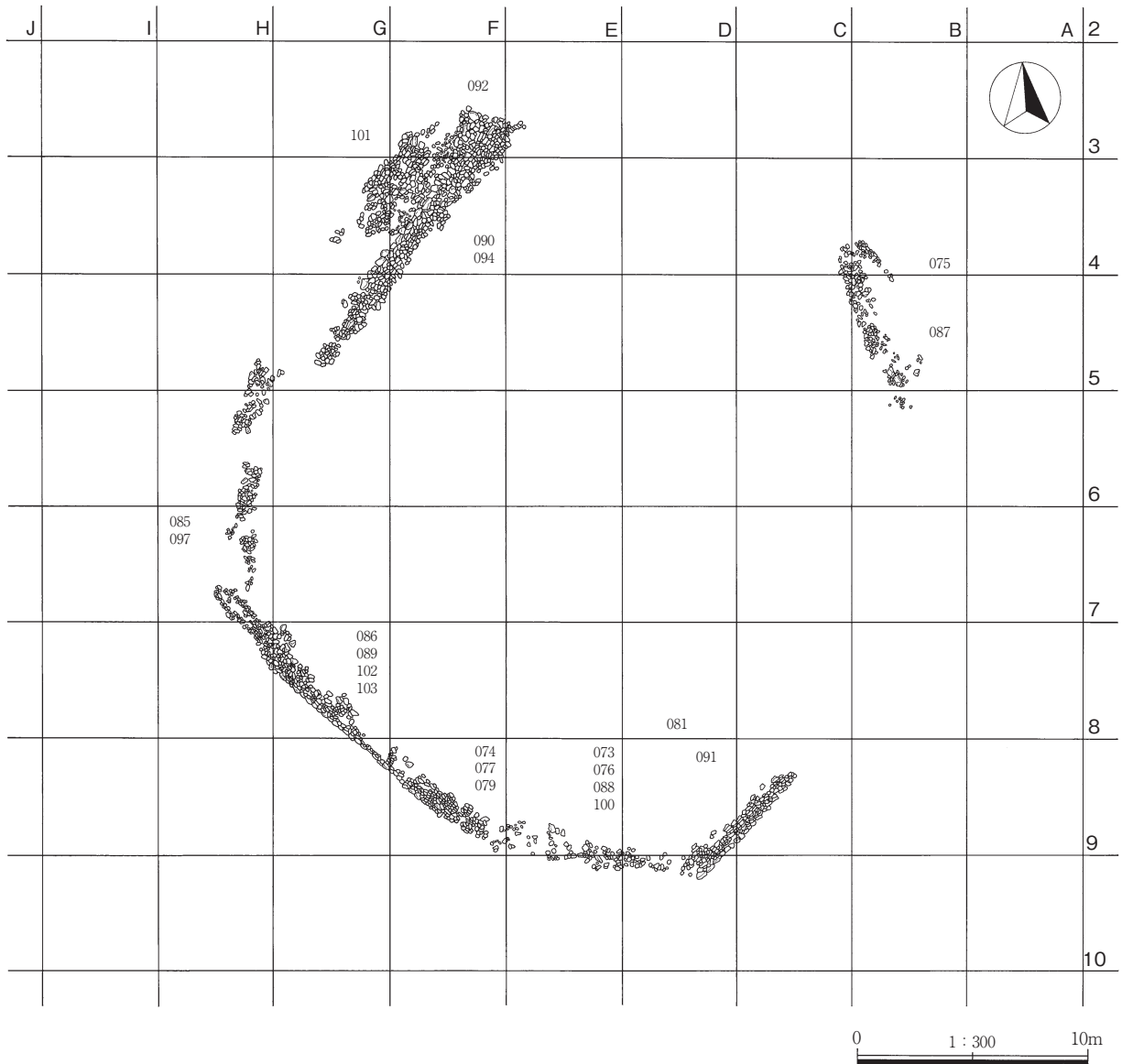
(2) その他古墳時代の土器

072から103は墳丘の調査に伴って各所から出土した土師器である。器種は甕、壺、埴、高杯、器台他が確認された。出土位置は第17図のとおりである。以下、その特徴を記す。

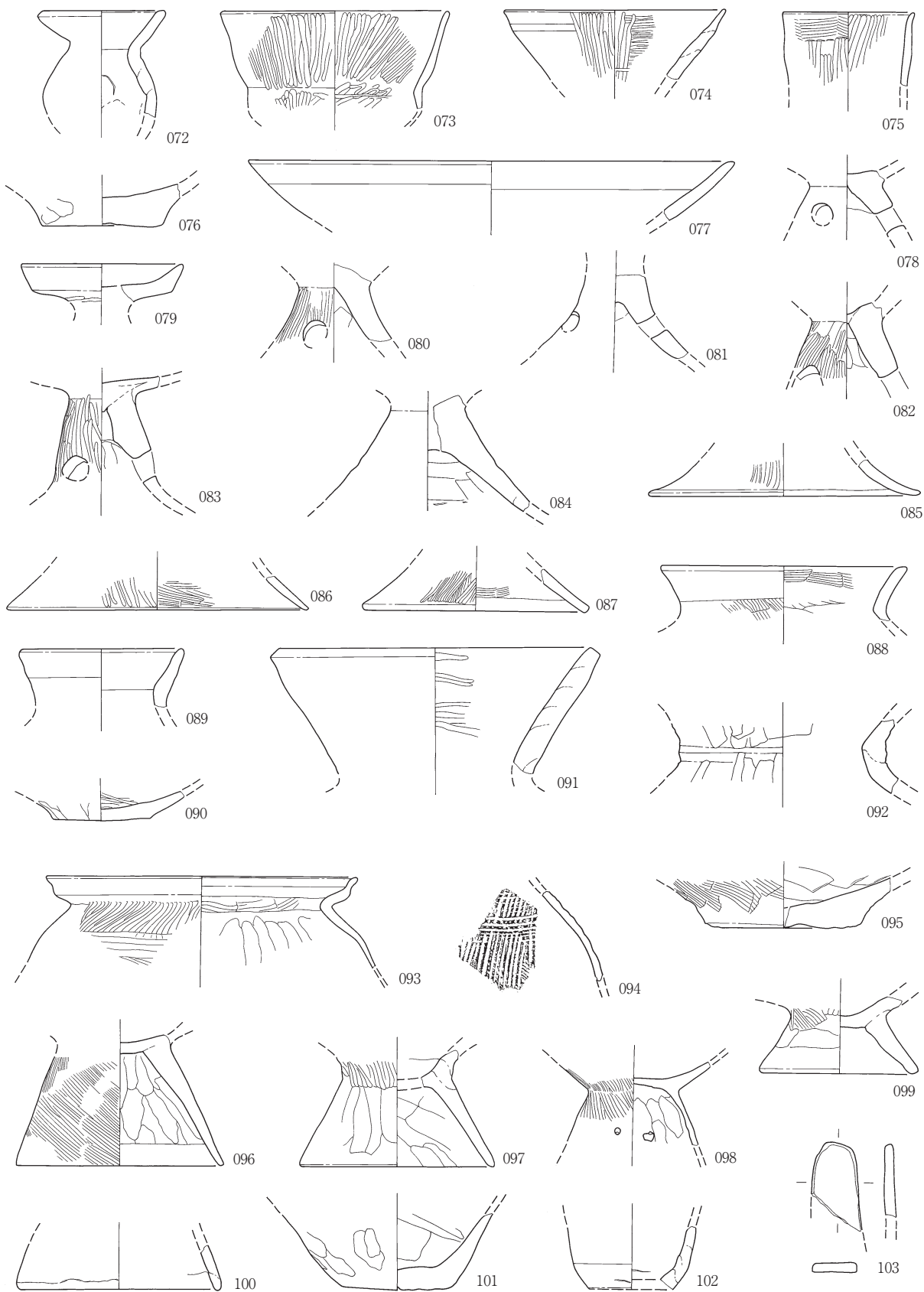
072は口縁部から胴部上半部の小型壺である。南北トレンチから出土した。073は埴である。胎土は

精選されている。E 8グリッドの出土である。074は小型壺の口縁部破片である。F 8グリッドの出土である。075はひさご形を呈する小型壺である。外面、口縁部直下に爪形の刺突文が見られる。B 3グリッドの出土である。076は壺の底部である。E 8に出土である。

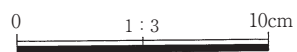
077は高杯の口縁部破片である。F 8グリッドの出土である。078は出土地不詳の高杯である。079はF 8グリッド出土の器台である。080・081・083は出土地点不詳の高杯、82は南北トレンチ出土の高杯である。084は南北トレンチ出土の高杯脚部である。



第17図 土器の出土状況 (2)



第18図 出土した土器(8)





85はH 6グリッド、086はG 7グリッド出土の高杯または器台である。087はB 4出土の器台である。

088から090は甕である。それぞれE 8、G 7、F 3のグリッド出土である。

091・092は壺である。D 8、F 2グリッドの出土である。

093・094・095・098・100はS字状口縁台付甕である。順に南北トレンチ、F 3、出土地点不詳、出土地点不詳、E 8グリッドの出土である。095は壺の底部である。099は台付甕の脚台部である。出土地点不詳である。

101は杯である。G 2・3グリッドの出土である。102はG 7グリッド出土の器種不明品である。103はG 7グリッド出土のヘラ状をした土製品である。高杯あるいは器台の脚部破片を二次利用している。

いずれもその形状、成・整形の特徴から古墳時代前期に位置付けられるものと考えられる。

### (3) 埴輪

本古墳から出土した埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がある。出土位置は第19図のとおりである。

円筒埴輪は87点を掲載した。形状については、2条突帯3段構成と推定されるが、全体形状を確認できるような資料は検出されていない。基底部から口縁部に向かって徐々に外傾あるいは外反して立ち上がるものと考えられる。

口縁部破片は32点を資料化したが、口径を推定できる資料は5点で、直径17.0cmから24.4cmに復元された。口径20cm前後の規模を想定することが妥当であろうか。長さは115で先端から突帯上辺のヨコナデまでが6.2cmであった。

形状は先端に向かって緩やかに外反して立ち上がるものが大半であった。先端の断面形は平坦なものと同M字状を呈するものが見られた。111・117・119は、先端に強いヨコナデが施されたことにより、内面に弱い稜をなして、外方に屈曲している。

器肉は比較的薄く、成形が整っていたが、113は全体的に器肉が厚い。129は先端が肥厚していた。

口縁部から胴部、胴部から基底部にわたる破片は

43点を資料化した。胴部の直径を復元することができた資料は18点を数え、直径10.6cmから19.4cmに復元されたが、直径18cm前後の資料が多く見られた。段間の長さがわかる資料はなかった。

基底部の破片は11点を資料化した。底径は4点の資料で復元が可能であったが、13.0から15.0cmの規模であった。基底部も高さを明らかにすることのできる資料はなかった。

突帯は、総じて低いものであった。断面形状には遺物観察表に示したように台形状、M字状、三角形の3種類が見られる。また、上稜が下稜より突出するものを1、下稜が上稜より突出するものを3、両者が拮抗するものを2として分類した。本古墳では台1、台2、台3、M1、M2、三角形と6種類の断面形状の事例が認められた。上稜が突出する台1、M1の形状の事例が主体を占めていた。三角形は121だけであった。

突帯の貼り付けには全体的に丁寧な調整が施されていたが、139のようにやや粗雑で、ヨコナデにより動いた粘土が器面上にそのまま残されているものも見られた。147ではヨコナデよりもさらに上下の位置の器面上にナデが見られた。

透孔の全体形状を知ることができる資料はなかった。切り込みはいずれも弧線を描くもので、直線をなす事例が見られないことから、いずれの透孔も円形を呈していたものと考えられる。

胎土は資料によっては結晶片岩の混入を目視で確認することが困難なものも含まれているものの、総じて片岩類の小粒が含まれていた。雲母や凝灰岩の小粒も確認された。中には器面上で海綿骨針化石の混入が確認できたものもある。

遺物観察表では砂粒の混入量の相違により、A、直径1から5mmの小礫や砂粒を含む。B、小礫、細砂を含む。C、礫の混入は少量に大別した。

色調は橙色や明褐色が多く、これに明赤褐色、にぶい黄褐色の事例が少量見られた。

焼成は窖窯焼成で、全体的に良好であった。一部還元状態を呈していたのは土中で水付けになっていた

第1章 箱石浅間山古墳の調査

た影響を受けたものがあるためと考えられる。

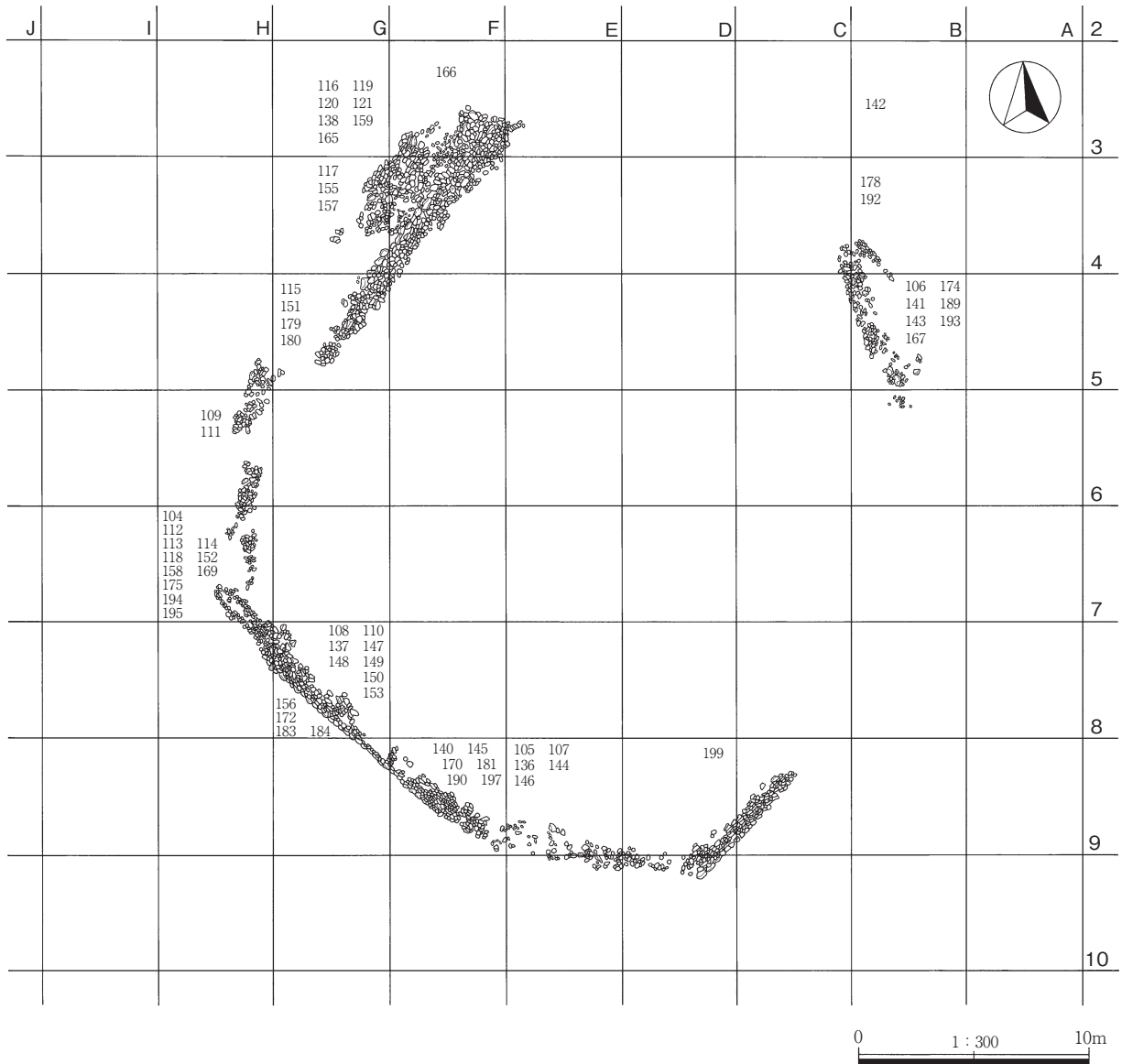
成・整形の特徴について記すると、外面の調整は基底部分、胴部ともタテハケで、口縁部はナナメタテハケであった。内面の調整は基底部分、胴部にタテ方向のナデが施されていた。口縁部はナナメタテハケが施された後にハケメをナデ消している。

基底部分の成形は基部粘土板を成形し、これを筒状にした上に粘土紐を積み上げる方法が採用されていたものと考えられる。底部調整については182の外面にヘラ状工具によるタタキが認められる。内面にはヘラケズリが加えられている。187や188は端部が

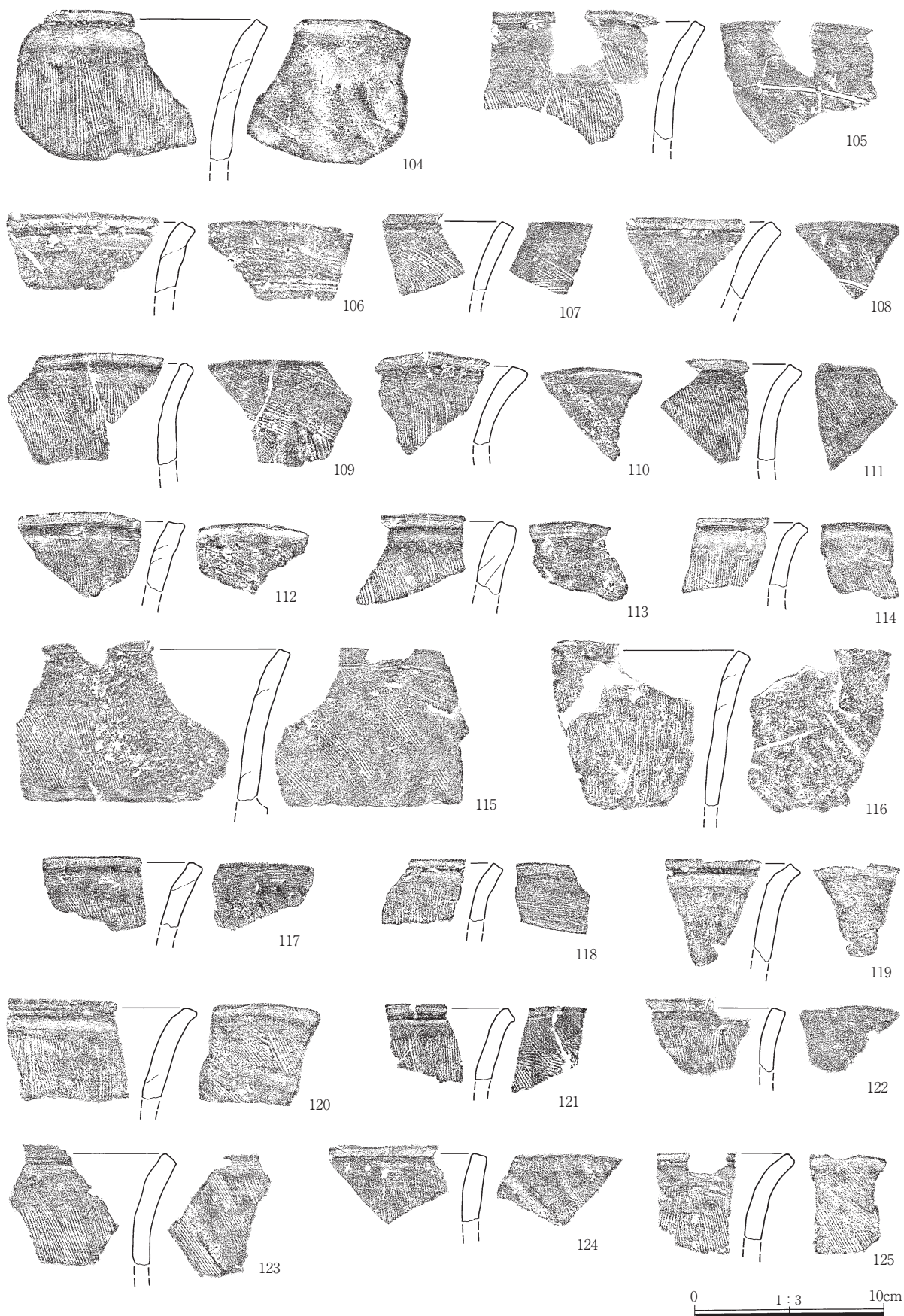
屈曲、形状が歪んだままである。

ハケメを施す工具としては104や137に代表されるような2cm幅に15から17本のハケメが数えられるものと、127や139に代表されるような2cm幅に7から9本のハケメが数えられるものに大別される。167では途中で工具が変わっていた。

ヘラ記号は、ヨコ方向に1条が施されていたものが、152の胴部外面、178の外面、105・108の口縁部内面、175の内面に見られた。143の内面にはやや間隔をあけて2条見られた。176の外面にはV字状のものが見られた。

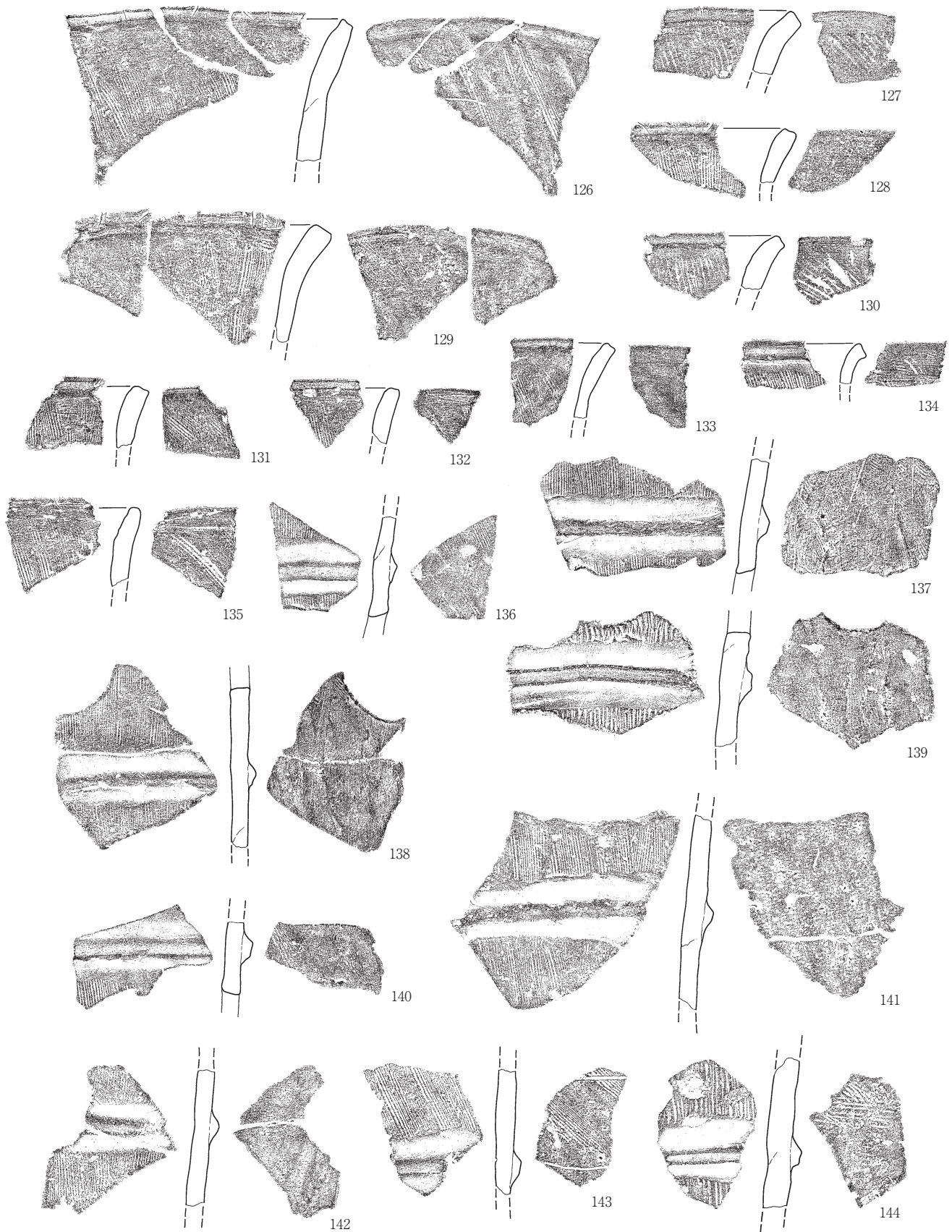


第19図 埴輪の出土状況



第20図 出土した円筒埴輪（1）

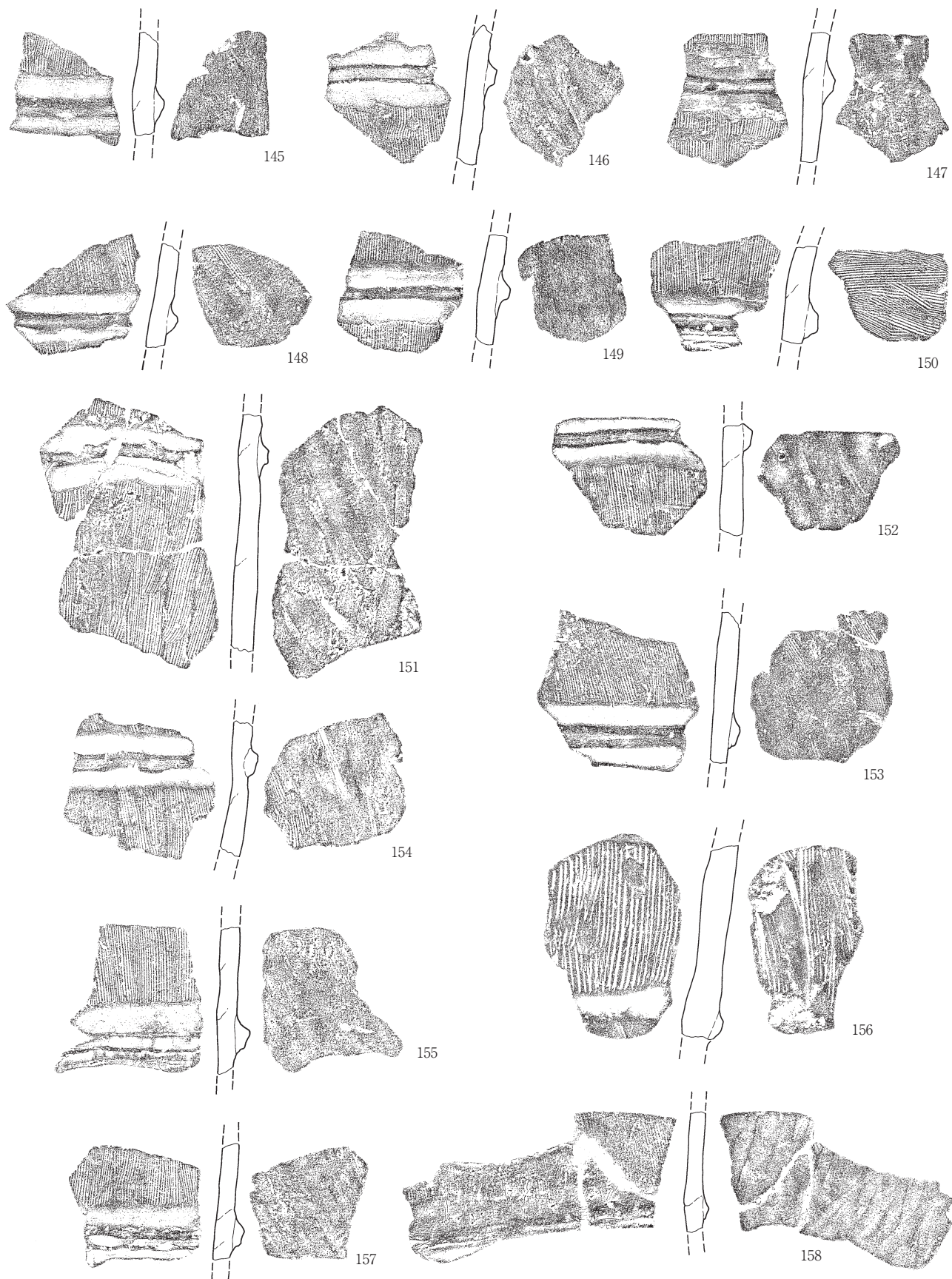




0 1:3 10cm

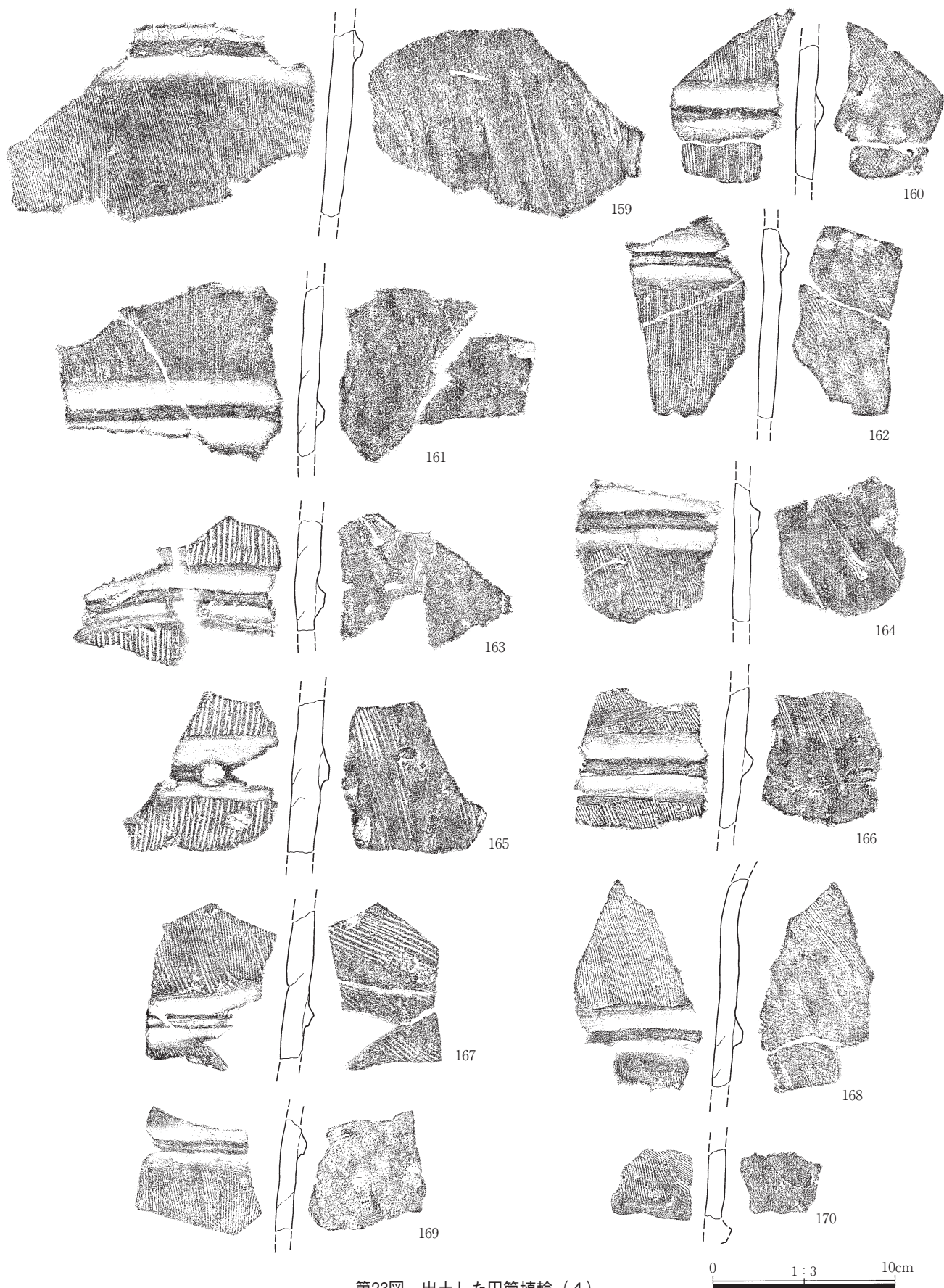
第21図 出土した円筒埴輪(2)





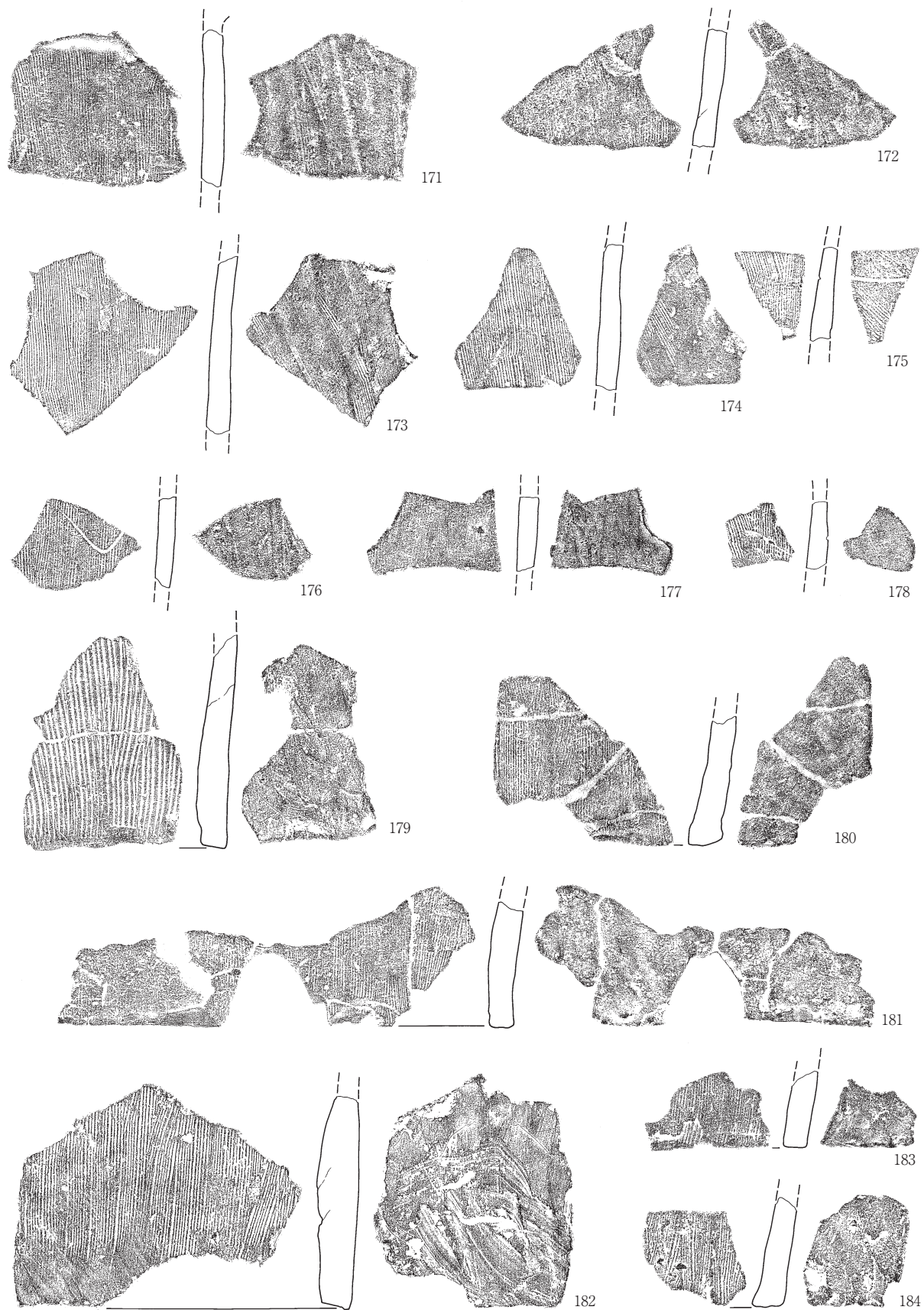
第22図 出土した円筒埴輪 (3)



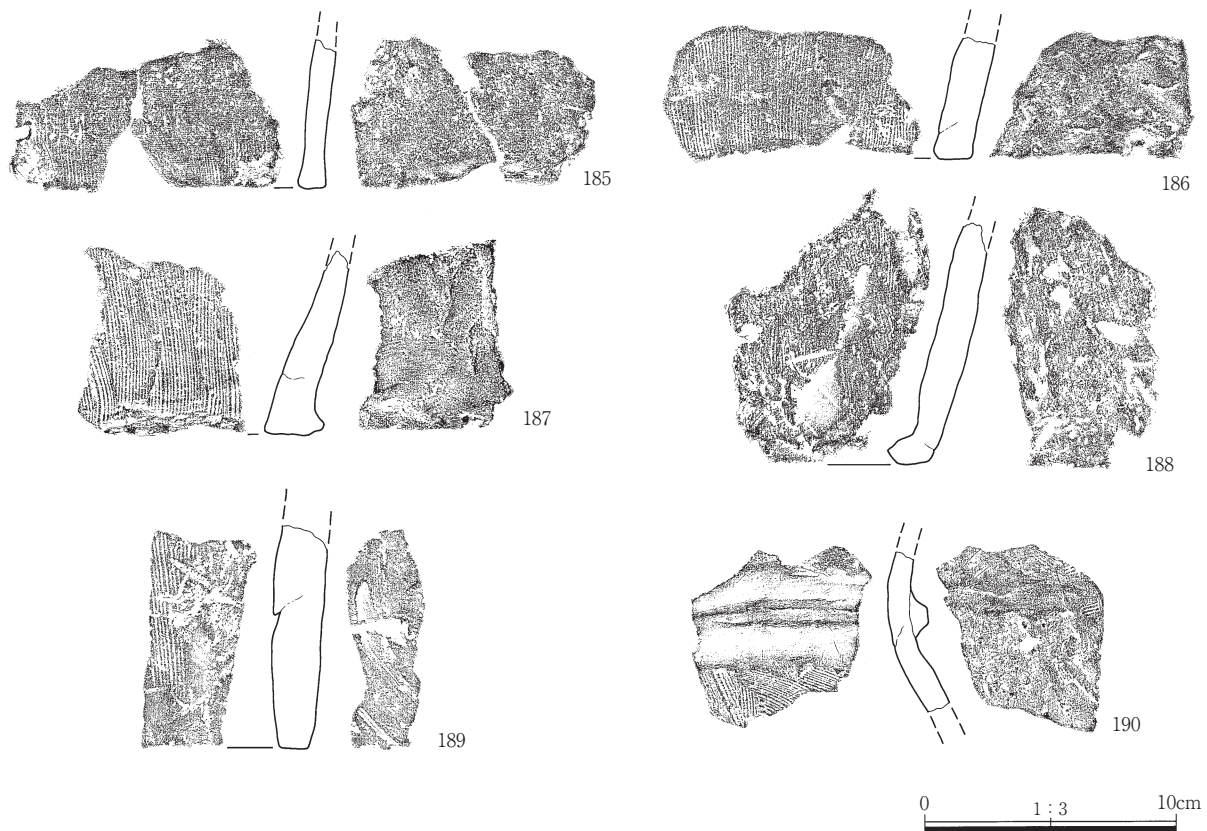


第23図 出土した円筒埴輪 (4)





第24図 出土した円筒埴輪 (5)



第25図 出土した円筒埴輪（6）

190は朝顔形埴輪の頸部破片である。112・170も朝顔形の可能性が考えられるが断定できなかった。

円筒埴輪と比較して形象埴輪の出土量は少量であった。確認された器種は家、盾、人物、馬である。13点を掲載した。いずれも破片資料で全体形状を知ることができるものはなかった。

破片の数量が比較的多く見られた器種に家形埴輪がある。196・197・200・201・202・203の資料がこれにあたる。これらの胎土、色調は共通している。198の板状破片もその可能性が考えられる。

196は入母屋を呈する上屋根の破風の一部分である。わずかに外方の折れ曲がった端部には斜方向に平行するヘラ描き沈線が配されている。

201や202は上屋根の流れの部分と考えられる。201はヘラ描き沈線による鋸歯文が配されている。赤色塗彩が施されている。202も流れの部分と考えられる。ハケメの上にヘラ描き沈線による鱗状の弧線が見られる。197と200は壁体あるいは基部の破

片と考えられる。横断面は楕円形を呈しており、四隅にあたる部分に縦方向に突帯が貼り付けられており、これにより四柱部が表現されている。

203も基部の破片と考えられる。底面直上とこれより13cm上方の2箇所横方向に延びる突帯が巡っている。底面近くに透孔が配されている。円形あるいは隅丸の四角形と考えられる。

以上のように上屋根の形状、文様表現、壁体あるいは基部の部分の残存幅、器厚などから比較的良形の個体が樹立されていたものと考えられる。

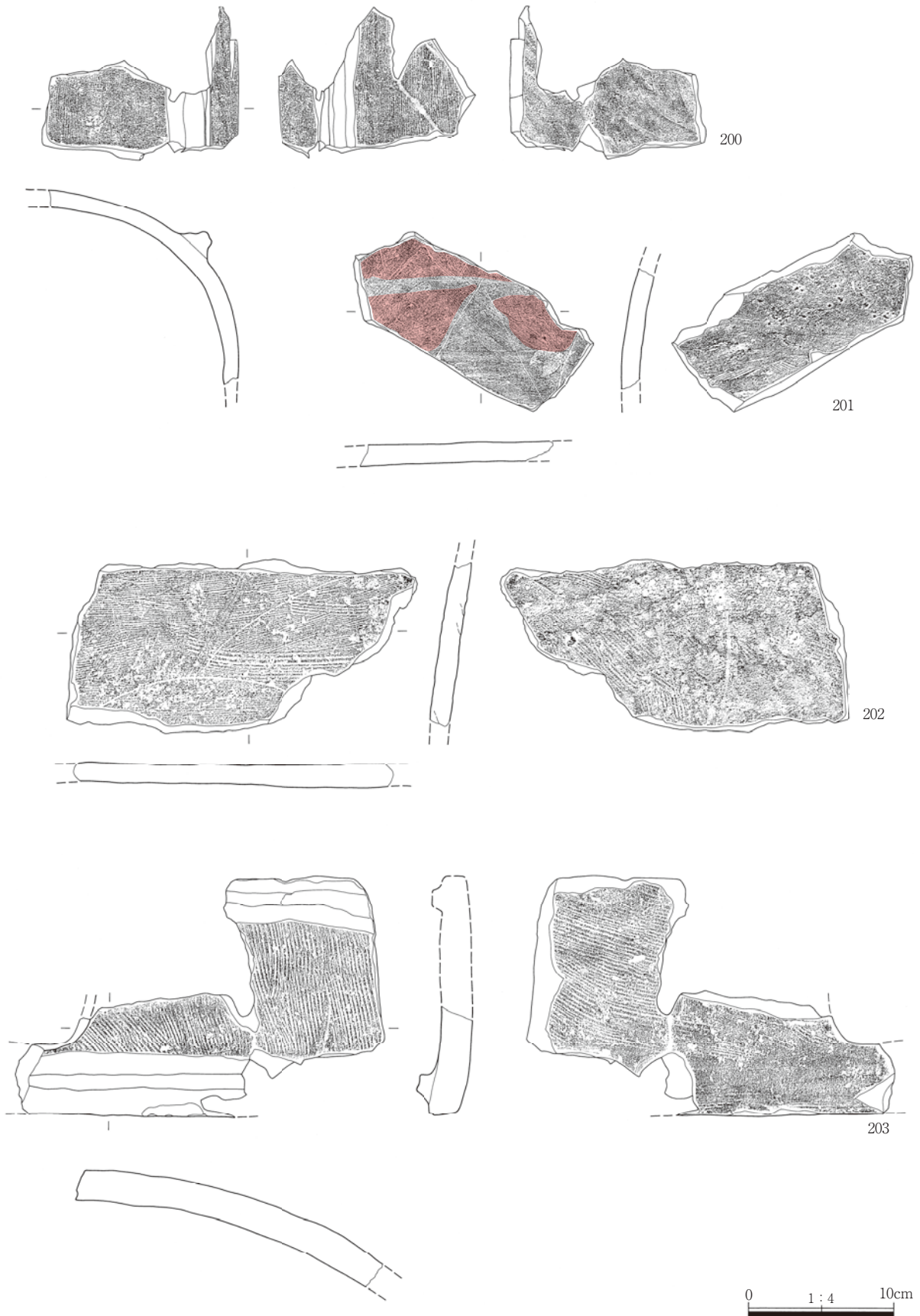
195は筒状を呈する個体の破片である。器財埴輪と考えられる。2条1単位のヘラ描き沈線により斜格子状の文様が描かれている。盾あるいは鞆の可能性が考えられる。

191は馬形埴輪の脚部の付け根部分の破片と考えられる。193と194は端部が弧状を呈する板状の破片である。小破片であるため断定は困難であるが馬形埴輪の鞍橋の一部を構成していた可能性を考えた



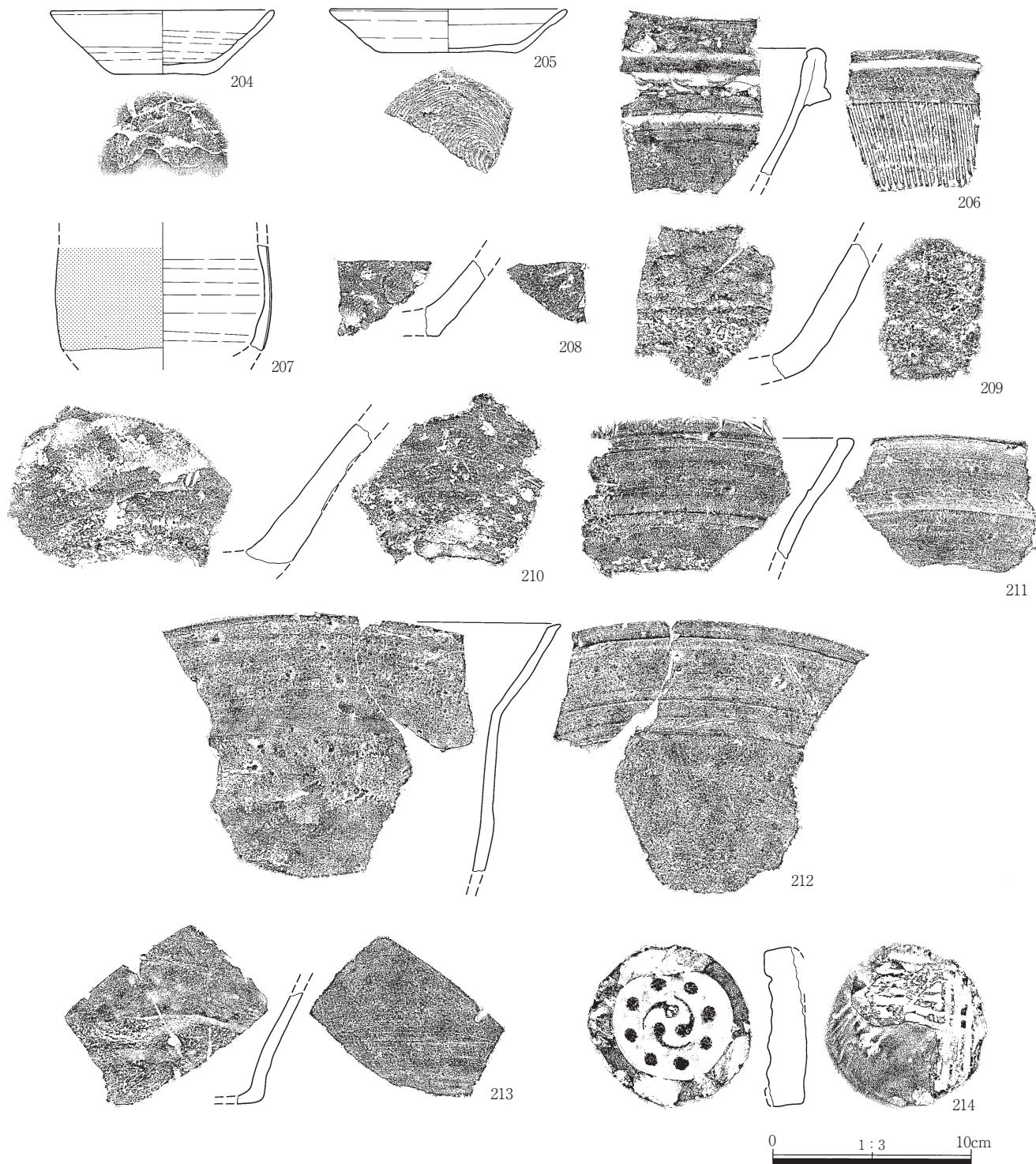


第26図 出土した形象埴輪（1）



第27図 出土した形象埴輪(2)





第28図 出土した土器（9）

い。

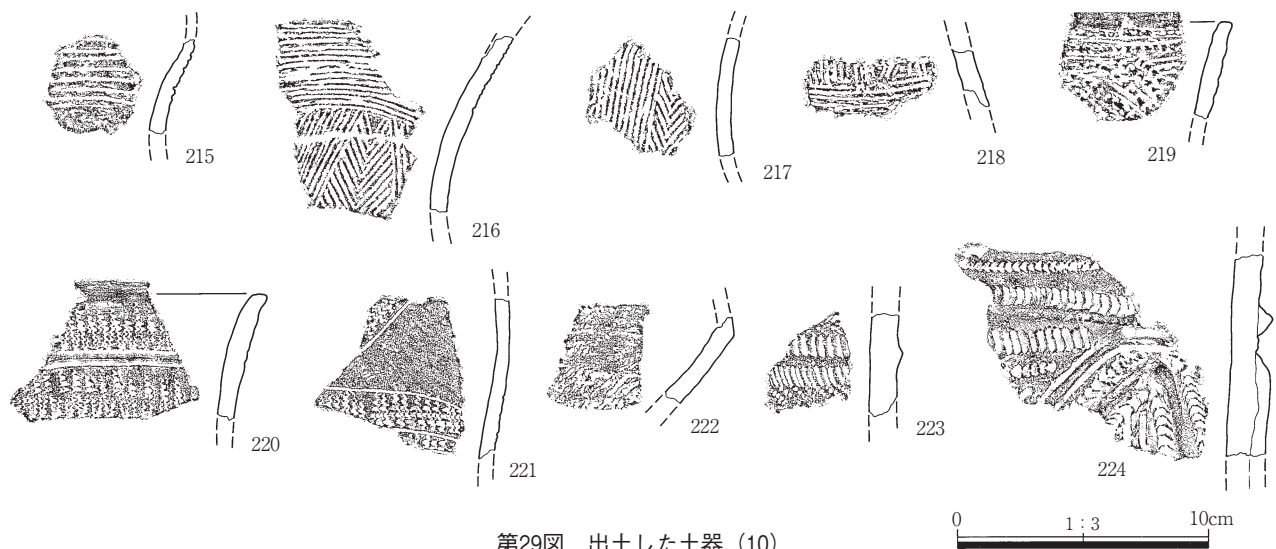
199は円筒状の本体から斜め下方に裾部が付く。半身像の人物埴輪の上衣端部破片と考えられる。

これらの形象埴輪の胎土は、円筒埴輪と同様に片岩類を含むものであった。総じて大きな礫は含まな

いものであった。家形埴輪は凝灰岩の小粒を多く含んでいた。

（4）中・近世の土器

本古墳とは直接的な関連性はないと考えられるが、墳丘覆土中から中・近世の所産と考えられる土



第29図 出土した土器 (10)

器を検出した。当該時期の遺構は確認されていない。

204・205は土師質土器皿である。ロクロ回転成形で、底部は糸切り離しである。206は陶器播り鉢の口縁部破片である。内面に縦方向の卸目が見られる。207は陶器碗である。外面には厚く釉がかけられている。208も陶器播り鉢の小破片である。209・210は軟質陶器播り鉢の底部近くの破片である。内面は摩耗しており、使用痕は確認できない。210は卸目はないが内面は使用により摩耗している。211・212・213は軟質陶器内耳鍋の破片である。211は胴部から弱く屈曲して立ち上がる。212は内面に稜をなして屈曲、外方に向かって立ち上がる。213の底部は平底である。214は軒瓦である。3つの巴とそれを囲む8粒の珠文が見られる。

#### (5) 縄文土器

中・近世の土器同様、古墳調査の過程で少量の縄文土器が検出された。

215は胴部破片で横位の集合条線文が施されている。216は胴部破片で、集合条線文により横位、斜位、矢羽根状文を施す。217は胴部破片で、集合条線文により斜位、矢羽根状文を施す。218は底部破片で、216と同様、集合条線文による横位、斜位、矢羽根状文が見られる。文様が見られる。219は口縁部の破片である。横位の集合条線文上に結節浮線文を施す。215から219は前期諸磯c式期の資料であ

る。220は口縁部破片である。横位区画文内に貝殻状文を施す。221は胴部破片である。単一沈線による区画内に貝殻状文を施す。前期興津Ⅱ式である。222は胴部破片である。縄文原体はL横位。施文は不良で不明瞭である。浅鉢か。前期の資料である。223は隆帯に沿って連続爪形文を施し、その間に平行線を加える。224は隆帯に沿って連続爪形文を施す。中期勝坂2式の資料である。

## 7 成果と問題点

### (1) 調査の成果

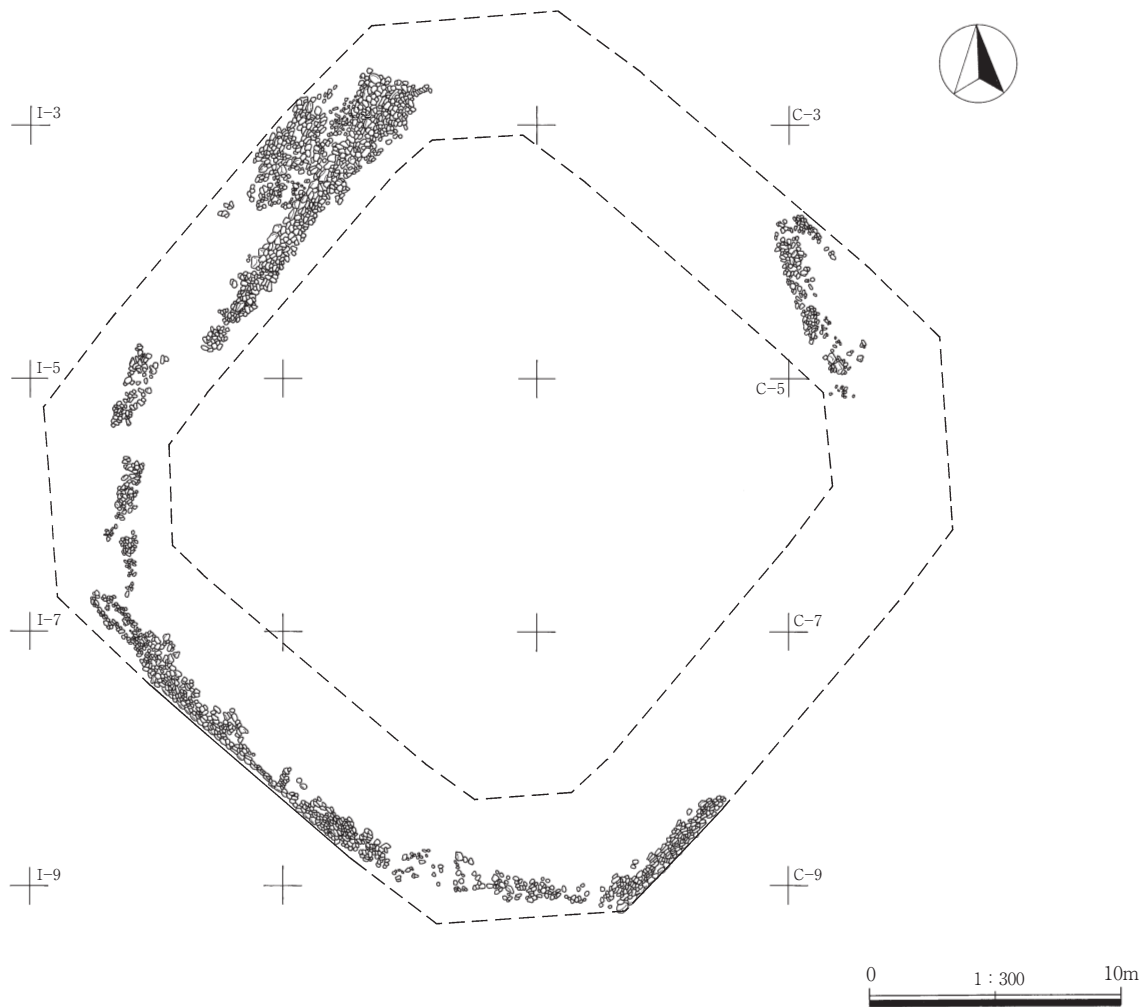
箱石浅間山古墳の調査および出土遺物の整理作業の結果については5、6に記したとおりである。

箱石浅間山古墳は検出した葺石の設置状況から南北、東西ともに約30.8mの規模を有する古墳であることが分かった。

墳丘の形状は方墳の四隅を隅切りしたような不等辺八角形を呈していたものと推定される。長辺の規模は19.5m、短辺の規模は7.5mが想定される。第30図は調査担当者の平野進一氏の所見を取り入れて築造当初の平面形状を復元したものである。南北の軸線は磁北から東偏45度である。

墳丘は古墳時代前期の土器を包含する(調査所見では南北トレンチ他の出土状況から集落の上に築造されたものと考えられている)旧地表、黒色土上に





第30図 墳丘の復元

盛土を積み上げて築造されていた。外表は礫（河原石）を積み上げた葺石により被覆されていた。葺石の状況から見ると中位に狭い中段面が存在しているようにも見えるが段築の有無は判然としなかった。

埋葬施設は検出されなかった。既に削平を受けていたものと考えられる。周堀は存在する可能性が高いが、確認するまでにいたらなかった。

葺石直上から二重口縁壺が破片の状態となって多数出土している。これらは墳頂部に配列されていたものが転落した可能性が高い。

本古墳は出土遺物の内容から古墳時代前期に底部穿孔の二重口縁壺を伴う第1次墳丘が築造された後、その墳丘を二次利用して円筒埴輪を伴う第2次墳丘が築造されたことが判明した。

第2次墳丘の形状、埋葬施設については全く不明

である。第2時墳丘に伴う円筒埴輪は、全体形状を把握することができなかったが2条突帯3段構成であったと考えられる。外面の器面調整はいずれもタテハケである。透孔は円形と考えられる。一部に底部調整が認められた。

胎土中には結晶片岩をはじめとした片岩類、雲母などの砂粒・鉱物片が含まれており、海面骨針化石の混入も見られることから藤岡方面で窖窯焼成されたものと考えられる。

中里正憲氏によれば、玉村町域の古墳においては6世紀後半も時代が下ると胎土に結晶片岩を含む埴輪（「片岩混入埴輪」）より、胎土中に混和材として角閃石安山岩を含む埴輪（「角安混入埴輪」）のほうが量的に卓越する傾向にあるとされる<sup>(1)</sup>。

円筒埴輪とともに家形、器財（盾あるいは鞆か）、

## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

人物、馬形埴輪の形象埴輪の破片が検出された。家形埴輪は基部を見る限り大型品である。上屋根は丁寧なつくりで鋸歯文、鱗状の文様が描かれていた。

### (2) 二重口縁壺について

二重口縁壺についてはこれまでに多数の研究成果が発表されている。紙幅の関係からその全てを網羅することはできない。ここでは箱石浅間山古墳出土の土器について言及している論考を中心に見ていきたい。

調査担当者の平野進一氏は、本古墳出土壺について図化を行い、4世紀末を中心とする年代を考えた<sup>(9)</sup>。

田口一郎氏は、井野川流域を中心としたS字甕や伊勢型二重口縁壺の編年を進める中で、パレス壺について編年を行っている。第31図に見られるように田口氏はパレス壺をA・B・Cの3形式に分類し、3類に区分している。この中で箱石浅間山古墳から出土した加飾壺についてB形式の3類としている<sup>(9)</sup>。パレス壺の3類は田口編年のS字甕のⅢ期後半からⅤ期に、伊勢型二重壺のⅡ期後半からⅣ期に相当する。

古谷紀之氏は二重口縁壺をA・B・Cの3形式に分類し、それぞれの編年を行っている。その中で箱石浅間山古墳出土の壺についてはB形式に含めている。B形式の中には田口氏が伊勢型二重口縁壺とした元島名将軍塚古墳出土資料や下郷天神塚古墳出土資料も含まれている。古谷氏は箱石浅間山古墳出土資料について頸部型式が設定できないとしながらも長頸率（頸部高－本報告では口縁下半の高さ／頸部下端径）が0.64となることから、廻間Ⅲ式中葉以前の東海系土器とは共伴せず、松河戸式以降の所産となると考えている<sup>(9)</sup>。元島名将軍塚古墳出土資料は廻間Ⅲ式中葉と考えている。

また、古谷氏は二重口縁壺・有段口縁壺の型式分類に基づき東日本の墳墓を7期に分けて編年している。その中で箱石浅間山古墳については下郷天神塚古墳や堀之内DK-4とともに東日本6期としているが、埴輪を共伴するとの認識は事実誤認であろう。

君島俊行氏は関東地方における二重口縁壺を(1)

加飾垂下口縁壺、(2) パレス壺系二重口縁壺、(3) 伊勢型二重口縁壺、(4) 畿内系二重口縁壺に分類して検討を加えている<sup>(9)</sup>。

新山保和氏は群馬県内出土の二重口縁壺を集成・分類する中で、これらの壺を(1) 畿内系二重口縁壺、(2) 伊勢型二重口縁壺、(3) パレス壺系二重口縁壺に分類した。箱石浅間山古墳出土資料はパレス壺系二重口縁壺に含まれている<sup>(9)</sup>。

以上のように二重口縁壺のとらえ方については研究者により器形からの分類、加飾の有無やその系譜からの分類とその視点が必ずしも一律ではないが、田口氏や古谷氏の論考を参考にすれば箱石浅間山古墳出土の二重口縁壺は深澤敦仁氏が設定した古墳時代前期新段階に位置付けられるようである。

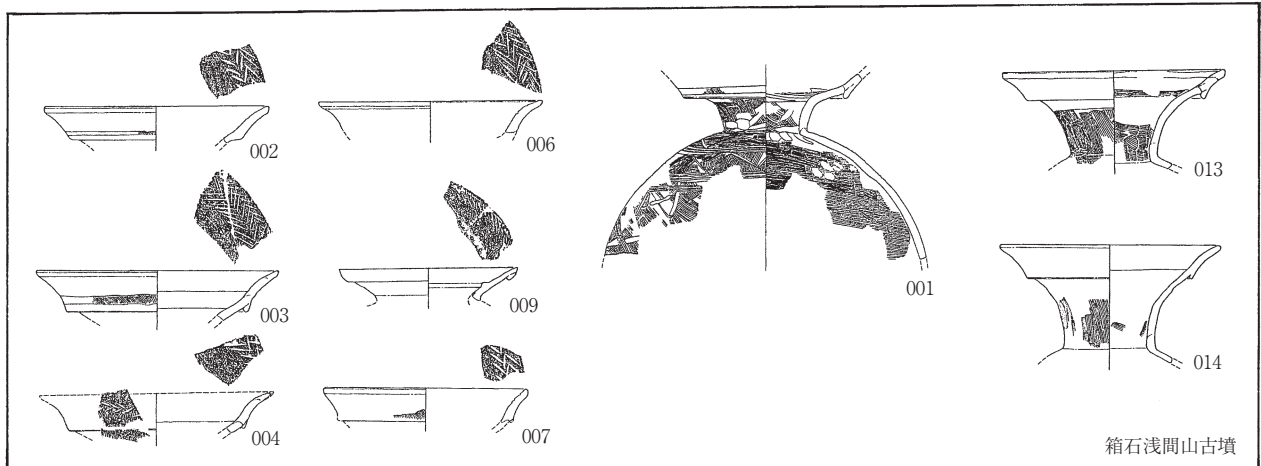
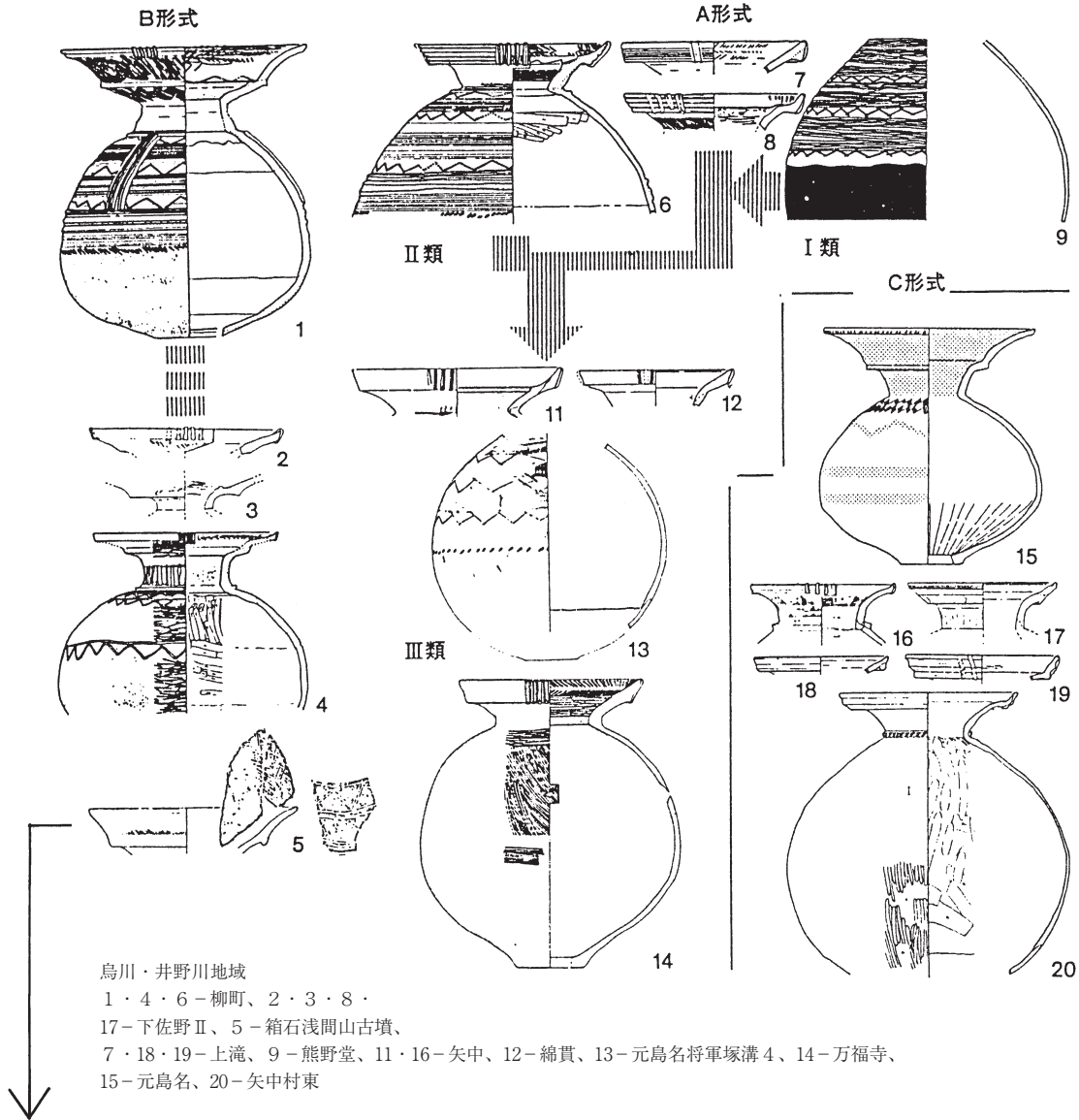
### (3) 箱石浅間山古墳の位置付け

箱石浅間山古墳の第1次墳丘は、出土した底部穿孔の二重口縁壺の特徴から古墳時代前期新段階に築造されたものと考えられる。

不等辺八角形という墳形については群馬県内では類例を見ることができないものである。墳丘が2次利用されていることから第2次墳丘（おそらくは円墳）構築の際に方墳の四隅部分が改変された可能性も検討されるべきところであるが、今報告では調査時の所見を受け、検出した葺石は不等辺八角形を呈していた第1次墳丘を被覆したものとしたい。

本古墳周辺では元島名将軍塚古墳、前橋八幡山古墳、前橋天神山古墳、川井稲荷山古墳、下郷天神塚古墳、下郷遺跡S Z42などの前期古墳が築造されている。下郷遺跡の墳墓の構成内容からこの時期、墳墓築造に関する重層的な階層構造が存在していたことが分かる。箱石浅間山古墳は墳丘規模が約30 m、墳形も不整八角形であることから、当該地域の第2位以下の階層を被葬者とする古墳であると言えよう。

なお、箱石浅間山古墳に対応する集落の所在については現在のところ不明である。今後、国道354号関連の調査が進展する中で関連遺跡が発見されるものと考えられる。



第31図 烏川・井野川流域のパレス壺

## 第1章 箱石浅間山古墳の調査

円筒埴輪は二重口縁壺と較べ後出する特徴が見られ、二重口縁壺と共伴するものではない。前記のとおり、6世紀中葉から後葉にかけて本古墳の再構築が行われたものと考えられる。かかる様相は本古墳群の南方1.2kmに所在する川井古墳群中の『総覧』芝根村1号古墳や7号古墳<sup>6)</sup>、高崎市若宮古墳群、藤岡市堀之内遺跡群<sup>9)</sup>においても指摘されているところである。

円筒埴輪の特徴からすると、第2次墳丘の主体部は横穴式石室であった可能性が高いが、今回の調査においては新しい古墳に係わる墳丘や埋葬施設に関する情報を得ることはできなかった。

## 8 箱石浅間山古墳 引用・参考文献

- 1 玉村町教育委員会『玉村町の遺跡』1992
- 2 玉村町教育委員会『小泉大塚越遺跡』1993
- 3 玉村町教育委員会『小泉長塚遺跡』2006
- 4 川井箱石遺跡調査会『川井箱石遺跡』1999
- 5 玉村町教育委員会『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』1997
- 6 玉村町教育委員会『十王堂・十王堂Ⅱ遺跡』2000
- 7 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3 1981
- 8 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
- 9 玉村町教育委員会『オトカ塚遺跡』2003
- 10 玉村町教育委員会『神明遺跡 行人塚遺跡 十王堂Ⅲ遺跡 中郷遺跡 松原Ⅱ遺跡 杉山遺跡』2006
- 11 玉村町教育委員会『上之手地区遺跡群(1)・(2) 稲荷森遺跡天神塚遺跡 宇貫地区遺跡群 稲荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明Ⅱ遺跡 上新田地区遺跡群』1999
- 12 玉村町教育委員会『滝川南遺跡』1999
- 13 玉村町教育委員会『角湖城Ⅱ遺跡』2000
- 14 玉村町教育委員会『角湖城遺跡』2001
- 15 玉村町教育委員会『宮ノ下遺跡 若王子Ⅱ遺跡 天神巡りⅢ遺跡』2000
- 16 玉村町教育委員会『城2号墳』2007
- 17 玉村町教育委員会『蟹沢遺跡』2001
- 18 玉村町教育委員会『蟹沢Ⅱ遺跡』1993
- 19 玉村町教育委員会『蟹沢Ⅳ遺跡』1993
- 20 玉村町教育委員会『横堀遺跡 街道南遺跡』2004
- 21 玉村町教育委員会『上之手石塚遺跡』2000
- 22 玉村町教育委員会『上之手石塚Ⅲ遺跡』1993
- 23 玉村町教育委員会『行人塚Ⅲ遺跡』2000
- 24 玉村町教育委員会『上之手石塚Ⅳ遺跡』1993
- 25 玉村町教育委員会『宇貫遺跡』1999
- 26 玉村町教育委員会『赤城Ⅱ遺跡』1993
- 27 玉村町教育委員会『八幡原赤塚Ⅱ遺跡』2000
- 28 玉村町教育委員会『上之手八王子遺跡』1991
- 29 玉村町教育委員会『上之手八王子Ⅱ遺跡 原屋敷Ⅱ遺跡』1997
- 30 玉村町教育委員会『粉糠島遺跡』1998
- 31 玉村町教育委員会『内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡』2004
- 32 玉村町教育委員会『曲田Ⅱ遺跡』1999

## 註

- 1 中里正憲氏にご教示を頂いた。
- 2 平野進一「箱石浅間山古墳」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究会他 1984
- 3 田口一郎「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器研究・報告編』1987  
田口一郎『元鳥名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981
- 4 古屋紀之「墳墓における土器配置の系譜と意義」『駿台史学』第104号 1998
- 5 君島俊行「関東地方における壺形埴輪の成立過程」『土曜考古』2002
- 6 新山保和「群馬県出土の二重口縁壺」『研究紀要』26 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
- 7 深澤敦仁「群馬県の様相」『前期古墳の諸段階と大型古墳の出現』2009
- 8 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3 1981
- 9 藤岡市教育委員会『堀ノ内遺跡群』1982

- 33 玉村町教育委員会『曲田遺跡』1999
  - 34 玉村町教育委員会『中袋遺跡』2000
  - 35 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島久保田遺跡 福島大光坊遺跡』2003
  - 36 玉村町教育委員会『味噌袋・福島二丁遺跡 福島・南玉遺跡』2007
  - 37 玉村町教育委員会『利根添遺跡』1998
  - 38 玉村町教育委員会『久保田遺跡』2004
  - 39 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島大島遺跡』2009
  - 40 玉村町教育委員会『福島稲荷木 福島稲荷木Ⅱ遺跡 福島稲荷木Ⅲ遺跡』2009
  - 41 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯塚遺跡(1)』2007
  - 42 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯塚遺跡(2)』2008
  - 43 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯玉』2008
  - 44 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報15』1996
  - 45 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報16』1997
  - 46 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『斉田中耕地遺跡』2009
  - 47 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報24』2005
  - 48 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報28』2009
  - 49 玉村町教育委員会『一本木遺跡』2004
  - 50 玉村町教育委員会『田口下屋敷遺跡』2000
  - 51 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島曲戸遺跡 上福島遺跡』2002
  - 52 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上福島中町遺跡』2003
  - 53 玉村町教育委員会『一万田遺跡』2003
  - 54 玉村町教育委員会『神人村Ⅱ遺跡』1992
  - 55 玉村町教育委員会『樋越諏訪前遺跡』2004
  - 56 玉村町教育委員会『中道東遺跡中道西Ⅱ遺跡蛭堀東遺跡』『中道東Ⅱ遺跡』2008
- 文頭の番号は第1表の文献番号と一致している。



## 第2章 不動山古墳の調査

### 1 調査に至る経過

国道354号は高崎市並榎町君が代橋交差点を起点に群馬県、栃木県を通り、茨城県銚田市にいたる一般国道である。群馬県では東毛広域幹線道路と位置付けられ、県内の高崎市から館林市・板倉町までの各所でバイパス化が図られている。

高崎市綿貫町地内における354号の現行の路線は、高崎駅方面から綿貫町北交差点を南に進み、綿貫町交差点で東折、日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所の敷地北側境界に沿って玉村方面へと向かっている。綿貫町交差点から東側部分は、旧陸軍造兵廠岩鼻火薬製造所の敷地内を通過していた旧日光例幣使街道を同製造所の拡張に伴って北側に付け替えたものがその前身となっている。路線の付け替

えに際し、不動山古墳の前方部南側墳丘部分を一部削平する形で現在の位置に新設されたものである。1975（昭和50）年に県道から国道354号に昇格している。

1979（昭和54）年3月、群馬県教育委員会文化財保護課の職員が不動山古墳の墳丘および周堀部分を含む国道354号の路線北側部分で路面の拡幅と歩道部分の整備工事が進行していることを確認した。こうした状況を受けて、群馬県土木部と群馬県教育委員会との間で埋蔵文化財保護の措置を講ずるための調整が実施された。協議の結果、工事の進捗に則する形で、不動山古墳に係わる部分に対し、土層断面の観察を主体とした調査を実施された。



第32図 不動山古墳周辺の地形

## 2 調査の経過

調査は1979（昭和54）年3月12日から3月17日の6日間の間に実施された。

調査は、現況の前方部裾部から西方に49mの地点から後円部西側の綿貫町堀米地区から来た三叉路接点までの長さ約168mの間、道路拡幅部分の北側掘削面の土層堆積状況を観察することを主な内容とした。この間の土層の状況について、不動山古墳に関わる遺構の有無を確認しながら、写真撮影、断面図の作成、土層内容の注記、出土埴輪の取り上げを行った。

これにより不動山古墳には従来周知されていた周堀の外側にもう一重、周堀が存在し、不動山古墳は内堀、外堀の二重の周堀により圍繞されていることが確認された。

周堀等の遺構の位置関係については工事の進行状況との兼ね合いから、平面図にその概略を記録するに止まった。

なお、これらの記録類の整理、出土遺物の図化・写真撮影などの作業については第1章4（5）に記したよう箱石浅間山古墳の整理作業と合わせて実施した。

## 3 古墳の位置と地形

不動山古墳は高崎市の東南部、綿貫町金堀1260-1番地他に所在（墳丘は1272番地他）し、東経139度4分55秒、北緯36度18分1秒を測る。高崎線倉賀野駅からは東北東に2.6kmの距離にある。

榛名山東南麓を流れ下る井野川は利根川の一支流で、本古墳の下流約1.0kmで烏川と合流する。井野川の左岸、東側は前橋・伊勢崎台地で、現在では識別することが困難となってきたが、微高地と低地が交互に広がっている。下滝2号墳を中核とする古墳群や下滝天水遺跡などが立地している。

また、右岸、西側は高崎泥流と呼ばれる泥流堆積物が堆積する低地と河岸段丘になっている。本古墳はこの泥流堆積物の上に築造されている。南流する井野川の河川敷からは西側に200m離れている。

周囲の標高は73m前後である。同一面上には現在、群馬の森や日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所などが位置している。本古墳の周辺はかつては純農村風景が広がり、点在する宅地の周囲に畠や桑畑が広がっていた。近年は、高崎市営綿貫住宅団地や綿貫工業団地が造成され、国道354号のバイパス工事が進行するなど徐々に古墳時代の景観を復元することが困難になりつつある。

西側の河岸段丘は1.2から1.5kmの幅を有している。現在は圃場整備により水田が形成されているが、粕川と呼称される小河川のより形成された崖線を境に柴崎蟹沢古墳や飯玉神社古墳ののる前橋・伊勢崎台地上の微高地へと続いている。

## 4 周辺の遺跡

ここでは不動山古墳周辺の遺跡の分布について、古墳や古墳時代の集落の動向を中心に記述したい。

井野川下流域の右岸段丘上に築造された不動山古墳の周辺には『上毛古墳総覧』作成時に不動山古墳を含む5基の前方後円墳と17基の円墳の合計22基が確認されている。この時、陸軍造兵廠岩鼻火薬製造所の敷地内は踏査の対象から除外されていたので、実際には第34図にみられるよう、登載数をはるかにしのぐ古墳が段丘上一帯に築造されていたものと考えられている。これらの古墳は綿貫古墳群として把握、呼称されている。

不動山古墳から南方270m、現在の日本原子力研究開発機構高崎量子応用研究所敷地内には墳丘長約115mの前方後円墳岩鼻二子山古墳が南方向に前方部を向けて築造されていた。埋葬施設は2基の舟形石棺である。副葬品には五神四獣鏡、鉄製武器・農工具、石製模造品などが出土している。5世紀前半から中頃の築造と考えられている。

岩鼻二子山古墳との間に位置する総覧岩鼻村12号墳は墳丘長約43mの小型前方後円墳か帆立貝式古墳と考えられる。

本古墳の北側に位置する普賢寺裏山古墳は総覧には未登載の古墳であるが墳丘長約80mの前方後円墳

第2表 不動山古墳周辺の遺跡一覧

※文の項中の番号は章末の引用・参考文献の番号と同じ

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
1	不動山古墳	綿貫町字金堀 1272-1	本報告の古墳。	
2	岩鼻二子山古墳	綿貫町字二子	現在は消滅するが墳丘長約 115 m ほどの前方後円墳であったと推定される。後円部から 2 基の舟形石棺の出土が伝えられるがその内の 1 基は東京国立博物館に収蔵されている。副葬品は五神四獣鏡、鉄斧、鉄鉾、鉄剣、直刀、石製模造品が知られる。5 世紀前半から中頃の築造と考えられる。近接して墳丘長 43 m の綜覧岩鼻村 12 号墳があったとされる。	1
3	普賢寺裏古墳	綿貫町字堀米西 1560	墳丘長 80 m ほどの前方後円墳で、前方部は西面する。墳形が後円部高に比して前方部高の低い形状を呈することから、比較的古い時期の築造が想定されているが、埴輪・土器など年代決定の根拠となる資料が得られていない。なお、不動山古墳から観音山古墳の間には綜覧記載、記載漏れ合わせて 9 基の古墳が確認されている。	2
	普賢寺東古墳	綿貫町字堀米西 1557	普賢寺裏東古墳は現在は既に消滅しているが、直径 30 m ～ 40 m の規模を有した円墳であったと推定される。主体部は横穴式石室であった可能性が指摘されている。鉄地金銅張の f 字形鏡板付轡、挂甲の出土が知られる。	3
4	綿貫観音山古墳	綿貫町字観音山 1572	墳丘長 97.5 m の前方後円墳。墳丘上に円筒埴輪、家・人物・馬・盾などの形象埴輪を多数樹立する。主体部は角閃石安山岩削石を積上げた横穴式石室で全長 12.8 m を測る。甲、装身具、武器・武具、馬具、銅製水瓶、須恵器など多数を副葬する。6 世紀後半の築造と考えられる。	4 5
5	堀米前遺跡・不動山東遺跡・綿貫堀米前Ⅱ遺跡	綿貫町字堀米前	堀米前遺跡では 5 ～ 6 世紀の住居 40 軒を検出した。不動山東遺跡では古墳時代前期・後期の竪穴住居をそれぞれ 2 軒検出している。5 世紀後半の溝からは格子叩目文を施した土師質土器の甕を出土している。堀米前Ⅱ遺跡では古墳時代前期・後期、平安時代の集落跡。竪穴住居 40 軒を検出した。	6 7
6	綿貫伊勢遺跡	綿貫町字伊勢	古墳時代前期から奈良・平安時代にいたる住居が密集状態で検出された。この他に中世の溝、土坑、井戸を検出した。	8
7	綿貫牛道遺跡	綿貫町字牛道	遺構の分布は散在的であった。中・近世の溝、堀、井戸、火葬跡、A s - A 下の畠などが検出された。	8
8	綿貫原北遺跡	綿貫町字原北	古墳時代前期、奈良・平安時代の集落、中世の屋敷、掘立柱建物、溝、近世の墓坑、A s - A の復旧溝（灰掻き溝）などを検出した。	8
9	綿貫遺跡	綿貫町、台新田町	古墳時代前期の住居 6 軒・方形周溝墓 2 基、後期の住居を検出した。字小林前では土壇状の遺構を伴う瓦葺建物址が検出され、9 世紀前半の寺院と考えられている。重弁蓮華文の軒丸瓦や斜格子文の軒平瓦などを含む瓦が多量に出土している。	9
10	綿貫小林前遺跡	綿貫町字小林前	古墳時代前期から奈良・平安時代にいたる集落を検出した。	10
11	倉賀野東古墳群大応寺群・大道南群	倉賀野町下町字乙大応寺・乙大道南他	鳥川左岸の字乙大応寺から字乙大道南地内にかけて約 1500 m の範囲に形成された大古墳群である。東端は岩鼻町地内に及び綜覧岩鼻町 1 号墳などの大型円墳が形成されている。綜覧では前方後円墳 4 ～ 6 基を含む 162 基の古墳が確認されている。現在は削平が進行し、現存する古墳はその数を著しく減少させている。	11
12	飯玉神社古墳	栗崎町字宮原 609	墳丘長 30 m ほどの前方後円墳とされるが改変が著しい。円筒埴輪が散見する。	
13	東中里遺跡	東中里町		
14	矢中村東 C	矢中町字清水・柴崎境	古墳時代前期の方形周溝墓 11 基と円形周溝墓 1 基を検出する。	12
15	矢中村東 B	矢中町字村東	古墳時代前期の全長 27 m の前方後方型周溝墓、2 基の方形周溝墓が検出される。	13
16	矢中村東遺跡	矢中町字村東	古墳時代前期の方形周溝墓を検出する。その他に A s - B 下水田、溝、溜池状遺構を検出する。出土遺物では「物部私印」の銅印が特記される。	14
17	砂内遺跡	矢中町字砂内	小円墳 3 基を検出した。	15
18	下大類遺跡	下大類町字芹沢	微高地上から古墳時代前期、平安時代の竪穴住居 20 数軒を検出した。	16
		柴崎町字二本木		
19	柴崎熊野前遺跡	柴崎町字熊野前	埋没土の中位に A s - C が堆積する河川跡が検出され、大量の土器とともに石製勾玉・管玉、ガラス製小玉、大足をはじめとした木器が出土した。	17
20	柴崎蟹沢古墳	柴崎町字蟹沢 602	1910（明治 10 年）に削平される。墳丘、主体部とも形状が判然としないが 10 数 m の小型古墳であったとされる。「正始元年」銘三角縁四神四獣鏡、三角縁三神三獣鏡、内行花文鏡 2 面、鉄斧、鉄鏝、土師器が出土している。4 世紀の築造と考えられる。本古墳の東側には浅間山古墳が現存する。	18 19
21	下大類蟹沢遺跡	下大類町字蟹沢	古墳時代～平安時代の住居、建物址と考えられている柵列状遺構が検出された。それとともに円墳 1 基が検出され、円筒埴輪、人物・馬・大刀等の形象埴輪が出土している。	20
22	高崎情報団地遺跡	宿大類町・中大類町	弥生時代から奈良・平安時代の住居 131 軒・掘立柱建物 20 棟、弥生時代後期の方形周溝墓 7 基、東山道駅路、A s - B 下水田、中世館跡などともに古墳 33 基が確認された。これらの古墳は墳丘長 33 ～ 45 m の 4 基の帆立貝式古墳を中心とした 5 世紀後半から 6 世紀前半の群集墳と 6 世紀後半から 7 世紀代の群集墳である。その分布は高崎情報団地Ⅱ遺跡まで延びていることが確認されている。	21



第2章 不動山古墳の調査

No.	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
23	下郷遺跡	玉村町八幡原	古墳時代4世紀の方形周溝墓27基、円形周溝墓2基、堅穴系小石塚2基、埴輪棺1基、土坑10基、墳丘長40mの前方後方墳S Z 42が検出されている。また、堅穴式住居3軒も発見されている。6・7世紀になると周辺も含め横穴式石室を主体部に有する円墳群が形成され、14基が調査されている。	22
24	下郷天神塚古墳	玉村町八幡原	墳丘長80～90mの規模を有した前方後円墳と推定されるが、現存しない。後円部の一部が調査され、葺石、周堀が検出された。特殊器台の系譜を引く埴輪、底部穿孔壺形土器、土師器の壺・S字状口縁台付甕が出土している。4世紀後半の築造と考えられる。近接して築造された前方後方墳、方形周溝墓との関連が注目されている。	22
25	若宮八幡北古墳	八幡原町字若宮 2145	墳丘長46.3mの規模の帆立貝式古墳である。南南東を向く前方部の西側には造り出し部が付設されている。墳丘の周囲には周堤帯を伴う周堀が一周する。主体部は舟形石棺で、早くから珠文鏡、直刀、鉄鏃、碧玉製管玉、ガラス小玉の出土が知られている。調査で中段面を圍繞する円筒埴輪列を検出したほか、男女人物、盾持人、家、盾、蓋、馬、犬、鹿等多種の形象埴輪が出土した。5世紀後半の築造と考えられる。若宮八幡北古墳の南東、鳥川沿いには玉村町域にかけて群集墳が形成され、若宮・八幡原古墳群と呼称されている。若宮古墳群では堅穴系小石塚を主体部に有する円墳6基、墳丘を有さない堅穴系小石塚20基が検出された。他に横穴式石室を主体部に有する円墳11基も検出されており、長期にわたり古墳群が形成されていたことが分かる。また、これらの古墳とともに前期の堅穴住居の存在が認められ、古墳群形成以前は居住域として利用されていたことがわかる。	23 24
26	八幡原大鼻・稲荷遺跡	八幡原町字大鼻・稲荷	古墳時代後期を中心に25軒の住居を検出する。	25
27	灰塚遺跡・灰塚II遺跡	八幡原町字灰塚 792 他	古墳時代から平安時代に至る堅穴住居を検出する。それとともに直径35mほどの円墳1基を検出する。周堀内から出土した土師器高杯・杯・甕、須恵器甕の様相から5世紀中頃か後葉の築造と考えられる	26
28	下斉田遺跡	下斉田町字小芝・熊野	古墳時代前期の堅穴住居3軒とともに方形周溝墓1基を検出する。その他に奈良・平安時代の住居なども存在する。	27
29	上新田新田西遺跡	玉村町上新田字新田西	下斉田遺跡と一連の遺跡と考えられる。奈良時代の住居3軒と中・近世以降の井戸などを検出した。	28
30	下斉田重土薬師遺跡	下斉田町重土薬師	東側の微高地部分から古墳時代から奈良時代にいたる住居が検出された。これ以外の調査区からはAs-B下水田が検出された。	8
31	下滝高井前遺跡	下滝町高井前	古墳時代前期から奈良・平安時代にいたる集落を検出した。	
32	上滝社宮司遺跡	上滝町社宮司	古墳時代前期の土坑が検出されている。井戸の可能性も考えられる。近接して滝川C遺跡あり、溝から前期の土器を出土している。	29
33	下滝天水遺跡	下滝町・上滝町	井野川の右岸段丘上位置する。低台地上には古墳時代を中心にした奈良・平安時代へと継続する集落跡が検出された。一辺約50mの方形区画を形成すると考えられる5世紀の掘削の溝は豪族居館の可能性が高い。	30
34	綜覧滝川村2号墳(前山古墳)	下滝町字境内 26	墳丘長60mを越す前方後円墳である。主体部は後円部に構築された複室構造の横穴式石室である。大刀、馬具をはじめ多数の副葬品を出土する。6世紀後半の築造と考えられる。本古墳の周辺、井野川左岸には多数の古墳が群在する。本古墳の北側、慈眼寺境内には円墳が存在する。	31
35	元島名將軍塚古墳	元島名町字將軍塚 162	井野川左岸上に位置する。墳丘長91～96mの規模を有する前方後方墳である。後方に存した主体部は粘土塚と推定され、小型製四獣鏡1、碧玉製石釧1、鉄刀、刀子、鉈が副葬され、他に勾玉など玉類の出土が伝えられている。墳丘をめぐる不整形な周堀からは底部穿孔壺形土器やS字状口縁台付甕が出土している。	32
36	上滝五反畑遺跡	上滝町字五反畑	榎町北遺跡と同時期の水田址を検出している。	33
37	上滝榎町北遺跡	上滝町字榎町北	古墳時代の遺構としてはHr-F A下面の水田とAs-C混土層上面、及びその下面から水田址を検出した。前期の住居1軒も検出している。	34
38	宿横手三波川遺跡	宿横手町字三波川	古墳時代の遺構としてはHr-F P下面とHr-F A下面の水田址を検出した。	35
39	上滝遺跡	上滝町	古墳時代前期・後期、奈良時代の住居を検出した。	36
40	元島名B遺跡	元島名町	元島名城関連の堀跡を検出した。	37
41	西横手遺跡群	西横手町字西免・萩原町字沖	古墳時代前期の周溝墓、古墳時代前期～中期の水路、Hr-F A下面の水田を検出した。	38









である。埋葬施設は竪穴系と考えられる。副葬品が不明であることや埴輪が採集できないことから築造年代を推定することが困難であるが、墳丘形状を考慮すると不動山古墳より古い時期の築造が想定されている。

綿貫観音山古墳は綿貫古墳群の北限に位置する墳丘長97.5mの前方後円墳である。二段築成で、周囲を周堀が二重に圍繞している。全長12.6mの大型横穴式石室は榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩削石を積み上げて構築されている。墳丘全体を飾り立てるように円筒埴輪や多種・多彩の形象埴輪が樹立されていた。副葬品には鏡、装身具、武器・武具、馬具、銅製水瓶、須恵器などが見られる。6世紀後半の築造と考えられ、綿貫古墳群最後の前方後円墳と考えられる。古墳の諸属性のどの部分をとっても同時期の群馬県内における最上位の内容を有している。

円墳の中では直径18mの規模を有していたとされる普賢寺東古墳が注目される。主体部は初期横穴式石室であった可能性を有し、鉄地金銅張f字鏡板付轡や挂甲小札を出土している。

この他に井野川右岸の古墳としては北西方向2.1kmの位置に柴崎蟹沢古墳がある。この古墳は正始元年銘の三角縁神獸鏡など4面の銅鏡を副葬していたことで著名である。4世紀後半の築造と考えられている。近接する矢中村東B遺跡からは前方後方型周溝墓も検出されている。

井野川左岸では綿貫古墳群よりも下流、利根川との合流地点付近の河岸段丘上に若宮八幡北古墳が築造されている。墳丘長46.3mの帆立貝式古墳で、二箇所造りに造り出し部を有する古墳である。造り出し部には、人物・馬・鹿などの形象埴輪が集中配置されていたものと想定される。埋葬主体部は舟形石棺である。築造年代は5世紀後半と考えられている。この古墳の南側、烏川段丘上には若宮・八幡原古墳群が形成されている。

綿貫古墳群より左岸上流部分では上滝町慈眼寺境内付近から下滝町にかけて南北800mにわたり古墳の分布が見られる。中には6世紀後半の築造で、墳

丘長47m、複室構造の横穴式石室を主体部に有する下滝2号墳（前山古墳）や直径40mの伊勢山古墳などが存在する。

元島名將軍塚古墳は墳長91から96mの前方後方墳である。埋葬施設は粘土槨で、小型仿製鏡や石釧の出土が知られている。墳裾部から二重口縁の底部穿孔壺が出土しており、墳丘上に配列されていたものと考えられている。4世紀前半の築造と考えられている。

さらに本古墳から3.7km井野川を上流に遡った中大類町から宿大類町では高崎情報団地遺跡の調査で帆立貝式古墳4基、円墳29基が検出された。5世紀後半から6世紀前半、6世紀後半から7世紀にいたる2時期の群集墳が形成されたことが知られる。

不動山古墳の周辺ではこれまであまり遺跡の調査事例が無く綿貫古墳群の成立と集落遺跡の動向について対応させて検討する材料が少なかった。

早くには不動山古墳の東方近接地で綿貫堀米前遺跡や不動山東遺跡の調査が、綿貫観音山古墳の北方では綿貫遺跡の調査が行われていたが、最近になり前橋長瀨線バイパスや国道354号バイパスの建設とともに綿貫小林前遺跡や綿貫伊勢遺跡などの調査が実施されることにより古墳時代集落の内容が明らかになりつつある。綿貫堀米前遺跡や不動山遺跡では4世紀の住居が、堀米前Ⅱ遺跡では6世紀の住居が検出されている。不動山東遺跡では古墳時代中期末の住居から格子目叩目文をもつ土師質土器の甕が出土しており、岩鼻二子山古墳や不動山古墳の築造の背景に渡来人、渡来系文物との関わりが存在することを考慮させる資料が得られている。綿貫伊勢遺跡では古墳時代前期を中心に平安時代までの集落が検出されている。古墳時代前期竪穴住居の密集状況に比べると中期・後期の住居数は量的に減少している。綿貫小林前遺跡でも古墳時代前期を中心とした集落が検出されている。

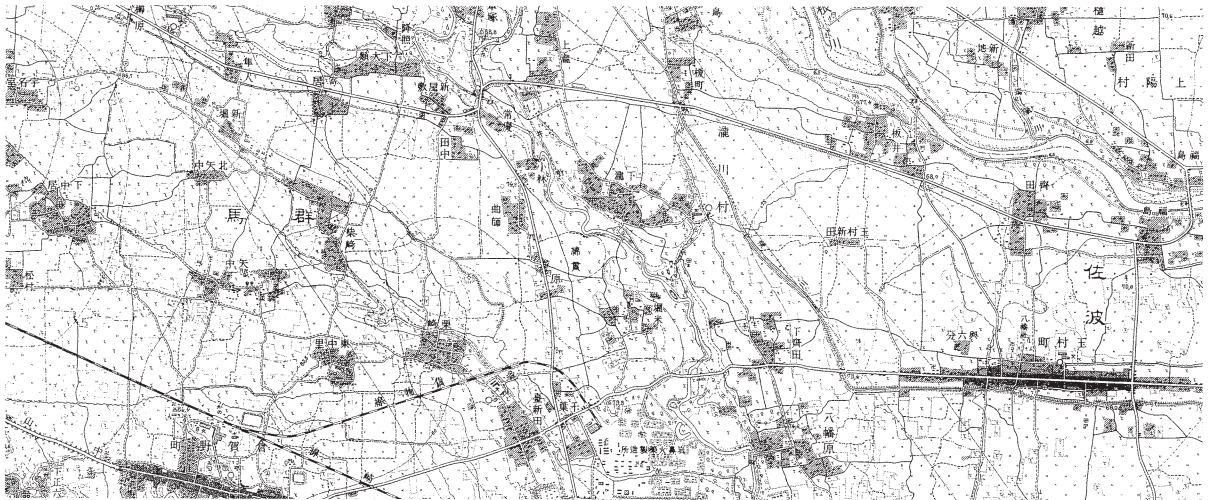
井野川右岸では下滝天水遺跡で古墳時代前期以降の集落が展開している。一辺約35mの方形区画が検出され、5世紀の豪族居館の一端と推定されている。



第2章 不動山古墳の調査



1885(明治18年)



1929(昭和4年)



1968(昭和43年)

0 1 : 50,000 2km

第35図 不動山古墳周辺の地理的変遷



## 5 これまでの調査と研究成果

不動山古墳は墳丘長94mの前方後円墳で、主体部には舟形石棺が採用されている。道路建設のため墳丘南側裾部の一部を削平されたものの昭和30年代前半頃まではほぼ全形をとどめていたとされる。その後、前方部は土砂採取のため盛土が持ち去られ、著しく変形してしまった。周囲には周堀が巡り、水田として地割りにその痕跡を残している。

本項では不動山古墳に係わるこれまでの発掘調査歴や研究成果についてまとめておく。

## (1) 調査以前の不動山古墳

本古墳の後円部墳頂部には現在、不動尊堂が建立されており、墳丘はその原形を大きく改変されている。堂宇の背後には1916(大正5)年の堂宇建設の際に発見された舟形石棺が露出している。その位置は後円部の中心よりやや北側に偏している。

舟形石棺は棺身のみが残存しており、蓋については不明である。その規模は全長344cm、幅146cmと大型である。平面形は両端の幅に差がなく、断面形は箱形である。両小口面に各一つ、大振りな縄掛突起が造り出されている。石材は、岩野谷(観音山)丘陵から供給されたと考えられる凝灰岩である。副葬品については全く不明である。

不動山古墳に近接する岩鼻二子山古墳、若宮八幡北古墳においても主体部に舟形石棺が採用されている。群馬県内には20基前後の舟形石棺が確認されているが不動山古墳の石棺は其中で古相に位置付けられるものである。

## (2) 群馬県立博物館による調査

不動山古墳は、今回報告する調査を含め3回にわたり発掘調査が行われている。

最初に行われた調査は、1962(昭和37)年から1964(昭和39)年のことである。前方部の土砂採取を契機に、梅澤重昭氏を担当者として、群馬県立博物館による学術調査が3次にわたり実施された。第1年次の調査は1962(昭和37)年に行われた。前方部北側の造り出し部分を中心に行われた。

1963(昭和38年)の第2年次には不動山古墳後円

部東方に位置する円墳を不動山古墳の陪塚と考えて、調査が実施されている。1964(昭和39)年の第3年次には後円部の墳丘、葺石、円筒埴輪列を対象とした調査が行われた。

3次にわたる調査の成果については梅澤重昭氏により『日本考古学年報』15・18(1967・1970)および『群馬県史』資料編3(1981)、『高崎市史』資料編1(1999)にその内容が記されている。

『群馬県史』資料編3によると不動山古墳は、前方部を西面して構築された前方後円墳である。主軸方向はN-73°-Eである。墳丘の規模は94.00m、後円部の直径54.00m、墳頂部の直径18.00m、高さ10.10m、前方部前幅56.00m、残高9.10m、くびれ部幅36.50mを測る。墳丘は二段築成で、墳丘傾斜面には葺石を施設していた。前方部右側(北側)に造り出しを有している。墳丘の周囲には幅12mで盾形の周堀が圍繞しているとされる。

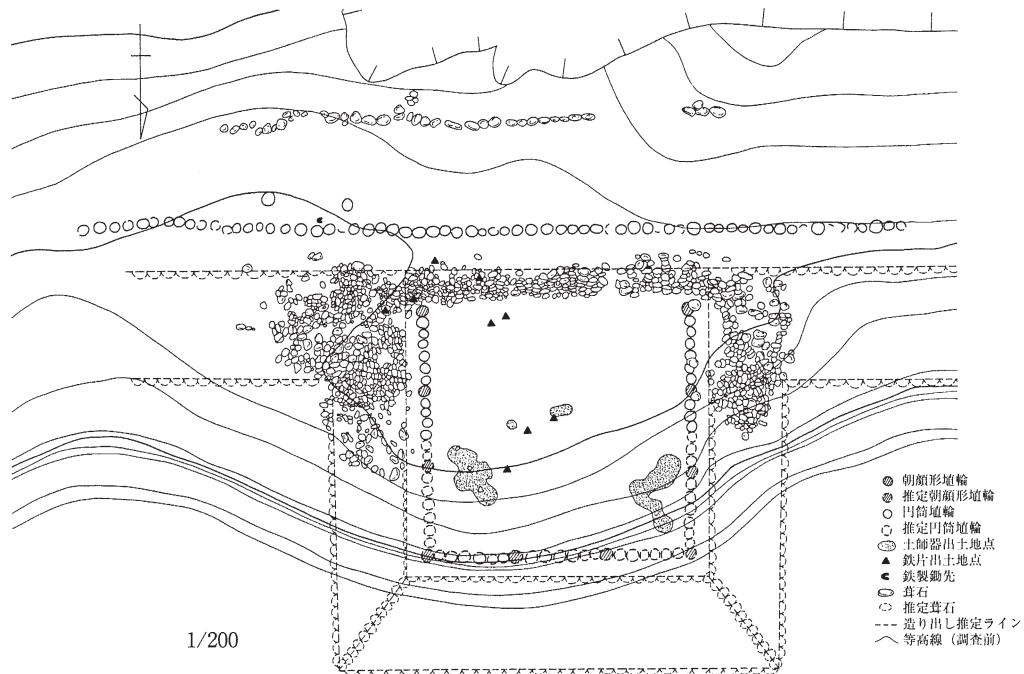
埴輪は、円筒埴輪が中段平坦面に樹立されていることが確認されている。前方部墳頂部から鞍部では器財埴輪と家と推定される破片が出土している。

造り出しは前方部に向かって右側に付設されている。形状は方形台状で、周堀底面から1.7mの高さ、墳丘中段面より0.8m下位にある。平坦面の規模は幅8.4m、奥行6mに復元できる。基底部の規模は12m、奥行8.4mである。側部法面に葺石が配されている。側部縁辺に円筒埴輪を樹立している。床面上から土師器埴や壺の破片が出土している。

本文献中には墳丘実測図と舟形石棺の実測図が掲載されている。主体部からの副葬品は不明であるが、前方部北側中段の円筒埴輪列近くから鉄製鋏先1点が出土している。

梅澤氏は後述するように不動山古墳の築造企画についても言及している。『群馬県史』通史編1(1990)では本古墳の墳丘のプラン構成が、太田天神山古墳と同一で、天神山古墳の主要部位のスケールを25尺(一尺約24cm)除して、2分の1に縮尺した相似形の規模であると記している。

構築年代は、5世紀後半から末葉とされている。



第36図 不動山古墳造出部の推定図

『高崎市史』資料編1では『群馬県史』の内容の他に以下のことが追記されている。墳丘実測図と地籍図を比較すると特に前方部前面において三重に周堀を構えた地割りが残されていることが看取できるとされる。また、本古墳には人物埴輪、馬形埴輪は配置されていなかったものと推定している。

造り出しでは円筒埴輪列による区画内から破碎された土師器壺、甕、杯の破片が3箇所散布していたことが認められ、一部に鉄片の散布も確認できたと記されている。

また、現在置かれている舟形石棺の位置が後円部の中心からはずれていることから別の主体部が存在していた可能性を指摘している。

本文献中に造り出し部分の推定図と鉄製鋏先の実測図が掲載されている。

構築年代は5世紀中葉から後半を推定している。

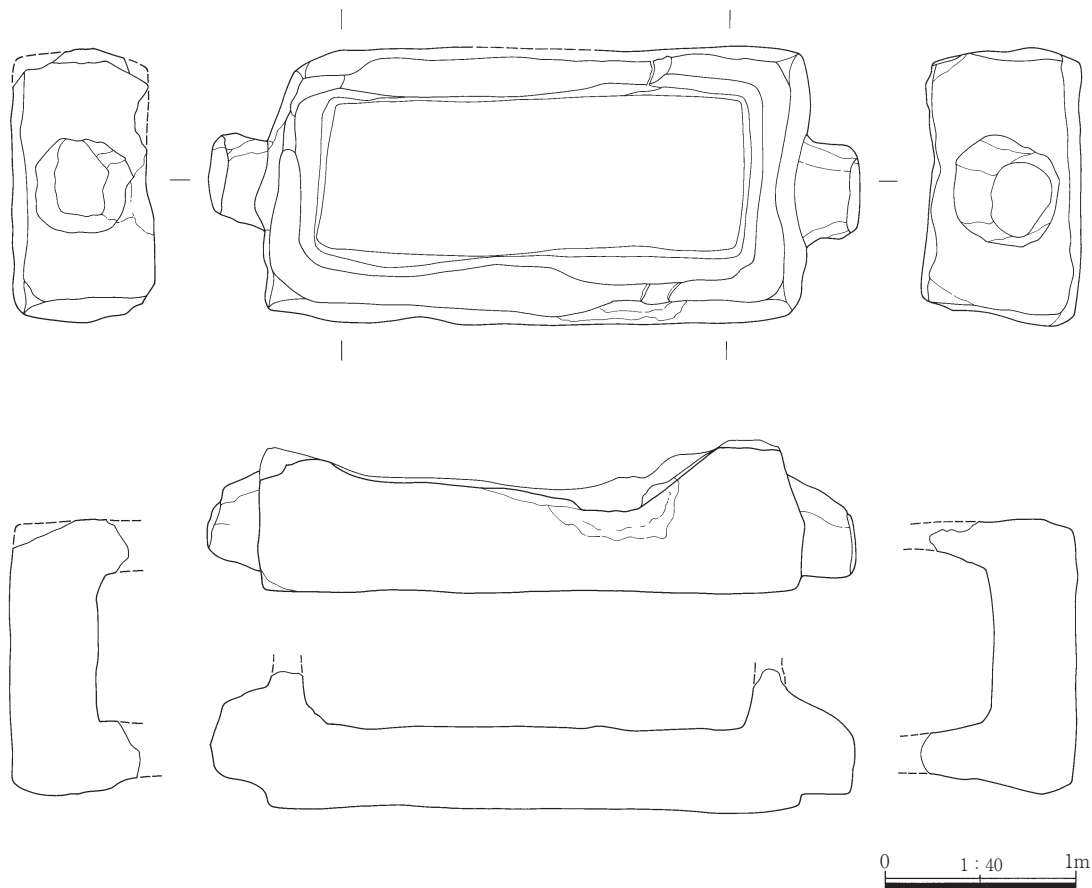
1962年からの調査で出土した埴輪の一部は『群馬のはにわ』(1979)などに写真が掲載されている。普通円筒埴輪は3条突帯4段構成の資料が主体であるとされる。法量は高さが58cm前後、口縁部直径が56cmを測るとされる。外面の調整にはヨコハケが見

られるという。朝顔形埴輪は大型で、高さ84.5cmを測る。口縁部は直径50cmと大きく開いている。突帯は肩部も含め4条が巡る。外面調整はタテハケで、胴部各段に透孔が認められるとされる。

### (3) 高崎市教育委員会による調査

今回報告の調査は群馬県立博物館による調査から14年を経た1979(昭和54)年に実施されたものである。その後、民間開発に伴い、1998(平成10)年4月に高崎市教育委員会により、後円部後方にトレンチが設定され、周堀部分の調査が実施された。この時、周堀内から円筒埴輪が出土している。

出土した埴輪は後円部墳丘上から転落したものと考えられる。調査報告書(1999年)には19点の資料が掲載されている。そのうちの1点、図5はほぼ完形で、3条突帯4段構成である。高さ58.1cm、口径28.7cm、底径21.8cmを測る。形状は、胴部の直径に大きな変化がなく、口縁部の立ち上がりもわずかに外反、外傾しているだけである。成形は、高さ5.5cmの基部粘土板をもとに、4工程で口縁部までを積み上げたものと考えられる。突帯は断面台形を呈しており、下幅20から22mm、上幅8から10mmを測った。



第37図 不動山古墳出土の舟形石棺

第2突帯の剥落下にはヘラによる沈線が認められた。透孔は胴部第1段が円形、第2段が半円形である。半円形は上位突帯に偏って開けられている。

外面の調整は、基底部がナナメタテハケで、ハケメは2cm幅に13本である。胴部第1段は2次調整B種ヨコハケである。ヨコハケは突帯間を数回に分けて調整している。工具の幅は3.5cm以上で、右回りに動いている。工具の静止痕にはほとんど傾きがない。胴部第2段、口縁部にもヨコハケが施されている。内面の調整は下位から胴部第2段までがナデ、口縁部がナナメヨコ方向のハケメである。

赤色塗彩は外面の口縁部から胴部第2段までの範囲に施されている。焼成は窯窯焼成である。

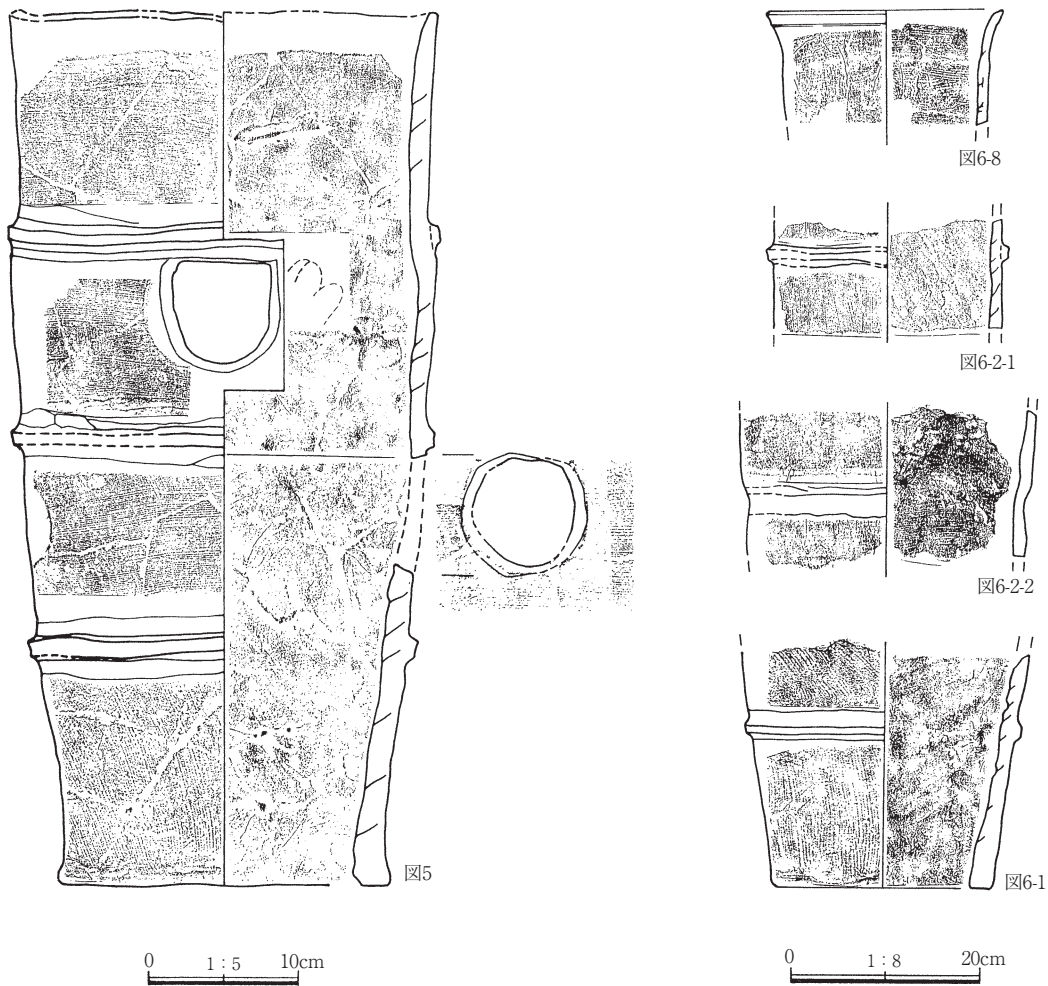
この他に金子智一・桜井衛・山田寧和により表採資料が公表されている(1985)。3条突帯、一瀬和夫氏の2次調整B種ヨコハケ分類のBc種を施し、口縁部に複数周巡る資料が見られる。

#### (4) 研究史上の位置付け

調査は上記の2回と今回の報告の合わせて3回であるが、この他に不動山古墳について論究したものに、梅澤重昭氏による墳丘築造企画に対する研究や出土埴輪に対する研究、梅澤重昭、右島和夫、若狭徹氏らによる井野川流域の首長墓の変遷に関わる研究などが知られている。

梅澤重昭氏は「毛野の古墳の系譜」(1985)の中で、不動山古墳は、太田天神山古墳や御富士山古墳と同系譜で相似形の墳丘平面企画を有することを指摘している。この時には不動山古墳の墳丘企画は晋尺で後円部径225尺、前方部前端幅230尺、墳丘長390尺で設計されたと推定している。

その後、梅澤氏は、『綿貫観音山古墳I』(1998)の中で不動山古墳の墳丘平面企画について、晋尺(1尺24cm)5尺(1.20m)を1単位と想定して再検討する中で、「設計規準円」の規模が5尺の整数倍値



第38図 不動山古墳出土の円筒埴輪

の半径115尺 (27.60m)、後円部中心点 (O) と前方部中心点 (O') の間隔 (OO') は165尺 (39.60 m) に復元できるとし、その場合の墳丘長は390尺 (93.60 m)、前方部幅 (BB') が233.42尺 (56.02m) を修正し、230尺 (55.20m) に、くびれ部幅 (CC') は160.24尺 (38.46m) を修正し160尺 (38.46m) であったと推定している。内堀の幅は墳丘主軸線上において、後円部後方、前方部前方とも12.00m内外を推定している。

不動山古墳の埴輪について梅澤氏は、「毛野の埴輪 - 5世紀代におけるその受容の様相 -」(1985)の中で、整形手法から5分類、胎土から2分類した。そしてこのような多様性に富んだ埴輪の様相について、『群馬県史』通史編1 (1990)の中では、不動山古墳の埴輪は、規格の上では同一指示のもとで

作られてるが、製作手法、特に仕上げの段階になっての整形の仕方や用具の種類に相違が見られる。埴輪の生産が同一地で集中的に行われていなかったこと、多数の人の手によってなされたことをうかがわせるとしている。梅澤氏は、このような円筒埴輪は古墳の造営を取り仕切る工人の長から指示されて、首長が支配する傘下の村人たちによって生産されたものと考えた。以上のような埴輪の生産形態は「供出型」あるいは「貢納型」と言えるとし、埴輪の生産体制が専門的工人によって組まれる以前のものと考えた。

さらに『綿貫観音山古墳 I』(1998)では不動山古墳の埴輪が窖窯焼成である点を考慮し、先に「貢納型」と性格づけた埴輪生産のあり方を古墳の造営にあたり徴発されて製作に従事した村人の製品であ



ると考え、「徴発生産型埴輪」とする方が妥当であるとしている。

また、梅澤氏は、不動山古墳の舟形石棺について、『群馬県史』通史編1（1990）において岩鼻二子山古墳出土石棺とともに長持形石棺の影響を強く受けて製作された石棺であることから刳拔式長持形石棺と呼称した。そして、刳拔式長持形石棺やその系譜下にある舟形石棺が群馬県西部地域を中心に分布することから、この時期に当該地域に「刳拔式石棺分布圏」が形成されていたことを提唱した。

右島和夫氏も「古墳からみた五・六世紀の上野地域」（1990）で、5世紀後半の上野地域の動向について論究する中で、太田天神山古墳の成立以降、5世紀第3四半期から5世紀末までの不動山古墳をはじめとした群馬県西部地域を中心とした大型古墳の埋葬施設に舟形石棺が採用されていることについて、この時期、利根川以西の地域に舟形石棺の共有に象徴される地域的な政治的連合関係が成立していたことが推測されるとし、「舟形石棺地域圏」が成立していたとした。

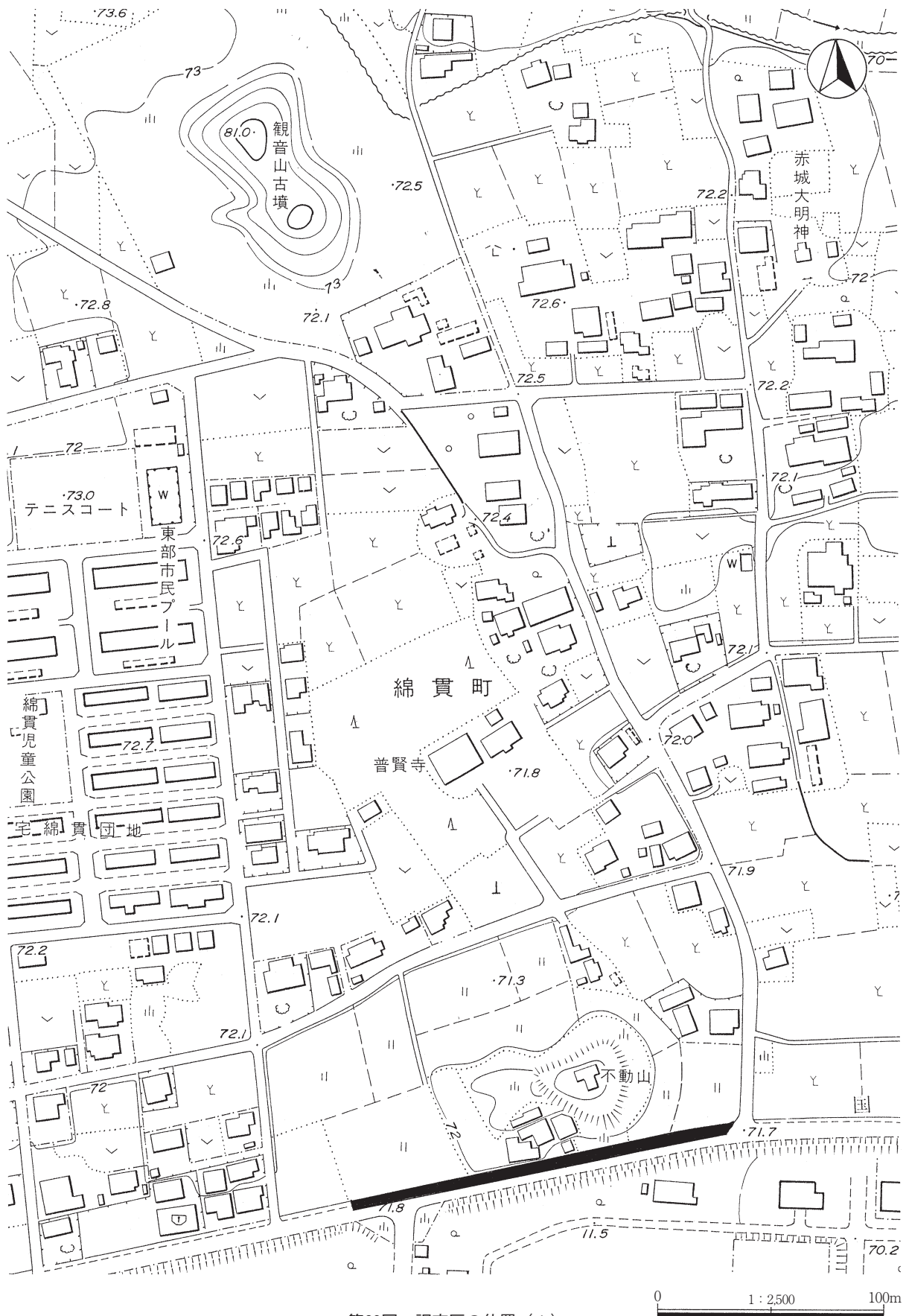
不動山古墳を含む井野川流域の首長墓の系列については梅澤重昭氏、右島和夫氏、若狭徹氏らにより研究が重ねられてきている。

梅澤重昭氏は、「黒井峯遺跡のムラを生んだ毛野の古墳文化」（1994）の中で、保渡田古墳群の井出二子山古墳がそれまで有力な古墳の分布が見られなかった榛名山東南麓に造営されたことを解釈するにあたり、井野川を介して「井野川水系」という政治的地域圏の存在を想定し、井野川下流域の不動山古墳、岩鼻二子山古墳を造営した勢力が、その上流域に上並榎稲荷山古墳、井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳の順で首長墓を成立させたと考えた。首長墓の立地は地域の開発と連動して首長が本拠地を上流域に移動、その後、榛名山噴火の火山災害により上流地域が疲弊したことにより、再び下流に移動して綿貫観音山古墳を造営したとする。梅澤氏は綿貫古墳群と保渡田古墳群を一系列と考えている。

この梅澤氏の考え方に対し、右島和夫氏は、「保渡田古墳群の研究」（1994）の中で保渡田古墳群の成立について検討を行い、梅澤氏の言う「井野川水系」という政治地域圏の設定について、水系による地域圏を設定しようとする解釈の根底には、人工的、かつ大規模な農業用水、水運の掌握が念頭に置かれていると考えられるが、近年の調査事例から明らかになった古墳時代の水田経営における水源は湧水・溜井・小規模河川に求められることから、井野川のような中規模あるいはこれより大規模な河川は直接用水として利用しえないこと、水運を可能とする環境が整備されていたのかと考えると「井野川水系」としてその上流域と下流域を一体化した政治的地域圏としてとらえることには問題があるとし、保渡田古墳群と綿貫古墳群を別系列と考えた。

そして、保渡田古墳群の成立については、畿内との政治関係の中で在地の新興勢力が開発主体となり、新たな農業技術が導入されたことにより、既存の水田耕作の集約化や畑作の拡大が図られ、生産規模が拡大された結果、これまで大型古墳が存在しなかった榛名山東南麓に井出二子山古墳が築造されたと考えた。同様の古墳群形成が、5世紀後半の総社古墳群、八幡古墳群、6世紀初頭の大室古墳群に認められるとした。

若狭徹氏は、「上野西部における五世紀後半の首長墓系列」（1995）の中で、5世紀後半の群馬県西部における首長墓の変遷について、河川流域を基礎に複数の系列が認められ、地域の開発が下流域から上流の山麓域に移行するのに伴って開発主体である首長の造墓域が移動している現象が見られるとし、井野川水系では綿貫古墳群から保渡田古墳群へ造墓域の移動が行われたと考えた。そして、若狭氏は梅澤氏が井野川流域における首長墓の推移を一列で考えているのに対し、墳丘企画、主軸の方向、規模を検討する中で井野川流域の首長権の移動は一列ではなく、二系列の系譜関係が成立する可能性があり、井野川流域の首長墓の中に重層的な関係が存在したと考えている。



第39図 調査区的位置 (1)



第40図 調査区の位置 (2)



## 6 調査された遺構

遺構の検出状況については前方部側から順次、その形状、覆土・埋没土の状況、出土遺物について記述していく。

調査区と不動山古墳との関係は概略、第39・40図に示したとおりである。最西端を端点とすると、調査対象地の土層断面は、道路の敷設状況に合わせ緩やかに彎曲しているが最東端までの距離が長さ約172.4mを測った。

端点から東へ3.15mの位置に掘り込み面がある。断面形は、上方に向かって大きく開くもので、法面は極めて緩やかに立ち上がっている。土層の堆積状況から底面にはやや平坦な部分があることが分かる。東西両端の上幅は15.6m、下幅13.5mである。深さは表土上面から1.25mである。下層に浅間B軽石、Hr-FAの純層が堆積していた。出土遺物は認められなかった（第42図）。

西端の端点から23.6mの位置で前方部前面の外堀外縁（西側）の立ち上がりを確認した。内縁（東側）は電柱が敷設されていたため調査を行うことができなかった。前述の掘り込みからは東側に4.85mの位置である。外堀の断面形は上方に向かって緩やかに外傾する。外堀の上幅は約5.75mと推定される。深さは表土上面から1.18mである。下層に浅間B軽石、Hr-FAの純層が堆積していた（第43図）。

外堀内縁（東側）から内堀外縁（西側）までの距離は9.5mである。この間が中堤となるわけであるが、この部分は削平が進行しており、盛土の存在、埴輪の樹立の有無について確認することはできなかった。

内堀外縁（西側）の立ち上がりは調査区西端の端点から38.9mの位置にある。内縁部分は構造物との関係から未調査で、埴輪部は検出されていない。外縁掘り込みの形状は上方に向かって緩やかに外傾する形状である。検出した上幅は10.9m、下幅は約8.65mと考えられる。深さは表土上面から1.5mであるが、上層の1mは客土、耕作土である。埴輪寄りの埋没土中には長さ20cmほどの大きさの礫が多数含

まれていた。崩壊した葺石が周堀中に転落したものと考えられる。下層には浅間B軽石、Hr-FAの堆積が確認できた（第43図）。

これより以東は前方部墳丘部分であるが、既に削平を受けていた。表土上面から約0.6m下位に黒色土の地山が堆積していた。これより上層に埴丘盛土が確認された。

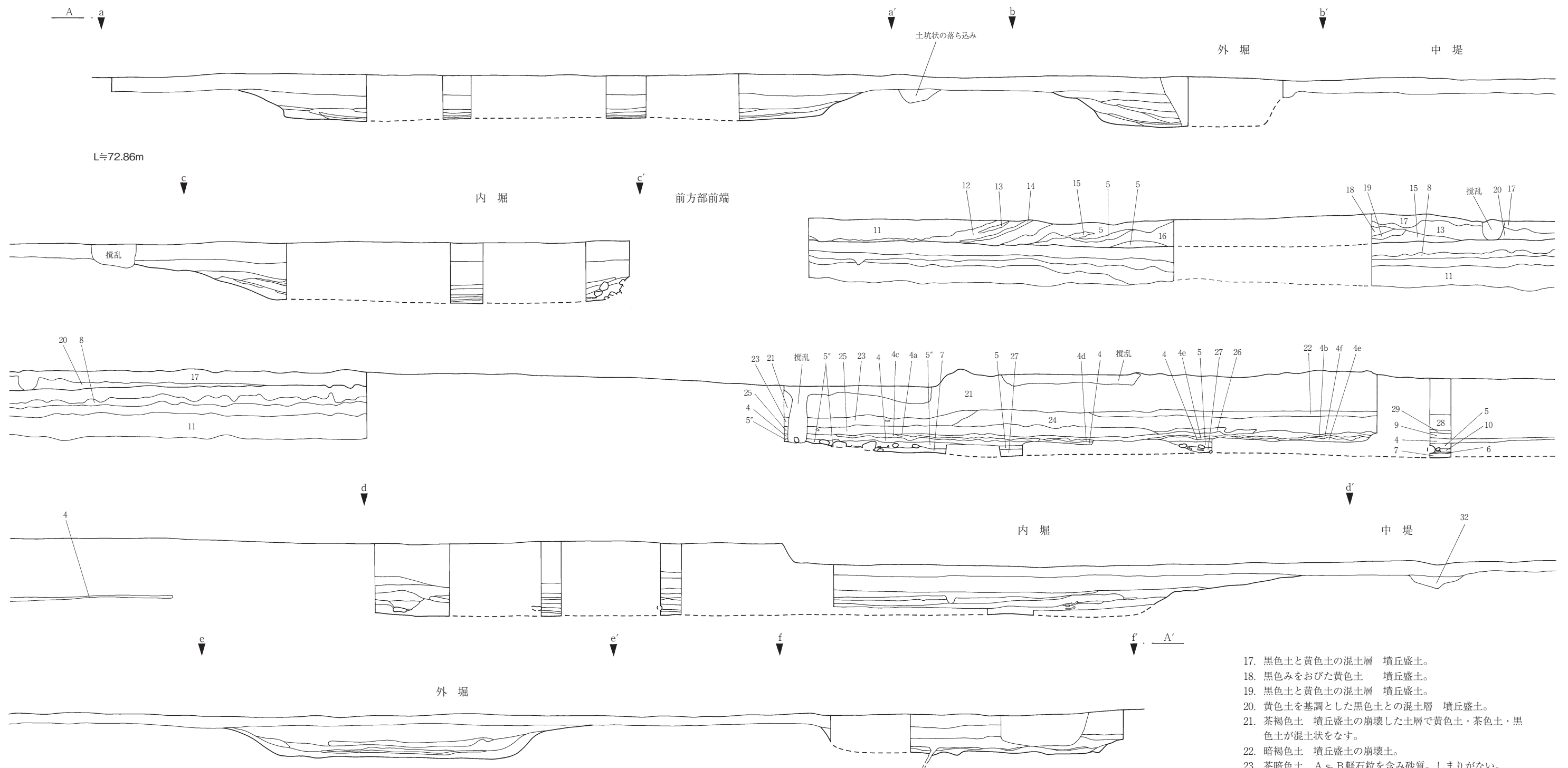
西側の端点から86.1mで再び内堀の掘り込みを検出した。ここはくびれ部南側に当たる部分である。他地点同様埋没土中に浅間B軽石、Hr-FAの純層が堆積していた。

西側の端点から測り、91.6mから93.6mまでは後円部に最も近い部分である。土層は後世の攪乱を受けていた。埋没土中に浅間B軽石、Hr-FAの堆積が見られなかった。

後円部南側部分の内堀は、東側の端点から44mの地点から以東で確認できた。外縁の立ち上がり、東側端点から35.5mの地点である。掘り込みの断面形は大きく外傾して立ち上がる形状である。深さは表土上面から1.2mである。埋没土の下層には浅間B軽石、Hr-FAの純層が堆積していた。立ち上がり近くでは底面より20から40cm離れた高さで埴輪片が出土している（第44図）。

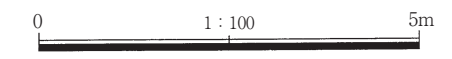
後円部外堀は東側端点から22.5mのところの内縁（西側）の立ち上がり、14.5mの位置に外縁（東側）が確認された。調査地点における上幅は8.0m、下幅5.5m、深さは表土上面から1.05mである。埋没土中には浅間B軽石、Hr-FAが堆積していた。これにより外堀と内堀の間、中堤の幅は調査区内では13.0mとなった。前方部側と同様、盛土の存在、埴輪の樹立の痕跡などについては確認することはできなかった（第45図）。

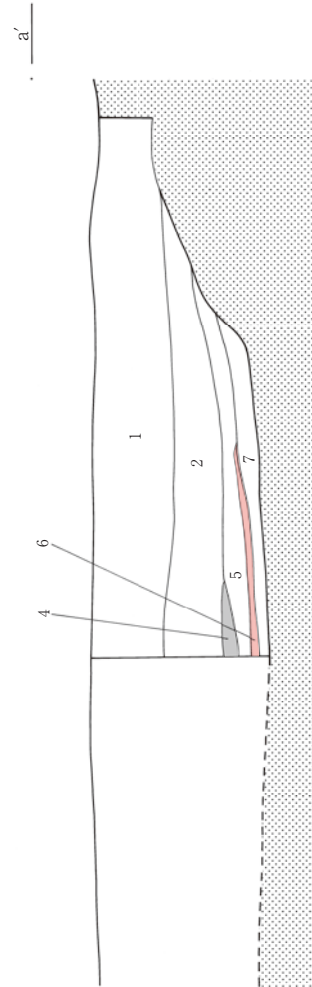
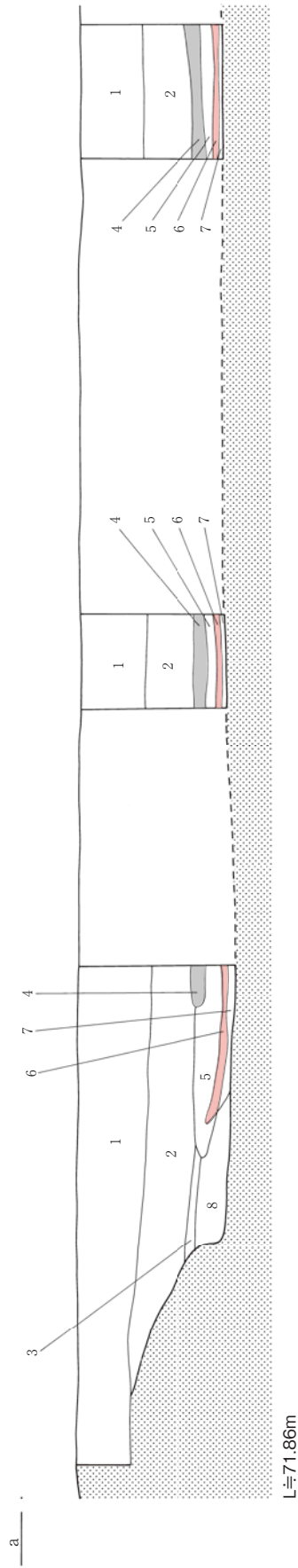
外堀外縁（東側）から6mほど東側寄りの地点では、一部に後世の攪乱が入り込んでいたが上幅5m程の掘り込みが確認された。上層を浅間B軽石混土層が覆っていた。埋没土中からHr-FAが検出されている。西端端点寄りで検出した掘り込みとの関係については不明である（第45図）。



- |                            |  |                                       |   |  |
|----------------------------|--|---------------------------------------|---|--|
| 1. 耕作土および表土                | 4e. A s- B 火山灰。                              | 7. 灰褐色土 粘性をおびる。壁面に近いところにはロームブロック多い。   | 12. 黒色土を基調とした黄色土との混土層 墳丘盛土。                       | 17. 黒色土と黄色土の混土層 墳丘盛土。                    |
| 4. A s- B 軽石。              | 4f. A s- B 火山灰。                              | 7'. 7層にロームブロックを混入。                    | 13. 黄色土 墳丘盛土。                                     | 18. 黒色みをおびた黄色土 墳丘盛土。                     |
| 4a. A s- B 黒褐色砂粒。          | 5. 黒色土 黒色みある。粘性、非常に強い。<br>5層以下は堆水していた可能性もある。 | 8. 黒褐色土 ロームブロックを多く混入。                 | 14. 黒色土 墳丘盛土。                                     | 19. 黒色土と黄色土の混土層 墳丘盛土。                    |
| 4b. A s- B 砂粒。             | 5'. 黒色粘土 5層に類似するがしまりがない。                     | 9. 黒色土 砂質、A s- B 軽石粒を多量に混入。           | 15. 黒色土を基調とした土層 混土状況を変えながら<br>ブロック状に積み上げられる。墳丘盛土。 | 20. 黄色土を基調とした黒色土との混土層 墳丘盛土。              |
| 4c. A s- B 火山灰。上位灰色、下位暗紫色。 | 6. H r- F A                                  | 10. 灰褐色土 粘性強い。5層の黒色土にH r- F Aが混入した印象。 | 16. 黄色土を基調とした土層 墳丘盛土。                             | 21. 茶褐色土 墳丘盛土の崩壊した土層で黄色土・茶色土・黒色土が混土状をなす。 |
| 4d. A s- B 火山灰。            |  | 11. 黄白色ローム土 礫含入。墳丘盛土。                 |   | 22. 暗褐色土 墳丘盛土の崩壊土。                       |
|                            |  |                                       |   | 23. 茶暗色土 A s- B 軽石粒を含み砂質。しまりがない。         |
|                            |  |                                       |   | 24. 茶褐色土 墳丘盛土とA s- B 軽石粒の混入土。            |
|                            |  |                                       |   | 25. 茶褐色土 A s- B 軽石粒を含み砂質。しまりあり。          |
|                            |  |                                       |   | 26. 茶褐色土 砂質。                             |
|                            |  |                                       |   | 27. 灰色粘土                                 |
|                            |  |                                       |   | 28. 灰褐色粘性土                               |
|                            |  |                                       |   | 28'. 灰褐色土                                |
|                            |  |                                       |   | 29. 鉄分の多い茶褐色土 鉄分を多く含入。                   |
|                            |  |                                       |   | 32. 黒褐色土 ロームブロックを含む。                     |

第41図 調査区の土層断面 (1)





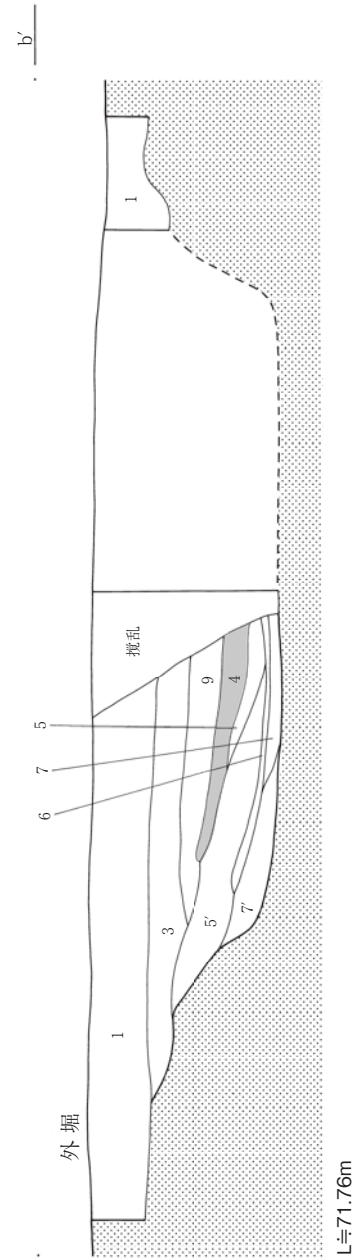
- a - a'
1. 耕作土および表土
  2. 茶褐色土 鉄分を多く含み、A s- B 軽石粒も混入。
  3. 茶褐色土 1層に類するが黒色みは薄れ、鉄分を含む。
  4. A s- B 軽石。
  5. 黒色土 黒色みある。粘性、非常に強い。5層以下は堆水していた可能性もある。
  6. H r- F A 粘性をおびる。壁面に近いところにはロームブロック多い。
  7. 灰褐色土 ロームブロックを多く混入。
  8. 黒褐色土

6 調査された遺構

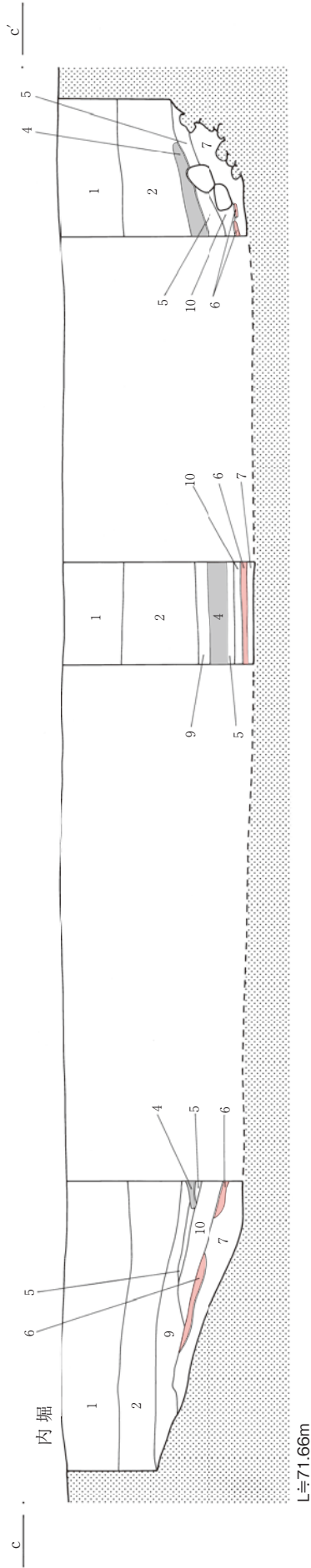


第42図 調査区の土層断面 (2)





L=71.76m



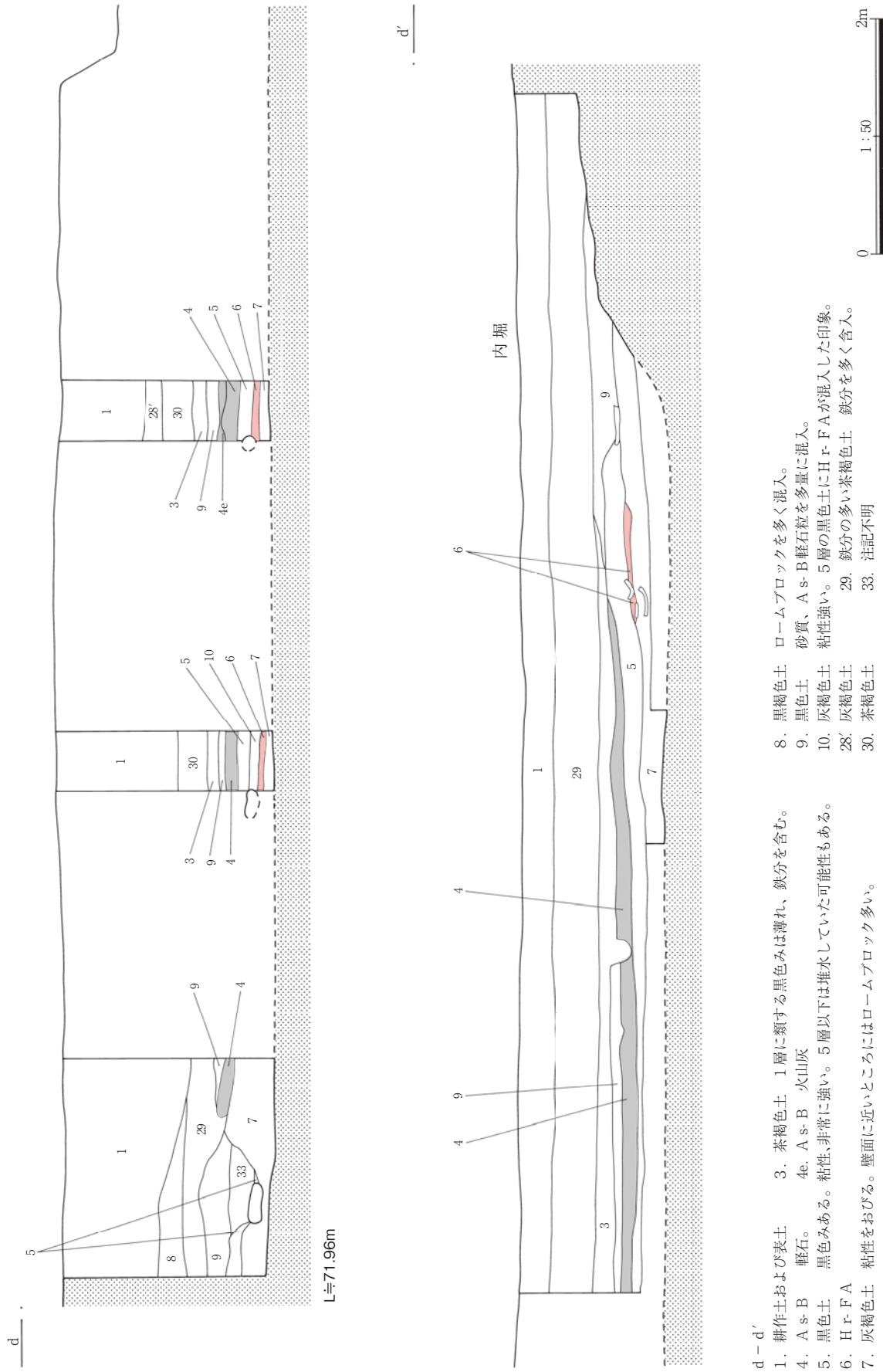
L=71.66m

b-b', c-c'

- 1. 耕作土および表土
- 2. 茶褐色土 鉄分を多く含む、A s-B 軽石粒も混入。
- 3. 茶褐色土 1層に類するが黒色みは薄れ、鉄分を含む。
- 4. A s-B 軽石。
- 5. 黒色土 黒色みある。粘性、非常に強い。5層以下は堆水していた可能性もある。5層にロームブロックを混入。
- 6. H-r-F A
- 7. 灰褐色土 粘性をおびる。壁面に近いところにはロームブロック多い。7層にロームブロックを混入。
- 9. 黒色土 砂質、A s-B 軽石粒を多量に混入。
- 10. 灰褐色土 粘性強い。5層の黒色土にH-r-F Aが混入した印象。



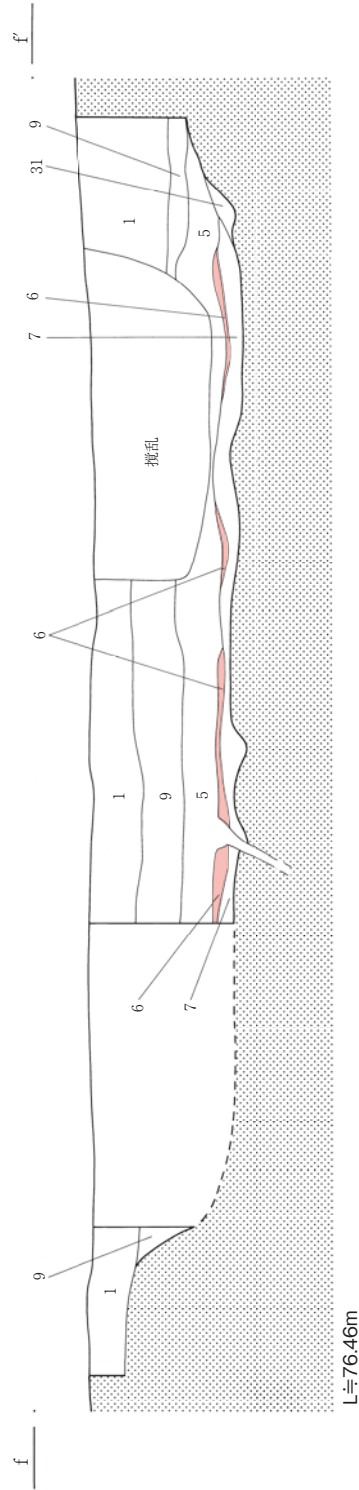
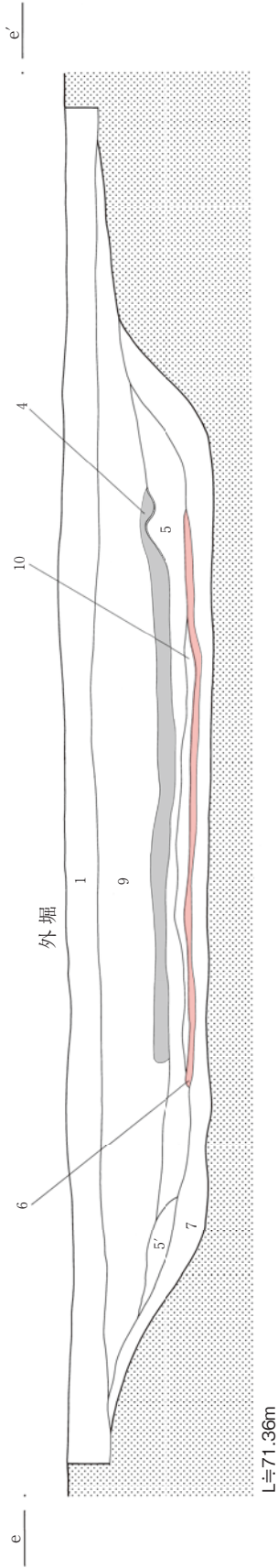
第43図 調査区の土層断面 (3)



第44図 調査区の土層断面 (4)

d-d'

- 1. 耕作土および表土
- 2. 茶褐色土 1層に類する黒色みは薄れ、鉄分を含む。
- 3. 黒褐色土 ロームブロックを多く混入。
- 4. A s-B 軽石。砂質、A s-B 軽石粒を多量に混入。
- 4e. A s-B 火山灰
- 5. 黒色土 粘性、非常に強い。5層以下は堆水していった可能性もある。
- 6. H r-F A 粘性、非常に強い。5層以下は堆水していった可能性もある。
- 7. 灰褐色土 粘性をおびる。壁面に近いところにはロームブロック多い。
- 8. 黒褐色土
- 9. 黒色土 粘性強い。5層の黒色土にH r-F Aが混入した印象。
- 10. 灰褐色土 鉄分の多い茶褐色土 鉄分を多く含む。
- 28' 灰褐色土
- 29. 鉄分の多い茶褐色土 鉄分を多く含む。
- 30. 茶褐色土
- 33. 注記不明



e-e', f-f'

1. 耕作土および表土

4. A s-B 軽石

5. 黒色土 黒色みある。粘性、非常に強い。5層以下は排水していた可能性もある。

5' 5層にロームブロックを混入。

6. H r-F A

7. 灰褐色土 粘性をおびる。壁面に近いところにはロームブロック多い。

9. 黒色土 砂質、A s-B 軽石粒を多量に混入。

10. 灰褐色土 粘性強い。5層の黒色土にH r-F Aが混入した印象。

31. ロームと黒褐色粘質土の混土层



第45図 調査区の土層断面 (5)



## 7 出土した遺物

本古墳から出土した遺物は、60×37×15cmの遺物収納箱に13箱である。その中から53点を抽出して、資料化を行った。

進行する工事に対応した緊急調査であったため埴輪の出土位置については詳細な記録を残すことはできなかった。

## (1) 埴輪

既述のとおり、群馬県立博物館や高崎市教育委員会調査時に出土した資料から見ると、普通円筒埴輪の全体形状は、3条突帯4段構成と考えられる。器高は約60cm以下と考えられる。

本調査において、形状の全体を確認できる資料はなかったが、001や010などの資料から基底部から口縁部までが3条4段構成であると想定される。

口縁部資料14点の内6点が口径を確認し得る資料であった。数値的には口径26.0cmから32.0cmである。口縁部の長さは001・003・004などの資料から12から16cmほどであることが知れる。形状は、全体的に弱く外反して立ち上がるものである。001あるいは003は口縁部下半が上方に向かって立ち上がり、先端のみわずかに外反している。これに合わせ器肉も先端のみがやや薄くなる。003は先端に比較的平坦な面をなす。002・005は内面、先端直下に弱い稜を有している。003は上方に向かって徐々に外反する形状が他の資料と若干異なる。013は外反の度合いが他とやや異なる。器形が歪んでいるか、朝顔形埴輪の破片である可能性が考えられる。

胴部の直径が復元可能であった資料は18点あるが、その数値は直径23.4cmから33.2cmであった。段間の長さは001で13.2cm、007で12.9cm、010で13.3cmであった。なお掲載した胴部破片資料の中には朝顔形埴輪の胴部が含まれていることは充分考えられるところである。

底径は2点で確認することができた。010は23.8cmであったのに対し、もう1点の012は19.0cmと小径であることから器財埴輪の基底部である可能性を考える必要もある。基底部の高さは010で13.3cmを

測り、胴部第1段と比較してやや長い。

基底部は基部粘土板を作成し、これを輪状にして基部としている。粘土板の高さは010で3.5cm、045で4cmである。

突帯は断面台形かM字形状を呈する。断面台形状の資料は上下の両稜が明瞭に形造られているが、細かな部分ではバラエティーにとんでいる。法量は001の第2突帯で上幅0.8cm、下幅2.1cm、高さ0.6cmである。006や007では上稜の突出の度合いが下稜を上回っている。010は第2突帯は前例と同様であるが、第1突帯は突出の度合いが弱く、扁平である。

透孔は胴部の上下2段にほぼ90度角度をずらし、各段に一对、対向する位置に配置されている。胴部第1段には円形の透孔が配される。これに対し胴部第2段には上位に直線を有する半円形が配されている資料が見られる。ただし、半円形、円形の配置についてはばらつきが見られ、規則性は薄いようである。透孔の切開は左上隅を起点に右回りに工具が動いているものが大半である。切開後、切開面の一部に粗雑なナデを加える事例が少量見られる。

赤色塗彩は色あせ、剥落が著しかった。塗彩の範囲は001、010の事例から見ると、第2突帯から上位、胴部第2段、第3突帯、口縁部にわたる。出土資料からは外面のみが対象となっており、内面には全く認められない。顔料は科学的分析を行っていないが、ベンガラ系の系統の可能性が考えられる。

胎土中には大型の砂粒の混入は少ない。遺物観察表においては箱石浅間山古墳と同様に砂粒の混入状況をA、直径1から5mmの小礫や砂粒を含む。B、小礫、細砂を含む。C、礫の混入は少量に大別した。鉱物は、石英や長石類が多く見られるが輝石や角閃石の混入は微量である。チャートも含まれる。植物珪酸体化石を多く含み、淡水性粘土が使用されているとされる。近接する綿貫観音山古墳の埴輪の胎土が片岩類や堆積岩を主体とする砂粒で構成され、海綿骨針化石を多く含むものであるのとは異なる状況である。

焼成は全て害窯焼成で良好である。一部に還元状

## 第2章 不動山古墳の調査

態を呈するものもある。

色調は、橙色が主体で、一部に灰黄褐色、にぶい黄橙色を呈するものが見られた。

成形は、高さ3から4cm前後の基部粘土板を基礎に、この上に幅2cmほどの粘土紐を巻き上げ、あるいは積み上げている。個々により異なるが003や010のように粘土紐の痕跡を調整により消しきっていない事例が多く見られた。

調整については、外面の調整は001と010によってそのあり方を知ることができる。基底にはタテハケが施されている。外面の下端近くには未調整の部分が見られる。器面上に詐欺容態の木目痕が見られるものもある。

胴部は第1段・第2段ともタテハケ後、突帯を貼付、その後突帯間に2次調整のB種ヨコハケを重ねている（その後、突帯周辺にヨコナデを加えているものもあるか）。口縁部もタテハケ、ナナメタテハケの上にヨコハケを重ねている。口縁部の先端にはハケメ施文後内外面にヨコナデを加えている。口縁部先端の平坦面にはハケメは施されていない。

ハケメについては従来、普通のハケメ、粗いハケメ、木っ端状の幅広で浅いタッチのハケメの3種類が認められるとされていた。本報告の資料も012のように2cm幅の中に16本、009のように4本、その中間にあたるものに大別できるようである。調整に使用した工具はハケメの本数の観察から多数の種類が存在したことが確認できる。

内面の調整は、ハケメあるいは指頭によるナデを施した事例が多く見られる。下半部、基底部から胴部第1段位まではタテあるいはナナメタテ方向であるが、上半部は003に代表されるようナナメヨコ方向となり、口縁部上半ではほぼヨコ方向のハケメあるいはナデが加えられている。

2次調整のB種ヨコハケは単周と複数周のものが見られる。001を見ると胴部は2段とも段間を2回で調整している。最初は下段の突帯に工具の下端を沿わせるようにハケメを施した後、今度は上位の突帯に工具の上端を沿わせている。004の口縁部も

001と同様の状況が見られる。007のヨコハケは単周と考えられる。この資料の場合、突帯間の全てに施文ができず、一次のタテハケが消し残されている。工具の動きは右回転のものが全てである。工具の幅は001で5.3cm、003で5cm、034で6cm以上ある。静止痕の間隔は029のように狭いもので2.5cm、広いもので5から6cmであった。027の静止痕はやや傾斜して止まっているように見える。

009は突帯をはさんで上下段ともナナメタテハケ、あるいはタテハケである。016と017、025はナナメハケが施されている。

001は口縁部の下位、第3突帯寄りに焼成前に小円孔が穿たれている。

線刻は004の口縁部外面、036の外面に認められる。

突帯貼付下の器面上に沈線が施されている資料がある。突帯を貼付する位置を割り付けるための印と考えられる。

朝顔形埴輪は肩部から口縁部にかけての破片資料が出土しただけで、全体形状を把握できるような資料の出土はなかった。口縁部の花状部は頸部から斜め上方に向かって立ち上がり、中位の突帯を経てその傾きを変換、さらに大きく外反して立ち上がっている。先端は平坦面を有し、斜め上方を向いている。

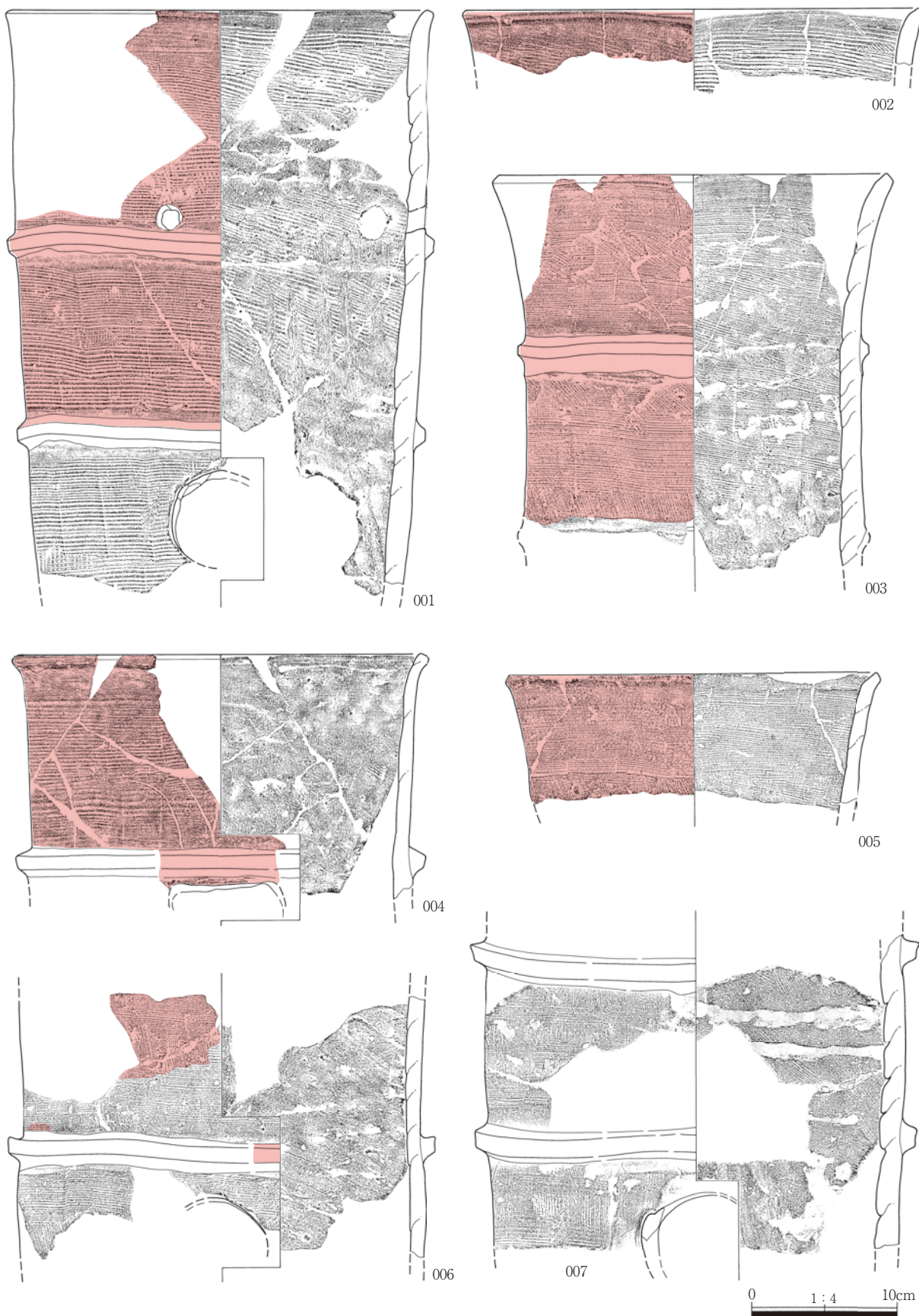
成形は、048、050、051の観察から中位突帯の位置にいわゆる疑似口縁が形造られていることが分かる。この上に粘土紐を積み上げ、口縁部を立ち上げた後突帯を貼付している。

器面の調整は外面がナナメタテハケで、先端にヨコナデが加えられている。ハケメの工具には046、051、053のように普通からやや細かいものと049、050のようにやや粗いものが見られる。内面にもハケメが施されるが、その角度は個々の資料、部位により異なっている。

052、053は肩部の破片である。頸部で細くくびれたあと、丸みをおびて張り出す形状である。

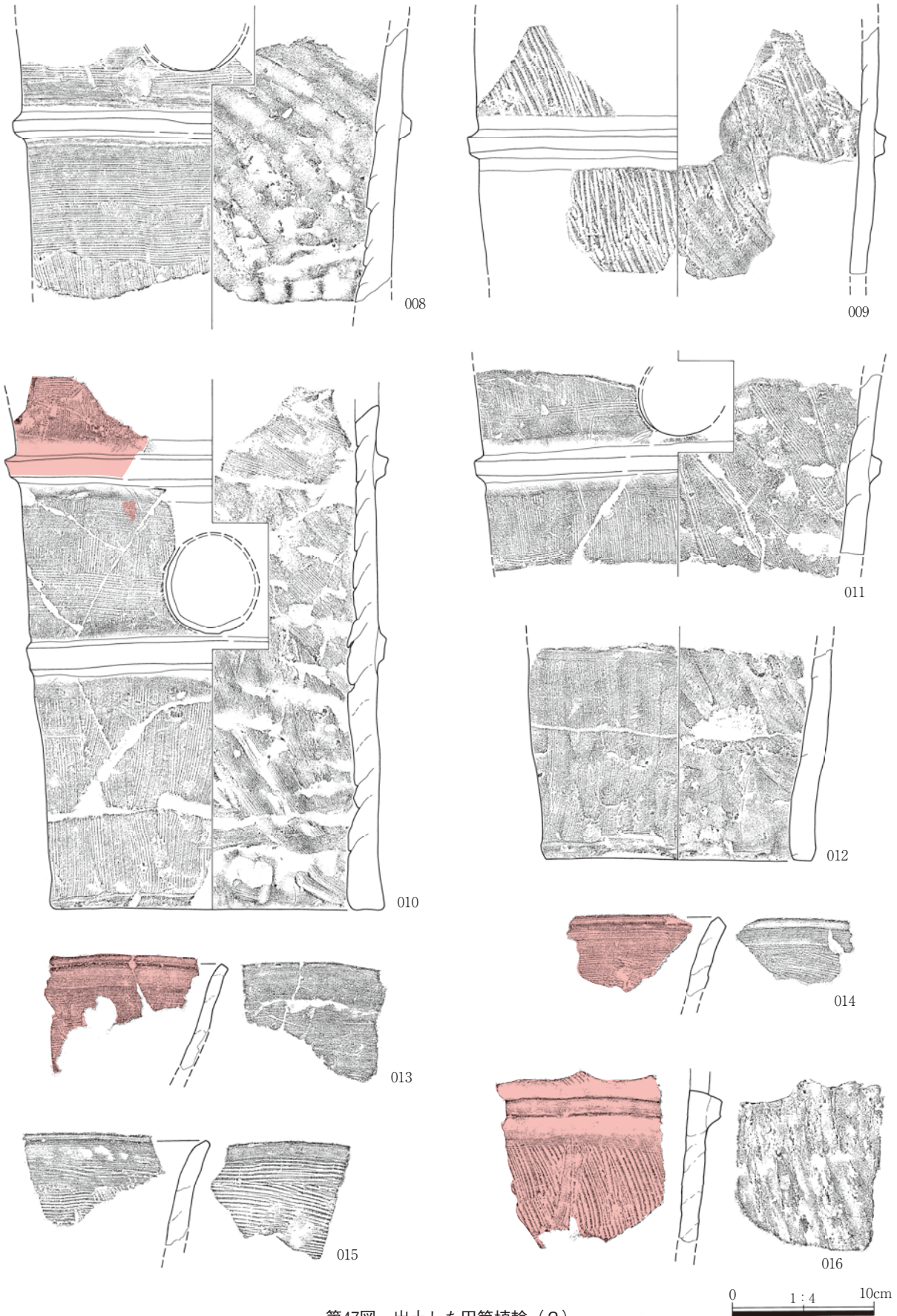
048から050、052で塗彩が見られる。肩部突帯から上位の口縁部全体が対象範囲であったものと考えられる。内面には観察はできない。



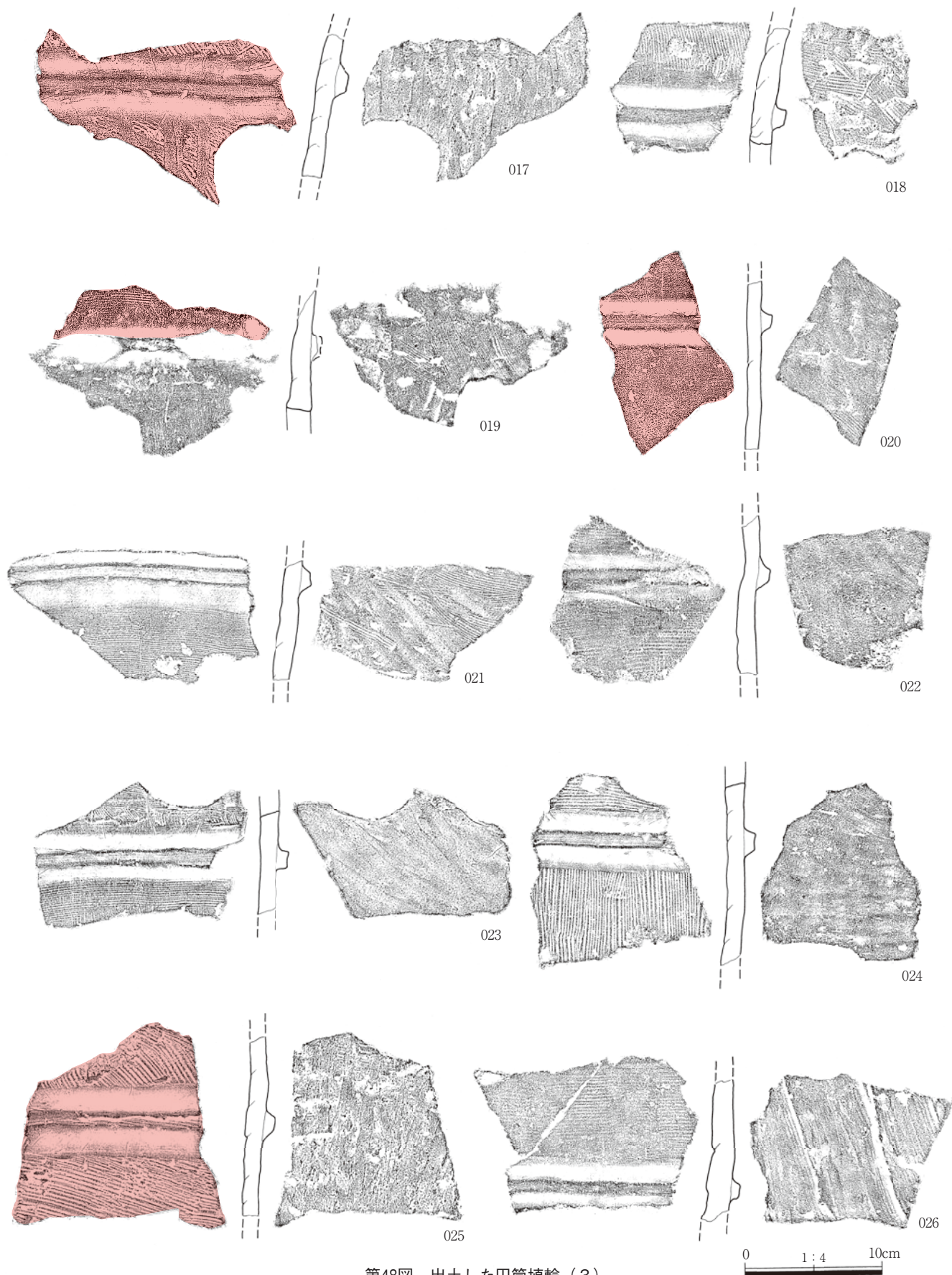


第46図 出土した円筒埴輪（1）



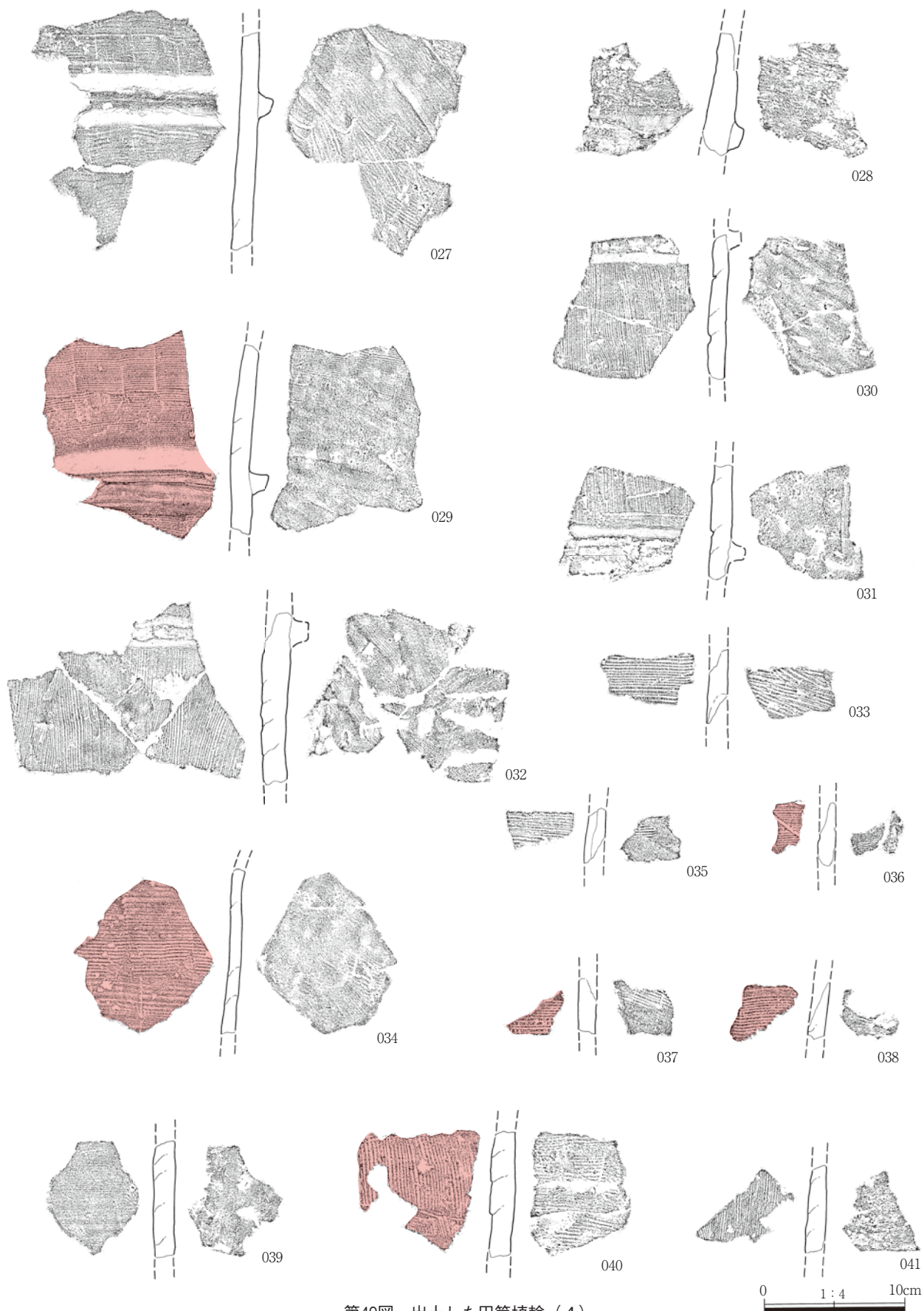


第47図 出土した円筒埴輪（2）



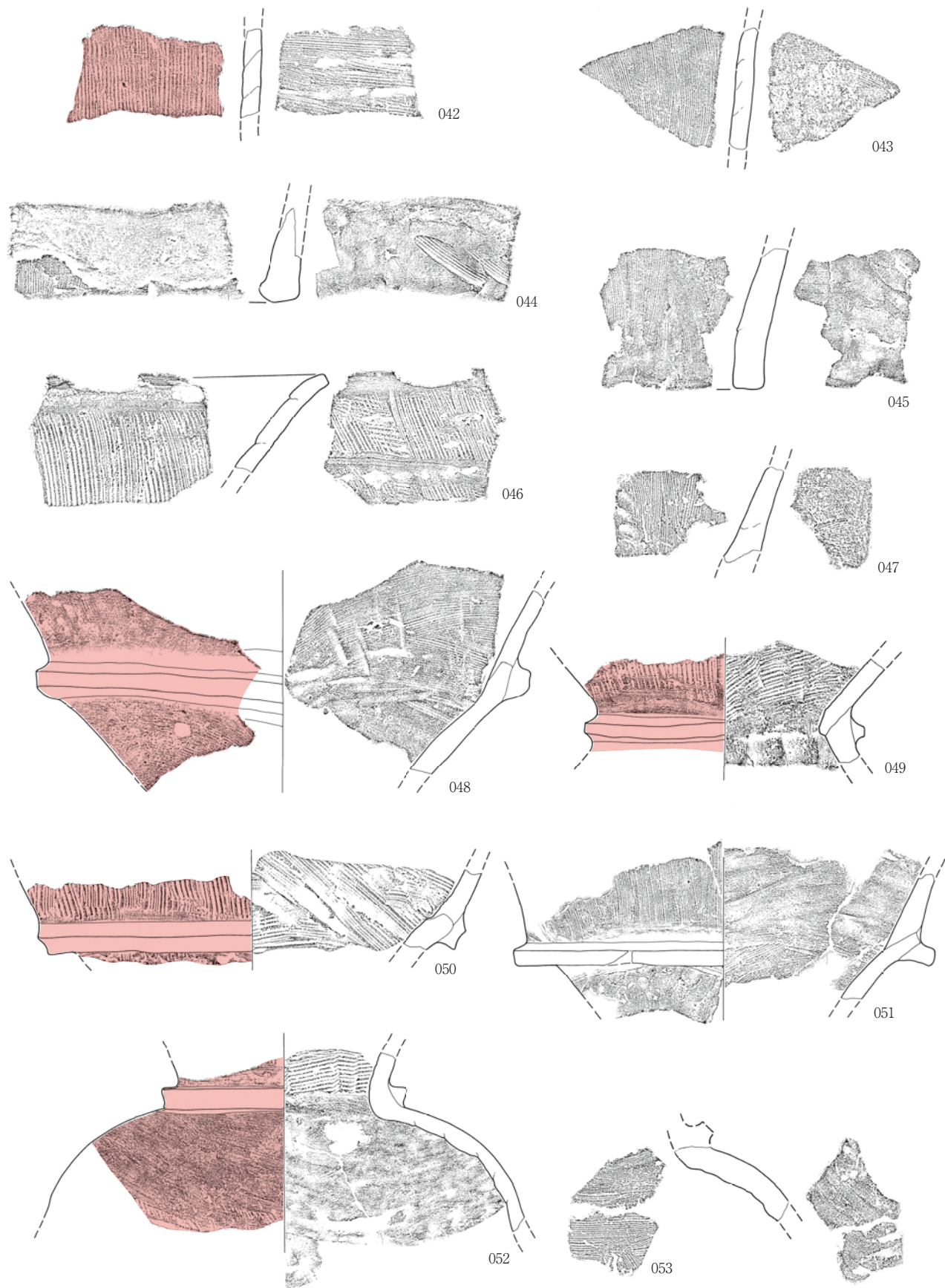
第48図 出土した円筒埴輪 (3)



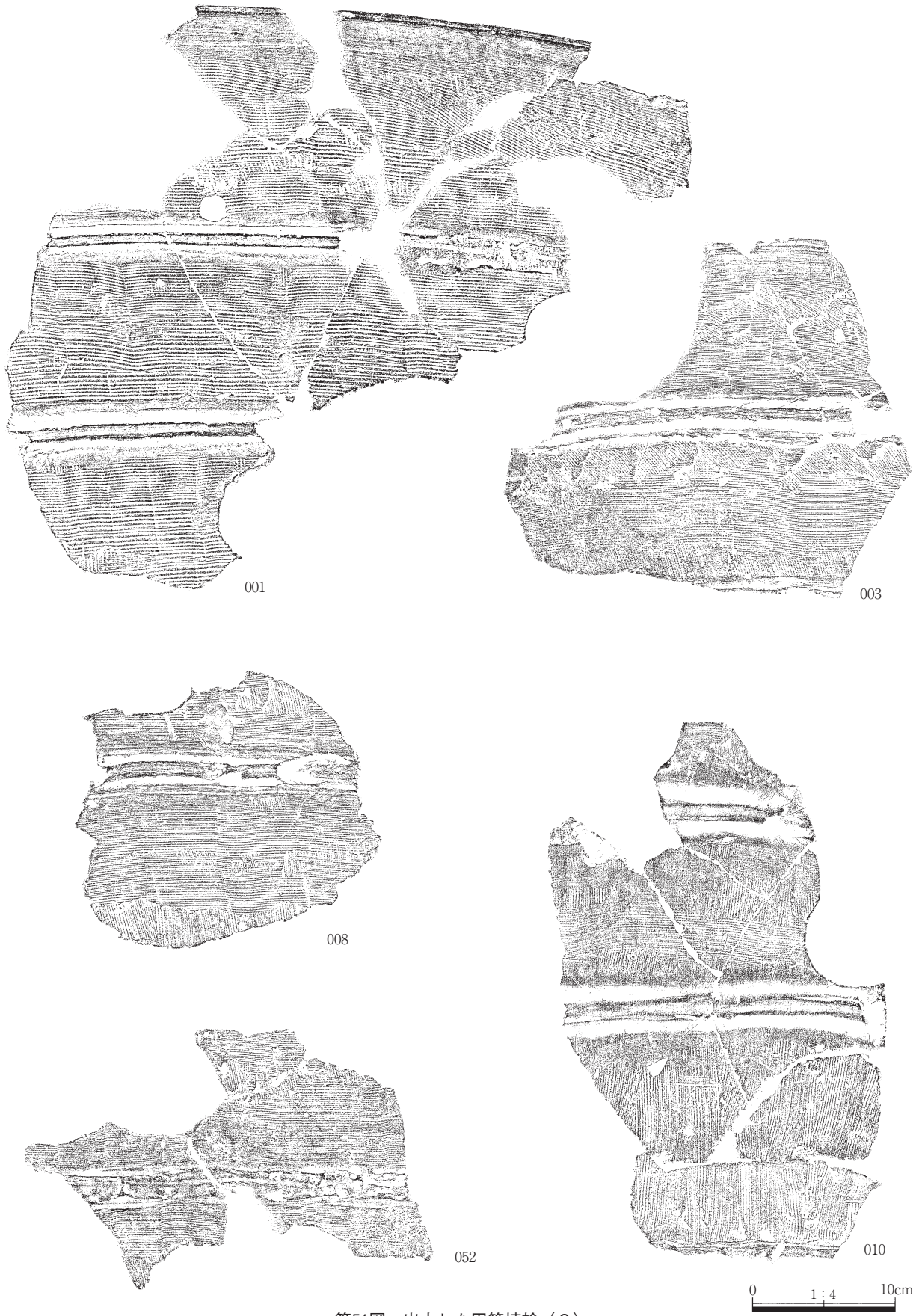


第49図 出土した円筒埴輪（4）



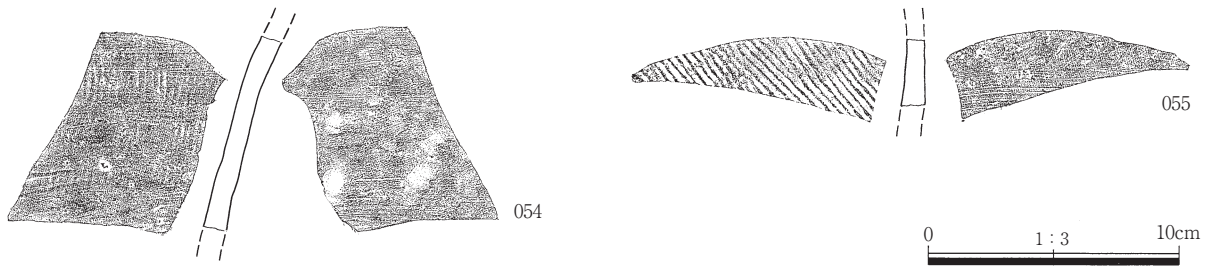


第50図 出土した円筒埴輪 (5)

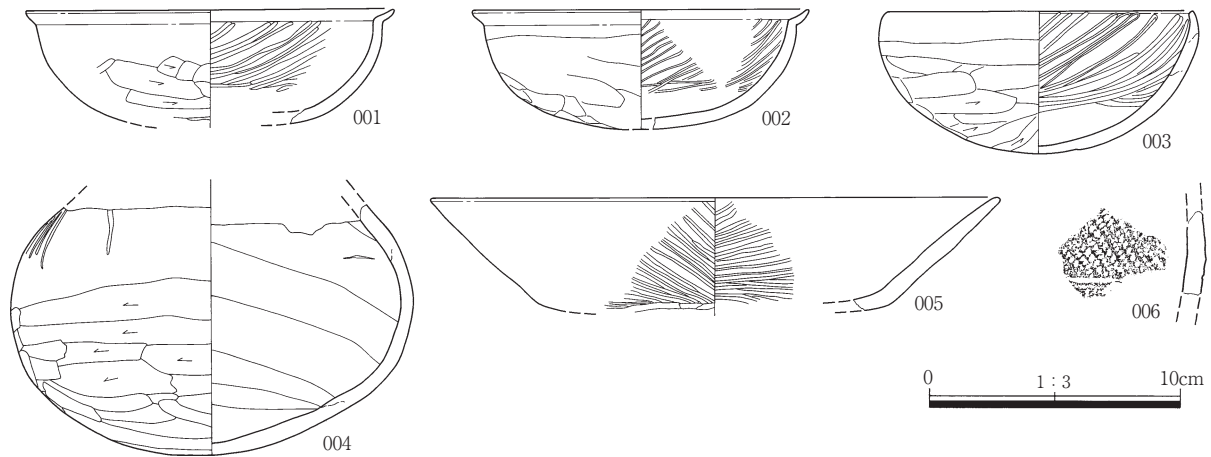


第51図 出土した円筒埴輪(6)





第52図 出土した土器



第53図 不動山古墳隣接地出土土器

## (2) 土器

054、055は須恵器大甕の胴部破片と考えられる。

外面に当目が、内面にはナデが認められる。

## (3) 不動山古墳隣接地出土土器

第53図001から006は、本報告と同じ道路拡幅に伴う掘削により、不動山古墳の東方地点から出土したものを採集した資料である。周辺の遺跡の項でも記したように本古墳の北東方向に200mの台地上では不動山東遺跡や堀米前遺跡が調査され、古墳時代、5世紀から6世紀の集落が検出されている。

掲載資料は土師器5点、縄文土器1点である。

001、002は内斜口縁の杯である。002は丸底である。003は口縁部の先端が内彎ぎみに立ち上がる半球形の杯である。004は壺であろうか。胴部破片である。上位はほぼ同じ高さで欠損していることから二次利用が図られた可能性も考えられる。005は高杯の口縁部破片である。5世紀後半の所産と考えられる。

006は縄文土器の破片でR L縄文に横方向の沈線

が見られる。

## 8 成果と問題点

## (1) 調査の成果

今回報告する調査は不動山古墳の兆域を東西に貫く形で調査区が設定されたわけであるがその幅が狭かったことから墳丘については墳丘長、その他の部位の数値を変更するような資料は得られていない。前方部南側の裾部の形状は不明確なままである。

現在まで正式な調査報告が作成されなかったことから既に周知されていることであるが、今回報告する調査において、不動山古墳に二重の周堀が巡っていたことが初めて判明した。従来からの知見のとおり、墳丘を盾形に圍繞していたものと考えられる。

前方部前面における各部分の数値は、内堀の上幅が約12m、外堀の上幅約6.2m、中堤の上幅約8.8mであると推定される。内堀、外堀とも埋没土中に浅間B軽石、Hr-FAが堆積していた。



## 第2章 不動山古墳の調査

第54図は5の項で記した梅澤重昭氏の示した築造企画に基づいた墳丘長94.8m、内堀幅12mのプランに中堤と外堀の企画時の幅を想定して追加したものである。中堤は調査時に得られた想定幅約8.4mを晋尺で換算すると33.3尺となる。これを5の倍数値の35尺とすると企画時の幅は8.4mにすることができる。外堀は調査時の想定幅6.2mを晋尺に換算すると25.8尺となり、これを5の倍数値の25尺とすると企画時の幅は6.0mにすることができる。これらの数値を基礎とすると不動山古墳の兆域は墳丘主軸方向で147.6m、前方部前面で幅108.0mを測ることが推定される。

この図と第55図に掲載した地割りを比較すると、内堀は後世にいたるまで地割りにその旧状を残していたことが分かる。これに対し、中堤や外堀は墳丘北側から後円部後方ではその痕跡を見いだすことはできない。前方部前面では両者が一筆に合わせられながらも南北方向に帯状の地割りが延びている。墳丘南側にも東西方向に帯状の地割りが認められるが企画線の方向と異なり、西側に向かって扇状に開いている。地割り図の精度を考慮するとしても中堤・外堀の痕跡とは断定できなかつた。

前方部側では外堀のさらに外方に幅15.6mの掘り込みあるいは落ち込みが存在することが確認された。調査部分の比較からすれば外堀の幅をはるかに上回るものである。底面に平坦面を有すると考えられるような形状、埋没土中に浅間B軽石、Hr-FAが堆積していることが注意されることである。後円部側でも調査区最東端で攪拌された浅間B軽石と、Hr-FAの純層が堆積していることが確認されている。全体の形状が把握できないことから、これが不動山古墳に付随するもの、例えば三重目の周堀や古墳築造に係わる土採り坑などの掘り込みあるいは自然地形であるのかについては判断することができなかった。埋没土中の火山灰の堆積状況が周堀の同様であることから6世紀初頭以前に遡るものであることが推定される。現地確認、耕地図などに残された地割りなどからは読みとることはできない。

### (2) 円筒埴輪について

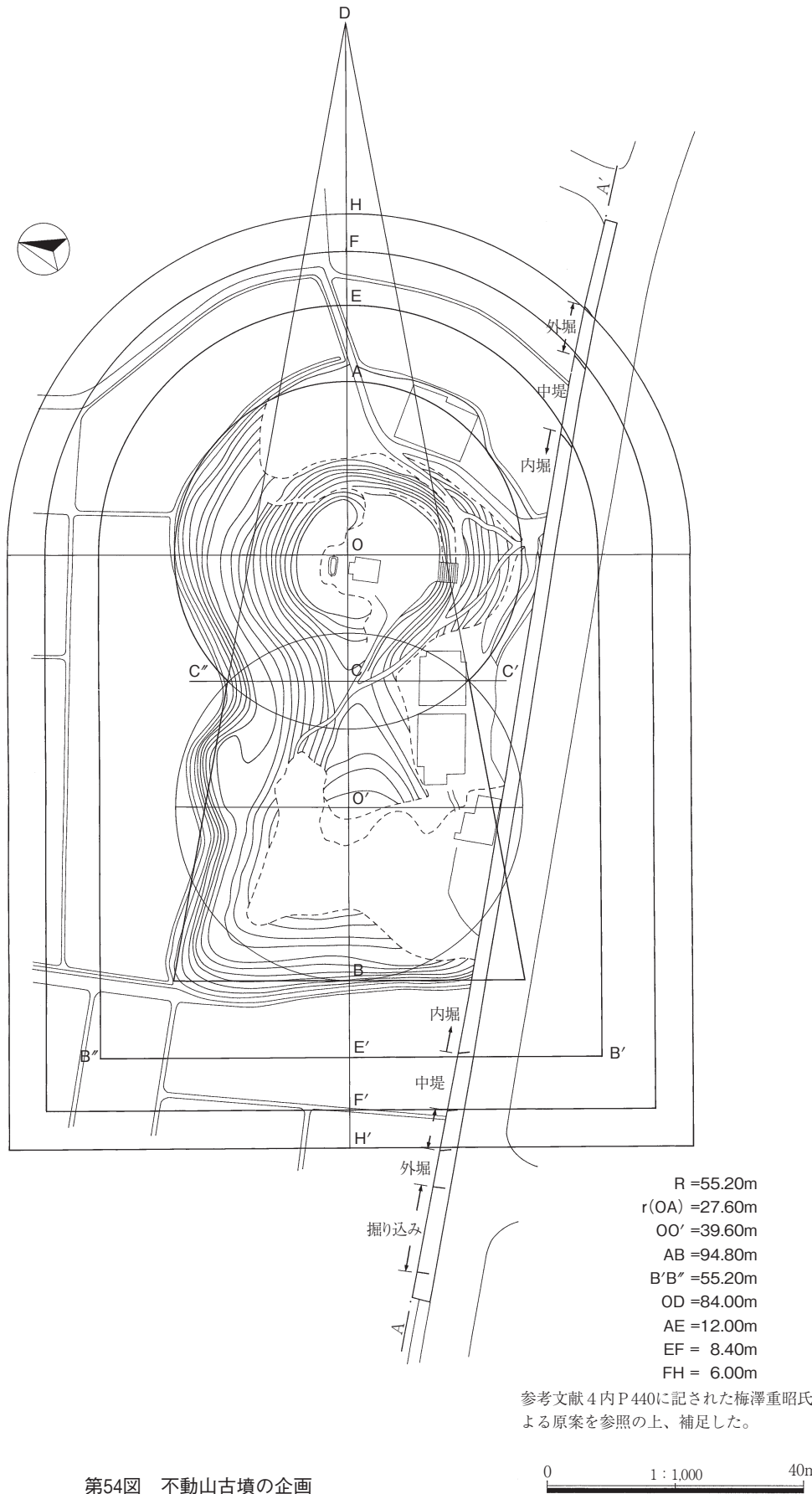
今回の調査で検出した埴輪は全て円筒埴輪で形象埴輪は含まれていない。普通円筒と朝顔形埴輪が確認された。人物・動物埴輪の存在については不明である。完形品は皆無であったが、普通円筒埴輪は群馬県立博物館や高崎市教育委員会の調査でも出土している器高60cm前後で3条突帯4段構成の資料と同様の資料が検出された。朝顔形埴輪は細片のため全体構成が不明である。これらの資料の特徴については6の項に記したとおりである。胎土には片岩類の混入が顕著なものは見られなかつた。焼成は窖窯焼成で、一部に還元状態を呈し、須恵質のものが見られる。

器面の調整は突帯貼付後2次調整のB種ヨコハケを施す個体が見られた。胴部には001のように複数周の資料と003のように単周の資料がある。両者の主客については今回扱った資料が少数であることから判断することはできないが、複数周の資料は一定量含まれるものと考えられる。口縁部は001のように複数周させている。基底部はタテハケのみである。

2次調整B種ヨコハケの変遷については若松良一氏により幅の狭い工具で複数周するB 1 a種から幅の広い工具で単周するB 2 a種への移行<sup>(1)</sup>が、一瀬和夫氏より突帯間を複数周するB a種、B b種から単周するB c種、B d種への移行<sup>(2)</sup>が示されているところである。不動山古墳の円筒埴輪は、若松氏の分類のB 1 a種、B 2 a種の両者、一瀬氏のB b 2種とB c種にあたるものである。

3条突帯4段構成の円筒埴輪は、既研究によれば5世紀以降群馬県内の最上位に位置付けられる前方後円墳を中心に採用されていることが知られている。その中で5世紀前半に位置付けられる太田天神山古墳や御富士山古墳の資料は、一部に窖窯焼成のものが見られるもののその主体は窖窯導入以前の有黒斑の資料であることから不動山古墳の資料はこれらに後出するものと考えられる。

不動山古墳出土資料と同様の窖窯焼成、3条突帯4段構成で2次調整B種ヨコハケを施す資料は第



第54図 不動山古墳の企画

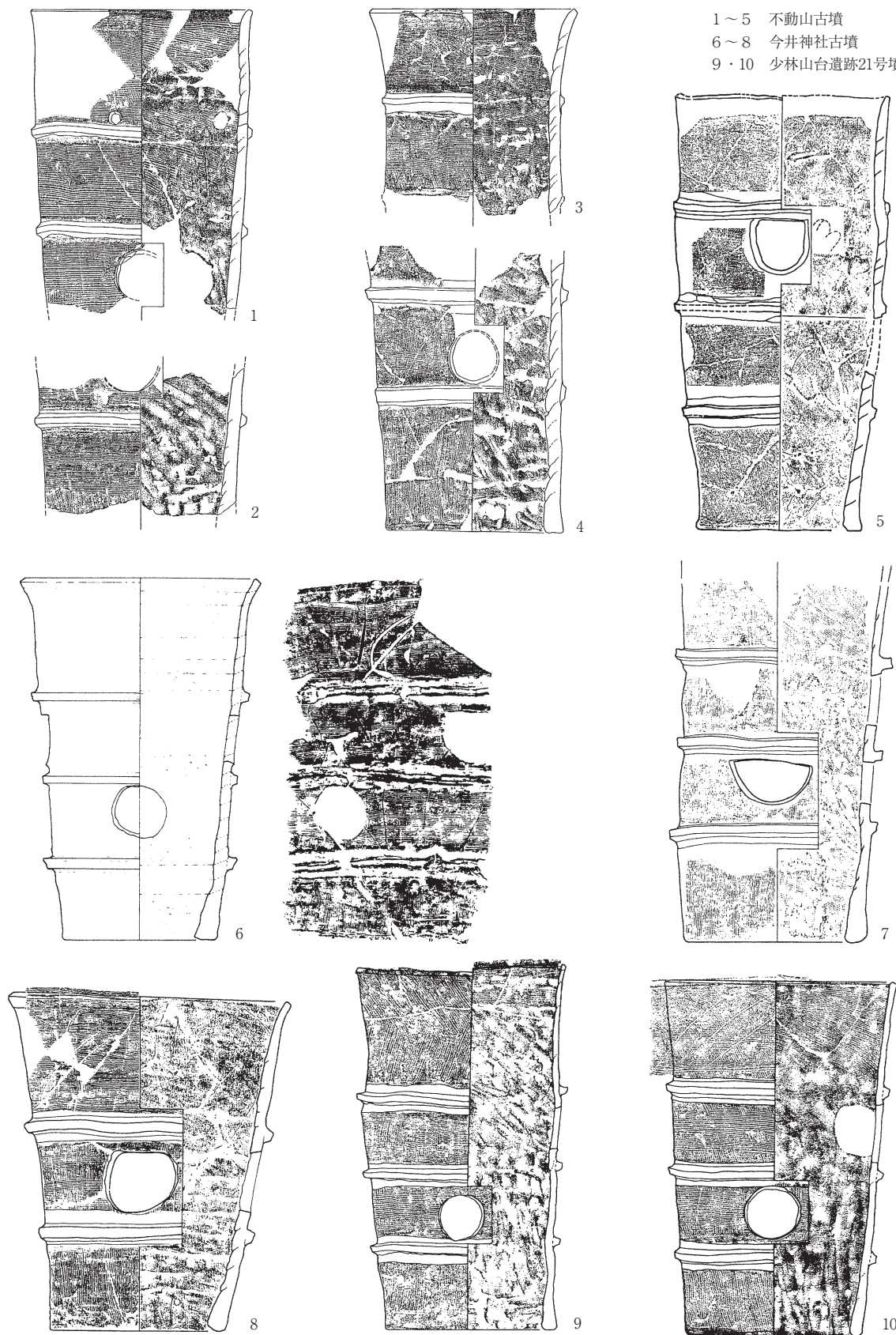


第55図 不動山古墳と旧地割り



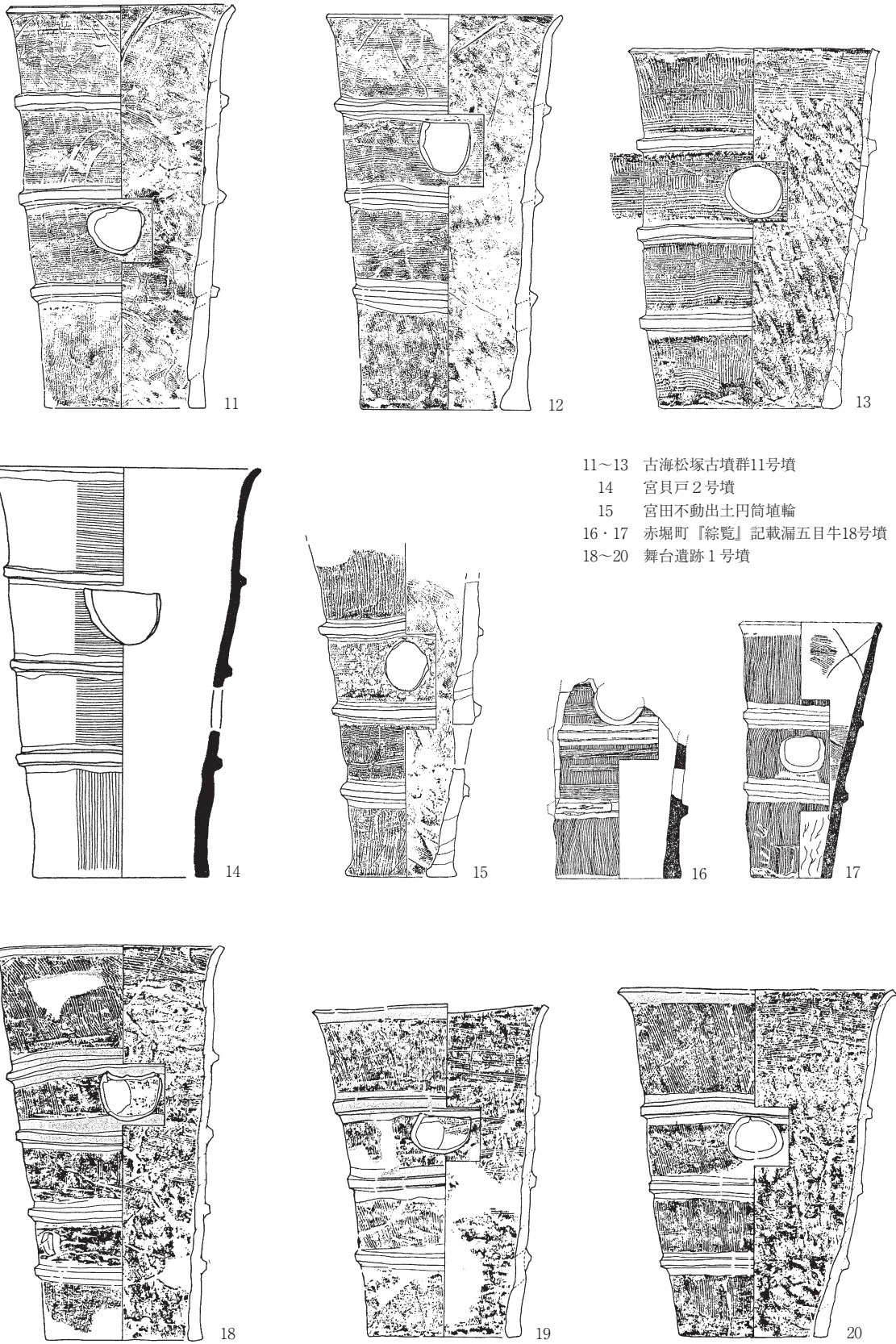
8 成果と問題点

- 1～5 不動山古墳
- 6～8 今井神社古墳
- 9・10 少林山台遺跡21号墳



第56図 群馬県内出土のB種ヨコハケ埴輪(1)

縮尺1/8



11~13 古海松塚古墳群11号墳  
 14 宮貝戸2号墳  
 15 宮田不動出土円筒埴輪  
 16・17 赤堀町『綜覧』記載漏五目牛18号墳  
 18~20 舞台遺跡1号墳

第57図 群馬県内出土のB種ヨコハケ埴輪 (2)

縮尺1/8



56図、第57図に掲載したように前橋市今井神社古墳<sup>(3)</sup>、高崎市少林山台遺跡21号墳<sup>(4)</sup>、大泉町古海松塚古墳群11号墳<sup>(5)</sup>などから出土している。この他にも全体構成が不明であるが、群馬県内の主要古墳の中には伊勢崎市赤堀茶臼山古墳<sup>(6)</sup>や丸塚山古墳<sup>(7)</sup>、太田市亀山古墳や米沢二ツ山古墳などで2次調整B種ヨコハケを施す資料の存在が指摘されている。

今井神社古墳では3条突帯4段構成と2条突帯3段構成の資料が見られる。2次調整B種ヨコハケは一瀬氏分類のB c種が見られる。少林山台遺跡21号墳においても3条突帯4段構成と2条突帯3段構成の資料が見られる。B種ヨコハケはB c種である。これらの円筒埴輪と有黒斑の朝顔形埴輪が相伴している。古海松塚古墳群11号墳では3条突帯4段構成と2条突帯3段構成が検出されている。3条突帯の器面調整はB b種とB c種の二種が見られるようである。この古墳には群馬県内では最古相の人物埴輪、馬形埴輪が相伴している。高崎市倉賀野万福寺Ⅱ遺跡埴輪棺<sup>(8)</sup>ではB c種が見られる。渋川市宮田不動出土資料<sup>(9)</sup>もB c種であろうか。伊勢崎市宮貝戸2号墳<sup>(10)</sup>や伊勢崎市綜覧漏れ五日牛18号墳<sup>(12)</sup>では詳細は不明であるがB種ヨコハケが施された資料が見られる。

以上のように今井神社古墳や少林山台遺跡21号墳、古海松塚古墳群11号墳などの円筒埴輪の調整にはB c種のヨコハケが見られる。これらの埴輪には陶邑古窯址群の須恵器編年のTK208型式期併行の年代観が与えられている。

第57図に掲載した前橋市舞台遺跡1号墳<sup>(13)</sup>では4条突帯5段構成を主体に2条突帯から5条突帯までの資料が混在している。いずれも外面の調整はタテハケで、B種ヨコハケを施した資料は1点のみということである。

井出二子山古墳では5条突帯6段構成の円筒埴輪を主体に3条突帯、4条突帯が出土しているが、B種ヨコハケを施す事例はごく少量で、B c種が見られるという。井出二子山古墳の埴輪にはTK23型式からTK47型式併行の年代観が考えられている<sup>(14)</sup>。

このようにして見てくると不動山古墳の円筒埴輪

は今井神社古墳と同時期、あるいはB b 2種があることを考慮すれば今井神社古墳よりやや古相に位置づけることができると考えられる。

群馬県内における窖窯焼成の導入時期<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>については赤堀茶臼山古墳の資料の評価が重要となると考えられる。赤堀茶臼山古墳資料と比較検討する中で不動山古墳資料の年代的な位置づけもより精度を増すものと考えられる。

### (3) 不動山古墳の位置付け

これまで見てきたように不動山古墳は現状の墳丘長94mで、太田天神山古墳と相似形の築造企画を有する前方後円墳である。主体部には5世紀後半、群馬県西部地域の最有力首長層に採用された舟形石棺が見られる。築造年代は円筒埴輪の特徴から5世紀中葉でも古相の時期と考えられる。

不動山古墳はこれまで評価にあったとおり、井野川下流域に展開する綿貫古墳群の中で岩鼻二子山古墳とともに5世紀代の首長墓としてその中核をなす古墳であることに変わりはないものである。そして、今回報告の調査により墳丘の周囲に二重の周堀が巡ることが判明したということを見ると、本調査の意義は極めて大きなものであったとすることができよう。

岩鼻二子山古墳との築造時期の前後関係については両者に共通して比較できる材料が少なく、断定することが困難であるが、主体部の舟形石棺の形状が岩鼻二子山古墳の方が丁寧な造りで、長持形石棺の影響をより強く受け継いでいることを考えると、両者の築造年代は接近していながらも、岩鼻二子山古墳、不動山古墳の順番に築造された可能性が高いと考えられる。この点もこの後の検討課題である。

井野川上流域に築造された保渡田古墳群の井出二子山古墳との関係は円筒埴輪の様相から不動山古墳が一段階古相に位置づけられるものと考えられる。このことから井野川流域における首長墓編年については岩鼻二子山古墳→不動山古墳→井出二子山古墳→保渡田八幡塚古墳→保渡田薬師塚古墳→綿貫観音山古墳と考えられる（これらを首長権が一系列と考



## 第2章 不動山古墳の調査

えるのか、二系列と考えるのかについては今後の課題であるが)。また、保渡田薬師塚古墳と綿貫観音山古墳との間には時間幅があることから少なくとももう一世代首長墓が入る可能性があることは従来の研究で認識されているとおりでである。

### 註

- 1 若松良一他『諏訪山33号墳の研究』1987
- 2 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・V』1988 大阪府教育委員会
- 3 南雲芳昭「今井神社古墳出土埴輪の位置づけと課題」『荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 4 群馬県埋蔵文化財調査事業団『少林山台遺跡』1993
- 5 大泉町教育委員会『古海松塚古墳群』2002
- 6 松村一昭「赤堀茶臼山古墳」『群馬県遺跡大事典』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 7 永井智教「伊勢崎市丸塚山古墳採集の埴輪資料」『群馬考古学手帳』6 1996
- 8 高崎市教育委員会『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1994
- 9 小林修「埋没古墳出土埴輪の基礎考察」『群馬考古学手帳』第11号 2001
- 10 伊勢崎市教育委員会『宮戸古墳群・蟹沼東古墳群』1980
- 11 群馬県埋蔵文化財調査事業団『波志江今宮遺跡』1995
- 12 赤堀村教育委員会『赤堀村地蔵山の古墳』2 1978
- 13 群馬県教育委員会『舞台遺跡』1995
- 14 山田俊輔「井出二子山古墳の埴輪」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会 2009
- 15 加藤一郎「関東における中期古墳の円筒埴輪」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究会 2003
- 16 加部二生「群馬県における中期古墳出土埴輪の分布と系譜」『埴輪研究会誌』第8号 2004

## 9 不動山古墳引用・参考文献

- 1 徳江秀夫「岩鼻二子山古墳」『高崎市史』資料編1 1999
- 2 津金沢吉茂・飯島義男・大久保美加「群馬県高崎市岩鼻町『群馬の森』を中心とする地域の歴史について」『群馬県立歴史博物館紀要』第2号 1981
- 3 右島和夫「普賢寺東古墳」『高崎市史』資料編1 1999
- 4 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅰ』1998
- 5 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅱ』1999
- 6 不動山東遺跡調査会『不動山東遺跡』1986
- 7 高崎市遺跡調査会『綿貫堀米前Ⅱ遺跡発掘調査報告書』2000
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬県埋蔵文化財調査事業団平成20年度実績報告』2009
- 9 高崎市教育委員会『綿貫遺跡』1985
- 10 群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫小林前遺跡』2006
- 11 塚越甲子郎・柳沢一男・南雲芳昭・大野哲二「倉賀野東古墳群大道南群調査報告」(下)『高崎市史研究』17 高崎市史編さん専門委員会
- 12 高崎市教育委員会『矢中村東C遺跡』1988
- 13 高崎市教育委員会『矢中村東B遺跡』1985
- 14 高崎市教育委員会『矢中村東遺跡』1984

- 15 高崎市教育委員会『下村北・砂内遺跡』1986
- 16 大類村史編集委員会『大類村史』1979
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団『柴崎熊野前遺跡』1997
- 18 梅澤重昭「柴崎蟹沢古墳」『群馬県史』資料編3 1981
- 19 徳江秀夫「柴崎蟹沢古墳」『高崎市史』資料編1 1999
- 20 高崎市遺跡調査会・高崎市教育委員会『下大類蟹沢遺跡』1993
- 21 高崎市遺跡調査会『高崎情報団地遺跡』1997
- 22 群馬県教育委員会『下郷』1980
- 23 高崎市史編さん専門委員会原始古代部会「若宮八幡北古墳の埴輪」『高崎市史研究』4 1995
- 24 高崎市教育委員会『高崎市八幡原町若宮古墳群第二次調査概況報告』1975
- 25 高崎市教育委員会『八幡原大鼻遺跡・稲荷遺跡』1983
- 26 高崎市教育委員会『岩鼻坂上北遺跡、八幡原灰塚Ⅱ遺跡、飯塚新田西・雁田遺跡、高崎市内水田遺跡一覧』1994
- 27 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下斉田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡』1987
- 28 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上新田新田西遺跡 上新田赤塚遺跡』2009
- 29 高崎市遺跡調査会『上滝社宮司東・斉田北遺跡、下滝高井前・赤城遺跡』1990
- 30 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下滝天水』2004
- 31 田島桂男「『綜覧』滝川村2号墳」『群馬県史』資料編3 1981
- 32 高崎市教育委員会『元島名將軍塚古墳』1981
- 33 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上滝五反畑遺跡』1999
- 34 群馬県埋蔵文化財調査事業団『上滝榎町北遺跡』2002
- 35 群馬県埋蔵文化財調査事業団『宿横手三波川遺跡』2001
- 36 群馬県埋蔵文化財調査事業団『八幡原A・B、上滝、元島名A』1981
- 37 群馬県教育委員会『元島名B遺跡 吹屋遺跡』1982
- 38 高崎市教育委員会『西横手遺跡群(Ⅱ)』1990
- 39 中島義一他『日本図誌大系』関東Ⅱ 1972
- 40 梅澤重昭「群馬県高崎市不動山古墳」『日本考古学年報』15 1967
- 41 梅澤重昭「群馬県群馬郡綿貫観音山古墳」『日本考古学年報』18 1970
- 42 梅澤重昭「不動山古墳」『群馬県史』資料編3 1981
- 43 梅澤重昭「不動山古墳」『高崎市史』資料編1 1999
- 44 梅澤重昭「第五章古墳時代の群馬」『群馬県史』通史編1 1990
- 45 群馬県立歴史博物館『群馬のはにわ』1979
- 46 高崎市教育委員会『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書13』1999
- 47 金子智一・桜井衛・山田寧和「高崎市周辺の埴輪」『埴輪の変遷』1985
- 48 梅澤重昭「毛野の古墳の系譜」『月刊考古学ジャーナル』No. 150 1978
- 49 梅澤重昭「第6章考察1. 綿貫観音山古墳の墳丘」『綿貫観音山古墳Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 50 梅澤重昭「毛野の埴輪」『月刊考古学ジャーナル』No. 253 1985
- 51 右島和夫「古墳から見た五・六世紀の上野地域」『古代文化』第42巻第7号 1990
- 52 梅澤重昭「黒井峯遺跡のムラを生んだ毛野の古墳文化」『黒井峯遺跡』1994
- 53 右島和夫「保渡田古墳群の研究」『東国古墳時代の研究』1994
- 54 右島和夫「保渡田古墳群」『季刊考古学』第71号 2000
- 55 若狭徹「上野西部における五世紀後半の首長墓系列」『古墳時代水利社会研究』2007

文頭の番号は第2表の文献番号と一致している。

# 遺物觀察表





箱石浅間山古墳出土土器観察表

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
001	壺	第10図 P L 10	①B 8、F 2、 F 3、F 3・ G 4、G 3、 G - 4 出土地 詳細不明 ②埋没土	残 口縁部～ 胴部破片 高 <21.6)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	二重口縁。胴部上半に鋸歯文を2段配す。器面の調整はハケメ。内面もハケメ。	外面に赤色塗彩。
002	壺	第11図 P L 11	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (24.0)	①粗砂②酸化・良好③明赤褐 5YR5/8	二重口縁。上半は外面に丸みのある稜をなし、さらに外反する。外面、ハケメをナデ消す。内面、綾杉文を施す。	
003	壺	第11図 P L 9	①F - 3、G - 3 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (26.0) 高 <6.3)	①粗砂②酸化・良好③明褐 7.5YR5/8	二重口縁。上半部の立ち上がりは高い。先端は外側がそげ、やや尖る。内面上半に綾杉文を配す。外面、ヨコナデ、一部にハケメを施す。	内外面とも赤色塗彩を施す。
004	壺	第11図 P L 11	①G 4 ②埋没土	残 口縁部破片 高 <4.1)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部の内側面に綾杉文を施す。外面の一部にはハケメを残す。	内外面とも赤色塗彩を施す。
005	壺	第11図 P L 11	①F 3 ②埋没土	残 口縁部破片 高 <1.2)	①粗砂②酸化・良好③明褐 7.5YR5/8	二重口縁。内面に綾杉文を配す。	
006	壺	第11図 P L 11	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (24.0)	①粗砂②酸化・良好③明褐 7.5YR5/8	二重口縁。内面に綾杉文を配す。	外面は磨滅している。
007	壺	第11図 P L 11	①H 6 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (21.8) 高 <3.6)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/6	二重口縁。上半部の立ち上がりは短い。内面に綾杉文を配す。	
008	壺	第11図 P L 12	①H 6 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (24.0) 高 <4.1)	①夾雑物少ない②酸化③明褐 7.5YR5/8	二重口縁。口径は大きくなる可能性あり。上半部は外面に稜をなしたあと、外反して立ち上がる。先端は外側がそげ、やや尖る。内外面ともヨコハケ。外面の一部にハケメを残す。	
009	壺	第11図 P L 11	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (19.0) 高 <3.5)	①粗砂少量②酸化・良好③明褐 7.5YR5/8	口縁部はくの字に外反して立ち上がり、先端は外面に粘土を貼り折り返し口縁となる。内面も下位に断面三角形の突帯をめぐらす。内面に無節 r の絡条体を施文する。	
010	壺	第11図 P L 11	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (16.8) 高 <3.6)	①細砂②酸化③橙 5YR6/8	先端は外側に折り返し口縁状に粘土を貼って肥厚させ、3本1単位の棒状浮文で飾っている。内外面ともミガキを施す。	
011	壺	第11図 P L 11	①F 2 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (20.0) 高 <2.3)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。上半部は折り返し口縁のように短い。外面は先端近くに変換点を有し、先端は鋭く尖る。内外面ともヨコナデ。	
012	壺	第11図 P L 12	①F 3・G 4 ②埋没土	残 口縁部破片 口 (22.0) 高 <4.1)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部の立ち上がり短い。先端は狭い平坦面を形成する。下端の成形、粗雑。	器面の磨滅・磨耗顕著。
013	壺	第11図 P L 9	①F 3 ②埋没土	残 口縁部 口 23.8 高 <10.5)	①粗砂②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	二重口縁。下半は長くラップ状に外反して立ち上がり、外面に断面三角形の突出部を有する。上半部はこれよりさらに斜め外方に外反して立ち上がる。先端は外側がややそがれ、外向の面をなす。外面、口縁上半部と下半部上位をヨコナデ。以下にはナナメタテ方向のハケメ。内面、上半部が一部にハケメを残すがヨコナデ。下半部はナナメヨコ方向のハケメ。	

遺物観察表

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
014	壺	第11図 P L 9	①F 2 ②埋没土	残 口縁部 1/4 口 (23.6) 高 (12.5)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。下半部は長く、上方に立ち上がる。内外面とも下半部にハケメが認められる。	器面は磨減、磨耗。
015	壺	第12図 P L 12	①B - 3 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (23.0)	①礫少量、粗砂②酸化・良好③明褐 7.5YR5/8	二重口縁。上半は強く外反、先端はやや厚く、丸みをおびる。内外面ともヨコナデ。	
016	壺	第12図 P L 12	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (23.4) 高 (4.6)	①粗砂、白色鉱物粒②酸化・良好③橙 5YR6/8	二重口縁。上半の立ち上がりは他よりも長い。先端は外側がそがれやや尖る。外面の一部にハケメを残す。	内外面とも著しく磨減、磨耗。
017	壺	第12図 P L 12	①H 5 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (23.0) 高 (3.4)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半の立ち上がりが他に比してやや短い。内外面ともヨコナデか。	器面の磨減、磨耗顕著。
018	壺	第12図 P L 12	①H 5 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (23.0) 高 (2.7)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化・やや軟質か③橙 7.5YR6/8	二重口縁。上半部は外面に稜をなし、さらに外反して立ち上がる。	外面に赤色塗彩を施す。器面、磨減顕著。
019	壺	第12図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (23.4) 高 (3.8)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部は斜め上方に大きく外反する。内外面ともヨコナデ。一部にハケメを残す。	
020	壺	第12図 P L 12	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 (5.1)	①粗砂②酸化・良好③橙 5YR6/8	二重口縁。外面には棒状工具によるミガキがみられる。	外面に赤色塗彩。内面、磨耗、磨減。
021	壺	第12図 P L 9	①F 3・G 4 ②埋没土	残 口縁部 1/4 口 (25.0) 高 (4.6)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部は外反して立ち上がる。先端は丸みを有し全体の器肉も厚い。内外面ともヨコナデ。一部にハケメを残す。	外面に赤色塗彩。
022	壺	第12図 P L 12	①H 6 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (25.0) 高 (3.9)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部の下端は欠損する。内外面ともヨコナデ。	外面に赤色塗彩。内面、やや磨減。
023	壺	第12図 P L 12	①F 8、G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 (2.5)	①粗砂②酸化・良好③明褐 7.5YR5/6	二重口縁。大きく外反して立ち上がる。内外面ともヨコナデ。	
024	壺	第12図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (25.0) 高 (5.2)	①白色鉱物粒少量②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。先端は外側がそがれやや尖る。上半部の下端は欠損、剥落している。内外面ともハケメをナデ消している。	内外面に赤色塗彩を施したか。
025	壺	第12図 P L 12	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 (2.8)	①粗砂少量②酸化③明赤褐 5YR5/8	二重口縁。外面の残存部上半にハケメを残す。内面にもハケメ。	
026	壺 (高杯か)	第13図 P L 12	①B 4 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 (3.8)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	二重口縁。上半部は外面に稜をなし、さらに外反して立ち上がる。外面、ミガキ。内面、ナデ、ミガキ。	内外面に赤色塗彩。
027	壺	第13図 P L 12	①B 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 (3.6)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。外反して立ち上がる。先端は外側がそがれやや尖る。内外面ともヨコナデ。外面の一部にハケメを残す。	内外面とも赤色塗彩。
028	壺	第13図 P L 12	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 (4.5)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。内外面ともヨコナデ。外面の一部にハケメを残す。	

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
029	壺	第13図 P L 12	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (24.0) 高 〈3.2)	①粗砂、白色鉱物粒、赤 色粘土粒②酸化・良好③ 橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半は外反して立ち上がる。 内外面ともヨコナデ。	内外面とも 磨減、磨耗。
030	壺	第13図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (25.0) 高 〈4.9)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半は外反して立ち上がる。 内面、ヨコ方向のミガキが施される。	内外面とも 赤色塗彩。 器面、やや 磨減する。
031	壺	第13図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.8) 高 〈3.6)	①粗砂少量②酸化・良好 ③橙 7.5YR6/6	二重口縁。先端は外側の器肉がそがれ やや尖りぎみ。外面はハケメの上をヨ コナデ。内面もヨコナデ。	内面、炭素 吸着。
032	壺	第13図 P L 12	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 〈4.7)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部は強く外反して立ち 上がる。内外面ともヨコナデ。外面の 一部にハケメを残す。	外面に赤色 塗彩。
033	壺	第13図 P L 12	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (26.0) 高 〈3.3)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。上半部は外反して立ち上が り、先端は外側がそがれ尖る。外面、 ヨコナデ。一部にハケメを残す。	内面磨減。
034	壺	第13図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (27.2) 高 〈3.5)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	二重口縁。上半部は外反して立ち上が る。内外面ともヨコナデ。一部にハケ メを残す。	
035	壺	第13図 P L 12	①H 5 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (29.8) 高 〈3.9)	①粗砂、白色鉱物粒②酸 化③橙 7.5YR6/8	二重口縁。外面の上半はヨコナデ。下 半はハケメ。内面も残存下位にハケメ を残す。	内外面、赤 色塗彩。器 面、やや磨 減、磨耗。
036	壺	第13図 P L 12	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (34.0) 高 〈5.6)	①粗砂、白色鉱物粒② 酸化・やや軟質③橙 5YR6/8	二重口縁。上半部の先端は器肉が薄く なり、やや尖りぎみ。器面の一部にハ ケメを残す。	器面、磨減、 磨耗。
037	壺	第14図 P L 9	①F 3、G 3 ②埋没土	残 口縁部～ 胴部上位 2/3 口 (25.4) 高 〈13.0)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 5YR6/8	二重口縁。口縁部はラップ状に外反し て立ち上がり、中位で外側に段をなし た後さらに外反して立ち上がる。口縁 部下半にハケメがみられる。	器面、磨減、 磨耗。
038	壺	第14図	①G 7 ②埋没土	残 口縁部下 半～胴部 上位破片 高 〈10.3)	①粗砂②酸化③明褐 7.5YR5/6	口縁部下半部は外反弱く上方に向けて 立ち上がる。胴部は大きく張る。外面、 ハケメ、一部にナデ。内面、ハケメ。	内外面、赤 色塗彩か。 内面、剥離。
039	壺	第14図 P L 9	①G 3、F 3、 F 3・G 4 ②埋没土	残 口縁部～ 胴部破片 高 〈14.2)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 5YR6/6	二重口縁。外面、ハケメ。内面、ハケメ。 胴部上位は指頭によるナデ、押さえ。	外面に赤色 塗彩。器面 の一部、磨 減、磨耗。
040	壺	第14図	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 〈7.2)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/6	二重口縁の下半部。内外面とも上位は ヨコナデ。中～下位はハケメ。	外面に赤色 塗彩。
041	壺	第14図	①H 6 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 〈5.5)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。外反弱く立ち上がる。内外 面ともハケメ。	
042	壺	第14図 P L 9	①F 3・G 4、 F 3 ②埋没土	残 胴部上位 1/4 高 〈6.0)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	胴部は球形を呈し、大きく張る。外面、 ハケメ。一部にナデ。内面、ハケメ。 上位に指頭による押さえ、ナデ。	
043	壺	第14図	①H 6 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 〈5.0)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 7.5YR6/6	二重口縁。下半部は外反弱く立ち上が る。外面、棒状工具によるミガキ。内 面、ヨコ方向のハケメ。	外面、赤色 塗彩か。器 面、やや磨 減。



遺物観察表

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
044	壺	第14図	①G7 ②埋没土	残 胴部上半 部破片 高 <8.1)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③明赤褐 5YR5/8	胴部上位の破片。外面、ハケメ。一部にナデ。内面、ハケメ。	
045	壺	第14図 P L 9	①F3・G4 ②埋没土	残 口縁部 高 <6.1)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③橙 5YR6/8	二重口縁。下半部は斜め上方に外反して立ち上がる。外面、ナナメタテハケ。内面、ナナメヨコハケ。	器面、磨減、剥離。
046	壺	第14図 P L 9	①E8、F2 ②埋没土	残 胴部破片 高 <14.8)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/6	丸く大きく張る。外面、中位はナナメ方向、下位はヨコ方向のハケメ。内面、ヨコ方向のハケメ。	器面、磨減、磨耗。
047	壺	第15図	①F8 ②埋没土	残 胴部破片 高 <10.1)	①粗砂、白色軽石、赤色粘土粒②酸化③橙 5YR6/8	外面、ハケメ、一部ナデか。内面、ハケメ、ナデ。	器面、磨減。
048	壺	第15図	①F3 ②埋没土	残 胴部破片 高 <8.0)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/8	胴部中位の破片である。内面にハケメがみられる。	器面、著しく磨減、磨耗。
049	壺	第15図	①G3、F3 ②埋没土	残 胴部破片 高 <5.4)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③明褐 7.5YR5/8	胴部下位の破片である。内面に一部ハケメが残る。	器面、著しく磨減、磨耗。
050	壺	第15図 P L 9	①F8 ②埋没土	残 胴部～底 部 1/3 底 (7.2) 高 <25.1)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③にぶい橙 7.5YR7/4	焼成前底部穿孔。胴部は球形を呈し、最大径を中位に有する。穿孔の直径は3.0cm 前後と推定される。外面、上半はヨコ方向に粗雑なハケメ。下半は粗雑なナデ。一部にハケメを残す。内面、ハケメ、中位に一部ナデ。	
051	壺	第15図 P L 10	①G ②埋没土	残 底部破片 底 (6.2) 高 <2.4)	①粗砂②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	焼成前底部穿孔。底部は他に比してやや小径。孔の直径は3.2cm に復元される。外面、ナデ、ハケメ。内面ハケメ。	
052	壺	第15図 P L 10	①F3・4 ②埋没土	残 底部破片 底 (8.2) 高 <2.1)	①粗砂少量②酸化・良好③明褐 7.5YR5/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は4.8cm に復元できる。孔の周縁に平坦面を有する。外面の一部にハケメが残る。内面もハケメ。	
053	壺	第15図 P L 10	①F2 ②埋没土	残 底部破片 底 (10.4) 高 <2.9)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は6.3cm に復元できる。外面、ハケメをナデ消す。内面、ハケメ。	
054	壺	第15図 P L 10	①G2・3 ②埋没土	残 底部破片 底 (7.2) 高 <3.0)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は3.0cm に復元できる。孔の周縁に平坦面をもつ。外面、ハケメ、ナデ。内面、ハケメ。	
055	壺	第15図 P L 10	①F3 ②埋没土	残 底部破片 底 (9.6) 高 <2.6)	①粗砂、赤色粘土粒②酸化③橙 7.5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は6.4cm に復元される。周縁には広い平坦面を有しない。胴部はもっと張り出す可能性あり。外面、ナデ。内面、ハケメ。	
056	壺	第15図	①F8、F2 ②埋没土	残 底部破片 底 (8.2) 高 <4.3)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	焼成前底部穿孔。孔の直径は6.4cm に復元。孔の周縁に平坦面を有する。外面、ハケメ。内面、ハケメ。	
057	壺	第15図 P L 10	①F3 ②埋没土	残 底部破片 底 (8.0) 高 <3.1)	①粗砂②酸化③にぶい橙 5YR6/4	焼成前底部穿孔。孔の直径は6.8cm に復元。外面、ハケメをナデ消す。内面、ハケメ。	
058	壺	第15図 P L 10	①B4 ②埋没土	残 底部破片 底 (5.9) 高 <4.0)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	焼成前底部穿孔。孔の直径は2.8cm に復元。孔の周縁に平坦面を有する。胴部外面、粗雑なナデ、ハケメ。内面、ナデ。	
059	壺	第16図 P L 9	①G3 ②埋没土	残 胴部下位 ～底部 底 (9.2) 高 <6.0)	①粗砂②酸化・良好③橙 2.5YR6/6	大きく張り出した胴部は平底の底部に終息する。底部は焼成前底部穿孔。孔の直径は5.3cm。孔の周縁には平坦面が残る。胴部外面、粗雑なナデ、ヘラナデ。底部外面、ナデ。胴部内面、ハケメ。穿孔部分はヘラケズリ、ナデ。	外面に赤色塗彩。

No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
060	壺	第16図	①G7 ②埋没土	残 底部1/2 底 7.7 高 < 3.6)	①粗砂②酸化・良好③橙 5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は4.5cm。孔の周縁に平坦面を有する。外面、ハケメを部分的にナデ消す。内面もハケメ、ナデ。	
061	壺	第16図 P L 9	①H5、F3 、F3・4出 土地詳細不明 ②埋没土	残 胴部下位 ～底部 底 8.0 高 < 7.7)	①粗砂②酸化・良好③橙 2.5YR6/6	胴部は膨らみを有し、大きく張り出す。底部は平底、焼成前穿孔である。孔の直径は4.7cm。胴部外面には粗雑なハケメを施し、一部にこれをナデ消している。内面にもハケメを充填している。穿孔部分はナデ、ヘラケズリ。	
062	壺	第16図 P L 10	①G7 ②埋没土	残 底部破片 底 (8.4) 高 < 2.2)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は3.5cmを推定。孔の周縁に幅広い平坦面を有する。外面、粗雑なハケメ、ナデ。内面もハケメ、ナデ。	
063	壺	第16図 P L 10	①G7 ②埋没土	残 底部破片 底 (9.6) 高 < 4.4)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は8.8cmに復元される。孔の周縁に平坦面をもたない。内外面ともハケメ。	
064	壺	第16図 P L 10	①G7 ②埋没土	残 底部破片 底 (7.6) 高 < 3.8)	①粗砂②酸化・良好③明 赤褐 5YR5/8	焼成前底部穿孔。孔の直径は5.2cmに復元できる。外面、ヘラケズリ、ナデ。内面、ハケメ。	
065	壺	第16図 P L 10	①F8 ②埋没土	残 底部破片 底 (7.8) 高 < 4.8)	①粗砂②酸化③にぶい黄 橙 10YR6/3	焼成前底部穿孔。孔の直径は5.4cmに復元される。胴部外面、ハケメ。内面、ナデ、ハケメ。	
066	壺	第16図 P L 9	①H6 ②埋没土	残 底部破片 底 (9.2) 高 < 3.8)	①粗砂②酸化・良好③橙 7.5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は5.0cmに復元できる。孔の周縁に幅広い平坦面を有する。外面、ハケメにナデを加える。内面、ハケメを放射状にナデ消す。	外面に赤色 塗彩。
067	壺	第16図 P L 10	①H6 ②埋没土	残 底部破片 底 (9.0) 高 < 3.3)	①粗砂②酸化③にぶい黄 橙 10YR6/4	焼成前底部穿孔。孔の切り込みは外面側が大きい。直径は6.2cmに復元できる。外面、ハケメにナデを重ねる。内面、ハケメ。	
068	壺	第16図 P L 10	①F3・G4 ②埋没土	残 底部破片 底 (9.0) 高 < 2.4)	①粗砂②酸化③橙 7.5YR6/6	焼成前底部穿孔。穿孔は底部の中心をはずれて位置するか。孔の直径は6.0cmに復元される。外面、ナデ。内面、ハケメ。	
069	壺	第16図 P L 10	①F3 ②埋没土	残 底部破片 底 (6.9) 高 < 3.2)	①粗砂②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	焼成前底部穿孔。穿孔は直径6.0cmに復元。周縁に平坦面を有しない。外面、ハケメをナデ消す。内面、ハケメ。	
070	壺	第16図	①F8、F2 ②埋没土	残 底部破片 底 (7.2) 高 < 4.4)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 5YR6/6	焼成前底部穿孔。孔の直径は5.0cmに復元される。孔の周囲に平坦面を有す。外面、粗雑なナデ。内面、ハケメ。	器面、やや 磨減、磨耗。
071	壺	第16図 P L 9	①F3 ②埋没土	残 底部破片 底 (7.2) 高 < 4.5)	①粗砂、赤色粘土粒②酸 化③橙 5YR6/8	焼成前底部穿孔。孔の直径は6.0cmに復元。孔の周縁に平坦面を有さない。外面、粗雑なナデ、ハケメ。内面、ハケメ、ナデ。	器面、磨減、 磨耗。
072	土師器 小型壺	第18図 P L 13	①S N t ②埋没土	残 口縁部～ 胴部上半 2/3 口 6.6 高 < 5.5)	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	器形は歪んでいる。口縁部はくびれ、くの字状に立ち上がる。	器面、磨減、 磨耗。
073	土師器 埴	第18図 P L 13	①E8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (11.8) 高 < 6.0)	①細砂、精選②酸化・良 好③橙 2.5YR6/6	内外面とも棒状工具によるミガキを施す。	
074	土師器 小型壺	第18図	①F8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (11.4) 高 < 3.6)	①粗砂少量②酸化・良好 ③にぶい褐 7.5YR5/4	小破片。先端は器肉が薄くなりやや尖りきみ。外面、タテ方向に棒状工具によるミガキ。内面もミガキ。やや粗雑。	

遺物観察表

No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
075	土師器 ひさご形 壺	第18図 P L 13	①B 3 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 ( 6.8) 高 ( 3.8)	①細砂・精選②酸化・良 好③明赤褐 5YR5/8	器肉薄く精美。口縁部は弱く波打ち立 ち上がる。外面、端部にヨコ方向のハ ケメ。その直下に瓜形の刺突文。以下 にミガキ。内面、タテ方向のミガキ。	
076	土師器 壺	第18図	①E 8 ②埋没土	残 底部1/2 底 ( 6.2) 高 ( 2.2)	①粗砂②酸化③明褐 7.5YR5/8	平底。中心部が弱くへこむ。内外面と もナデ。	
077	土師器 高 杯	第18図	①F 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 ( 25.0) 高 ( 3.0)	①粗砂②酸化③にぶい黄 橙 10YR7/3	杯部小破片。斜め上方に大きく開く。 端部は内外面ともヨコナデ。以下は棒 状工具によるミガキか。	器面、磨滅、 磨耗。
078	土師器 高 杯	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 破片 高 ( 2.2)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/6	3箇所に通孔を有す。	器面、割口、 磨滅、磨耗。
079	土師器 器 台	第18図	①F 8 ②埋没土	残 受部破片 口 ( 8.4) 高 ( 2.0)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/6	受部破片。先端は直立ぎみに立ち上 がる。先端はヨコナデ。以下はミガキ。	内面、剥離。
080	土師器 高 杯	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 脚部破片 高 ( 4.0)	①細砂・精選②酸化③に ぶい橙 7.5YR6/4	脚部は斜め上方に延びる。三方に通孔 を配する。外面、タテ方向のミガキ。 内面、ナデ。	
081	土師器 高 杯	第18図	①D 7 ②埋没土	残 脚部破片 高 ( 4.3)	①粗砂②酸化③橙 5YR6/8	脚部は外反ぎみに延びる。透孔を3箇 所に配す。外面、ミガキ。内面、ナデ。	器面、磨滅、 磨耗。
082	土師器 高 杯	第18図 P L 13	①S N t ②埋没土	残 脚部破片 高 ( 3.8)	①粗砂②酸化・良好③明 褐 7.5YR5/6	脚部上半の破片で、斜め外方に延びる。 三方に通孔を配置する。外面、棒状工 具によるミガキ。内面、ナデ。	
083	土師器 高 杯	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 脚部上半 部 高 ( 6.1)	①細砂・精選②酸化・良 好③橙 5YR6/8	脚部は外傾弱く延びたあと変換点を有 し、強く外反する裾部をつくる。外面、 タテ方向に棒状工具によるミガキ。内 面、ナデ。一部にミガキ。	
084	土師器 高 杯	第18図	①S N t ②埋没土	残 脚部破片 高 ( 6.0)	①粗砂、石英②酸化③橙 5YR6/8	脚部は斜め上方に延びる。外面、ミガ キか。内面、ケズリのようなナデ。	
085	土師器 高杯又は 器台	第18図	①H 6 ②埋没土	残 脚部破片 底 (14.0) 高 ( 1.8)	①粗砂多量②酸化③浅黄 橙 10YR8/3	裾部小破片。斜め外方に延びる。外面、 タテ方向にミガキ。内面、ナデ、ヨコ ナデ。	
086	土師器 高杯又は 器台	第18図	①G 7 ②埋没土	残 裾部破片 底 (15.6) 高 ( 1.7)	①粗砂少量、精選②酸化 ・良好③明赤褐 5YR5/6	裾部の小破片。大きく外反ぎみに開く か。外面、ミガキ。内面、ハケメ。端 部を狭くヨコナデ。	
087	土師器 器 台	第18図	①B 4 ②埋没土	残 脚部破片 底 (11.4) 高 ( 2.2)	①細砂・精選②酸化・良 好③明褐 7.5YR5/6	裾部の小破片。斜め外方に延びる。外 面、ていねいなミガキ。内面、ハケメ。 下端はヨコナデ。	
088	土師器 甕	第18図	①E 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (12.6) 高 ( 2.8)	①粗砂少量②酸化③明褐 7.5YR5/6	口縁部はくの字状に屈曲して立ち上 がる。外面、ヨコナデ。下位にハケメ。 内面、ヨコナデの下にハケメを残す。	
089	土師器 甕	第18図	①G 7 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 ( 8.4) 高 ( 3.0)	①粗砂②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	小破片。口縁部は外傾弱く立ち上がる。 内外面ともヨコナデ。	
090	土師器 甕	第18図	①F 3 ②埋没土	残 底部1/2 底 ( 5.0) 高 ( 1.5)	①粗砂②酸化③明褐 7.5YR5/8	平底。底部外面、ヘラケズリ。胴部外 面、ハケメ、ナデ。	
091	土師器 壺	第18図 P L 13	①D 8 ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (16.0) 高 ( 6.5)	①粗砂、白色鈹物粒②酸 化③明黄褐 10YR6/6	直線的に斜め上方に立ち上がる。先端 は平坦面をなす。内面、ミガキ。	内外面とも 磨滅。



No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
092	土師器 壺	第18図 P L 13	①F 2 ②埋没土	残 口縁部破 片 高 < 3.7	①粗砂。礫も少量混入② 酸化③明赤褐 5YR5/8	頸部外面に低い断面三角形の突帯を めぐらす。内外面とも粗雑なナデ。	
093	土師器 S字台付 甕	第18図 P L 13	①S N t ②埋没土	残 口縁部破 片 口 (16.0) 高 < 4.6	①粗砂多数②酸化③にぶ い黄橙 10YR6/4	口縁部はヨコナデ。胴部外面、ナナメ タテ方向のハケメ。肩部にヨコ方向の ハケメをめぐらす。内面、頸部にハケ メを残す。胴部、指ナデ。	
094	土師器 S字台付 甕	第18図 P L 13	①F 3 ②埋没土	残 胴部破片 高 < 4.7	①粗砂多量②酸化③にぶ い黄橙 10YR6/4	小破片。ナナメタテ方向のハケメにヨ コ方向のハケメが重なる。	
095	土師器 壺	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 胴部下位 ～底部破片 底 (8.0) 高 < 2.6	①粗砂少量②酸化・良好 ③橙 5YR6/6	底部は平底であるが周縁に粘土を輪状 に貼り付けている。胴部外面にはハケ メ、ナデ。内面、ナデ。	
096	土師器 台付甕	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 脚台部 2/3 底 (10.6) 高 < 6.7	①粗砂②酸化・良好③褐 7.5YR4/3	ハの字状を呈し、端部は内側に折り返 しを有さない。外面、ハケメ。内面、 ナデ。下端はヨコナデ。	胴部欠損後 も二次利用 か。
097	土師器 台付甕	第18図 P L 13	①H 6 ②埋没土	残 脚台部破 片 底 (10.0) 高 < 7.0	①粗砂②酸化③にぶい橙 7.5YR6/4	ハの字状に外傾して延びる。胴部外面 はハケメ。内面、ナデ。脚台部は粗雑 なナデ。内面もナデ。	
098	土師器 S字台付 甕	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 脚台部破 片 高 < 4.4	①粗砂多量②酸化③にぶ い橙 7.5YR6/4	外面、ハケメ。内面、ナデ。胴部下端、脚 台部天井に砂粒を多く含む粘土貼付。	脚台部に焼 成前に小 穴。器面、 やや磨耗。
099	土師器 台付甕	第18図 P L 13	①出土地詳細 不明 ②埋没土	残 脚台部 2/3 底 (8.2) 高 < 4.0	①細砂、精選②酸化③明 褐 7.5YR5/6	器高低く外傾著しい。外面、くびれ部 にハケメ。以下、ヨコ方向のナデ。内 面、ナデ、ヨコナデ。	
100	土師器 S字台付 甕	第18図	①E 8 ②埋没土	残 脚台部破 片 底 (10.4) 高 < 2.3	①粗砂②酸化③明褐 7.5YR5/6	台付甕の脚台部小破片。端部は内側に 折り返される。内外面ともナデ。	
101	土師器 杯	第18図 P L 13	①G 2・3 ②埋没土	残 1/3 底 5.6 高 < 3.9	①細砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	体部は平底の底部から斜め上方に立ち 上がる。内外面ともナデ。	甕の底部の 可能性も強 い。
102	土師器 不明	第18図	①G 7 ②埋没土	残 破片 底 (4.4) 高 < 3.3	①細砂。粗砂少量②酸化 ③橙 5YR6/6	外形は丸みを有して立ち上がる。	古墳時代? 器面、磨耗。
103	土製品	第18図 P L 13	①G 7 ②埋没土	残 一部欠損 縦 < 4.6 横 < 2.7 厚 0.5	①粗砂②酸化③明赤褐 5YR5/8	高杯、器台の裾部破片を二次利用。割 れ口を磨って調整している。	

遺物観察表

箱石浅間山古墳出土円筒埴輪観察表

器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備考	
					形状	間隔					
104	円筒	第20図 P L 14 ・16	①H 6 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈7.5)	①A、礫・粗 砂大の混入物 ②良好 ③橙7.5YR6/6				15	外反して立ち上がる。外面、 タテハケ後先端ヨコナデ。 内面、ナナメ方向のハケメ、 ナデ。	
105	円筒	第20図 P L 14 ・16	①E 8 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈6.2)	①B、粗砂大 の鉱物粒② 良好③明褐 7.5YR5/6				15	内外面ともハケメ後先端を ヨコナデ。	内面に線刻 あり。
106	円筒	第20図 P L 14	①B 4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.7)	①B、結晶片 岩混入②良好 ③橙7.5YR6/6				10	先端はシャープなつくりで 平坦面をなす。外面、ヨコ ナデ。内面にヨコ方向のハ ケメをみる。	器面磨滅し ている。
107	円筒	第20図 P L 14	①E 8 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.5)	①C、粗砂大 の鉱物粒少量 ②良好 ③橙7.5YR6/8				16	外面、ナナメタテハケ。内 面、ナナメハケ。先端にヨ コナデ。	
108	円筒	第20図 P L 14 ・16	①G 7 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈4.0)	①B、粗砂大 の鉱物粒少量 ②良好③明褐 7.5YR5/8				15	外面、タテハケ。内面、ハ ケメ、ナデ。先端は内外面 ともヨコナデ。	内面に線刻 あり。
109	円筒	第20図 P L 14	①H 5 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈5.3)	①B②やや不 良、還元ぎみ ③橙7.5YR6/6				16	先端は外反して立ち上がり 平坦面を外方に向ける。外 面、タテハケ後先端をヨコ ナデ。内面、ナナメヨコ方 向のハケ後ヨコナデ。	
110	円筒	第20図 P L 14	①G 7 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈4.1)	①B②良好 ③橙7.5YR6/6				16	先端は緩やかに外反、平坦 面を形成する。外面、タテ ハケ。内面、ナナメ方向の ナデ。先端は内外面ともヨ コナデ。	
111	円筒	第20図 P L 14	①H 5 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈5.1)	①B②良好③ 明赤褐5YR5/8				14	先端は緩やかに外反して立 ち上がる。外面、タテハケ 後先端をヨコナデ。内面、 ナナメタテハケ後ヨコナ デ。	
112	円筒	第20図 P L 14	①H 6 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.8)	①C、粗砂大 の鉱物粒少量 ②良好 ③橙7.5YR6/6				14	緩やかに外反して立ち上が る。先端は凹状の面をなす。 外面、タテハケ後ヨコナデ。 内面、ナデ、ヨコナデ。	
113	円筒	第20図 P L 14	①H 6 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.8)	①B②良好 ③橙7.5YR6/8				14	外反して立ち上がる。外面 に弱い稜をなす。外面、タ テハケ後、先端ヨコナデ。 内面、ナデ。	
114	円筒	第20図 P L 14	①H 6 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈4.1)	①C、粗砂大 の鉱物粒②良 好③明褐 7.5YR5/8				14	外反して立ち上がり、先端 は外方を向く平坦面を形成 する。外面、タテハケ後先 端をヨコナデ。	
115	円筒	第20図 P L 14	①G 4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈7.8)	①B②良好 ③橙5YR6/8				16	緩やかに外反して立ち上が る。外面、タテハケ後先端 にヨコナデ。内面ナナメ方 向のハケメ後、先端にヨコ ナデ。	
116	円筒	第20図 P L 14	①G 2、G 2・3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈8.1)	①B②良好③ 明赤褐5YR5/8				16	先端は緩やかに立ち上がり、 平坦な面をなす。外面、タ テハケ後先端をヨコナデ。 内面、ナデか。	

No	器種	挿 図 写 真	出土位置 ①平面 ②垂直	量 目	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	突 帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
117	円筒	第20図	①G3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.5〉	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6				14	緩やかに外反して立ち上がる。先端は平坦面をなす。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面もハケメ後ヨコナデ。	
118	円筒	第20図 P L 14	①H6 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.5〉	①C②良好③ 明褐 7.5YR5/6				14	器肉薄い。外面は緩やかに立ち上がる。先端は平坦面を外方に向ける。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ヨコナデ。	
119	円筒	第20図 P L 14	①G2・3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈5.2〉	①A②良好 ③橙 5YR6/8				14	先端は外反して立ち上がり平坦面を外方に向ける。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ナデ。	
120	円筒	第20図 P L 14	①G2・3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈4.8〉	①C、角閃石 安山岩②良好 ③橙 5YR6/8				15	先端は外反して立ち上がり平坦な面をなす。内外面ともハケメ、先端にヨコナデ。	
121	円筒	第20図 P L 14	①G2・3、 F3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.7〉	①C、粗砂大 の鉱物粒② 良好③明褐 7.5YR5/6				16	先端は外反して立ち上がり平坦面を外方に向ける。内外面ともハケメ。先端をヨコナデ。	
122	円筒	第20図 P L 14	①F3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.8〉	①B②良好 ③橙 5YR6/8				16	外反して立ち上がる。先端は平坦な面をもつ。外面、タテハケ後、先端ヨコナデ。内面はナデ。	
123	円筒	第20図 P L 14	①F3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈5.8〉	①A②やや不 良、やや還元 状態③明褐 7.5YR5/6				16	先端は外反して立ち上がり平坦面を外方に向ける。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケメ、ナデ。	
124	円筒	第20図 P L 14	①F3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.6〉	①B②やや不 良、やや還元 状態③明褐 7.5YR5/6				15	弱く外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ナデ。	
125	円筒	第20図 P L 14	①F3 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈4.6〉	①C、粗砂大 の鉱物粒少量 ②良好③明赤 褐 5YR5/6				16	先端は外反して立ち上がり外方に平坦な面を向ける。内外面ともハケメ、先端はヨコナデ。	
126	円筒	第21図 P L 14	①F3・4、 G3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈9.3〉	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6				16	緩やかに外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端ヨコナデ。内面ナナメタテ方向のハケメ、ナデ。	
127	円筒	第21図 P L 14	①F3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.5〉	①B、結晶片 岩を含む ②良好③橙 7.5YR6/6				8	外反して立ち上がる。外面、ハケメ後先端をヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケメ、先端にヨコナデ。	
128	円筒	第21図 P L 14	①F3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.0〉	①B②良好 ③橙 5YR6/8				14	外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ナデ。	
129	円筒	第21図 P L 14	①出土地詳 細不明	残 口縁部 破片 高〈6.3〉	①A②良好③ 明赤褐 5YR5/8				16	外反して立ち上がる。先端は平坦な面が外方に向く。外面、タテハケ後、先端を幅狭くヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケの上ナデを重ねている。	器面はやや磨滅している。
130	円筒	第21図 P L 14	①F3・G 4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈3.0〉	①A②良好③ 橙 7.5YR6/6				9	緩やかに外反して立ち上がる。外面、タテハケ後ヨコナデ。内面、ナナメヨコ方向のハケメ後ヨコナデ。	



遺物観察表

No	器種	挿 写 真	出土位置 ①平面 ②垂直	量 目	①胎土 ②焼成 ③色調	突 帯		透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
131	円筒	第21図 P L 14	①F 3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高 < 3.3)	①B②良好③ 明褐 7.5YR5/6				16	外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端をヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケメ後ヨコナデ。	
132	円筒	第21図 P L 14	①F 3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高 < 3.0)	①B②良好③ 明褐 7.5YR5/6				14	外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端にヨコナデ。内面、ナデ。	
133	円筒	第21図 P L 14	①F 3・4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高 < 4.1)	①A②良好③ 明褐 7.5YR5/6				16	器肉、薄い。外反して立ち上がる。外面、タテハケ後先端にヨコナデ。内面、ナデ。	
134	円筒	第21図 P L 14	①出土地詳細不明	残 口縁部 破片 高 < 2.2)	①A②良好③ 明褐 7.5YR5/6				15	先端は強く外反して立ち上がり、平坦面は外方を向く。外面、ハケメ。内面、ナデ。	
135	円筒	第21図 P L 14	①F 3・G 4 ②埋没土	残 口縁部 破片 高 < 4.2)	①B②やや不良、還元ざみ ③明褐 7.5YR5/6				14	緩やかに外反して立ち上がる。先端は若干丸みをおびる。外面、タテハケ後先端にヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケメ、ナデ。	
136	円筒	第21図 P L 14	①E 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 6.9)	①C、粗砂大の 鉾物粒少量 ②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 3		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナナメハケ。突帯は下稜の突出度低く、断面三角形状を呈す。	
137	円筒	第21図 P L 14	①G 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 7.4)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 2		円	16	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ハケメ後タテ方向に粗雑なナデ。	
138	円筒	第21図 P L 14	①G 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 10.3)	①B、粗砂大の 鉾物粒②良 好③橙 5YR6/8	台 1		円	16	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナデ。	
139	円筒	第21図 P L 14	①出土地詳細不明	残 胴部破 片 高 < 7.9)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6	M 2		円	8	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ナデ。	
140	円筒	第21図 P L 14	①F 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 4.2)	①C、粗砂大の 鉾物粒混入 ②良好③明褐 7.5YR5/6	M 1		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付。内面、ハケメ、ナデか。	内面やや磨減。
141	円筒	第21図 P L 15	①B 4 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 10.8)	①A、礫大・ 粗砂大の鉾物 粒を含む②良 好③橙 5YR6/8	台 1			15	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナデか。	器面は磨減している。
142	円筒	第21図 P L 15	①B 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 7.4)	①C、粗砂大の 鉾物粒②良 好③橙 5YR6/8	三			15	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、タテ方向のナデ。	
143	円筒	第21図 P L 15 ・16	①B 4 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 6.8)	①B、粗砂大の 白色鉾物粒 ②良好である がやや還元ざ み③にぶい黄 褐 10YR5/4	台 1			16	口縁部の破片の可能性もある。外面、ナナメハケ後、突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナナメ方向のハケメ、ナデ。	内面に線刻2本。
144	円筒	第21図 P L 15	①E 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 8.2)	①B、結晶片 岩を含む② 良好③明褐 7.5YR5/6	M 1			10	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ハケメ、ナデ。	
145	円筒	第22図 P L 15	①F 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 5.6)	①C、粗砂大の 鉾物粒② 良好③黄褐 10YR5/8	台 1			16	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナデ。突帯は突出度が弱く稜も明瞭でない。	

No	器種	挿 図 写 真	出土位置 ①平面 ②垂直	量 目	①胎土 ②焼成 ③色調	突 帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
146	円筒	第22図 P L 15	①E 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈7.4)	①B、粗砂大 の鉾物粒②良 好③明褐 7.5YR5/6	M 2			14	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデか。	
147	円筒	第22図 P L 15	①G 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈6.9)	①B、粗砂大 の黒色鉾物粒 ②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 2			14	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、タテ方向 のナデ。	
148	円筒	第22図 P L 15	①G - 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈5.5)	①B、黒色鉾 物粒②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 1			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ハケメ、 ナデ。突帯の下稜は丸みをお びる。	
149	円筒	第22図 P L 15	①G 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈5.9)	①B、黒色鉾 物粒②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 2			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	
150	円筒	第22図 P L 15	①G - 7 ②埋没土	残 口縁部 破片 高〈6.3)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6	M 2			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメヨ コ方向のハケメ。	
151	円筒	第22図 P L 15	①G 4、F 3・4 ②埋没土	残 胴部2 段破片 高〈7.8)	①B②良好③ 明褐 7.5YR5/6	台 2			18	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、タテ方向 のナデ。	
152	円筒	第22図 P L 15	①H 6 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈5.9)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②良好③橙 7.5YR6/6	台 1			15	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	
153	円筒	第22図 P L 15	①G 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈9.6)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②良好③明褐 7.5YR5/8	M 2 又は 台 2			17	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ハケメ、 ナデ。突帯は稜が不明瞭で ある。	
154	円筒	第22図 P L 15	①H 6 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈8.5)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②良好③橙 7.5YR6/6	台 1			14	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、タテ方向 のハケメ、ナデ。	
155	円筒	第22図 P L 15	①G 3 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈7.8)	①B、粗砂 大の鉾物粒 ②良好③橙 7.5YR6/6	M 1			15	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	
156	円筒	第22図 P L 15	①G - 7 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈10.4)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 2		円	7	突帯は突出度の低い形状を 呈する。外面、タテハケ後 突帯貼付、ヨコナデ。内面、 ハケメ、ナデ。	
157	円筒	第22図 P L 15	①G 3 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈6.3)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6	M 1			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	
158	円筒	第22図 P L 15	①H 6、G 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈6.4)	①C、粗砂大 の鉾物粒少量 ②良好③明赤 褐 5YR5/8	台 1			14	突帯の突出度低い。外面、 タテハケ後突帯貼付、ヨコ ナデ。内面、タテ方向のナ デ。	器面磨減。
159	円筒	第23図 P L 15	①G 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高〈10.2)	①B、粗砂 大の鉾物粒 ②良好③橙 7.5YR6/6	台 1		円	16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメタ テ方向のハケメ、ナデ。	
160	円筒	第23図 P L 15	①G 4、F 3 ②埋没土	残 口縁部 ～胴部 破片 高〈9.6)	①B、礫大の 鉾物粒少量混 入②良好③橙 5YR6/8	台 1			15	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメ方 向のハケメ。	

遺物観察表

No	器種	挿 写 真	出土位置 ①平面 ②垂直	量 目	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	突 帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
161	円筒	第 23 図 P L 15	①F 3・4、 出土地詳細 不明 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (10.0)	①B、粗砂大 の鉾物粒②良 好③橙 7.5YR6/6	台 2		円	14	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	器面磨滅し ている。
162	円筒	第 23 図 P L 15	①F 3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (10.5)	①B、粗砂大 の鉾物粒②良 好③橙 7.5YR6/6	台 1		円	15	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメタ テ方向のハケメ、ナデ。	
163	円筒	第 23 図 P L 15	①F 3・4、 G 4 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (8.1)	①A②良好③ 明褐 7.5YR5/6	M 2		円	8	外面、タテハケ後突帯貼付、 強いヨコナデ。内面、ナデ。	
164	円筒	第 23 図 P L 15	①出土地詳 細不明	残 胴部破 片 高 (8.7)	①B②良好③ 橙 5YR6/8	M 1			15	外面、タテハケ後突帯貼付、 強いヨコナデ。内面、ナナ メタテ方向のハケメをナデ 消す。	
165	円筒	第 23 図 P L 15	①G 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (8.0)	①B、結晶片 岩混入②良好 ③橙 7.5YR6/6	台 2		円	8	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、タテ方向 のハケメにナデを一部重ね る。	
166	円筒	第 23 図 P L 15	①F 2、出 土地詳細不 明 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (7.8)	①A②良好③ 橙 7.5YR6/6	M 1			16	外面、ナナメタテハケ後突 帯貼付、ヨコナデ。内面、 ハケメ、ナデ。	
167	円筒	第 23 図 P L 16	①B 4、G 2・3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (9.6)	①B、粗砂大 の鉾物粒②不 良、還元ぎ み③明赤褐 2.5YR5/6	M 1			9 16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメヨ コ方向のハケメ。	
168	円筒	第 23 図 P L 16	①G 2・3、 F 3 ②埋没土	残 口縁部 ～胴部 破片 高 (10.8)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②やや不良、 還元状態③明 赤褐 5YR5/6	台 2			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナナメタ テ方向のハケメ、ナデ。	
169	円筒	第 23 図 P L 16	①H 6 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (7.3)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②良好③橙 5YR6/8	台 1			16	外面、タテハケ後突帯貼付、 ヨコナデ。内面、ナデ。	
170	円筒	第 23 図 P L 16	①F 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (4.0)	①C、粗砂大 の鉾物粒少量 ②良好③橙 7.5YR6/8				16	外面、タテハケ後ヨコナデ。 内面、ナデ。	朝顔形の肩 部の可能性 もある。
171	円筒	第 24 図 P L 16	①F 3・4 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (8.0)	①B②良好③ 橙 7.5YR6/8			円	16	残存部上位は突帯直下。外 面、タテハケ。内面、ナデ。	
172	円筒	第 24 図 P L 16	①G 7、出 土地詳細不 明 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (6.7)	①B、粗砂 大の鉾物粒 ②良好③橙 7.5YR6/8			円	14	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
173	円筒	第 24 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 胴部破 片 高 (9.3)	①A②不良、 還元ぎみ③明 褐 7.5YR5/6			円	17	外面、タテハケ。内面、ナ ナメタテハケ、ナデ。	
174	円筒	第 24 図 P L 16	①B 4 ②埋没土	残 胴部破 片 高 (8.0)	①B、粗砂大 の白色鉾物粒 ②良好である がやや還元ぎ み③にぶい黄 褐 10YR5/4				15	外面、タテハケ。内面、ナ デ、ハケメ。	



箱石浅間山古墳

No	器種	挿 図 写 真	出土位置 ①平面 ②垂直	量 目	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	突 帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備 考
						形状	間 隔				
175	円筒	第 24 図 P L 16	①H 6 ②埋没土	残 胴部破 片 高 〈 4.8)	①C②良好③ 明褐 7.5YR5/8				16	外面、タテハケ。内面、ナ ナメタテハケ。	内面に線刻 あり。
176	円筒	第 24 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 胴部破 片 高 〈 4.7)	①B②良好③ 橙 7.5YR6/8				15	外面、タテハケ。内面、ナデ。	外面に線刻 あり。
177	円筒	第 24 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 胴部破 片 高 〈 5.2)	①A②良好で あるがやや還 元ざみ③明赤 褐 5YR5/8			円	14	外面、タテハケ。内面、ナデ。	器面は磨滅 している。
178	円筒	第 24 図 P L 16	①B 3 ②埋没土	残 胴部破 片 高 〈 3.5)	①C、粗砂大 の鉱物粒②良 好③橙 5YR6/8				16	外面、タテハケ。内面、ナデ。	外面に線刻 あり。
179	円筒	第 24 図 P L 16	①G 4、出 土地詳細不 明 ②埋没土	残 底部破 破片 高 〈 11.0)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6				8	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
180	円筒	第 24 図 P L 16	①G 4、出 土地詳細不 明 ②埋没土	残 底部破 破片 高 〈 10.3)	①B②良好、 やや軟質 ③橙 7.5YR6/8				16	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
181	円筒	第 24 図 P L 16	①F 8、F - 3・4、 出土地詳細 不明 ②埋没土	残 底部部 1/2 底 (15.0) 高 〈 6.4)	①C、粗砂大 の鉱物粒少量 ②良好③明赤 褐 5YR5/8				16	器肉は薄く、精美なつくり 方である。外面、タテハケ。 内面、ナデ。	
182	円筒	第 24 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 底部部 1/4 高 〈 11.8)	①B、結晶片 岩を含む②良 好、堅緻 ③橙 5YR6/6				13	外面、タテハケ。内面、ナ デ。外面には底部調整のため のヘラによる押さえ（ケズリ） がみられる。内面にはヘラケズリ。	
183	円筒	第 24 図 P L 16	①G - 7 ②埋没土	残 底部部 破片 高 〈 4.0)	①B、粗砂大 の白色鉱物粒 ②良好である がやや還元 ざみ③橙 7.5YR6/6				14	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
184	円筒	第 24 図 P L 16	①G - 7 ②埋没土	残 底部部 破片 高 〈 5.6)	①B②良好③ 明褐 7.5YR5/6				16	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
185	円筒	第 25 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 底部部 破片 高 〈 5.8)	①B②良好 ③橙 5YR6/8				14	器肉は全体に薄い。外面、 タテハケ。内面、ナデ。	器面は磨滅 している。
186	円筒	第 25 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 底部部 破片 高 〈 5.1)	①A②良好 ③橙 5YR6/8				15	外面、タテハケ。内面、ナデ。	
187	円筒	第 25 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 底部部 破片 高 〈 7.7)	①B②良好 ③橙 7.5YR6/6				15	底面は変形して、外方に延 びる。外面、タテハケ。内 面、ナデ。	
188	円筒	第 25 図 P L 16	①出土地詳 細不明	残 底部部 破片 高 〈 10.1)	①B、結晶片 岩を含む②良 好、やや軟質 ③橙 7.5YR6/8				16	底部は変形し、内側に折れ 返る。外面、タテハケ。底 部調整を施す。内面、ナデ か。	器面は磨滅 している。
189	円筒	第 25 図 P L 16	①B 4 ②埋没土	残 底部部 破片 高 〈 8.8)	①B、緑泥 片岩を含む ②良好③橙 7.5YR6/6				14	外面、タテハケ後ヘラ状工 具による底部調整。内面、 ナデ。	

遺物観察表

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
190	朝顔	25図 P L 16	①F 8 ②埋没土	残 胴部破 片 高 < 6.2)	①B、粗砂大 の鉾物粒②良 好③橙5YR6/8	台2			20	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。肩部には二次的にナナメハケを重ねている。内面、ナデ。一部にハケメ。	

箱石浅間山古墳出土形象埴輪観察表

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
191	形象 馬 (脚部)	第26図 P L 17	①出土地詳 細不明	残 破片 縦 < 8.9) 厚 1.8	①B、白色鉾 物粒②良好③ 明赤褐5YR5/6	16	脚の付根近くの破片であろうか。外面、タテハケ。内面、ナデ。	
192	形 象 馬? (不明)	第26図 P L 17	①B 3 ②埋没土	残 破片 縦 < 6.1) 横 < 6.0) 厚 2.4	①A、粗砂大 の砂粒少量② 良好③にぶい 黄橙10YR7/4	10	馬の体部破片の可能性を考えたいが小破片のため確定しがたい。器肉は2.3cmと厚い。外面に円形の付属品が剥落した痕跡がある。内面、ナデ。	
193	形象 馬 (鞍橋)	第26図 P L 17	①B 4 ②埋没土	残 破片 縦 < 5.3) 横 < 3.3) 厚 2.1	①B、礫大の チャートを含 む②良好③橙 5YR6/8	8	本体に貼り付いていた板状の付属品である。上端の厚さ1.5cm、本体付着部分2.5cmを測る。器面にはナデを施す。	
194	形象 馬 (鞍橋?)	第26図 P L 17	①H 6 ②埋没土	残 破片 縦 < 8.0) 横 < 3.3) 厚 1.4	①B②良好 ③橙 5YR6/8	12	外縁が弧状を呈する板状品である。馬の鞍橋か。端部の平坦面は厚さ1.0cmを測る。器面には一部にハケメを残す他はナデを施す。	
195	形象 器財盾 または鞆	第26図 P L 17	①H 6 ②埋没土	残 破片 縦 < 5.5) 横 < 6.8) 厚 1.3	①B、結晶 片岩を含む ②良好③橙 5YR6/8	7	形状は筒状を呈すると思われる。2条1単位のヘラ描き沈線を斜格子状に配している。地にはハケメを施す。内面、ナデ。	家の一部の可能性もあるか。
196	形象 家 (上屋根)	第26図 P L 17	①出土地詳 細不明	残 破片 縦 < 12.4) 横 < 10.8) 厚 1.5~2.6	①B、結晶片 岩を含む②良 好、やや軟質 ③橙 5YR6/8	11	上屋根の破風部分の破片である。端部はやや肥厚。外方に折れ曲がる。外面、ヘラ描き沈線による斜方向の平行線が配されている。	器面は磨滅している。
197	形象 家 (基部)	第26図 P L 17	①F 8 ②埋没土	残 破片 縦 < 6.3) 厚 1.1~2.6	①B、白色鉾 物粒を含む② 良好③橙 7.5YR6/6		壁あるいは基部の一部であろう。全体が楕円形に作られ、四隅にあたる部分にタテ方向に断面台形の突帯を貼り付け、壁面の交換点を強調したものと考えられる。突帯周辺にはナデが施されているが一部タテハケが残る。	器面は磨滅している。
198	形象 家 (基部)	第26図 P L 17	①F 3・G 4 ②埋没土	残 破片 縦 < 6.6) 横 < 10.3) 厚 1.4~2.2	①B、白色鉾 物粒②良好③ 橙 7.5YR6/6	16	板状の破片である。家の壁あるいは基部を構成していたものか。外面、タテハケ。内面、ナデ。	
199	形象 人物 (上着裾)	第26図 P L 17	①D 8 ②埋没土	残 破片 縦 < 12.0) 厚 1.4~4.3	①B②良好 ③橙 7.5YR7/6		円筒状の本体から斜め下方に外反する裾部が付く。外面、ていねいにナデを施している。	
200	形象 家 (基部)	第27図 P L 17	①F 3、G 3 ②埋没土	残 破片 縦 < 10.4) 厚 1.0~2.4	①B、チャー トをはじめと した礫大・粗 砂大の砂粒② 良好③明赤褐 5YR5/6	14	家の壁あるいは基部の一部と考えられる。全体を長円形に作り、四方にタテ方向の突帯を貼り付け四隅を表現したのと考えられる。外面、タテハケ。内面、ナデ。	
201	形象 家 (上屋根)	第27図 P L 17	①F 3 ②埋没土	残 破片 縦 < 12.6) 横 < 16.4) 厚 1.4	①B、粗砂大 の砂粒②良好 であるがやや 還元ざみ③明 赤褐 5YR5/8		上屋根の一部と考えられる。外面にはヘラ描き沈線による鋸歯文が配されている。鋸歯文の大きさは均等ではないようである。内面、ナデ。	外面に赤色塗彩。

No	器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	ハケメ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
202	形象家 (上屋根)	第27図 P L 17	①出土地詳細不明	残破片 縦 <12.0> 横 <24.4> 厚 1.6	①B、礫・粗砂大の砂粒 ②良好③橙 5YR6/8	8 ・ 14	外面、ハケメの上にヘラ描き沈線による弧線が描かれている。鱗状の文様を構成していたか。内面にもハケメ。	
203	形象家 (基部)	第27図 P L 17	①出土地詳細不明	残破片 縦 <16.8> 厚 2.2	①B、礫・粗砂②良好③明赤褐 5YR5/8	8	家の基部破片と考えられる。器肉は厚い。底面直上とこれより13cm上方の2箇所ヨコ方向に延びる突帯がめぐっている。また、下位突帯近くには円形の透孔が配されている。外面、タテハケ。内面、ヨコ方向のハケメ。	

箱石浅間山古墳出土土器観察表

No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
204	土師質 土器 杯	第28図 P L 18	①出土地詳細不明	残 1/3 口 (11.2) 底 (5.2) 高 3.2	①粗砂少量②酸化・良好 ③明褐 7.5YR5/8	左回転ロクロ成形。	
205	土師質 土器 杯	第28図 P L 18	①出土地詳細不明	残 1/4 口 (11.8) 底 (6.8) 高 2.2	①粗砂少量②酸化・良好 ③にぶい黄橙 10YR6/4	右回転ロクロ成形。底部は糸切り離し後無調整。	器面はやや磨滅している。
206	陶器 播り鉢	第28図 P L 18	①出土地詳細不明	残 口縁部破片 高 <6.5>	①白色鉾物粒を少量混入②還元・堅緻③赤褐 10R5/4	外面には断面三角形の突帯がめぐる。内面には櫛状工具による擦り面がつけられている。	
207	陶器 徳利 (尾呂)	第28図 P L 18	①出土地詳細不明	残 破片 高 <5.3>	①夾雑物を微量混入②還元③(内)浅黄 5YR7/3	胴部下半の破片。底部間近か。外面に茶色の釉がかかる。瀬戸・美濃産。	18世紀。
208	陶器 大甕	第28図 P L 18	①F 3 ②埋没土	残 破片 高 <3.8>	①黒色鉾物粒を微量含む ②還元・堅緻③暗赤褐 5YR3/4	常滑。底部間近の破片である。器肉は1.1cmと厚い。	
209	軟質陶器 播り鉢	第28図 P L 18	①B 4 ②埋没土	残 胴部破片 高 <6.7>	①礫大の黒色鉾物粒と細砂大の白色鉾物粒を含む②還元・軟質③黄灰 2.5Y5/1	胴部は斜め上方に向かって立ち上がると思われる。	
210	軟質陶器 播り鉢	第28図 P L 18	①B 3 ②埋没土	残 胴部破片 高 <6.9>	①細砂大の白色鉾物粒を含む②還元・軟質③灰 5Y4/1	胴部は斜め上方に向かって立ち上がると思われる。内面は使用によると思われる磨耗痕が認められる。	
211	軟質陶器 内耳鍋	第28図 P L 18	①出土地詳細不明	残 口縁部破片 高 <6.1>	①あまり夾雑物を含まない②還元・良好③暗灰黄 2.5Y5/2	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。胴部との境は内外面とも弱い稜を有するだけで明瞭な区分はみられない。内外面ともナデ、ヨコナデ。	
212	軟質陶器 内耳鍋	第28図 P L 18	①G 4 ②埋没土	残 口縁部～ 胴部破片 高 <12.3>	①粗砂少量②還元・良好 ③黄褐 2.5Y5/3	口縁部は内面に両を有し、短く斜め上方に向かって立ち上がる。胴部は深い。口縁部、ヨコナデ。胴部、ナデ。	
213	軟質陶器 内耳鍋	第28図	①E 8 ②埋没土	残 胴部破片 高 <5.5>	①細砂大の黒色鉾物粒を含む②還元・良好③灰白 2.5Y8/2	斜め上方に向かって立ち上がる。底部は平底である。外面、ナデ、押さえ。内面、ヨコ方向のナデ。	外面に煤付着。
214	瓦 軒先	第28図	①F 3 ②埋没土	残 破片	①大粒の夾雑物は無い②還元・堅緻③灰 5Y5/1	瓦頭の文様は三巴を中心に周囲に八曜を配している。	



遺物観察表

不動山古墳出土埴輪観察表

No	器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯			透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔					
001	円筒	第46図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 ～胴部 2段1/2 口 (29.8) 高 (41.0)	①B②良好 ③橙 5YR7/6	台2	口 胴	15.9 13.2	円	ヨ 10 ナ 11	口縁部は緩やかに外反、先端は器肉薄くなり尖りぎみ。外面は各段ともB種ヨコハケ。口縁部の先端のみヨコナデ。内面、胴部下段がナデ。これより上位はナナメヨコ方向のハケメ。	外面、口縁部、胴部上段に赤色塗彩。口縁部の突帯寄りに小透孔。直径1.8cm。
002	円筒	第46図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 上位 1/3 口 (32.0) 高 (4.0)	①C、粗砂大の白色鉍物粒 ②良好③橙 7.5YR7/6					ヨ 7	先端は器肉を薄くし、明瞭な面をもたない。外面、ナナメヨコハケにヨコナデを重ねる。内面、ヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。
003	円筒	第46図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 ～胴部 1/4 口 (27.8) 高 (27.0)	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②良好だがやや軟質③橙 7.5YR7/6	台2	口 胴	11.7 13.8		ヨ 13 ナ 17 ・ 13	口縁部は先端が緩やかに外反、平坦面をもつ。外面、ナナメハケ後突帯貼付。その後、各段ともB種ヨコハケ。各段とも2回に分けて右回転方向に工具を動かす。口縁部先端はヨコナデ。内面は比較的上位まで粘土紐の接合痕を残す。器面にはナナメヨコ方向のハケメ。	外面赤色塗彩。
004	円筒	第46図 P L 27 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 ～胴部 1/3 口 (29.0) 高 (17.0)	①B、粗砂大の鉍物粒②良好だがやや軟質③橙 7.5YR7/6	台1	口	14.0	半円	ヨ 9	口縁部は先端が緩やかに外反して立ち上がる。平坦面をなす。外面、2回に分けてB種ヨコハケ。先端はヨコナデ。内面、一部にハケメを残すがナデ。	外面に赤色塗彩。口縁部外面に線刻。
005	円筒	第46図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 上半 1/3 口 (26.0)	①B、粗砂大のチャート②良好③橙 5YR6/6					ヨ 17 ナ 12	先端は狭い面をなす。外面タテハケ後上半右回りにヨコハケを重ねる。内面、ヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。火熱を受けて脆弱になっている。
006	円筒	第46図 P L 27 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部1 段1/2 高 (18.0)	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②良好③橙 5YR7/6	M1			円	ヨ 14 ナ 14	上下両段に円形の透孔を配する。外面2段とも突帯貼付後やや粗雑なヨコハケ。内面、ナデ。	外面に赤色塗彩。
007	円筒	第46図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段1/3 高 (21.6)	①B、粗砂大の砂粒②良好 ③にぶい橙 7.5YR7/4	M1	胴	12.9	円	ヨ 14 ナ 12	胴部中部の部位で両段とも円形の透孔を配する。外面、タテハケを残すやや粗雑なB種ヨコハケ。右回りに工具が動いている。内面、粘土紐の接合痕を明瞭に残しながらのハケメ。	
008	円筒	第47図 P L 27 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 基底部 ～胴部1 段1/3 高 (19.5)	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②良好③にぶい橙 7.5YR7/4	M1			円	ヨ 14 ナ 14	上下両段とも右回転方向にヨコハケ。一部タテハケを消しきっていないところもある。内面、下位には粘土紐の接合痕を残し、ナデ。	
009	円筒	第47図 P L 28 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (17.8)	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②不良、還元 ③灰黄褐 10YR5/2	M2				ナ 4	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ナナメヨコハケ。一部にナデ。	

No	器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
010	円筒	第47図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 基底部 ～胴部 第2段 1/2 底 23.8 高 (37.4)	①B、粗砂大の白色鈹物粒 ②良好③にぶい橙 7.5YR7/4	M 1	基底 胴 13.3	上下 円	ヨ 13 ケ 11	基部粘土板の高さは7cm。 外面、タテハケ後突帯貼付。 胴部2段はともにB種ヨコハケ。内面、基底部はナデ。 胴部はナデ、ハケメ。	外面、胴部第2段と第2突帯に赤色塗彩。
011	円筒	第47図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段1/2 高 (15.6)	①B、粗砂大の白色鈹物粒 ②良好③橙 7.5YR7/6	M 1		円	ヨ 12 ケ 13	上下段ともタテハケ後突帯貼付。一部にヨコハケが重ねられる。内面、ナナメタテ方向のハケメ。	下段は基底部か。
012	円筒	第47図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 基底部 1/2弱 底 (19.0) 高 (15.1)	①B、粗砂大の白色鈹物粒 ②普通③橙 7.5YR7/6				ケ 16	外面、タテハケ。残存部最上位に突帯貼付時のヨコナデ。内面、ナデ。	下端に乾燥時に入った亀裂あり。
013	円筒	第47図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 上半破 片 高 (7.6)	①B、粗砂大のチャート、 黒色鈹物粒② 良好、やや軟質③にぶい橙 7.5YR7/4				ヨ 14	先端はやや外傾ぎみに立ち上がるか。幅の狭い平坦面をなす。内外面とも幅広くヨコナデを施す。外面、ナデの下位にヨコハケか。	外面に赤色塗彩。
014	円筒	第47図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 上半破 片 高 (5.6)	①B、粗砂大の黒色鈹物粒 ②良好③橙 7.5YR7/6				ヨ 14	弱く外傾して立ち上がる。先端内面に弱い稜をなす。内面とも先端にヨコナデ。その下位にナナメヨコハケを施す。	外面に赤色塗彩。
015	円筒	第47図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 上半破 片 高 (7.4)	①B、粗砂大のチャート、 細砂大の白色鈹物粒②良好 ③橙 5YR6/6				ヨ 10 ケ 9	先端は内側がそがれやや器肉が薄くなる。外面、先端にヨコナデ。以下はヨコハケ。内面、ナナメヨコ方向のハケメ。	
016	円筒	第47図 P L 28 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (10.8)	①B、粗砂大の白色鈹物粒 多い②良好、 やや還元ぎみ ③橙7.5YR7/6	M 2		円?	ケ 7	外面、粗い単位のナナメタテハケ。突帯貼付後、ヨコナデ。内面、粗雑なナデ。上段に透孔の下位が一部残存。	外面に赤色塗彩。線刻あり。
017	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (10.5)	①B、粗砂、 粗砂大の白色鈹物粒②やや不良、還元ぎみ③にぶい橙 5YR6/4	台 2		円	ナ 8	外面、ナナメタテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。下段はハケメを一部ナデ消している。内面、タテ方向のナデ。	外面に赤色塗彩。上段に線刻2箇所。
018	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (8.6)	①A、粗砂大のチャート、 白色鈹物粒② やや不良、還元ぎみ③橙 5YR7/6	台 1		円	ナ 10	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ハケメ、ナデ。	外面、赤色塗彩か。
019	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (12.3)	①B、礫大のチャート②良好、やや軟質 ③橙7.5YR7/6	不明		円	ヨ 12 ケ 14	上段にはヨコハケが施されている。内面、ナナメ方向のハケメ。	外面上段に赤色塗彩。器面は全体に磨滅。
020	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2 段破片 高 (14.5)	①B、礫大の砂粒②良好③橙 7.5YR7/6	台 1			ヨ 6	外面、突帯貼付後右回転方向にB種ヨコハケ。工具はハケの一本が幅広の木葉状を呈するもの。突帯の上辺にもハケメを施す。内面、ナデか。	外面に赤色塗彩。内外面は磨耗。

遺物観察表

No	器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
021	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 < 8.9	①B、礫大のチャート②良好③にぶい橙7.5YR7/4	M 2		半円	珶 14	外面、B種ヨコハケ。内面、ナナメハケ。一部をナデ消している。	
022	円筒	第48図 P L 28	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 12.3	①B、礫大の砂粒②やや軟質か③橙7.5YR7/6	台 1			珶 8	器形は中位でやや乱れている。外面、両段ともB種ヨコハケを施す。内面、ナデか。	器面は著しく磨滅している。
023	円筒	第48図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 10.3	①C、粗砂大の白色鉱物粒②良好③橙5YR6/6	M 2		円?	珶 12 珶 12	上段に透孔あり。外面、タテあるいはナナメタテハケ後突帯貼付。その後、右回転方向にB種ヨコハケ。内面、ていねいなナデ。	
024	円筒	第48図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 13.5	①B、礫大・粗砂大の砂粒②良好③にぶい黄橙10YR7/4	M 1		円	珶 9 珶 10	外面、タテハケ後、突帯貼付。その後上段のみB種ヨコハケ。	
025	円筒	第48図 P L 29 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 13.2	①B、礫大のチャート②不良、やや還元③にぶい橙7.5YR7/4	台 1			ハケ 8	突帯は後にやや丸みをおびる。外面、ナナメヨコ方向のハケメ後突帯貼付。ヨコナデ。内面、ナデ、一部にハケメ。	外面に赤色塗彩。
026	円筒	第48図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 11.7	①B、礫大の砂粒②良好、やや還元③橙7.5YR7/6	台 2			珶 9	外面、右回転方向のB種ヨコハケ。内面、ナナメタテ方向のハケメ。	器面、著しく磨滅している。
027	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部2段破片 高 < 17.0	①C、礫大の鉱物粒少量②やや軟質③にぶい橙7.5YR7/4	台 1		円	珶 6	下段に透孔あり。突帯は下稜が丸みをおびる。突帯貼付後右回転方向にB種ヨコハケ。工具はハケの一本が広い木葉状のものを使用している。一次調整のタテハケ、内面のナナメ方向のハケメにも同様の工具を使用している。下段の静止痕はやや傾斜している。	
028	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 < 8.8	①C、粗砂大の砂粒②良好③橙7.5YR7/6	台 1				突帯の剥離部分の胴部外面には突帯貼付の目安となるヘラ描き線がみられる。	器面、著しく磨滅。
029	円筒	第49図 P L 29		残 胴部2段破片 高 < 13.5	①C、粗砂大の白色鉱物粒②やや不良、還元③橙2.5YR6/8	台 1			珶 17	外面、突帯貼付後上下段ともB種ヨコハケ。上段は2回以上に分けて調整している。上位のヨコハケは右回転方向に工具が動き、静止痕を残す。内面、ナデ、上位にヨコ方向のハケメを残す。	上段は口縁部か。
030	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 < 10.3	①C、粗砂大の砂粒②やや軟質③橙5YR6/8			半円	珶 14	残存最上位、突帯の剥離痕。突帯に接して半円形の透孔を配す。外面、タテハケ。内面、ナデ。	
031	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 < 8.3	①B、粗砂大の白色鉱物粒②やや不良、還元③橙5YR6/6				珶 20	外面、タテハケ後突帯貼付。突帯は剥落、胴部外面に突帯貼付のための幅広いヘラ描きあり。内面、ナナメタテ方向のハケメ。	

不動山古墳

No	器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
032	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 基底部 破片 高 (13.3)	①B、粗砂大の砂粒②良好 ③にぶい橙 7.5YR7/4				ㄧ 12	外面、タテハケ後突帯貼付。 内面、ナナメ方向のハケメ、ナデ。突帯は剥離しているが、胴部外面に突帯貼付の目安となるやや幅広のヘラ描きあり。	
033	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 破片 高 (5.3)	①B、礫大の鉾物粒②良好 ③橙 5YR7/8				ㄱ 10	外面、ヨコハケ。左回転方向に工具が動いているか。内面もハケメ。	
034	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 破片 高 (11.7)	①C、粗砂大の鉾物粒少量 ②良好、やや軟質③橙 5YR7/8				ㄱ 8	外面、右回転方向にB種ヨコハケ。2回に分けて調整を施す様子が見られる。工具の幅は6cm以上。	外面に赤色塗彩。
035	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (4.0)	①B、粗砂大の鉾物粒②良好③橙 5YR6/6				ㄱ 10	外面、ヨコハケ。内面ナデ、ハケメ。	
036	円筒	第49図 P L 29 ・30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (5.6)	①C、礫大のチャート②やや軟質③橙 7.5YR7/6				ㄱ 14	外面、ヨコナデ。	外面に線刻あり。赤色塗彩。
037	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (4.0)	①B、粗砂大の砂粒②やや軟質③橙 7.5YR7/4				ㄱ 10	外面、ヨコハケ。	外面に赤色塗彩。
038	円筒	第49図 P L 29	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (4.1)	①B、礫大のチャート②やや軟質③橙 7.5YR7/6				ㄱ 10	外面、ヨコハケ。	外面に赤色塗彩。
039	円筒	第49図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (8.4)	①C、粗砂大の鉾物粒②良好③にぶい黄橙 10YR7/3			円?	ㄱ 14	外面、ヨコ方向のナデ、あるいは弱いタッチのヨコハケか。内面タテ方向のナデ。	
040	円筒	第49図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (9.0)	①B、粗砂大の鉾物粒②やや不良、還元 ③橙 5YR7/6				ㄧ 8	残存部最上位にはヨコナデがなされており、直上に突帯がめぐっていたと思われる。外面、タテハケ。内面、ヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。
041	円筒	第49図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 胴部破片 高 (6.4)	①B、粗砂大の鉾物粒②良好③にぶい黄橙 10YR7/3				ㄧ 12	外面、タテハケ。	内面は剥離している。
042	円筒	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 破片 高 (7.6)	①C、粗砂大の鉾物粒②良好③にぶい黄橙 10YR7/3				ㄧ 8	外面、タテハケ。内面、ヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。
043	円筒	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 破片か 高 (8.7)	①B、粗砂大の鉾物粒②良好③にぶい黄橙 10YR7/3				ㄧ 14	外面、タテハケ。内面、ナナメヨコ方向のハケメか。	内面は著しく磨滅。
044	円筒	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 基底部 下位 1/4 底 高 (12.0) (6.7)	①B、礫大のチャート②良好③にぶい橙 5YR7/4				ㄧ 14	基部粘土板の接合部分で分離している。外面、タテハケであるが器面がほとんど剥落している。内面、ナデ、一部にナナメヨコハケ。	



遺物観察表

No	器種	挿写真	出土位置 ①平面 ②垂直	量目	①胎土 ②焼成 ③色調	突帯		透孔 形状	ハケ 本/2cm	成・整形の特徴	備考
						形状	間隔				
045	円筒	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 底部破片 高 <10.0>	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②やや軟質③にぶい橙 7.5YR7/4				7 14	外面、タテハケ。内面、基部粘土板製作時の圧痕、その後のナデ。	基底面は一部歪んでいる。
046	朝顔	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部破片 高 <6.8>	①B、礫大・粗砂大のチャート、細砂大の白色鉍物粒 ②良好、やや還元ぎみ③橙 5YR7/6				7 内ヨ 8	外傾著しく立ち上がり、先端には平坦な面をなす。内外面とも先端にヨコナデ。以下、ナナメタテ方向のハケメ。	
047	朝顔	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部破片 高 <6.8>	①B、粗砂大の砂粒②良好 ③にぶい黄橙 10YR7/4				7 14 ・ 12	外面、タテハケ。内面、ナナメヨコ方向のハケメ。	外面に指頭圧痕あり。製作時の補修痕か。
048	朝顔	第50図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 1/3 高 <13.1>	①B、礫大のチャート②良好だがやや軟質③橙 7.5YR7/6	M 3			ヨ 12 7 12	外面、上段ナナメタテハケ、下段はヨコ方向のハケメ。内面、ヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。外面やや磨滅。
049	朝顔	第50図 P L 27	①出土地詳細不明 ②私有堀埋没土	残 頸部～肩部 1/3 高 <7.4>	①B、粗砂大の白色鉍物粒 ②良好③にぶい橙 5YR7/4	M 2			7	外面、タテ方向のハケメ後突帯貼付、ヨコナデ。内面、ヨコ方向のハケメ、ナデ。	外面に赤色塗彩。
050	朝顔	第50図	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 中位 1/3 高 <5.6>	①B、礫大のチャート②良好だがやや還元ぎみ③橙 5YR7/6				7	外面、タテ方向のハケメ後突帯貼付。内面、ナナメヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。
051	朝顔	第50図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 口縁部 中位 1/2 高 <8.9>	①B②良好③にぶい黄橙 10YR6/3	台 3			7 19 ・ 14	外面、タテハケ後突帯貼付、ヨコナデ。下段は上半にヨコナデの前にナナメ方向のナデが施されている。内面、ナナメヨコ方向のハケメ、ナデ。	
052	朝顔	第50図 P L 27	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 頸部～肩部 1/3 高 <11.6>	①B、粗砂大の鉍物粒②良好だがやや軟質③にぶい黄橙 10YR7/4	M 1			ナメ 8	頸部に突帯をめぐらす。外面、ナナメヨコ方向のナデ。内面、肩部がナデ。頸部はヨコ方向のハケメ。	外面に赤色塗彩。
053	朝顔	第50図 P L 30	①出土地詳細不明 ②周堀埋没土	残 肩部破片 高 <5.4>	①C、礫大のチャート、粗砂大の砂粒②やや軟質③にぶい黄橙 10YR7/3				ヨ 14	頸部直下の部位で突帯は剥落している。外面、ナナメヨコ方向のハケメ。内面、はナデ。	

不動山古墳出土土器観察表

No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
054	須恵器 甕	第 52 図 P L 30	①出土地詳細 不明	残 口縁部破 片	①粗砂大のチャートを微 量含入②還元③黄灰 2.5Y5/1	器肉一定の厚さで焼き締まっている。 外面ハケメをナデ消す。内面もナデ。	
055	須恵器 甕	第 52 図 P L 30	①出土地詳細 不明	残 胴部破片	①粗砂大の白色鉍物粒を 微量含む②還元③褐灰 10YR5/1	焼き締まっている。外面、タタキメ。 内面、ナデ。	

不動山古墳隣接地出土土器観察表

No	土器種別 器種	挿図 写真	出土位置 ①平面 ②垂直	残存状況 法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形の特徴	備考
001	土師器 杯	第 53 図	①出土地詳細 不明	残 口縁部破 片 口 (14.4) 高 < 4.4)	①粗砂大の砂粒を含む② 良好③橙 5YR6/8	口縁部は内側に稜をもち短く外方に立 ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外 面は下半部をヘラケズリ。内面には棒 状工具によるミガキを施す。	
002	土師器 杯	第 53 図	①出土地詳細 不明	残 口縁部～ 胴部下位 破片 口 (13.2) 高 4.7	①粗砂大の鉍物粒②酸化 ・良好③明赤褐 5YR5/8	いわゆる内斜口縁を呈し、口縁部は内 面に明瞭な稜をなし外方に屈折する。 口縁部はヨコナデ。底部は上位にナデ の面を残す他はヘラケズリ。内面の 上半には棒状工具によるミガキを施す。	
003	土師器 杯	第 53 図 P L 30	①出土地詳細 不明	残 完形 口 12.0 高 5.7	①白色鉍物粒はじめ粗砂 大の砂粒混入②酸化・堅 緻③橙 5YR6/8	口縁部は丸底の底部から彎曲して立ち 上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面 はヘラケズリ。内面は上半に棒状工 具によるミガキを施す。	
004	土師器 壺	第 53 図 P L 30	①出土地詳細 不明	残 口縁部欠 損 高 (9.8)	①粗砂大の鉍物粒を混入 する②酸化・良好③橙 5YR6/6	胴部は大きく横に張り出す形状。丸底。 外面の上位には棒状工具によるミガキ が施される。中位から底部はヘラケズ リ。内面はナデ。口縁部欠損後も二次 的に利用か。	
005	土師器 高杯	第 53 図	①出土地詳細 不明	残 破片 口 22.4 高 < 5.5)	①精選、細砂大の鉍物粒 混入②良好・堅緻③明赤 褐 5YR5/8	杯部破片。口縁部は斜め上方に向かっ て立ち上がる。内外面とも棒状工 具によるミガキを施す。	
006	縄文土器	第 53 図	①出土地詳細 不明	残 破片		横位の沈線と R L 縄文が施文される。	



# 写真図版







箱石浅間山古墳の位置 (○印)



PL2箱石浅間山古墳の調査



1 調査の状況（西から）



2 箱石浅間山古墳の現状（2001年1月）（東から）





1 墳丘の検出状況（南西から）



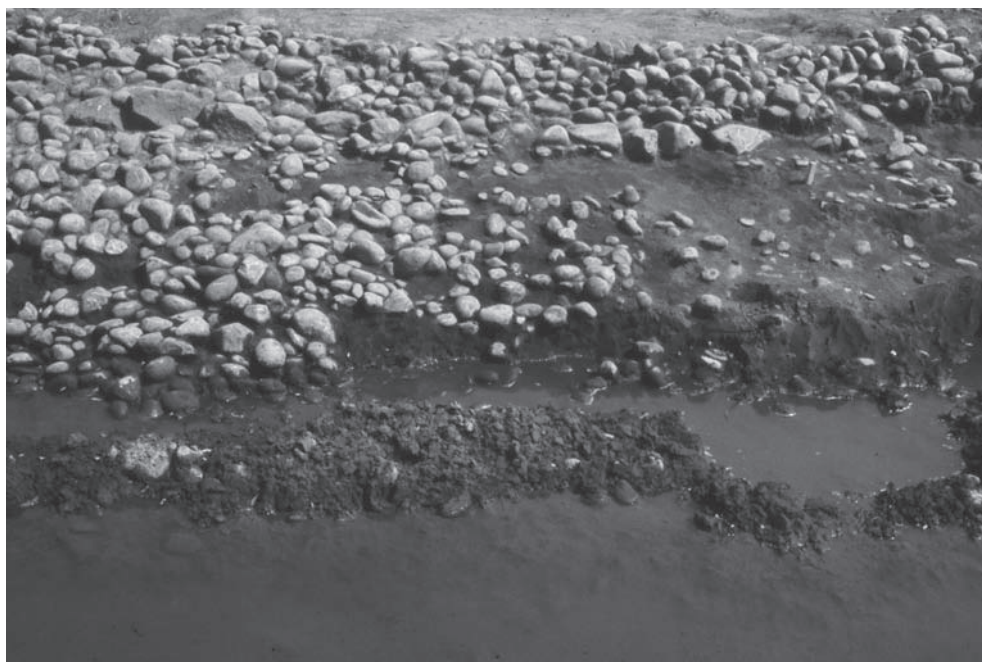
2 墳丘の検出状況（西から）



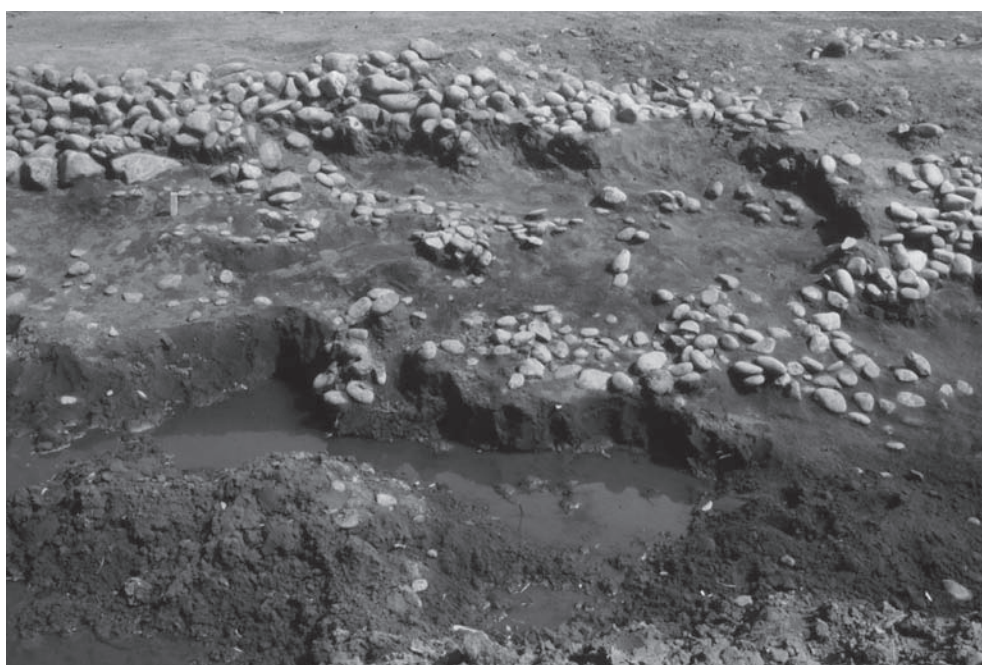
3 葺石の検出状況（南西から）



# PL4箱石浅间山古墳の調査



1 葺石の検出状況（西から）



2 葺石の検出状況（西から）



3 葺石の検出状況（西から）





1 葺石の検出状況（西から）



2 葺石の検出状況（西から）



3 葺石の検出状況（南から）



PL6箱石浅間山古墳の調査



1 葺石の検出状況（南から）



2 葺石の検出状況（南東から）



3 葺石の検出状況（北東から）

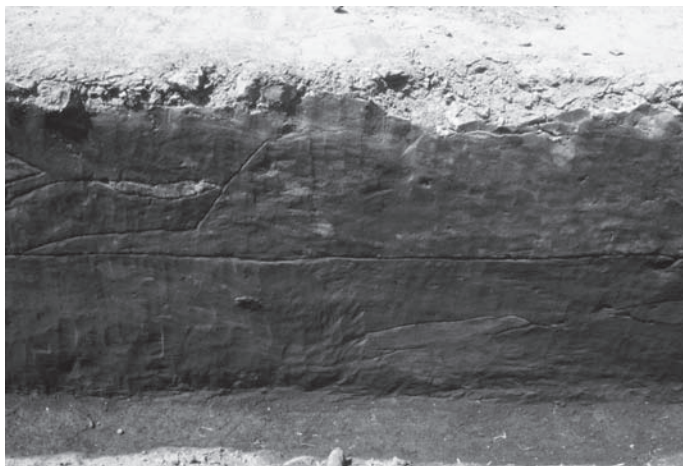




1 南北トレンチ土層断面 (南東から)



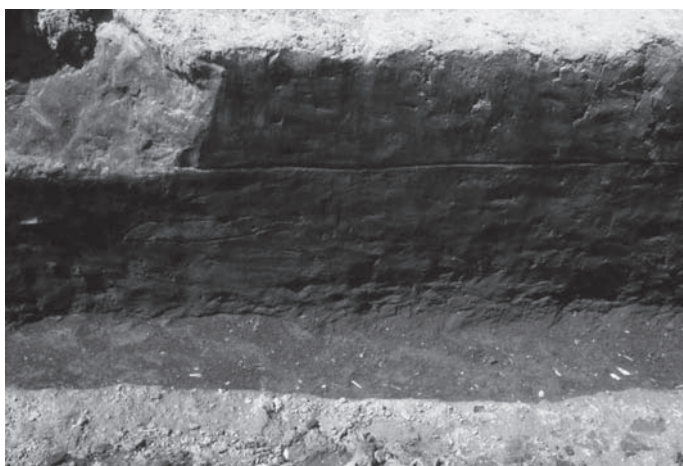
2 南北トレンチ土層断面 (南東から)



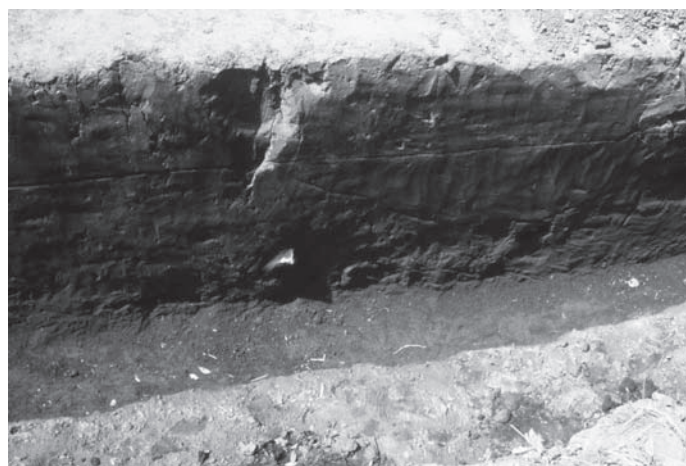
3 南北トレンチ土層断面 (東から)



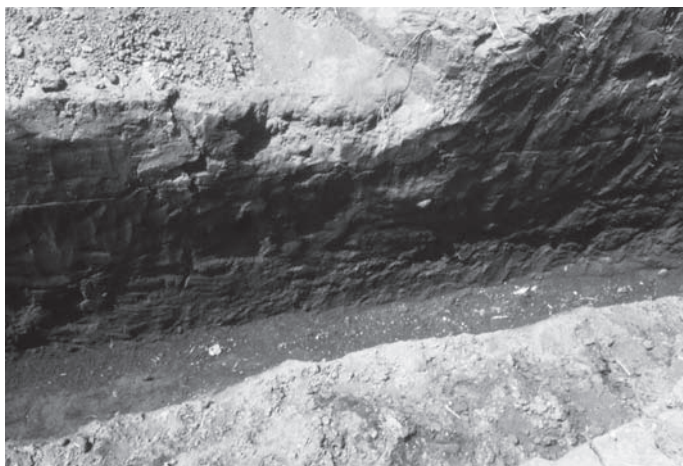
4 南北トレンチ土層断面 (東から)



5 南北トレンチ土層断面 (東から)



6 南北トレンチ土層断面 (東から)



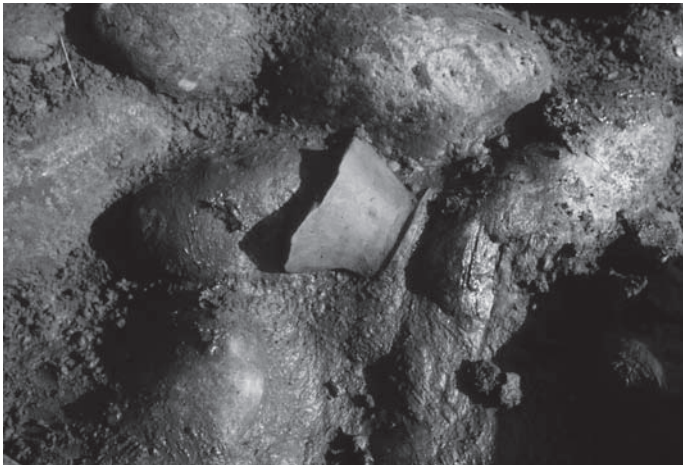
7 南北トレンチ土層断面 (東から)



8 南北トレンチ土層断面 (南東から)



PL8箱石浅間山古墳の調査



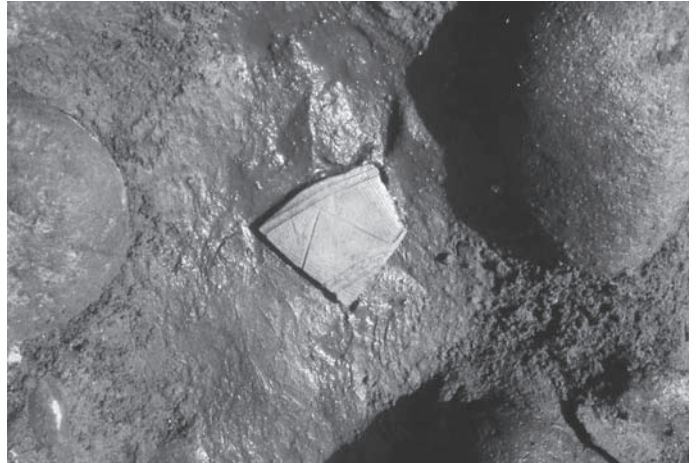
1 遺物の出土状況 (1)



2 遺物の出土状況 (2)



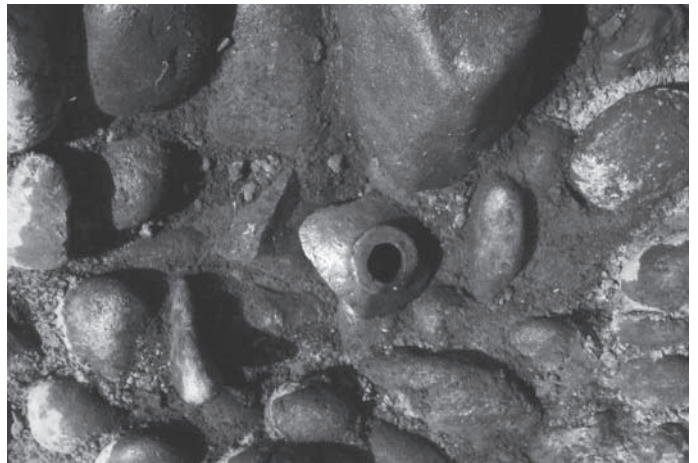
3 遺物の出土状況 (3)



4 遺物の出土状況 (4)



5 遺物の出土状況 (5)



6 遺物の出土状況 (6)

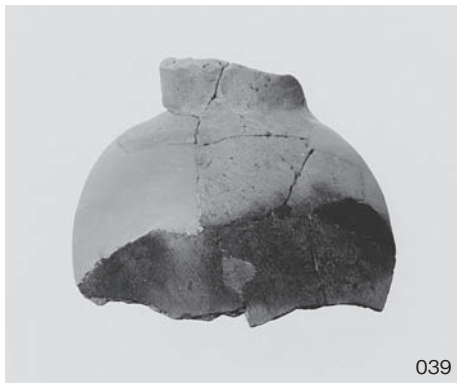


7 遺物の出土状況 (7)



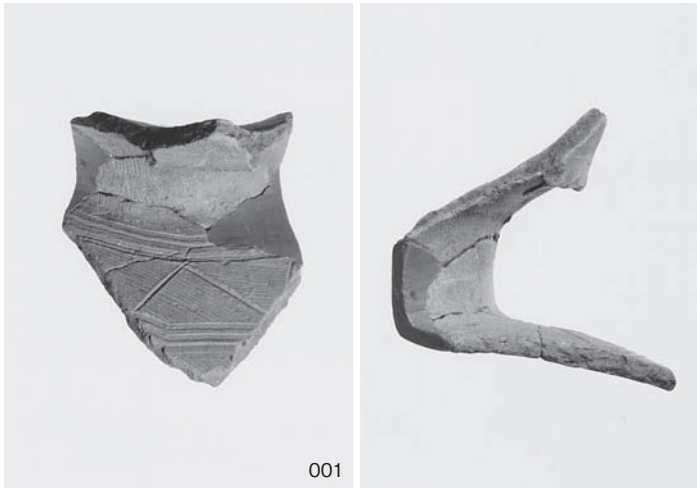
8 遺物の出土状況 (8)



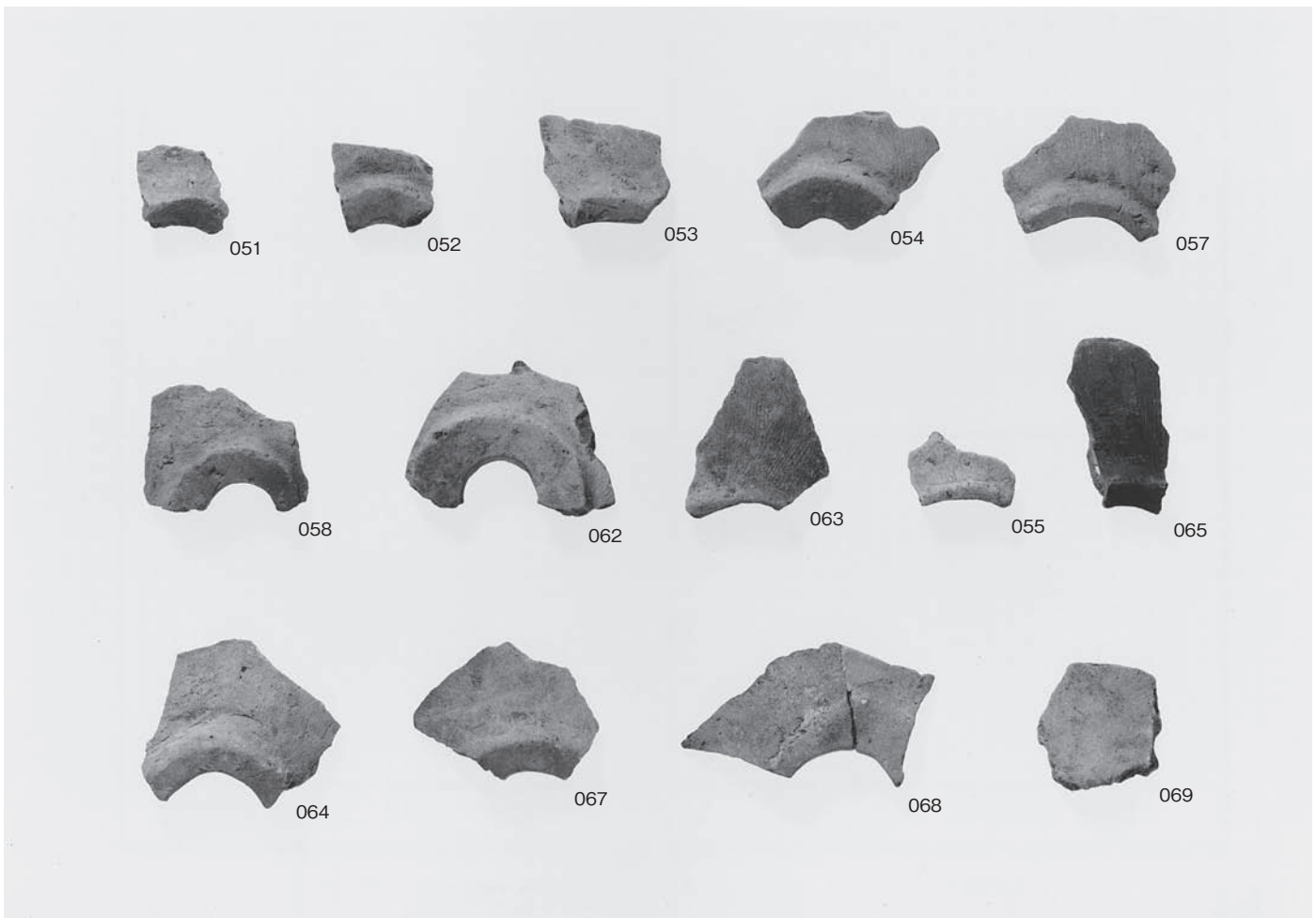




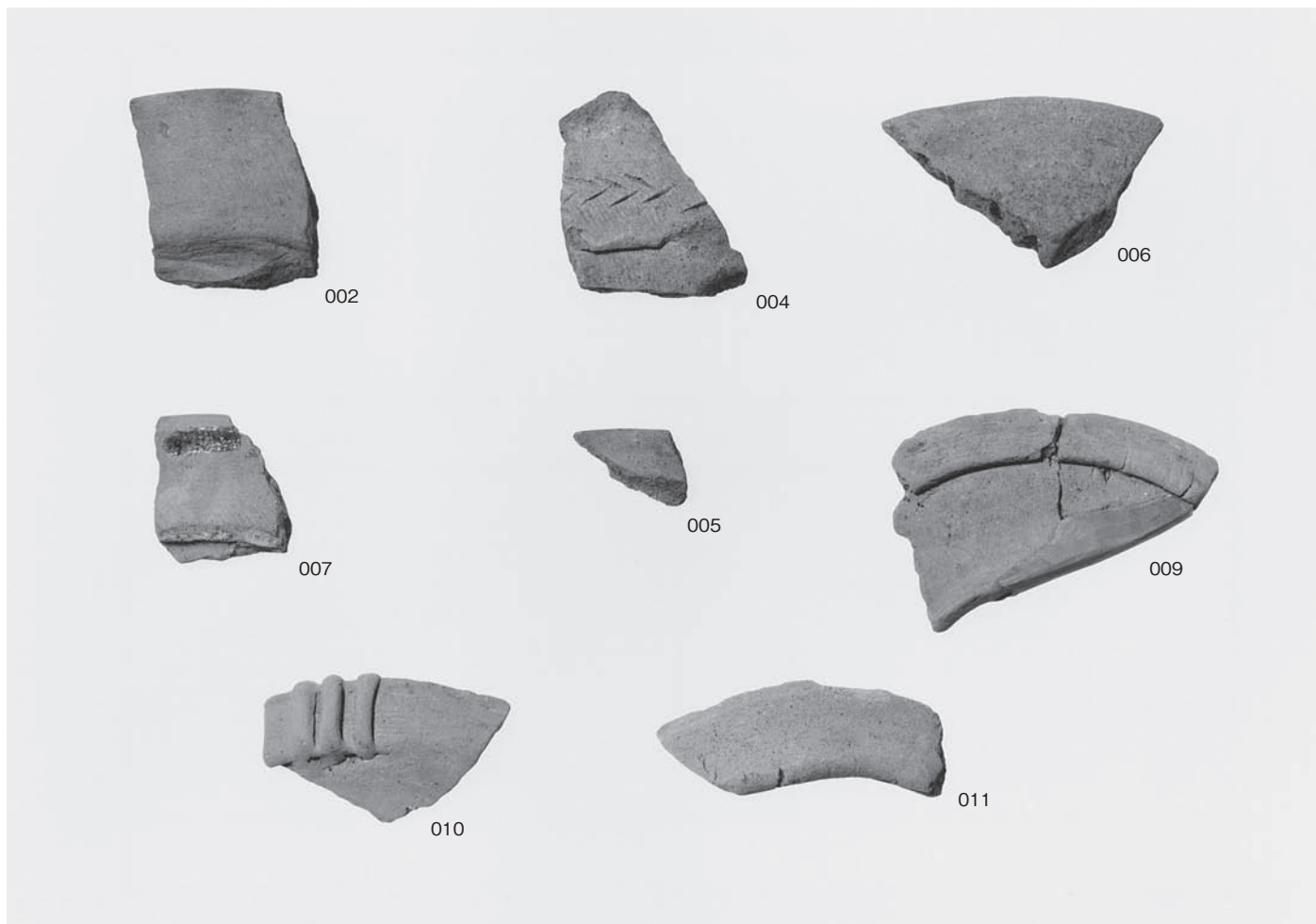
PL10箱石浅间山古墳の調査



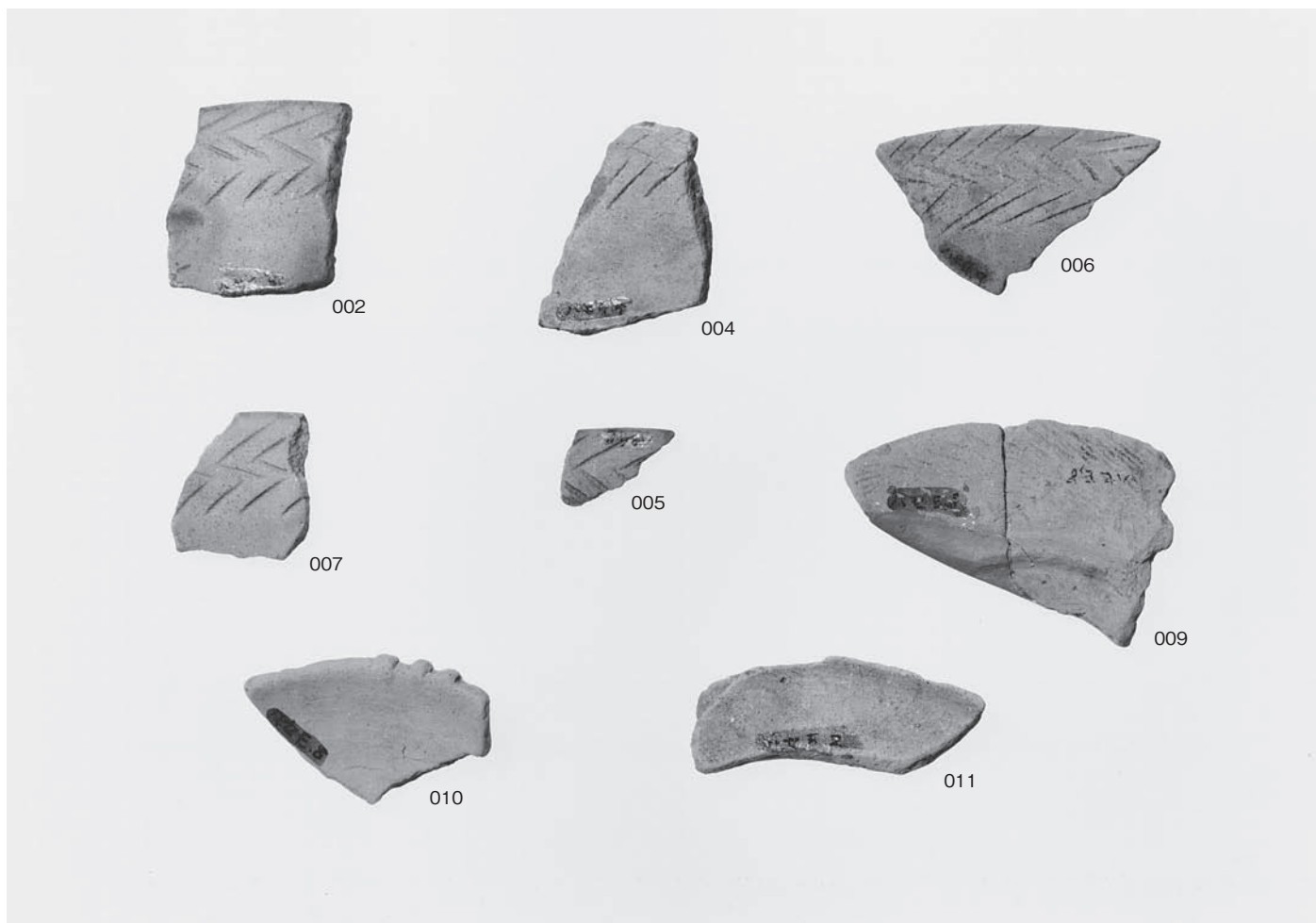
1 出土土器 (2)



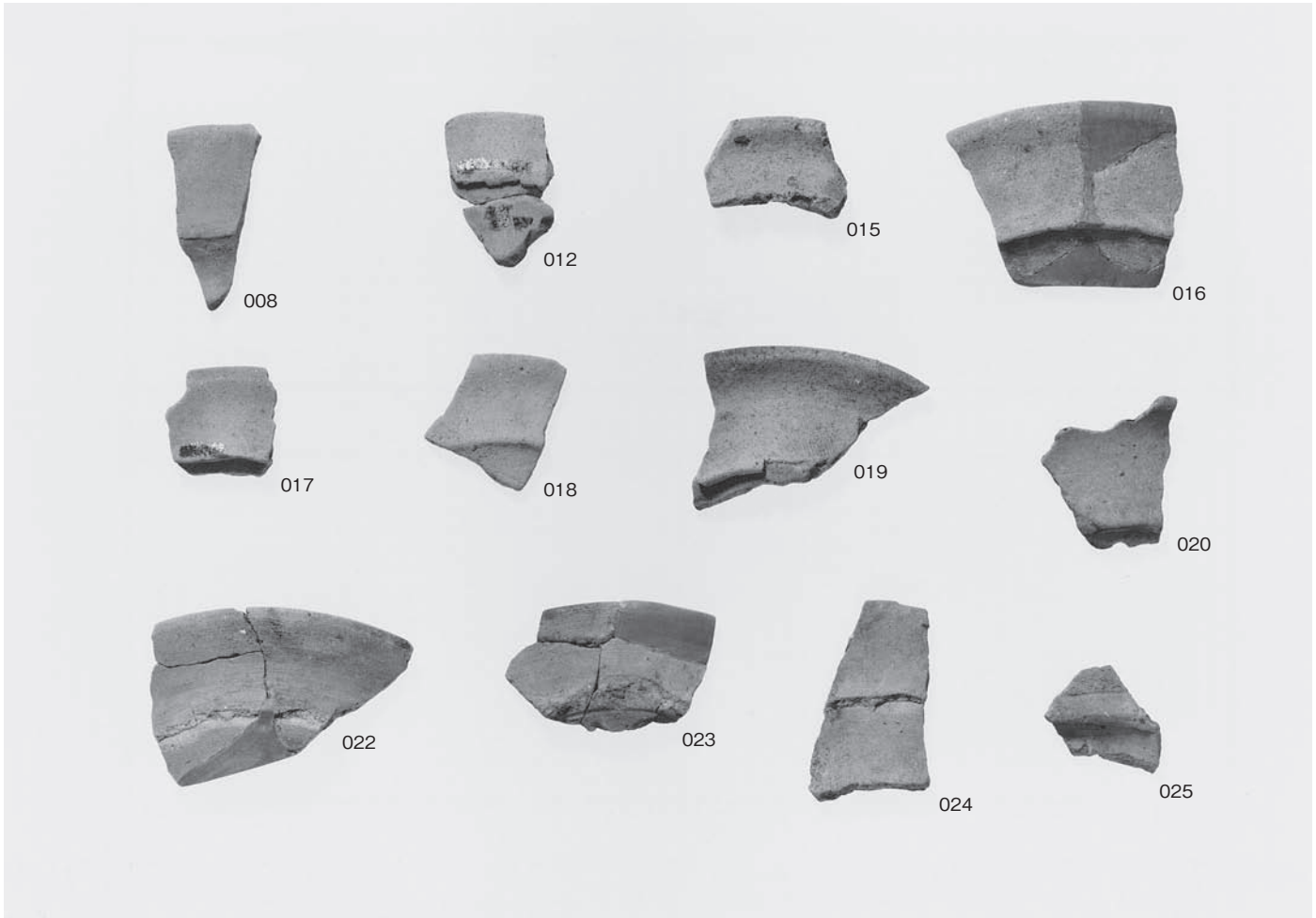
2 出土土器 (3)



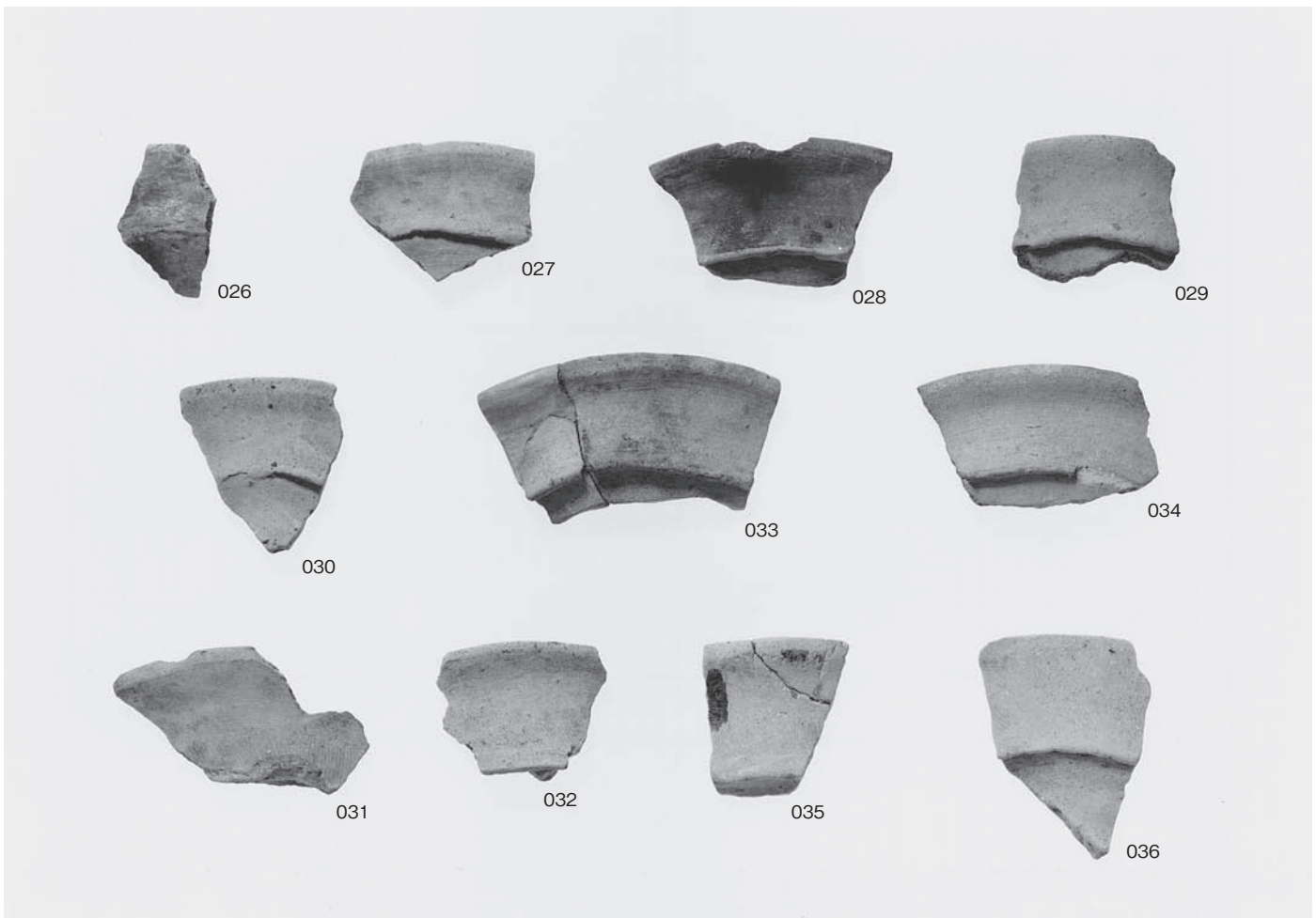
1 出土土器（4）-外面



2 出土土器（4）-内面

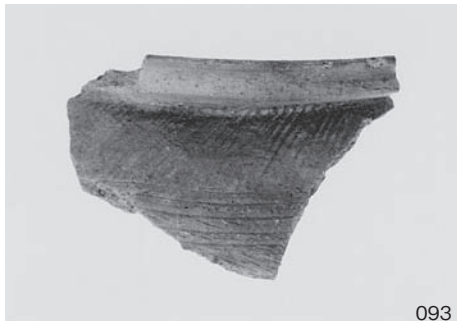
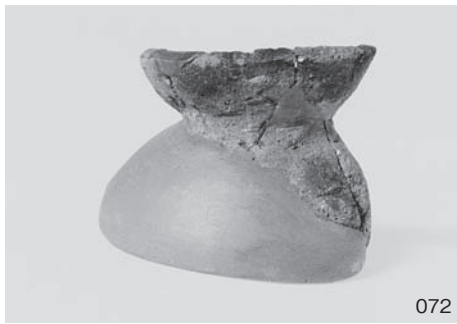


1 出土土器 (5)

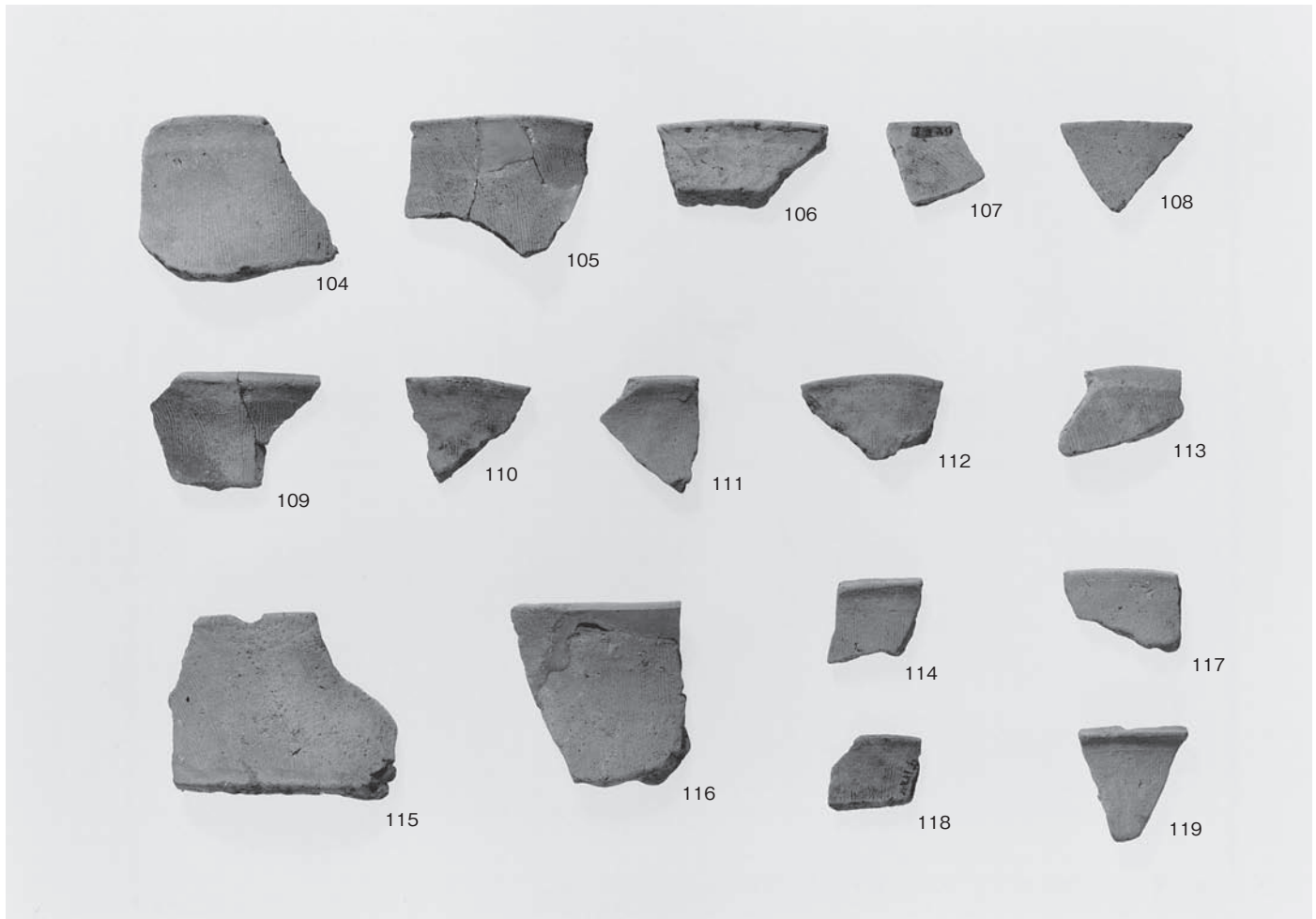


2 出土土器 (6)

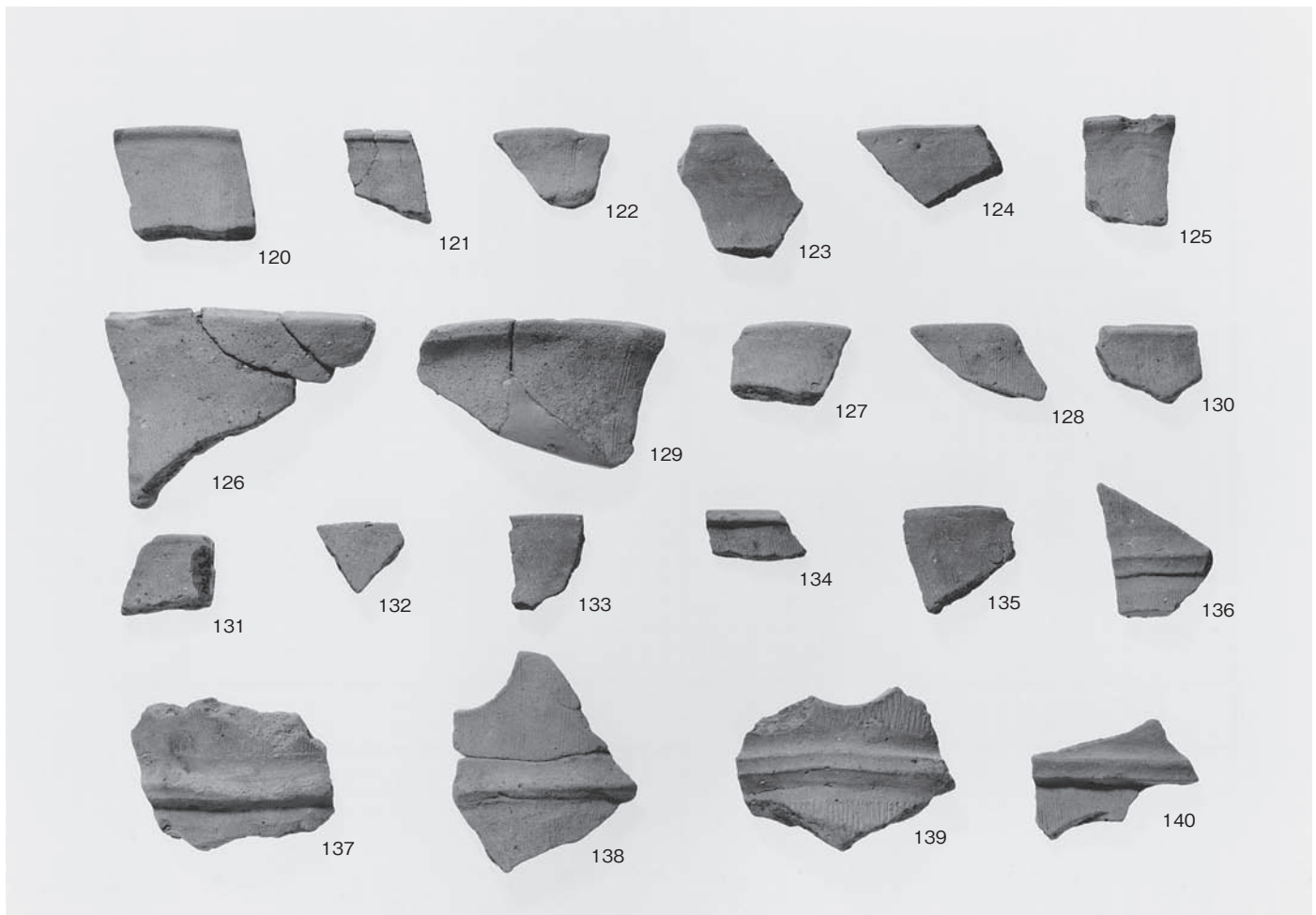




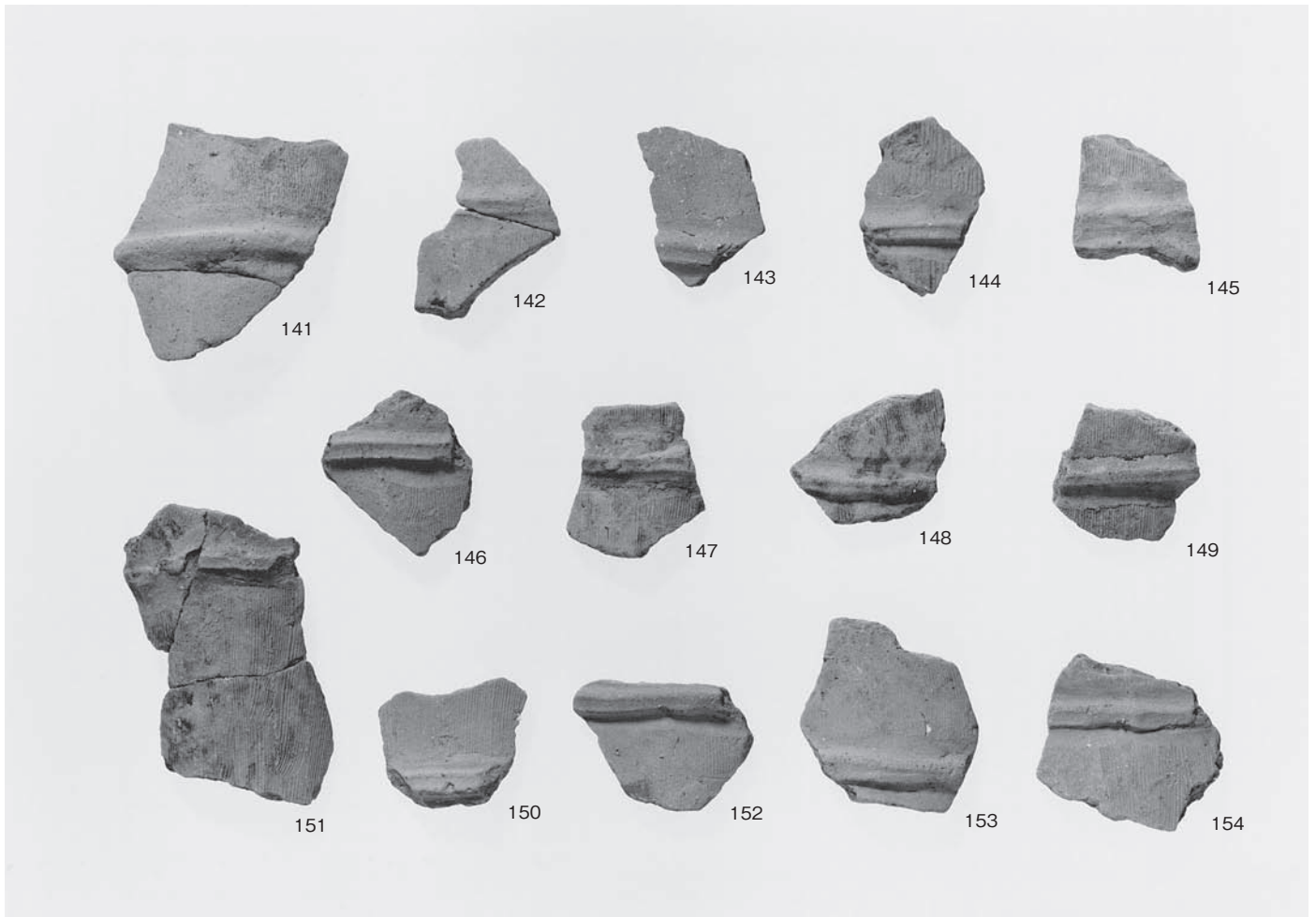
PL14箱石浅間山古墳の調査



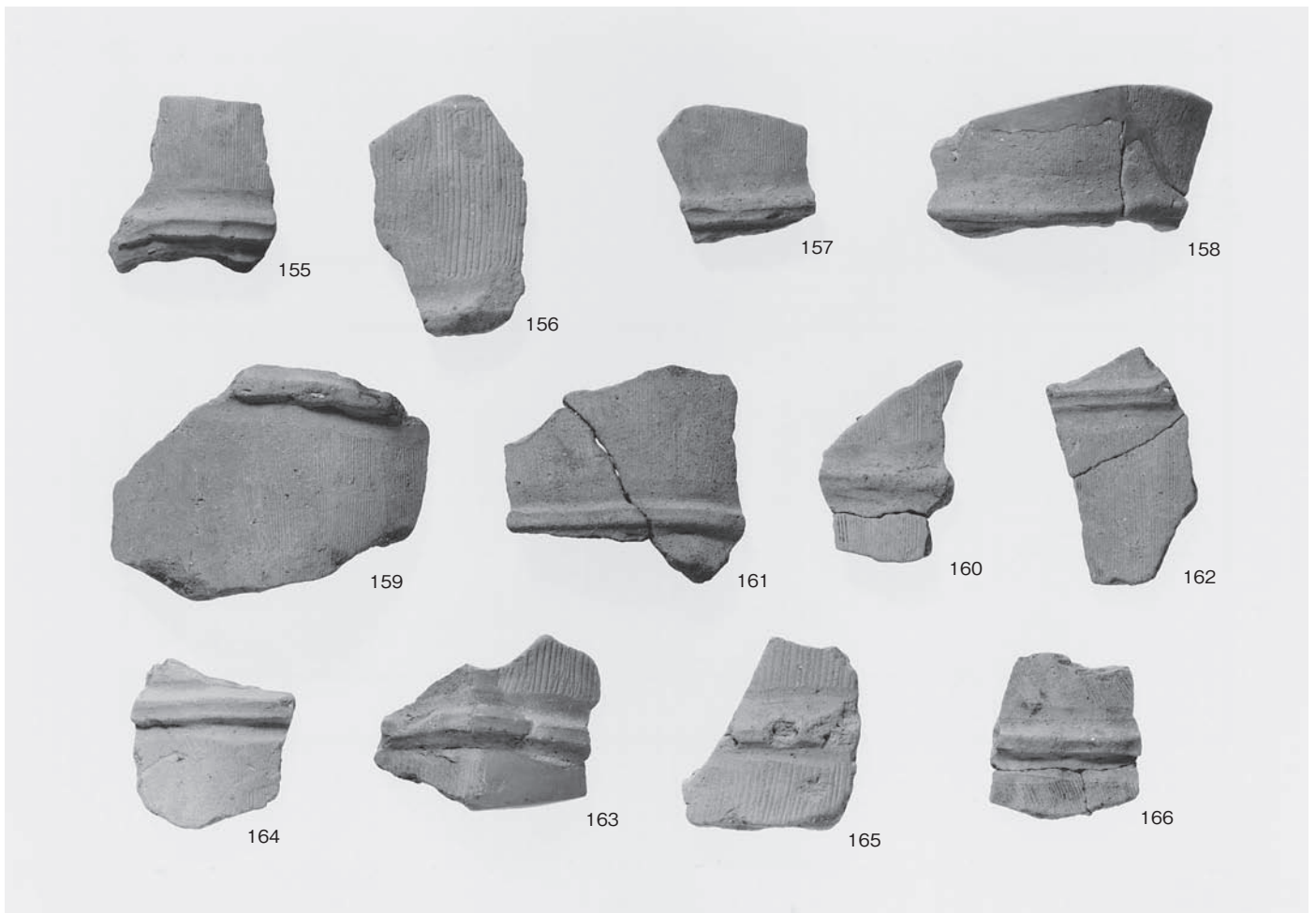
1 出土円筒埴輪 (1)



2 出土円筒埴輪 (2)



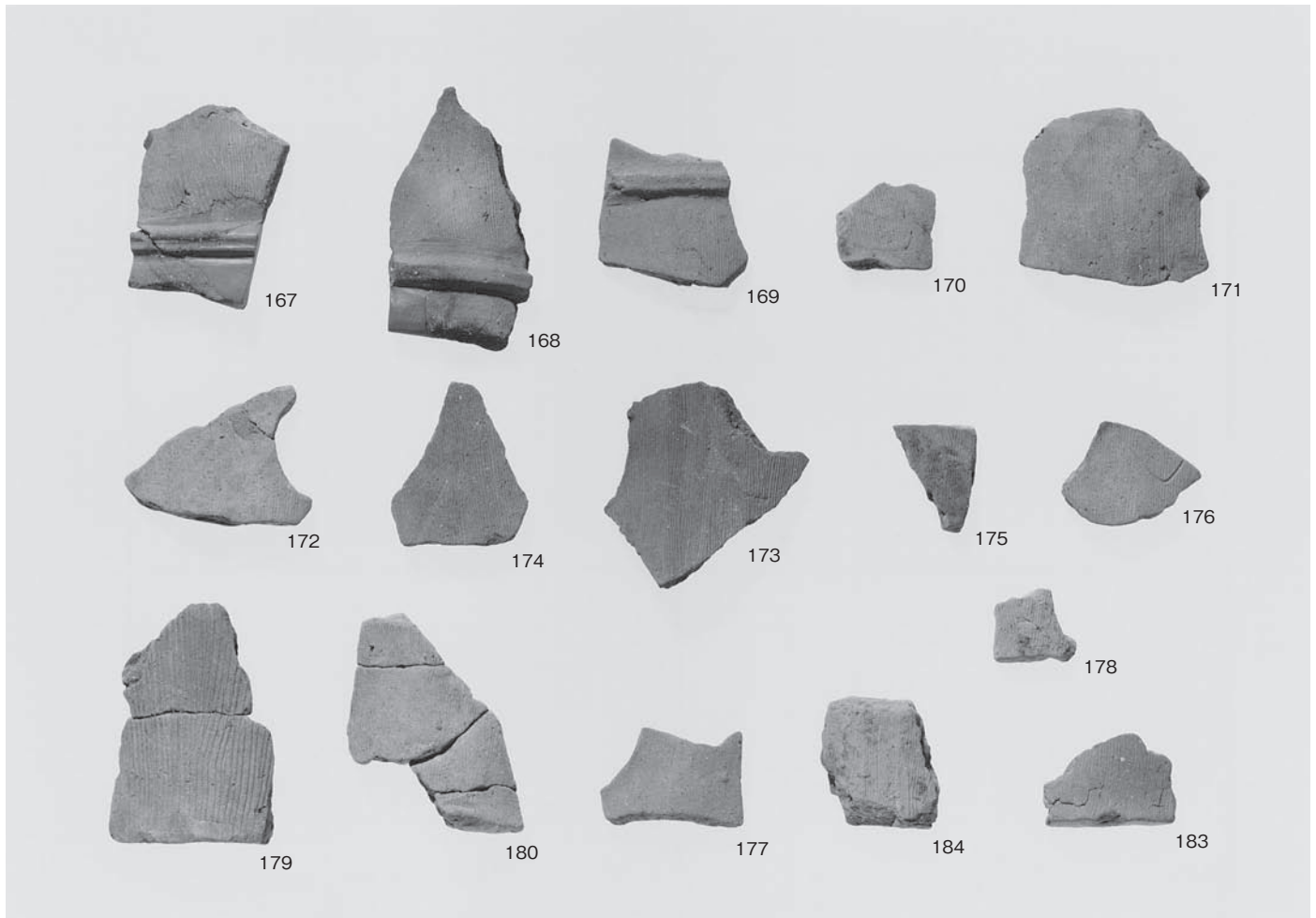
1 出土円筒埴輪 (3)



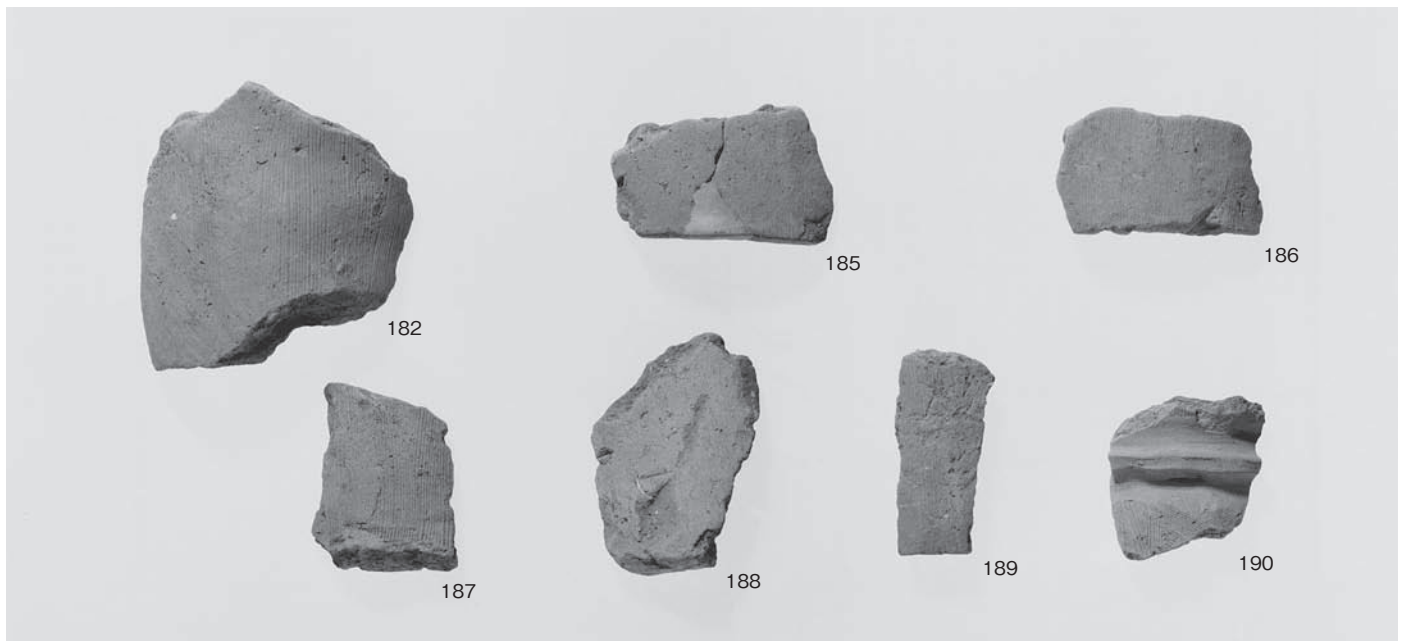
2 出土円筒埴輪 (4)



PL16箱石浅間山古墳の調査



1 出土円筒埴輪 (5)

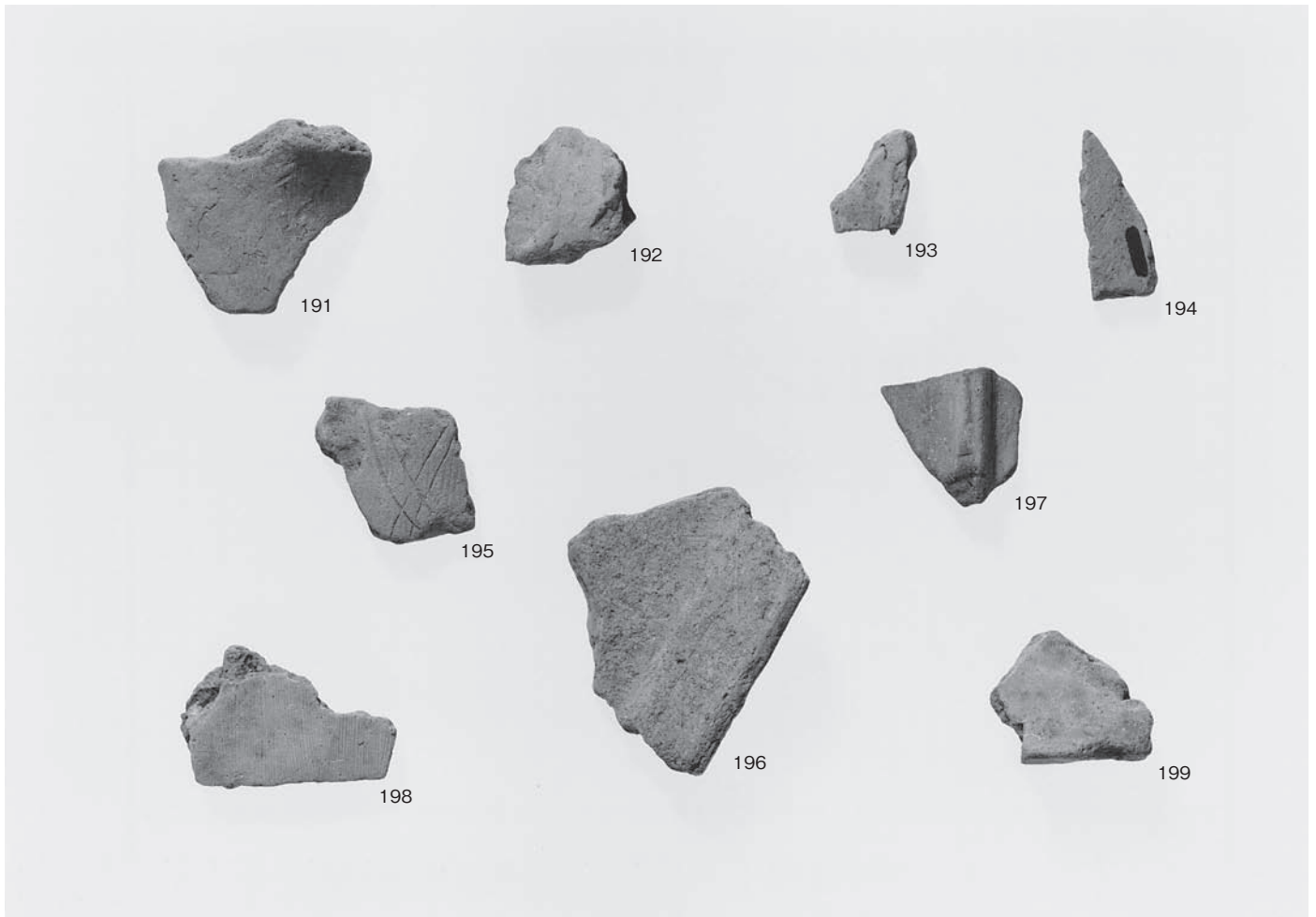


2 出土円筒埴輪 (6)

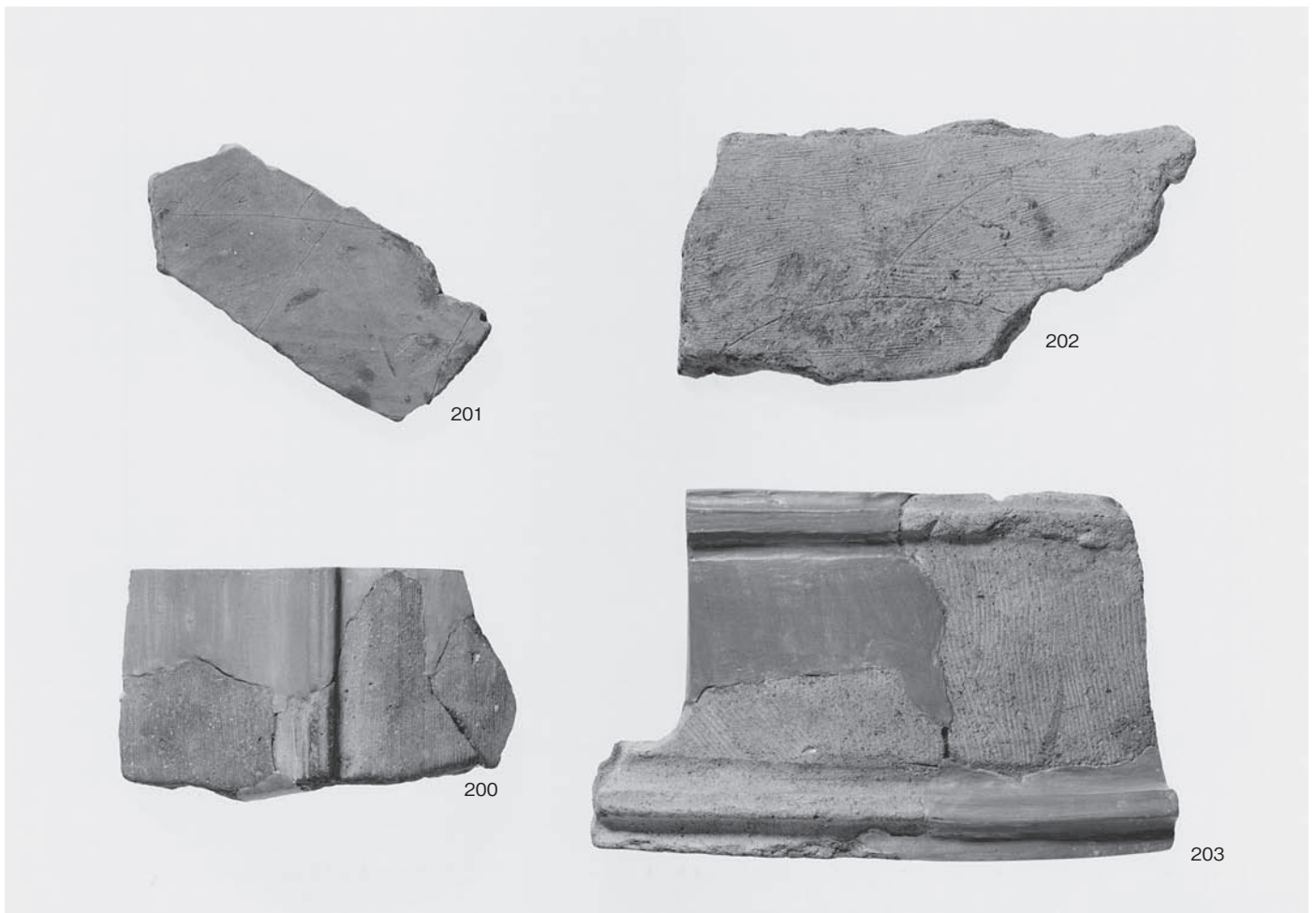


3 出土円筒埴輪 (7)

4 出土円筒埴輪 (8) 一線刻



1 出土形象埴輪 (1)



2 出土形象埴輪 (2)

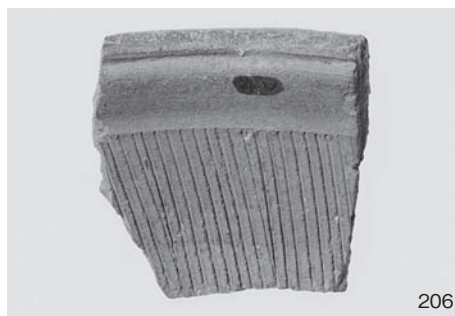
PL18箱石浅间山古墳の調査



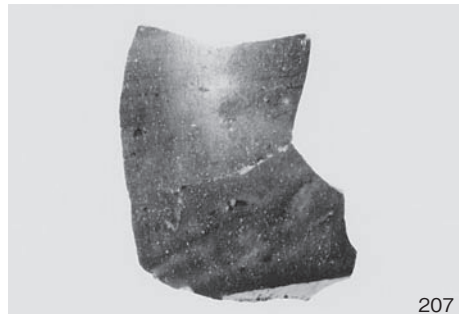
204



205



206



207



208



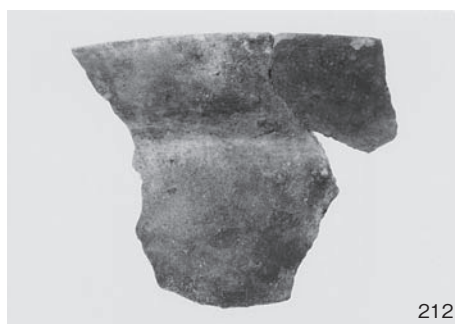
209



210

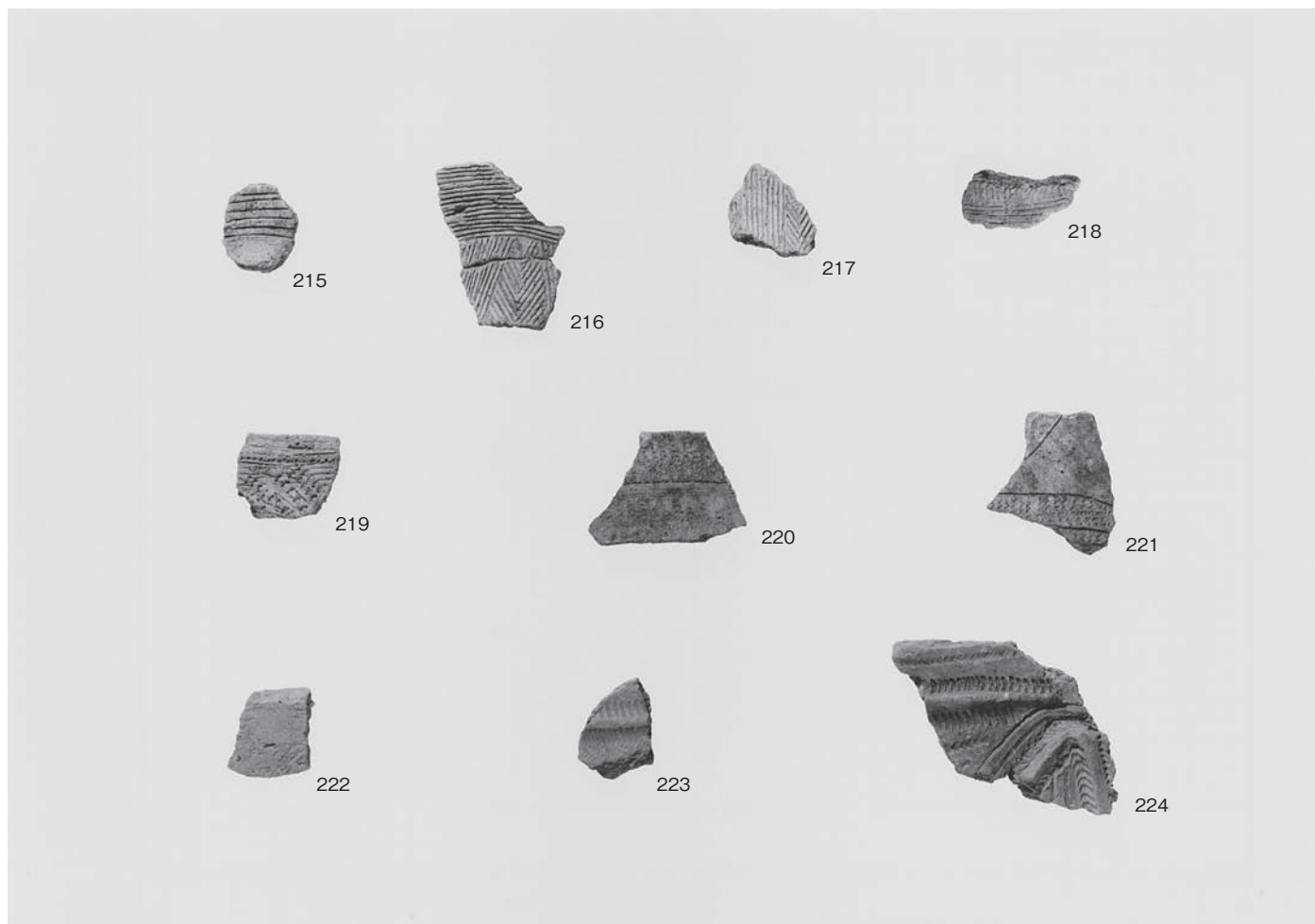


211



212

1 出土土器 (8)



2 出土土器 (9)





不動山古墳の位置（A不動山古墳 B普賢寺裏古墳 C綿貫観音山古墳 D元島名将軍塚古墳）



PL20不動山古墳の調査



1 不動山古墳の現状（2002年1月）（北から）



2 不動山古墳の現状（2002年1月）（東から）



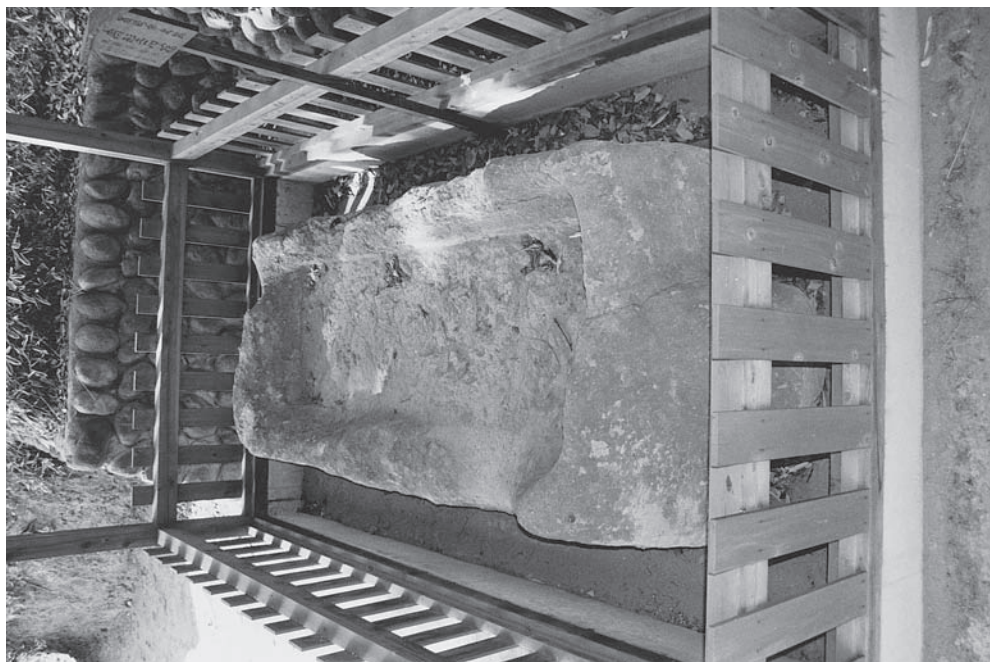
1 不動山古墳前方部の現状（北から）



2 不動山古墳後円墳の現状（北から）



3 不動山古墳出土舟形石棺





PL22不動山古墳の調査



1 調査前前方部西方の状況（西から）



2 調査前後円部東方の状況（東から）



3 調査前後円部東方の状況（西から）





1 調査状況と土層断面一前方部  
(南西から)



2 調査状況と土層断面一前方部  
(西から)



3 調査状況と土層断面一前方部  
(南西から)



PL24不動山古墳の調査



1 調査状況と土層断面－前方部  
(南から)



2 調査状況と土層断面－前方部  
(南東から)



3 調査状況と土層断面－前方部  
(南から)





1 調査状況と土層断面—後円部内堀  
(南東から)



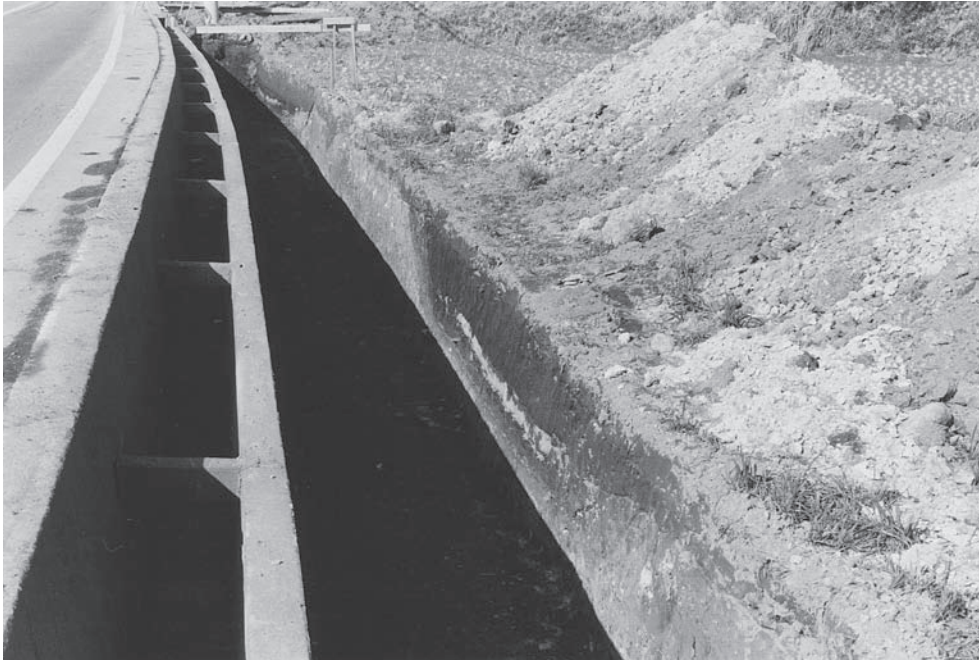
2 調査状況と土層断面—後円部内堀  
(南東から)



3 調査状況と土層断面—後円部内堀  
(南東から)



# PL26不動山古墳の調査



1 調査の状況と土層断面—後円部中堤～外堀（東から）

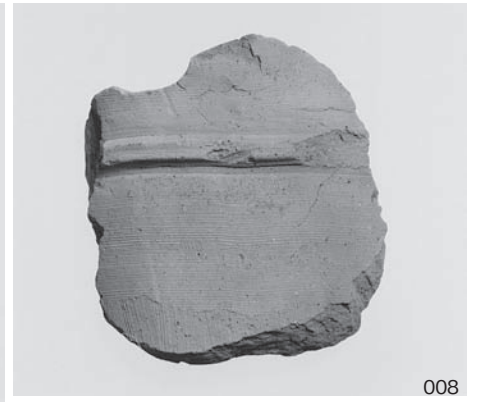


2 調査の状況と土層断面—後円部外面堀（南東から）



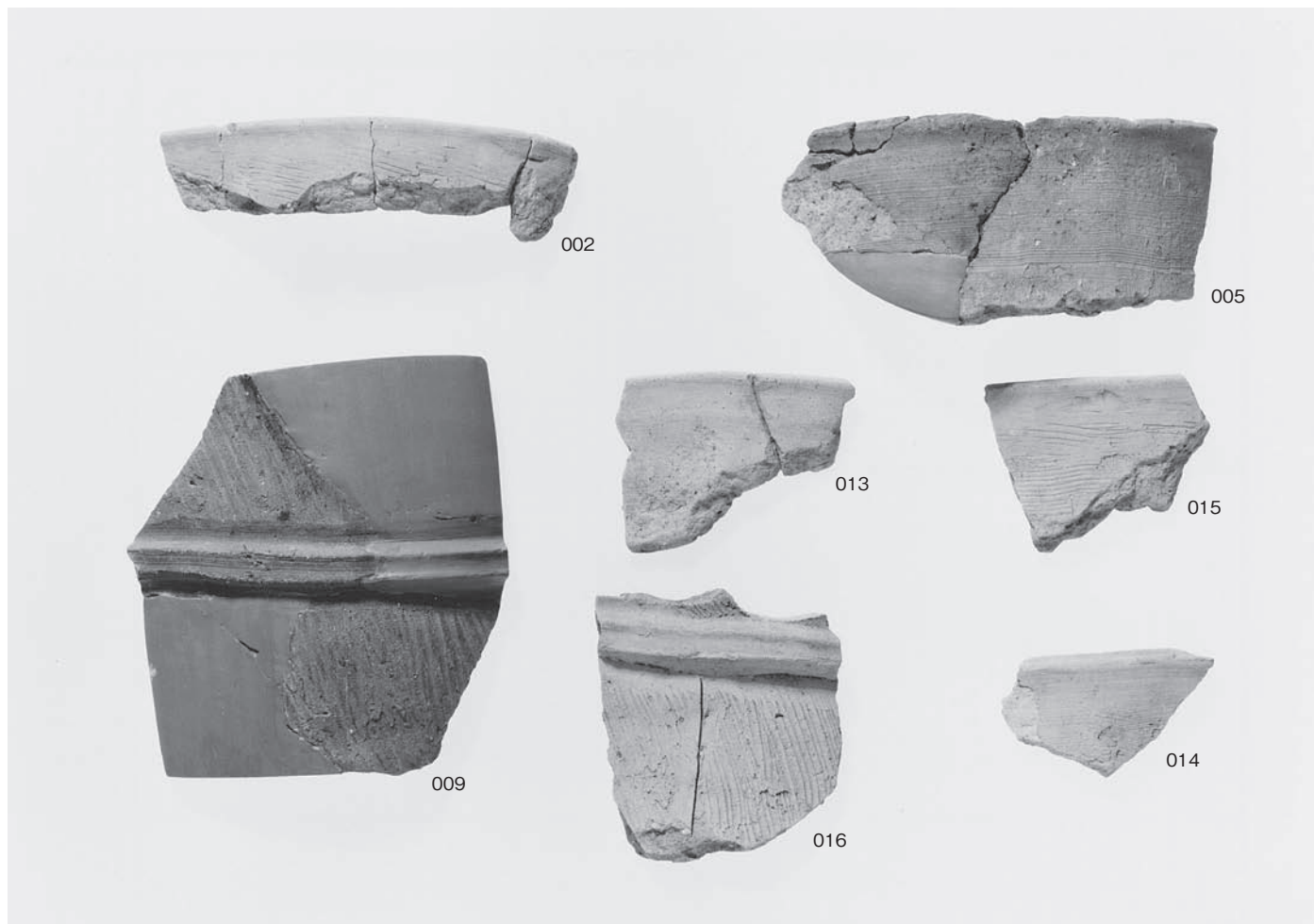
3 調査の状況と土層断面—後円部外面堀（南東から）



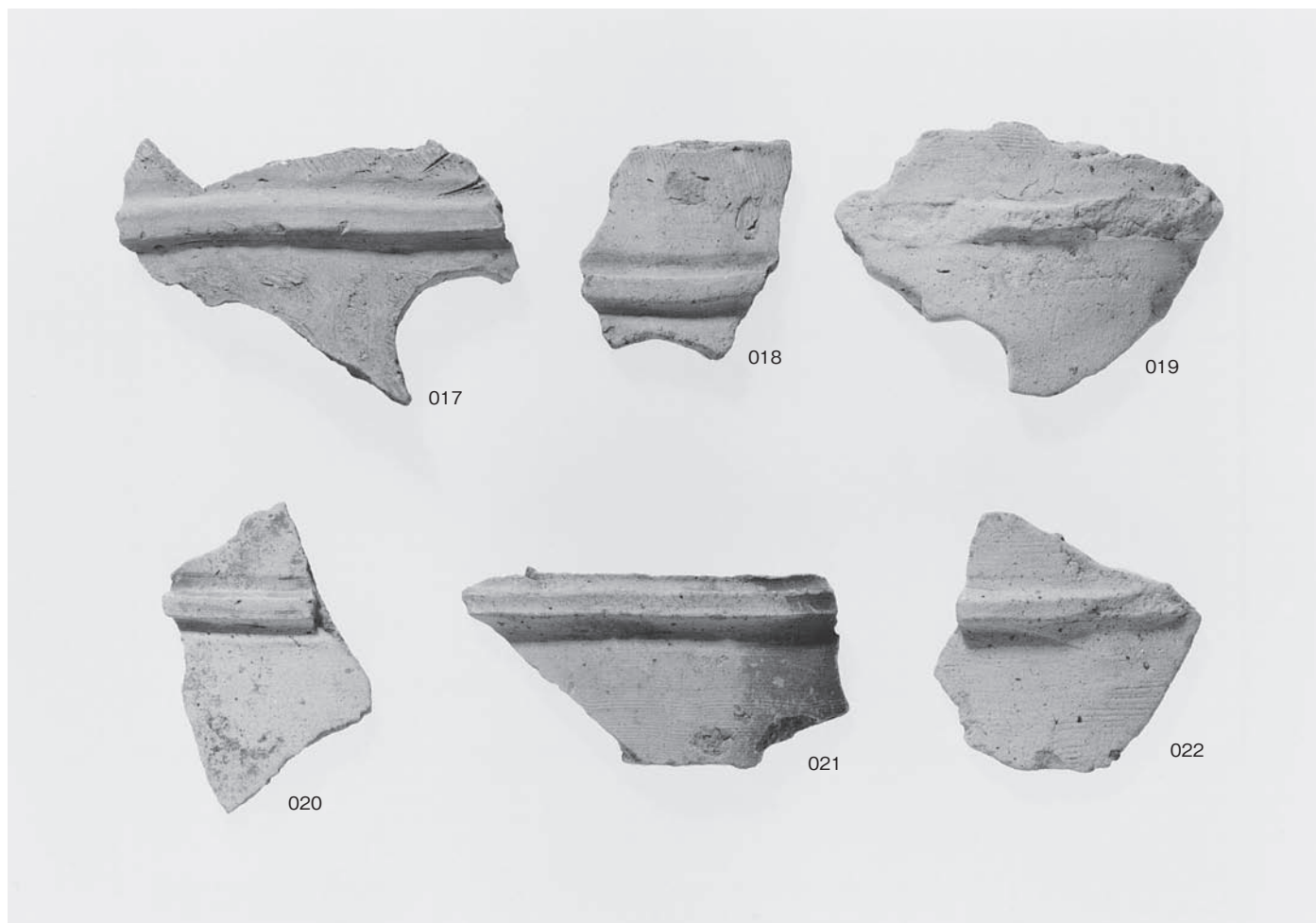


出土円筒埴輪（1）





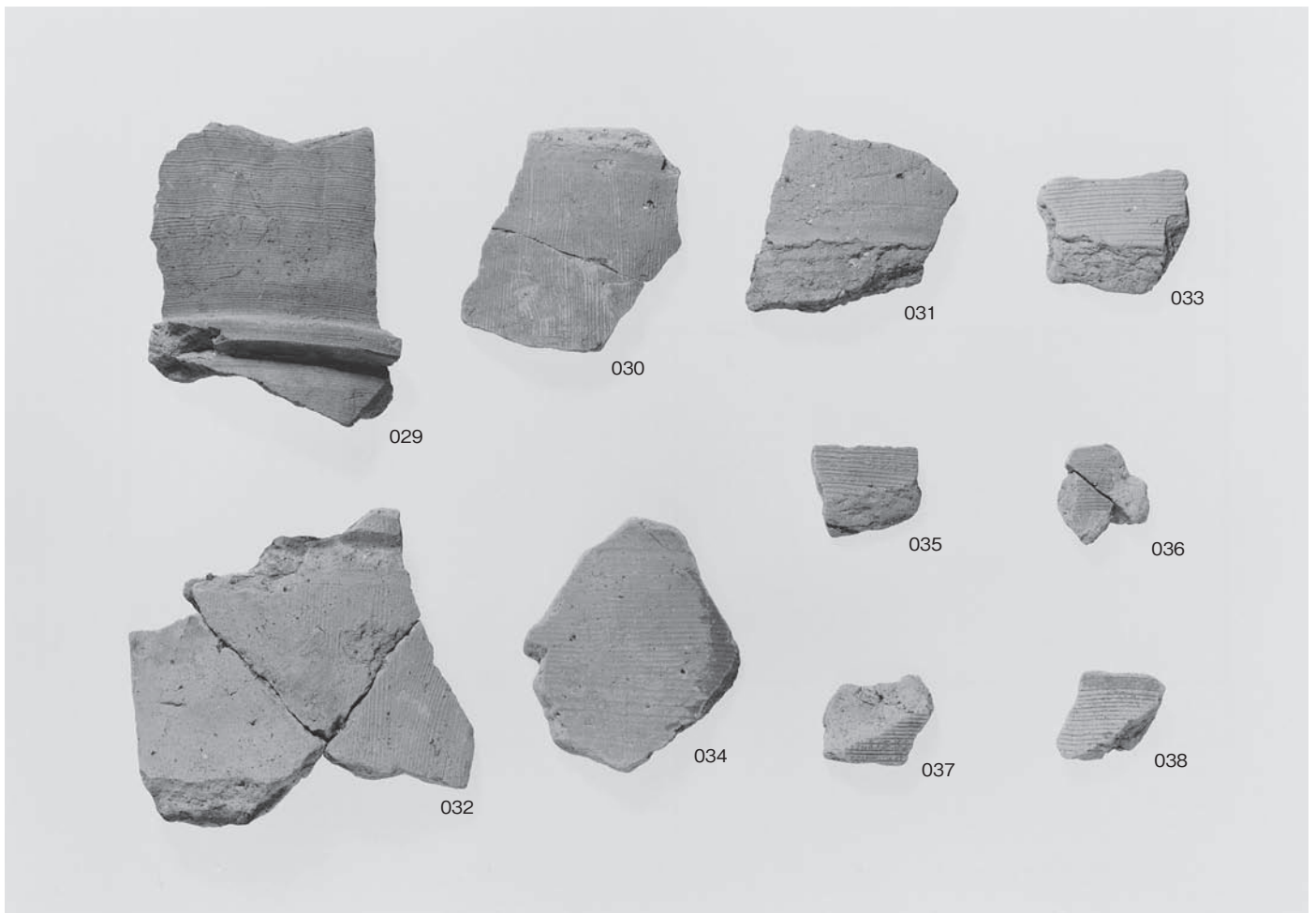
1 出土円筒埴輪 (2)



2 出土円筒埴輪 (3)



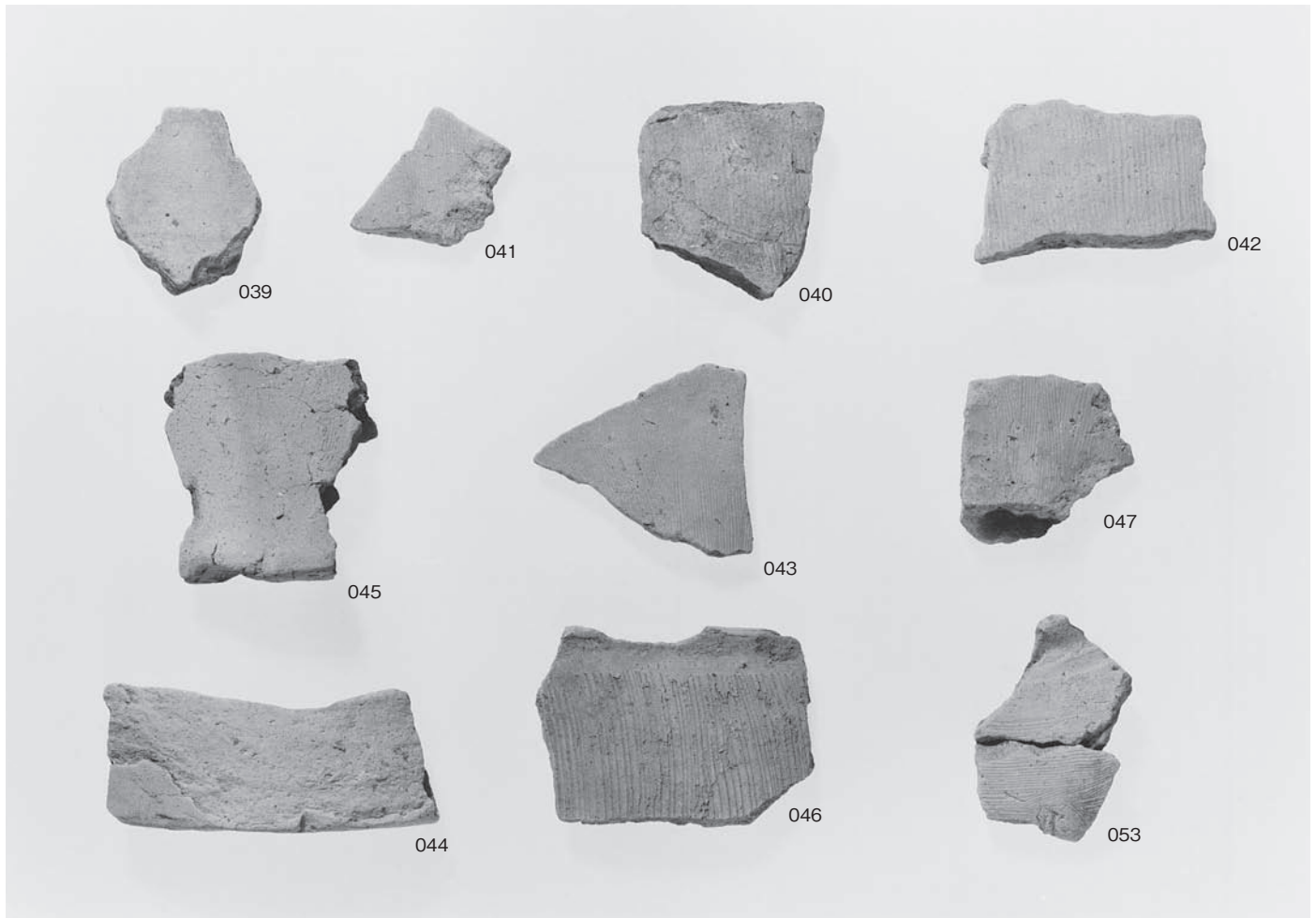
1 出土円筒埴輪 (4)



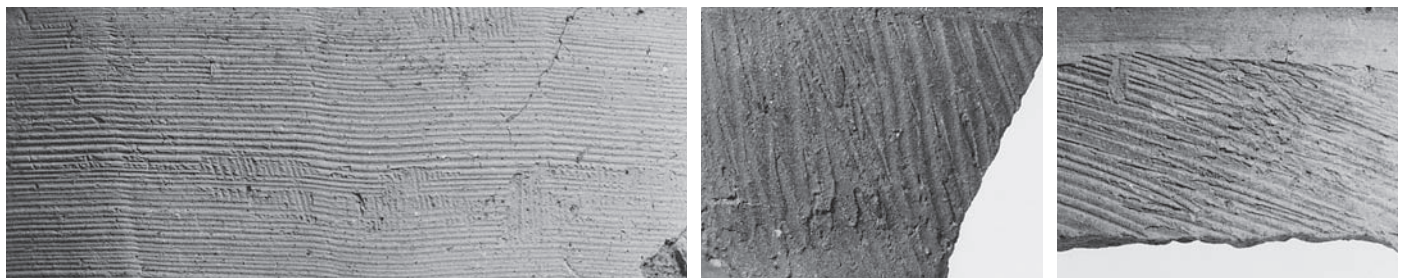
2 出土円筒埴輪 (5)



PL30不動山古墳の調査



1 出土円筒埴輪 (6)



008 B種ヨコハケ 14本/2cm

009 タテハケ 4本/2cm

025 ナナメハケ 8本/2cm



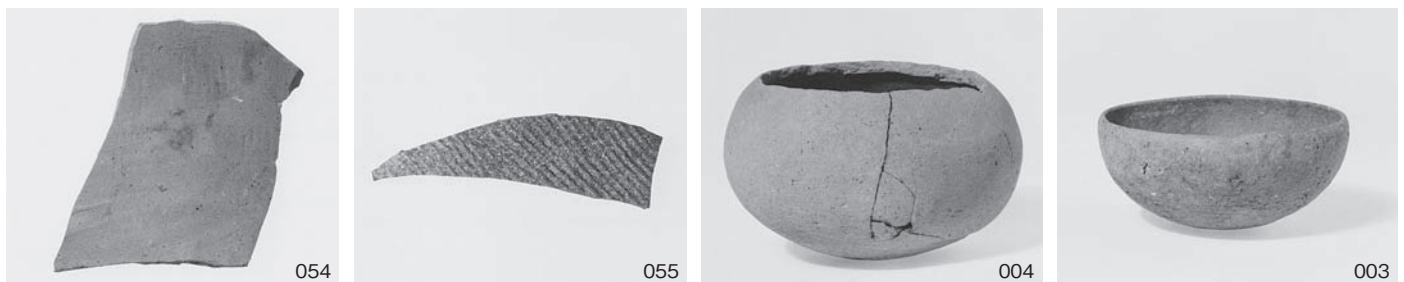
004 線刻 (口縁部)

016 線刻 (胴部)

036 線刻 (胴部)

006 突帯下の沈線

2 出土円筒埴輪 (7) -ハケメと線刻



3 出土土器

4 不動山古墳隣接地出土土器



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第495集

## 箱石浅間山古墳 不動山古墳

平成21年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成22(2010)年3月12日 印刷

平成22(2010)年3月18日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社

---

---